



TITLE:

十六世紀ドイツにおける農業生産
力と農業経営の諸類型に関する研
究: 十六世紀ドイツ農書の研究(
Dissertation_全文)

AUTHOR(S):

三好, 正喜

CITATION:

三好, 正喜. 十六世紀ドイツにおける農業生産力と農業経営の諸類型に
関する研究: 十六世紀ドイツ農書の研究. 京都大学, 1974, 農学博士

ISSUE DATE:

1974-05-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r2565>

RIGHT:

農
172 函
1-0

十六世紀ドイツにおける
 農業生産力と農業経営の
 諸類型に関する研究
 —十六世紀ドイツ農書の研究—

三 好 正 喜

十六世紀ドイツにおける

農業生産力と農業経営の

諸類型に関する研究

—十六世紀ドイツ農書の研究—

三好 正喜

第一章 課題、方法、史料

第一節 課題

2 頁

第二節 方法

15 頁

〔Ⅰ〕 生産力

15 頁

〔Ⅱ〕 農業生産力

23 頁

〔Ⅲ〕 十六世紀ドイツの農業

経営様式の分析

36 頁

第三節 史料

〔Ⅰ〕 農書成立の経済的背景

40 頁

〔Ⅱ〕 十六世紀におけるドイツ

農書

49 頁

第二章 十六世紀後半のニーダーライン

地方における農業生産力と農業

経営の諸類型

69 頁

第一節 ニーダーライン地方の

農業生産力

70 頁

第二節 ラインランドの土地所

有と農業経営の諸類型

109 頁

第三節	領邦国家ユーリッヒ＝	
	ベルク土地所有と農	
	業経営の諸類型	117頁
〔I〕	封建的土地所有	117頁
〔II〕	農民層の階層分化	133頁
〔III〕	農業経営の諸類型	139頁
第三章	十六世紀後半のザクセン地方	
	における農業生産力と農業経	
	営の諸類型	
	ーザクセン選定侯直営地経営	
	のバハイ	162頁
第一節	ザクセンの農業生産力	163頁
第二節	農業経営の諸類型	213頁
第四章	十六世紀後半のブランデンブルク地方	
	における農業生産力	
	と農業経営の諸類型	288頁
第一節	ブランデンブルク地方の	289頁
	農業生産力	
第二節	ブランデンブルクの土地	
	所有と農業経営の諸類型	334頁

		〔Ⅰ〕	バラ	ニ	デ	ニ	バル	ク	ク	エ	地	所	有	334	頁
--	--	-----	----	---	---	---	----	---	---	---	---	---	---	-----	---

		〔Ⅱ〕	農	業	經	営	の	諸	類	型				348	頁
--	--	-----	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--	--	-----	---

第	五	章		結	論									393	頁
---	---	---	--	---	---	--	--	--	--	--	--	--	--	-----	---

第一章 課題 方法 資料

第一節 課題

本論文は、十六世紀後半にドイツ各地で出現する農書¹⁾を史料として、以下の課題の解明に寄与しようとするものである。

(1) 十六世紀とくにその後半における農業生産力を具体的にかつ体系的に把握する。

(2) 農業生産力の展開によって、農業経営の自立度²⁾は増大するが、この経営の自立度の向上が、まず第一に、当時農業経営がそれなしには経営を維持しえなかった村落共同体規制とどのように矛盾してくるか、あるいはこの規制から自立してくるのかを明らかにする。

(3) このような生産力に基づく農業経営の諸類型を検出する。史料の性格および研究の現状(イギリス近世史ほどの、全村的・地域的調査に基づく土地所有・経営の諸類型に関する定量分析がない)から、この類型は領主経営および旧領主直営地を小作する富農経営

の定性分析に限定される。

(4) 上の経営の諸類型と関連して、第一に、領主权力からの自立度の問題、つまり領主・農民関係がどのように変化するか、および領主経営については封建的諸権利への依存からどのように脱却して行くかの問題と明らかにする。この点はい、特に当時の領主と農民関係、すなわち封建的土地所有の再編過程を特徴づけるところの、封建制から資本制への過渡的形態としての分益小作制ととりあひらる。

十六世紀におけるドイツ農業生産力の分析は、わが国では殆んど検討されておらず、空白状態に近いといっても過言ではまいであらう。西ドイツ農業史学界では勿論かなり研究が行なわれているが³⁾、その点はい、例えば農業生産力を構成する要素である作付組織、施肥方法などを個別に分析するに止まり、農業生産力を地域別・体系的に理解するという方

法をとっていまいように思われる。このよう
 な日本および西ドイツにおける十六世紀ドイ
 ツの農業生産力の研究について述べれば原
 因と合って、ドイツ農業および工業の地帯別
 構造（東エルベ、ライン・ヴェストファー
 ンを除く西エルベ、ライン・ヴェストファー
 レン）の形成に关する理解が、農業生産力の
 地域的・体系的な理解抜きで行なわれる結果を
 生ずるであろうと思われる。すなわち地帯別工
 業および農村構造の成立と社会的分業および
 政治構造に求め、農業生産力と関連づけて理
 解しようとする態度がみられる。工業およ
 び農業の地帯別構造の成立原因を上記の二要
 因に求めることは基本的に正しいといえよう。
 しかし農業生産力の地域的・体系的な理解が不
 十分であるばかりで、地域の農民層分析、さら
 ってまた農業経営諸類型の把握が、再生産過
 程にまで及ばなかったの外面的な分析に止ま
 るを得なくなり、その事が、ドイツ各地
 域で十四・十五世紀の封建制の危機に際して

の領主的土地所有の存続を取扱うに当たって、農業経営の再生産過程と社会的分業および政治構造とを相互に関連させて分析することは不可能にするに至ったと考えられる。ふいかえると、各地域における社会的分業の発展が農業生産力の展開とどのように関連しているのか、社会的分業の展開と関連した農業生産力の発展のもとで、どのような農業経営の諸類型が生まれてくるのか、このようにして生まれた農業経営の諸類型を前にして、封建的土地所有を編成するばあいに、政治構造がどのように機能するのか、を農業経営の再生産過程をも含めて考察することは従来不十分であったと考えられるのである。

以上のようなドイツ近世農業史研究にみられる欠陥は、意識的であるか否かは別として、生産力発展段階論に主たる原因を帰してゐるように思われる。すなわち十六世紀ドイツの農業生産力水準を主穀式農業と規定し、輪耕式農業への発展は生じなかつたと考えるところに

ろから出てきてゐるのではな^いかと推測される⁵⁾。しかし尾崎芳治氏が指摘されてゐるやうに同一の「生産力段階」に属するばあいでも、総じて、ある共通の技術的基礎の奥で大きく区画しうる生産力段階も、それ自身の内部に生産力水準の順次的上昇の過程を内包しうるのであつて、一段階の全体を同一の生産力水準が支配するものと前提（生産力水準を固定化！）する⁶⁾とは誤まりであらう。さらにこのような生産力水準の順次的上昇の過程はすべての農業経営に一律に生じるのではなく不均等に生じ、また同時に経営間の不均等と強めるよう作用するはずである⁶⁾。このような農業内部における生産力の発展が商品経済および社会的分業の展開とからみあつて、領主および農民層内部に、商品経済への参加の度合を異にする種々の経営類型を出現させるのである。封建的土地所有がその危機に際して再編を図るばあ、以上のやうな農業経営内部にみられるやうな経営の分化に対応して

方向をとらざるをえない。農業生産力の地域
 的・体系的分析の欠除はこうした側面に対す
 る分析視角を欠落させる結果をもたらしたと
 考えられる。

本論文では考察の対象地域として、ニーダ
 ーライン（ライン・ヴェストファーレン）、
 ガクセン（ライン・ヴェストファーレンを除
 く西エルベ）、ブランデンブルグ（東エルベ）
 の三地域をとっている。これは十六世紀のド
 イツ農書が以上の三地域にほぼ限られている
 ことによる。しかしこれらの三地域は奇しく
 もドイツにおける農業および工業の地帯別構
 造に対応しており、その点で本論文は不充
 分ながら、十六世紀のドイツ農業の地帯別構造
 と生産過程について明らかにする一段階作
 業の役割を果たすことができると考えている。

なお十六世紀において各地域で領主経営お
 よび分益小作経営がもつ意義について簡単に
 ふれておきたい。ニーダーラインにおいては

領主経営は基本的に解体しており、小作地が
 全農用地の約1/3弱を占めている。したがって
 分益小作経営は質的だけでなく量的にも経営
 類型として重要な位置を占める。ザクセンで
 は、賦役と芳份の一部として用いる大規模な
 領主経営（領主制についていえば、いわゆる
Wirtschaftsherrschaften）が存在するのが特徴である。
 分益小作経営は旧領主直管地での耕種部門お
 よび畜産部門にみられるが量的には大きな比
 重は持っていない。しかし地域の特徴を生産
 手段の確保方法や生産力の点において反映し
 た存在であり、この点で注目される。ブラ
 ンデンブルクでは専ら賦役に依拠する領主經
 営（領主制についていえば、いわゆる *Gutshe-
 nschaft*）の存在が特徴である。分益小作経営
 は主として牧羊部門に限定されているが、耕
 種部門においても、管種におよび主要労働力
 である執役小作が、十六世紀においては、全
 農および貧農的分益小作人の領主経営に包攝^へ
 退化した形迹として理解される側面をもつて

いるように思われる。

注 1) 十六世紀以前でも獣医学、園芸についてドイツでも固有のものがみられるが、穀作については十六世紀後半にはじめてドイツ固有の農書が出現する。この時期以前には穀作については、イタリア、フランス農書あるいは古代農書の翻訳があるだけである。ドイツにおける農書に関する書誌学的研究書には以下の二冊がある。M. Güntz, Handbuch der Landwirtschaftlichen Literatur, I. II. III. 1897.; M. Schulze Pattenzen/Leine, Die Anfänge der landwirtschaftlichen Literatur in niedersächsischen Bibliotheken, 1967.

2) 封建社会においては、農民経営の自立性は、農民相互間の関係を規定している村落共同体からの自立および領主権力からの自立としてあらわれる。領主経営についても、その自立性は村落共同体からの自立の問題、上級領主からの自立

の問題および自己の所有する封建奴隷への依存からの脱却の問題としてあらわれる。これは基本的には農民層の領土権からの自立の度合によって規定される。

具体的には生産手段の所有、労力調達方法に主としてあらわれる。

？

3) 第二次世界大戦後の主要な研究には次のものがある。

W. Abel, Geschichte der deutschen Landwirtschaft, 1967.; A. Krenzlin, Historische und wirtschaftliche Züge im Siedlungsformbild des westlichen Ostdeutschland, 1955. (Frankfurter Geographische Hefte); Dieselbe, Dorf, Feld und Wirtschaft im Gebiet der großen Täler und Platten östlich der Elbe, 1952. (Forschungen zur Deutschen Landeskunde, Bd. 70); D. Saalfeld, Bauernwirtschaft und Gutsbetrieb in der vorindustriellen Zeit, 1960.; G. Schröder-Lembke, Entstehung und Verbreitung der Mehrfelderwirtschaft in Norddeutschland, Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie (以下 ZAA と省略する) Jg. 12.; Dieselbe, Die mecklenburgische Koppelwirtschaft, Jg. 4.

11)

4) この点については後に本論で具体的に述べるが、戦後の代表的な十六世紀農業についての研究者である W. Abel (*Geschichte der deutschen Landwirtschaft*, 1967, S. 168ff.) と G. Schröder-Lembke (*Die Hauswaterliteratur als agrargeschichtliche Quelle*, ZAA, Jg. 1. SS. 115-118) についてみれば次のように云えるであろう。

アーベルは当時のドイツ農業の地域分化 (= ニーダーラントにおける輪栽式経営の萌芽、市場に近い北西ヨーロッパ牧草地域におけるコッヘル式農業、東部ドイツにおける三圃式農業、より以東のステップ地帯における半野牛飼養) と、当時世界貿易の中心であったニーダーラントを中心とするチューネン圏の成立として理解しようとする。しかしネーに当時すでにチューネン圏が成立する前提である統一市場が形成されていたとは考えられないし、第二に各圏の農業体系の規定の仕方は必ずしも正しくない。後の点については

東部ドイツについて地力増進的機能を持つ豆類を規則的に取入れた多圃式農業が特に領主経営においてみられたことの無視なし軽視の問題が指摘されねばならない。このことが、東部ドイツ農業が十六世紀には、地質や施肥能力に応じて流動的かつ集約的な作付が行われていたのに対し、十七世紀の作付が固定的な三圃式になった、という相異を看過す結果を生んでいる。

シュレーガー＝レムプケ女史は十六世紀農業にみられる進歩的要素（豆科作物の挿入、油料作物・緑肥作物の栽培、泥灰土使用）を地域農業体系から切離して強調することにより、当時の農業の進歩的側面を浮彫にした。しかし他面、体系的取扱いを欠いているため、豆科作物の栽培とすべて一称に地力増進的とみなし、総実作のばあいには地力収奪的な機能する点を見逃している。そのためガクセン

農業について、トウムブスヒルン (Thumshirn) が茎科作物が挿入される多圃式農業について、多圃式から三圃式への復帰を説いた理由を理解しえなかったように思われる。そのためガクセン農業の発展方向であった多圃化が地力消耗を招いたことを理解できず、多圃式から三圃式への移行をいたちう三十年戦争による荒廃という外因に求めることとなった。

5) 例えは藤瀬浩司氏は十六世紀ドイツには「農業生産力における大きな進歩は認められない」とされる。その根拠はR・ベルトの穀物収穫率についての研究にある。すなわち「存在する資料からは十六世紀における最初の集約化の波に対しては収穫(単位面積当りの)上昇は認められない。十八世紀の第二のより集約化の波……について始めて収穫(同上)の上昇の明瞭な傾向が認められる。」(藤

瀬浩司『近代ドイツ農業の形成』(61頁)。

すなわち十六世紀には主穀式農業の範囲内で集約化がある程度生じたけれども、その変化はある作物について測ったばかりで、単位面積あたり収量の増大を生じなかったことから生産力の増大はなかなたにされるのである。しかし土地生産力は単に一作物の収量と播種量との比率だけでは測れない。例えば苧科作物が地力増進機能を持って取入れられ多圃化したばかりで、耕地の利用率は言うまでもなく増大する。したがって作付られた作物全体の総収穫量は増大しているわけであって、この意味で土地生産力は増大したと云えるからである。

6) 尾崎芳治「吉岡昭彦『イギリス地主制の研究』」『歴史学研究』342号

第二節 方法 —農業生産力論—

[I] 生産力

(1) 生産力の構成 使用価値を生産する労働過程の單純な抽象的契機は、云うまでもなく、合目的な活動（有用労働）、労働対象、労働手段である。すなわち「社会の労働の生産力は、人間の労働能力（労働力）と、その能力への媒介的な力となるさまざまな労働手段と、生産の目的に応じて労働過程で活用される屈性をもつところの、いろいろな労働対象とによって成り立っている^カ」。

(2) 生産力の発展と生産様式 これら三つの生産諸力は生産様式（正確には労働様式と云うべきであらう。）によって結びつけられ組織化される。労働の生産力の増大と生産様式との関係についてマルクスは次のように述べている。

「たとえば或る靴屋は与えられた手段をもって一足の長靴を十二時間からなる一労働日で作ることもできる。同じ時間で

二足の長靴を作るためには彼の労働の生産力が二倍にならねばならぬのであるが、しかしその生産力は彼の労働手段または彼の労働方法——または同時に両者——の変化なしには二倍になりえない。だから彼の労働の生産諸条件に、すなわち彼の生産様式に、したがって労働過程そのものに、ある革命が起らねばならぬ。吾々が労働の生産力の増大というのは、ここでは総じて、それによって一商品の生産に社会的に必要な労働時間が短縮されて、より少量の労働がより多量の使用価値を生産する力を獲得するようになり、労働過程における変化のことである。だからこれまでに考察した形態での剰余生産にあっては生産様式は与えられたものと想定されていたのだが、必要労働の剰余労働への転化による剰余使用価値の生産のためには、資本が労働過程をその歴史的に伝えた——または現存する——姿態のまま

まで占領し、その継続時間だけ延長する

ということだけでは、決して充分ではない。

い。労働の生産力の増大によって労働力の

の価値を低下させ、かくして価値の増産

に必要な労働日部分を短縮するためには

は、労働過程の技術的および社会的諸条

件を、つまり生産様式そのものを変革し

なければならぬ。」

すなわち生産力の増大とは価値観念からす

ると労働日のうち必要労働部分が縮小される

ことであるが、使用価値観念からみると「労働

手段または労働方法——または同時に両者

——の変化なしには」生じない。そして労働

手段と労働方法の両者が生産諸条件、生産様

式、労働過程の技術的および社会的諸条件と

いう言葉で云いかえられていることばかりである。

つまりここでは生産様式とは労働過程にあり

て労働手段と労働方法（労働力と機械）と

が結合する方式と指す範囲として用いられて

いることがわかる。

このように意味での生産様式の分析を資本論でマルクスが具体的にどのように行なっているかを見てみよう。

まず単純協業。労働手段は変化せず、労働力の質、労働編成も変化しない。すなわち一人の労働者が一使用価値の労働過程全体を担当する。ただ個別資本のもとで、労働手段と労働力とがより多く集積され、その集積された労働力と労働手段とが同時に同じ作業場所で作業するという労働過程の変化（個別的労働過程の社会的労働過程への転化）によって労働の（社会的）生産力が増大する⁹⁾。

複雑協業。労働過程は部分作業になり特殊の諸段階に分解される。これに対応して「全体労働者」が「部分労働者」に分解され（労働力の質の変化）、この部分労働者は部分生産物だけを生産する（労働方法の変化。労働手段そのものも部分作業に適し、部分労働者の手びのみに充分に作用する労働用具に分化し、特殊化する（労働手段の変化）。その結果マニ

マニュアルにおける生産過程は、部分労働者が特殊化した労働用具を用いて、部分生産物を生産する部分作業過程の編成体となり、各部分作業過程間には量的な規制関係、比例関係（技術的法則）が成立する。このような社会的労働過程の質的編成と量的規制および比例性がマニュアルにおける生産様式、すなわち労働過程の技術的社会的結合の様式である¹⁰⁾。

以上から明らかになるように、ここで言う生産様式とは、資本＝賃労働関係（すなわち生産関係）を抽象した内容を目指している。つまりマニュアルについて言えば、賃労働者たる部分労働者から全体労働者（社会的生産機構）を構成させるところ、また労働手段から分離した労働力を再び生産手段と結合させるところ、資本の存在が当然前提されている。したがってここで言う生産様式とは、生産に当って、生産手段の所有を媒介として取結ばれる人と人との関係（生産関係）からな

所有を抽象したところの「労働過程（→生産力）」の技術的・社会的結合の内容を規定する範疇と考えてよいであろう。

(3) 生産関係 生産関係は資本論では価値形成・増殖過程において考察されている¹¹⁾。

すなわち労働日の分割、つまり労働者に帰属する必要労働部分と資本家に帰属する剰余労働部分への分割の問題（これが生産手段の所有を媒介として取結ばれた人と人との関係）が取扱われている。生産過程は以上に述べた労働過程と価値形成・増殖過程の二側面として捉えられており、二側面の統一的理解が行なわれる場が経営であった。したがって経営はこの二側面について分析される必要がある。

以上述べたところから明らかにするように労働過程は人と物との関係（労働力と生産手段との結合形式）を取扱かう。ところで相川哲夫氏は「生産様式」と「生産力と生産力の運動形態としての生産関係との統一概念」とされている。すなわち生産様式と「即自的かつ本源的意味

びはなんら敵対的・階級的な性格と有するもの
 ではないうにかかわらず、労働過程の社会化
 の内的必然の弁証法において敵対的なもの
 の自己変革が発生する。この意味で、それは
 歴史的・規定的生産様式である。すなわちこ
 れは一方においては、生産・交換・分配・消
 費の社会の経済的構造の四契機のうちでも、
 もっとも基本的なものは生産という意味で、
 また他方においては、どのような敵対的・階
 級的な生産関係が盛りあげられるかは、生産力
 と生産力の運動形態とによって生産関係は、一
 口でいえば労働過程の社会化の段階に、それ
 ゆえ社会的生産過程の発展段階に依存するこ
 うの意味で規定的である。⁽¹⁾とされる。具体的に
 いえば労働過程の社会化の段階が単純協業
 から複雑協業へと移ることによって、多数の
 「自立的手工業者」たち相互の横の関係から
 資本＝賃労働者という縦の関係が成立すると
 される。しかし、このばあい、「自立的手工業者」と
 いう言葉は、手工業者が部分労働者化してい

ない、つまり原料から完成品まで一貫して労働し生産する、という意味ではあっても、資本に対して自立してゐる、という意味ではない。

協業の一つの条件は「労働者が一定の場所に密集することである」¹³⁾。これは「同じ資本、同じ資本家が彼らの労働力を同時に購入してはじめて可能である」¹⁴⁾。また「より多量の生産手段が個々の資本家たちの手に集積される」ということが賃労働者の協業のための物質的条件である。¹⁵⁾「小親方と資本家たちとが、かくて資本関係を形式的に成立させるには個別資本の特定の最小限の大きさが必要であるが、この資本の最小限の大きさは、分散して相互に独立する多数の個別的労働過程を一箇に結合された社会的労働過程に転化させるための物質的条件である」¹⁶⁾。すなわち協業を可能にする物質的条件は資本であつて、決して自主的な小親方間の横の関係ではない。したがって單純協業も複雑協業も拾ひのつかない資本によつて始めて可能となる。「敵対的な関係」は始

めから前提さへていふのである。この意味で「労働過程の社会化の段階」は飽くまで先に述べたように、生産力を構成する要素ではあっても「生産関係を盛りにあげる」というものではない。生産力が生産関係に転化するとはありえない。そうではないとて、生産力の展開が価値の配分、したがってくどくとの関係、つまり生産手段の私的所有者と社会化した労働過程で働く賃労働者との間の矛盾と拡大するという道を通じて、生産関係の矛盾と激化させ、生産力に照応する生産関係と造り出して行くと考えらるべきであらう。すなわち、生産の社会的性格と所有の私的性格との矛盾。逆にまた生産関係を通じての価値の配分関係が、剰余価値の蓄積の量と規定することによって、生産力の展開を規制するのである。

〔Ⅱ〕 農業生産力

(1) 労働手段としての土地 農業にお

いても、生産の單純な抽象的契機が、有用労働

的・労働対象・労働手段であり、生産力の増
 大のためには「労働手段または労働方法」
 または同時に両者「の変化」一言でいえば
 生産様式の変化が生ぜねばならないことは生
 産力一般のばあいと同じである。しかし農業
 生産ないし農業生産力における特徴は、土地
 ないし過去の労働が加えられた土地である耕
 地が、工業のばあい——このばあいは土地が
 労働手段であるには違いないが、労働が行な
 われるための必要を对象的条件ではあっても
 「直接に過程にはいるない。・・・労働者に彼
 の立つ場所を支え、また彼の仕事⁽¹⁷⁾の場を支え
 る」に止まる。——とは異なり、農業のばあい
 直接労働過程にはいるという点で異っている。
 つまり労働者の仕事⁽¹⁷⁾の場、立つ場所を支える
 だけでなく、「作物育成に合目的的に利用され
 る自然条件⁽¹⁷⁾」すなわち労働手段などである。
 この耕地は(1)気象・地勢・地質(2)生
 物界との物質代謝などの農業的自然条件と結
 合して現実の形態をとるが、機械的労働手段

をもち、てある農耕労働による物質代謝や、土地改良・水利・排水などの生産手段と結びついて形づくられる耕地の豊饒度（土壌の物理的・化学的構造、微量含有金属、土壌水の状態）が土地と、この労働手段の能力を示すものと考えてよい。このように土地が、農業においては工業のばあいと異った労働手段であり、この労働手段の能率を示すものが豊饒度するわけの地力であるという点が農業生産の一つの特徴である。この点に、たとえば加用信文氏が農法論の中心課題と「経営内部の地力再生産のメカニズム」つまり地力維持体系とされる理由がある¹⁸⁾。

(2) 土地生産力と作付組織 とこで労働手段たる土地の能率を示す地力は、農業においては特異を現われ方をする。というのは自給的農業が商業的資本家の生産に変化し専門化するばあい、工業とは異った道と巡るからである。工業においては「専ら一生産物又は生産物の一部を生産するよう各個々の全

く独立した部門に分れる」が、「農業は工業のように完全に個々の部分に分離せず、單にある場合には一つの市場向け生産物の生産で専門化し、他の場合には他の市場向け生産物の生産で専門化するだけで、しかもこの場合、農業の他の部門はこの主要(すなわち市場向け)生産物の生産とみあう形に変わる¹⁹⁾」からである。したがって耕地に栽培される作物も單一ではなく、多数の作物が市場向け生産物を中心に経営において体系的に作付けられることとなる。

ところでこの作物の作付順序は三つの側面から規定される²⁰⁾。第一は、収量の高さおよび土地肥沃度の維持の点からみて、最も合目的な前後作の生産学的ないしは栽培技術的問題である²¹⁾。第二は、経営の方針過程、肥料・飼料、その他の経営手段の経営内容、危険分散などの点からみて最も合目的な作付割合の問題、すなわち穀物、牧草、根菜類、原料作物、休閑のそれぞれに仕向せられる園場の各

部分の比率、つまり耕園方式の問題である。
 第三は変化する経済条件への作付順序の適応
 に関する一切の問題を含むものである。第一
 の栽培技術的側面(土地生産力)は商品生産
 の方向によって経営の生産方向を反映する様
 になり、それにともなつて第二の作付比率は
 主として極端変動にみられる経済条件によつ
 て主として規定されるようになる。したが
 って経済条件は作物比率観念からみて諸作物の
 正しい組合せを攪乱する。このようにして土
 地生産力は経営の場において考へるとまづ作
 付組織について考察することになる

(3) 労働手段・労働対象

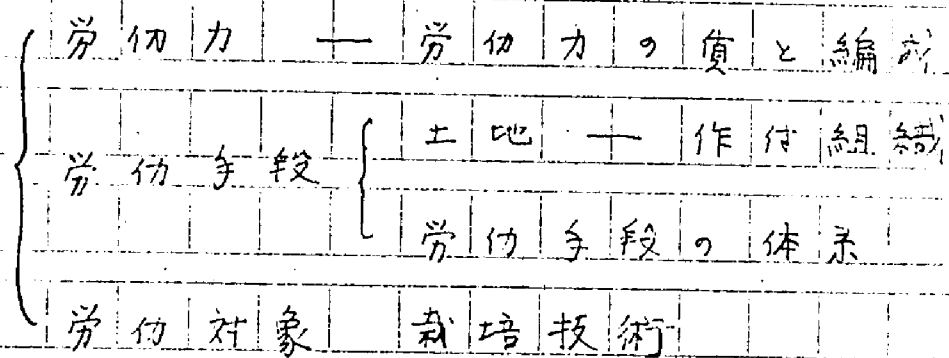
さう

まづもたう「土地はそれ自体一つの生産手段
 ではあるが、それが農業で労働手段として使
 だつたためには、更に一連の他の労働手段と、
 すでに比較的高度に発達した労働力とを前提
 とする」。この一連の労働手段——これをさう
 農業における資本として把握される——には、
 労働対象としての作物(種子)、用畜、肥料、

農薬、労働手段としての農機具、役畜、果樹、
 建物などがある。この労働対象と労働手段と
 は互に関わりあつて農業における生産力を形
 成する。労働対象は農業生産の原料や補助材
 料であつて、その改良は生産物の収量や品質
 改善となる。しかし労働手段の体系としてつ
 技術の変更をしなければならぬ。つまり労働手
 段は同じであつて、しかる生産力を左右する
 技術である。したがつてまた労働方法や生産
 規模に拘束されるにとつて採用される。
 いわゆる栽培技術がこれに当る。これに対し
 労働手段の体系としての技術は、工場生産に
 おける工場設備や機械と同じように、労働方
 法を左右するものである。

(4) 農業生産力の構成 以上から農業
 生産において小商品生産が開始されれば、農
 業生産力はまず農業の生産方向によつて区別
 される。これは農業生産内部における社会的
 分業の進度を示すものであると同時に、同一
 の使用価値についての生産力比較と可能とする

る。この農業の生産方向の区分を前提として、農業生産力は以下のように構成される。²²⁾



(5) 農業経営様式 上の農業生産力の構成要素の所有を含めて考察したばあい、とりわけ価値の配分を考へるばあいには、生産関係を含めた概念である農業経営様式が成立する。既存の農業経営様式は、生産力の発展の中で価値の配分を通じて矛盾を拡大し新しい農業経営様式に発展する。また逆に価値の配分を通じて剰余価値の蓄積を規定し、したがってまた生産力の展開を規定する。したがって農業経営様式は、第一に、その生産関係の性格によって区別され、次いで同じ生産関係の中では主要な市場向け生産物および生産力

によって区別される。

農業経営様式は、農業経営を場とし、労働過程と価値形成、増殖過程（価値の配分と関連する）の統一としてあらわれる。このような統一把握こそが農業経営様式分析の課題とななければならない。²³⁾

注 7) マルクス『資本論』（第1巻第3編第1節「労働過程」、邦訳、青木文庫、第2分冊（以下『資本論』第2分冊と略記）

8) 『資本論』第3分冊、532～533頁。

9) 『資本論』第3分冊、543頁以下。563頁以下。

10) 生産様式の解釈については、くく
に足原拓自『所有と生産様式の歴史理論』
20～24頁をみられたい。なお『資本論解
典』（青木書店）「生産様式」312頁。

11) 『資本論』第2分冊

12) 相川哲夫「農法論研究序説」（Ⅰ）

農業経済研究第40巻第4号、153～154頁。

13) 14) 15) 16) 『資本論』第3分冊、554～555頁。

17) 以下については井上晴丸「農業生産力の特殊性について」(『日本農業発達史』別巻下、654～672頁。とくに667頁。

18) 加用信文『日本農法論』52頁以下。

19) レーニン『ロシアにおける資本主義の発展』レーニン全集第3巻267頁。(大月書店)

20) ブリンクマン「ドイツ畑作の作付順序像」(熊代幸雄訳、農業経営調査会、3頁。クロハリョフ『農耕方式について——その史的概観——』とくに212頁以下。

21) この問題は、土壌・気候条件の差、圃場と天然採草地との比率、すなわち当該農業経営の部の天然採草放牧地の値と量によって規定される。

22) クロハリョフ 前掲書 292頁と

比較された。い。

23) 加用信文は『日本農法論』で農業生産力を構成する要素とすべて土地生産性の次元で、すなわち地力再生産のメカニズムの枠内で把握される。

すなわち労働手段のうち土地については、地力維持・増進のメカニズムの面から作付組織を分析される。例えば輪栽式農法については「地力消耗的を穀物＝稔実作物と地力補給的を基葉作物の二範疇の作物交替方式」、「飼料かぶの耕地導入による飼料基盤の拡大→家畜（用畜）生産力の増大→厩肥の増加→作物生産力の拡大という、地力の拡大再生産機構の確立と作物および家畜生産力の併進的を躍進の途」（加用信文、前掲書23頁以下）を

解明される。労働手段の体系についてカブ畜力条播機・畜力中耕機・揺動犁の導入による近代的犁耕体系の実現を取扱ったが、その中でもとくにカブ栽培のための、深

耕を可能とした「一〜二頭で牽引しうる

能率的な深耕可能の小型・軽量の揺動犁

の出現」を問題とされる。すなわち、こ

こでも新しい作付組織を可能ならしめる

ための犁という観点、したがって地力の

拡大再生産機構の確立の面から問題にと

らている。そして畜力条播・中耕機の出現

の意義についても「条播・中耕作業にお

ける畜力『機械化』による人力の代替、

すなわち労力節約を意味するものであ

く、封建的な農村共同体において、宅地

に附属していた狭小な園地にしか行な

れなかった人力による条播・中耕作業が、

この畜力条播・中耕機の出現によって大

きな農地にも実現可能になったこと、つ

まり耕地において是人力作業として不可

能であった条播・中耕作業が、畜力作業

としてはいじめて可能になったことである」

として、この場合の畜力「機械化」がま

さに地力維持増進のための作業体系の更

革として技術革命の性格をもつものである
 ったことを強調される(加用信之、前掲
 書、148頁以下。)つまり労働力と地力維
 持・増進にかかわる範囲内に限定して分
 析されるのである。しかしわれわれの観
 点からすれば生産力の増大による価値の
 配分比率の変化の問題「一商品の生産の
 社会的に必要を労働時間の短縮・・・必
 要労働の剰余労働への転化による剰余価
 値の生産」の問題が取扱われねばならな
 い。この観点からすると、当然、資本の
 技術的構成、したがってまたその有機的
 構造の問題、労働の質および編成の問題
 が論じられなければならない。

例えば、輪栽式農法について、以前は
 圃地でだけ手耨耕で行われていた耕作
 作業が、畜力中耕機によって耕地で行わ
 れるようになったことを、労働の生産
 力の発展、すなわち必要労働の減少、剰
 余労働の増大という側面から考察しねば

ば、なう、ない。馬・条播機、中耕機の導入によつて、可変資本に対する不変資本の比率が増大する、つまり労働生産力は増大したはずであり、そうであるからこそ「作業体系」の改革が可能であり、耕種生産における大規模経営の存在性が確立したのである。

さらに揺動犁—条播機—中耕機の体系は労働方法、すなわち労働者の質および編成の問題と関連する。まず第一に、労働力と生産手段が資本家のもとにより多く集中されることによつて、土地生産力とともに労働の生産力も協業、分業の適用によつて増大する点が考えられねばならない。第二に馬や改良農具の取扱いによつて労働者の質の問題が考えられねばならない。

〔Ⅲ〕 十六世紀ドイツの農業経営様式の分析

〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕は農業経営様式を具体的に分析するに当たっての理論的骨格である。本項では、農業経営様式概念によって封建的生産関係のもとで農業生産力と生産関係とをどう統一的に理解するかについて考えてみた。²⁴⁾

農業経営様式分析の課題は、農業における生産力の発展と、それに伴う価値配分比率（必要労働と剰余労働）の変化との統一的把握であった。さて十六世紀のドイツは封建制から資本制への過渡期²⁵⁾である。封建時代の農民は（a）領主的土地所有と農民的土地所有という二つの権利が同じ土地について重複して存在するもので、（b）開放耕地制度と村営共同体規制に従って経営を行ない、（c）自給農業と自給農村工業とが結合した自給経営とを営んだ。（d）その家族形態は家父長制家族であり、単独相続が行われていた。そこで農業生産力——労働力（質および編成）、労働手段（作付組織、労働手段の体系）、栽培技術

一 が発展する = によって、農民経営が村
 落共同体からどれだけ自立するのか、農村家
 内工業が農民経営からどれだけ分離し、自給
 自足的色彩がどれだけ消滅するのか、また農
 業生産がどれだけ商品生産向けに輪転されて
 くるのか、これに対応して家族形態はどう多
 化するのかが問題となるであろう。次いで、
 この農業生産力の発展の結果として必要労働
 と剰余労働との比率の変化が生じるが、これ
 は一つには領主取分と農民取分との比率の問
 題として、二つには経営諸類型の分化の問題
 としてあらわれる。すなわち前者は、農業生
 産力の増大とともに、必要労働部分が減少し
 剰余労働部分が増大するが、その結果として
 直接生産者の手許に従来の封建地代を上回る
 剰余が蓄積されるかどうかの問題であり、後
 者は剰余が直接生産者の手許に蓄積される条
 件があるばかりのも、生産力の発展が不均等に
 行なわれるため生じる問題である。
 さらに剰余労働と必要労働との比率を規定

する要因が、この時代には生産力較差ばかりではないことを言うまでもない。生産力を補完する要素も前近代的方法、例えば封建的特権、高利貸的方法などによって入手することが、この時代にはなお剰余労働部分の形成に大きな意味をもっている。したがって剰余労働部分の源泉を明らかにすることは農業経営様式の課題となる。

注 24) 農業経営様式は、生産力の発展に伴う労働過程で、労働、労働手段、労働対象についてどのような変化としてあらわれるのか、その変化に伴って、剰余労働と必要労働との配分比率がどう変化するかが問題とするための概念である。したがって十六世紀においては農民経営だけでなく領主経営も検討の対象となる。

25) 過渡期を十六世紀ドイツについて更に具体的に規定すると、先進地域(ニエーダーライン)では小商品生産段階と

い え る 。

第三節

史料

〔I〕

農書成立の経済的背景

(1)

ドイツにおける地域間分業の発展

新大陸、東方新航路の発見と契機として、

ヨーロッパの国際貿易は飛躍的に発展した。

そして十六世紀には、高度に発展した工業を

もつイギリス、オランダと背景として、アン

トワープ、アムステルダムを中心とするヨー

ロッパ商業の網が形成された。ドイツもこの

商業網に組入れられたことは勿論であるが、

こうした国際貿易の参加はドイツ内部におけ

る地域間分業の発展を基礎としていたことは

注目せねばならな²⁰い。

まず取引の対象としての商品の種類と生産

地についてみてみよう。中世末期から近代初

頭にかけて、取引商品のうちでは大衆消費財

が次第に前面に押しだされてくる。勿論、植

民地貿易の発展とともに、香料などのいわけ

る植民地産品が輸入品として重要な位置を占

めたが、ドイツ産商品のうちでは穀物、家畜²¹

木材、麻織物、金属器などが中心的地位を占めるに至った。²⁶⁾ 商品化される農産物はその生産地について興味深い地域的分化を示している。²⁷⁾ 穀物商業の中心地はエルベ河以東の農場領主制の支配する地域である。肉用牛は東南ヨーロッパ（ロシア、ポーランド、ハンガリー地域）からドイツへの輸入が見られたが、他方では北海沿岸の湿潤な気候条件を背景にデンマーク、西北部ドイツに牛の集中的生産地域が展開した。当時ドイツの牛市場の大中心地であったニュルンベルクでは、十六世紀の最後の二十五年間に、北西部ドイツ産肉用牛が東南ヨーロッパ産肉用牛と圧倒するに至った。このように北西部ドイツの肉用牛生産が東南ヨーロッパの粗放的な放牧生産と圧倒したのは、アーベルによれば北西部ドイツにおける改良穀草式農業（Koppelwirtschaft）の発展に求められている。さらにブドウ栽培についてみると、ブドウ作に不適をドイツ東北部に普及していたのが、十六世紀には南西部ドイツ

ツ、ライン上流地域に集中する傾向を示した。
 アーベルは以上のような農業の地域的分化と、
 オランダの集約的輪作を中心とする一種のイ
 ユーネン圏として理解しようとしている。²⁸⁾ 他
 方工業製品についても生産地域の分化がみら
 れる。麻布生産が南西部ドイツ、ヴェストフ
 ァーレン及び中部ドイツ（シュレジエン、ガ
 クセン）に、金属器生産が南部ヴェストフ
 ァーレンに展開した。²⁹⁾ このような農工生産の地
 域的分化の傾向こそが、ヨーロッパ市場と結
 びついたドイツ国内における地域間商業発展
 の基礎であった。そしてこのようなドイツ内
 陸部における地域間分業、したば、てまた地
 域間商業の発展が、主要通商路の北海沿岸航
 路から内陸部（ニュルンベルク－ライプツ
 ヒー－ブレスラウ－クラカウ－ポーゼ
 ン）への移動とをうけて現われた。³⁰⁾

工業生産において十六世紀の発展を示す経
 営形態は向屋制度（Verlagswesen）である。初期資
 本主義時代を特徴づける向屋制度は、それ自

体さまざまな発展段階をもっている。原初的にそれは生産者と完成品市場から切り離すという形態から始まり、最後には肉屋主が、原料供給、商品販売を独占する（すなわち生産者が完成品市場からだけでなく、原料市場からも切り離される）だけでなく、自身が分業を組織する段階まで発展する。最後の段階はすでに分散マニユファクチャーとしてマニユファクチャー段階に照応する工業形態として把握できる。肉屋制度に共通な要素は、生産者が同一の作業場に集中される＝となく、商人の指導のもとに、分散的に、自分自身の作業場で労働する＝とである。肉屋制度はドイツではすでに十五世紀に始まり、十六世紀以降加速的に発展したが、その発展の中心部門が繊維品のごとき日常的消費資料にあり、また金属器のごとき生産財にもこの経営形態がみられる＝とが注目される³¹⁾。

(2) ドイツ各地域における地域内分業

この肉屋制が地域的に異った発展段階をと

っ て 現 れ て い る こ と が 重 要 で あ る 。 肉 屋 制
 の 端 初 形 態 と し て は ツ ン フ ト 特 契 購 入 (Zunft-
 kauf) が あ げ ら れ る 。 こ れ は 商 人 の 取 り が 都
 市 ツ ン フ ト を 前 提 と し て い る 点 に 特 徴 が あ る 。
 ツ ン フ ト と 商 人 と の 利 害 を 調 停 す る 機 能 を 果
 す る の と し て は 市 参 事 会 が あ っ た ³²⁾。 流 通 の 面
 で の 需 要 の 大 規 模 化 に 対 応 し て 、 ま し め だ り
 生 産 様 式 の 変 化 な し に 、 品 質 の 統 一 し た 商 品
 を 大 量 に 調 達 す る た め の 方 法 が こ の ツ ン フ ト
 特 契 購 入 で あ る と い え る 。 最 初 南 部 ド イ ツ に
 発 生 し た が 、 後 に シ ュ レ ジ ー エ ン 、 ガ ク セ ン で
 完 成 し た 。 一 般 的 に 流 通 組 織 に 止 ま っ た が 、
 自 ら 生 産 者 と し て 分 散 マ ニ ュ フ ァ ク チ ャ ー と
 経 営 す る 場 合 も 稀 で あ っ た と 云 わ れ て い る ³³⁾。
 こ れ に 対 し 西 部 ド イ ツ の ヴ ェ ス ト フ ァ ー レ
 ン 地 方 (ヘ レ ス バ ッ ハ 農 事 対 象 地 域 で あ る
 ニ ー ガ ー ラ イ ン ラ ン ト を 含 む) で は 、 肉 屋 制
 は 中 部 部 ド イ ツ (ガ ク セ ン 、 シ ュ レ ジ ー エ ン)
 の よう に 都 市 手 工 業 (農 村 地 域 の 小
 都 市) に 基 盤 を 置 く の で は な く 、 農 村 手 工 業

を基盤としてゐる点に特徴がある。ここでは
 十六世紀に農村手工業の発展によつて、都市
 手工業の衰退傾向が明白にみられた。すなわ
 ち都市手工業はその就業者数を制限するたの
 に生業原則 (Nahrungsprinzip)³⁴⁾ — 営業独占と都市
 内部での成員間の平等性を維持するたの厳格
 な規制によつて生業を保障する — によつて
 その規模を限定されたが、農村工業・工業農
 民 (Industriebauern) すなわち小農民、下層農民
 (借家人層、小屋住農) は制限に悩まされる
 ことなく繁栄した。彼等は商人と同屋制関係
 に入り、技術をまなび、商人による指示や刺
 激を受け入れた。すなわちここでも、農村で
 増大した下層農民は農村手工業活動に生活の
 糧を見出し、その結果農業は彼等にとって副
 業となったのである。³⁵⁾ シュレジエンでは都市
 ツンフトが = の新しい組織である同屋制の共
 同の担手となったが、ヴェストファーレンで
 はこの新しい組織に無理解であり、その結果
 同屋制と都市ツンフトは対立せざるをえなか

った。都市の手工業の一部は農村に流出定住し、ツインフトの規制から解放されて、それまで農村副業としてあった手工業を発展させた事例が、ケルン、アーヘンなど西部ドイツの最も重要な工業の中心地で典型的に見られた。手工業製品について地域分化を見ると、ヴエストファーレン南部地域に金属工業（伝統的な武器の生産とともに、大鎌・小鎌・犁刃などの農具、各種刃物の生産）が、北部地域では麻織物、木工品生産が展開した。³⁶⁾

以上からみてヴエストファーレン地方と中東部ドイツとは同じ向屋制のもとにあるといっても、その発展段階が異っている。つまりヴエストファーレンでは、工業発展の基盤が農村地域に移行し始めており、封建制のもとでの都市と農村の分離による農工間の均衡＝秩序が解体し始めたことを意味する。³⁷⁾ 中東部ドイツでは事情が異なる。勿論ここでも工業生産は発展している。すなわちツインフト生産は注文生産ではなく価格仕事（Lohnwerk）と

なっており、しかも流通の組織者は需要の増
 大に対応して向屋商人となっていた。この向
 屋は分散マニユファクチャーとして生産の組
 織者となる場合も少なくはなかったものであり、
 この点で従来³⁸⁾の都市ツニフト、その流通の枠
 を一歩抜け出したものであった。そして農村
 においても都市ツニフトの規制に對抗して、
 あるいは規制を破って農村麻織物業の発展が
 かなり見られた。したがってザクセンでも農
 村と都市との分業秩序は解体の徴候が見られ
 たといえるが、ヴェストファーレンにおける
 ほど明確な形をとらず、領邦君主の規制によ
 って、十六世紀にはなお従来³⁸⁾の農村＝都市分
 業均衡の枠内にあったと云えよう。したがっ
 てヴェストファーレンでは都市による農村支
 配が崩れ、領邦君主の権力基盤（都市）と財
 政的基盤（農村工業と基盤として形成された
 商業資本）との分離対立傾向が見られたが、
 ザクセンでは両基盤がなお一致していた。

なお東部ドイツでは、工業の発展は他の二

地域と比較して著るしく立遅れていた。マルクブランデنبルグは東部ドイツでは先進地域であるが、十六世紀に都市ツーンフト手工業が漸く展開し、親方・雇人・徒弟関係に属する詳細な都市条令が初めて公布されている。しかしブランデنبルグにおいても、都市の大部分は農業的色彩を強くもち、フーフエ侯有者や醸造所所有者が都市貴族が占めるべき位置を占めており、少数の大都市においてのみ商人ギルドに結集した貴族層が上述の人達と並んで役割を果たしたにすぎなかったと云われている³⁹⁾。そして十六世紀後半から十七世紀にかけて、農場制領主の工業部内への生産、商取引についての進出がみられ、農村手工業が農場制領主のもとで奇型的に展開した^{40) 41)}。

このようにして、十六世紀には工業が主として西部ドイツにおいてみられるが、農村に新しい発展の場を見出すことにより、農業に対して相対的に高度な発展を遂げた。このことが従来の封建制のもとでの農工間の均衡を

破り、価格革命の過程で農産物価格、特に穀物価格が工業製品価格と比較して急上昇する原因となったと考えられる。

〔Ⅱ〕 十六世紀におけるドイツ農書 — 農書解題 —

(1) 農書と地域 〔Ⅰ〕で見たような商工業の発展に基づく従来農工均衡の解体が、農産物、とくに飼料を含めての穀物需要を増大させた。このような経済事情を背景として、ドイツ各地で農産物の商品化が進み、十六世紀後半に各地域で農書が出現した。ニーダーラインにおいては、Conrad Heresbach, *Rei rusticae libri quatuor*, 1570. (英訳本 *four books of Husbandry*, translated by B. Googe, 1577. 後に *The whole Art and Trade of Husbandry, contained in Four Books, Enlarged by B. Googe, Esquire*, 1614. 独訳本 *Vier Bücher über Landwirtschaft*, Bd. I, II, Übersetzung von M. Güntz, in: *Jahrbuch der Gesellschaft für Geschichte und Literatur der Landwirtschaft*; 1914 - 1931., Konrad Heresbach,

Vier Bücher über Landwirtschaft, Band I Vom Landbau, Übersetzung mit kritischem Quellenachweis von Helmut Dreitzel, 1970.) 、 ガクセン において は Haushaltung in Vorwerken, Ein landwirtschaftliches Lehrbuch aus der Zeit der Kurfürsten August von Sachsen, 1557/70; Abraham von Thumshirn, Oeconomia (1616 Casper Jugelius により Leipzig で 出版)⁴²⁾; 農書ではなすが ガクセン 選帝侯 アウグストの直営地経営の 実態を記録した Bericht über die Visitation der Kurfürstlichen Vorwerke im Jahre 1571 von Thumshirn がある。シュレジエン については Martin Grosser, Kürze und gar einfeltige Anleitung zu der Landwirtschaft, beides im Ackerbau und in der Viehzucht nach Art und Gelegenheit dieser Land und Ort Schlesien, Görlitz 1590.⁴³⁾ ブランデンブルグ については Johann Coler, Oeconomia ruralis et domestica 1593/1601.⁴⁴⁾ が 挙げら れる。

(2) 著者 ヘレスバッハ は ニーダーライ ンの領邦国家ベルクの領主で人文主義者であ った。古典古代の文献に親しむうち 古代農

書に接する機会を持つこととなったが、古代
 貴族と農業との関係を知る中で、農業が賤し
 い生業であるとする当時の考え方から次第に
 腹していったようである。「農業に因する四
 章」の序文では当時のライニランドの高級貴
 族の間で農業知識がかなり普及していたこと
 が窺われる⁴⁾。このことから見て、領主経営が
 基本的に解体していたこの地域でも、農業知
 識に対する潜在的な要求はかなり大きく、この
 要求を前提として、ヘレスバッハ農書(ラテ
 ン語)が出版されたと考えられる。ザクセン
 のトウムブスヒルンもヘレスバッハと同様貴
 族であり、自らの経営する二直管地経営の実
 態を中心に叙述している。当時のザクセン貴
 族の間で行われていた領主経営を正確に記
 述しているものと推測してよいであろう。Haus-
 haltungはザクセン選帝侯アウグストがトウム
 ブスヒルンの農書に刺激をうけ、領邦君主直
 管地経営の役人用に編纂させたもので、直管
 地管理指針といった性格をもっている。編者

は不明であるが、一説によればトウムブスに
 ルンではないかと云われている。貴族による
 農書⁴⁶⁾の出現は、先に述べた経済事情を背景と
 したところ、穀物価格の上昇による貨幣地
 代の価値の低下と直営地経営の有利化、およ
 び当時封建的兵制が解れ傭兵制に切替って行
 く中で貴族が軍役から離れて領邦君主の宮廷
 貴族(役人)化するか、あるいは農業経営に
 従事するかの選択に迫られたという事情があ
 っていた⁴⁷⁾。ゲロフサー、コーラーは何れもル
 タ一派の司祭出身である。彼らは宗教改革に
 よって従来農民に耕作させていた教区の司祭
 耕地(Pfarrgut)を自営することになったが、そ
 の中で農業に関心を持つようになり、その見
 聞した地域農業の実態を記述したと云われて
 いる。この意味で彼らの農業に対する関心は
 宗教改革の精神に根ざしているのであるが、
 そのイデオロギーは後にコーラーについて見
 る⁴⁸⁾様にゲーツヘル的である。以上からみてド
 イツにおける農書の成立は、十六世紀におけ

る農産物とくに穀物生産を有利とする経済事情、軍制上の変化といった社会的事情を背景として、⁴⁸⁾ 思想的には人文主義、フロイトスタニティズムの倫理が関与している点に注目される。(生産に対する積極的関心の喚起)。

(3) 内容 グロッカー農書が主として栽培・飼育技術的内容であるに對して、ヘレスバッハ農書および特にザクセン農書、コーラー農書が栽培・飼育に関する技術的記述に、経営管理的内容が加わっている点に特徴がある。記述の対象はヘレスバッハ農書、トウムバスヒルン農書をはじめとするザクセンの各農書では領主経営、グロッカー、コーラーの農書では農民経営である。しかしコーラー農書は同時に領主経営にも頁数を割いている。領主経営が対象となっているのは、ドイツの各地で貴族層における自営化傾向の高まりを反映していると考えてよいであろう。用語からみるとヘレスバッハだけがラテン語を使っているのに對して、他の農書はすべてドイツ

語を用いている。またヘレスバッハ、コーラーの農書が古代農書や他国の農書からの引用が随所に挿入されているに對して、グロツナー、トウムブスヒルンの各農書は対象地域の農業の記述に限定されている。このように用語、古代農書の引用の有無など形式的な相異はみられるが、その内容の点からみると、どの農書も、十六世紀のそれぞれの地域の農業実態の記述であつて、十七世紀以降の農書にみられるような時代、地域の混乱は見られない。この点に十六世紀農書の農業史資料としての大きな価値がある。したがつてこれらの農書は各地域の農業技術、領主経営、分益小作経営、農民経営について正確な信頼できる資料を提供してくれる。⁴⁹⁾

(4) 農書の時代的性格 さてこれらの農書はロツシャー (Roscher) 以来いわゆる家父学 (Hausvaterliteratur) の系列に属するものとされてきたが、最近シュレーダー・レムプケ女史は十七世紀のドイツ農書について「家父学的性

格が見られるが、十六世紀の農書には家父学
 文献とは区別するべき「初期資本主義」的性
 格が認められるとしてゐる。⁵⁰⁾ 家父学について
 はO. ブルンナー (Brunner) の画期的研究があ
 る。⁵¹⁾ すなわち彼は家父学がギリシャの「家」
 Oikos に關する學問とローマ農學との結合し
 て生じた、倫理學・社會學・醫學・家政學・
 農學の複合體であり、經濟的觀點からみれば、
 自給自足原理に立つ「家」經濟に關する學問
 であるとする。そのばあい商業は否定されて
 はいないが、それは「家」の自給自足經濟を
 補足する限りで認められてゐるに過ぎないも
 のであるとする。レムプケはこのブルンナー
 の研究を前提として、十六世紀ドイツ農書が
 自給自足經營ではなく、營利經濟的性質をも
 つ領主經營を前提としてゐる點を強調する。
 如史によれば、この營利經濟的性質はまづ十
 六世紀農書の構成に見られるとする。すなわ
 ち家父學が、家父長制により秩序づけられた
 自給經濟と營利領主の「家」の家政全部内と

対象としてゐるのに反して、十六世紀ドイツ農書が対象を農業に限定しており、しかもそのバあい、計算に基づき収益性を追求する商品生産を志向する農業経営について記述してゐるとする。したがって自給自足家計原理に立つ家長ではなく、商品生産を行はう経営主が記述の対象となつてゐるとする。そしてこのやうな商品生産志向は、十七世紀前半の三十年戦争によつて中断されて自給自足経営への復帰が行はれ（これを作付組織の観念からみると、豆科作物を含む多圃式農業から古典的三圃式への移行となる）、ここには自給自足原理による「家」=領主の家政の書として家文学が成立するとする。このやうにしてすれば十六世紀のドイツ農書を貫ぬくものも、商品生産を追求し計算に基づく収益性追求志向をもつ「初期資本主義的グーツヘル経営の精神」と規定するのである。

今、世史の見解を農書について簡単に検討してみよう。農業経営、とくに領主経営の合理

化、集約化について最も強調するのは、トウ
ムバスヒルンである。彼はザクセンについて
次のように述べる。

「農耕が有利で収益を毎年あげる為には、

(経営規模を――筆者) 家畜糞尿を施肥し

うる範囲に止め、すべての労力を適期に

かつ適切に行ない、採草地の草生、牧草

地、放牧地、羊その他の家畜飼育に応じ

て行なわねばならない。よく整えられた

農耕は、大面積の施肥もされず、作

業も適切に行なわれないうちより二倍、

いや三倍の利益がある。⁵²⁾「大面積の農業

では経費がかかるとだけでなく雑費も多く

かかり、しかも広いために適期の作業が

できず、賦役農民や賃労働者に勤勉に仁

事させることもできず、そのため屢々作

業時期を失し、播種収穫期に天候が悪い

と損害を生じる。かくして大面積の農耕

では必要な施肥ができず、結局支出と償

わえない。これを要するに、農耕は主とし

て神の御恵みの外に、二つの原因、適期の
の施肥と勤勉な作業にかかわる。 . . .

したが、て思慮ある農業者はもう一つ分
農場を設立するか、永小作あるいは他
保有形式で小作に出すことを考える。⁵³⁾

すなわち、トウムブスヘルンの目ざす経営
は、いたずらに面積の広さを追求する粗放農
業を適期の施肥・農作業による集約農業に移
すことにあつた。これは十六世紀の南疆ある
いは多圃化による休耕地の縮小と、いう形で耕
作面積の拡大を追求する農業生産力の発展が
必然的に突き当らなければならなかつた壁、
すなわち肥料不足を反映したものであるが、
十分な施肥、適期の農作業が行なわれなれば、
合費用を償ひえないとし、集約農業が粗放農
業よりはるかに利益があるとする真に商品生
産を行なう経営の性格が明らかにでてゐる。

この集約化、合理化は、耕地が離れていて年
雇あるいは賦役による農作業の監督を十分
に行なひ、地力低く肥料、労力、種子を

償や⁵⁴⁾ばあ、などに小作⁵⁵⁾に⁵⁶⁾す⁵⁷⁾ことも
 あらわれてゐる。さらにトウムブスヒルンに
 よれば農業経営でも簿記をつけ、商人経営と
 同様に計算を行なうべきであつた。「つぎの
 事は汝を恥ずかしめはしない。・・・他者か
 ら入手したもののすべてを数え衡る。支出と収
 入を記帳する」ニダトウムブスヒルンの言葉
 は勘定とか儲けとかが當時をあげクセンの領
 主層にとって身分にふさわしからぬものとし
 て感じられていたことを窺わせるが、しかも
 そうしたことが決して貴族にとって恥ずべき
 ものではないという=とを主張してゐるので
 ある。ここに農業における商品生産の発展が
 中部ドイツに与えた影響が窺われる。領主は
 穀物栽培耕地での穀物発芽後の除草に賦役を
 用ゐるのではなく、また貸金を支払つて賃勞
 力を使用するつでもない。貧農が家畜飼料に
 不足し雑草を飼料として必要とすることから
 領主の穀物畑の雑草を採取(除草)する=と
 も認め、代償に、草小作料(Graspacht)を徴集

55)

する。ここには雑草すらも貨幣化しようとする領主の志向があらわに出てきている。同様な経営の合理化は労働節約的な施肥方法や耕地利用法にも見られる。遠く離れた耕地には運搬の労働を節約するため糞肥が使用され、

あるいはまた植林された。遠く離れた耕地にはエンドウをまき、開花し始めた時刈込む。

それによって土地は肥え軟かになる。⁵⁶⁾ 多くの

の場所で遠くにある耕地には植林するのが良

い。なぜなら労働を必要としないからである。⁵⁷⁾

一方領主は封建的権力の貨幣化をはかっている。

すなわち分益小作人に賦役を貸与し、こ

れに対して貨幣を要求するのである。ここでは

領主と農民関係のところで賦役が維持され

る、従って基本的に封建的諸関係が堅持され

る中で領主と分益小作農との関係だけが貨幣

化される。

したがって、商品生産の発展に伴って、貴

族は旧来の生活慣習に拘束されるがらも、そ

こから次第に脱して商品生産に適応して行く。

そこには施肥、労働節約の姿が見られたように
 一定の合理化が見られた。また簿記の記帳
 による計算と収益性の追おがみられ、雑草の
 作にみられるように、あらゆるものを貨幣に
 転化しようとする傾向が顕著であった。しか
 し賦役について見られたように、この合理性の
 追おは基本的に封建的領主特権を解消するも
 のではなく、積極的に維持利用することと結
 びついた合理性の追おであり貨幣追おであっ
 た。ユーラーが宗教改革の精神である生産に
 対する積極的肯定的姿勢をとりをばら、しか
 もガーツヘル的立場にたつたことも、以上のよ
 うな時代に大きく規定されたことであつた
 と考えられる。この意味で、十六世紀におけ
 るドイツ農家の成立は、領主的立場からの生
 産に対する肯定的姿勢によるものであり、領
 主の「初期資本主義的精神」に負うていると
 いえるであろう。⁸⁾

注 25) 藤瀬浩司、「近代初期ドイツにおける社会経済構造」(岩波講座『世界歴史』14所収) 259頁。なお上述の過程は、一方では都市・商人の上昇を、他方では領主の下降、いわゆる「封建的危機」を生ぜしめた。この「危機」への対応の仕方ドイツでエルベ以西のドイツの地代荘園領主制、エルベ以东の農場領主制(Gutschenschaft)という二元性を生んだことはよく指摘されている。

26) 藤瀬浩司、前掲論文 259頁。

27) 以下については、W. Abel, *Geschichte der deutschen Landwirtschaft vom frühen Mittelalter bis zum 19. Jahrhundert*, 2. Auflage, 1967. ss. 168-182.

藤瀬浩司、前掲論文、259頁。

28) アーベルは集約度を規定する要因として、土壌・気候・農民負担、交通立地の四要因を挙げるが、その中で交通立地を最も重視する。Abel, a. a. O. S., 176. ただし筆者はこのキューーネン園的考えには

賛成できない。その理由については注41)を見られたい。

29) F. Lütge, Die wirtschaftliche Lage Deutschlands vor Ausbruch des dreißigjährigen Kriegs (in: Studien zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, 1963, S. 374ff. 藤瀬浩司、前掲論文、259頁。

30) F. Lütge, a. a. O. S., 363ff.

31) 向屋制度については F. Lütge, a. a. O. S., 374. S.S. 377-383. 藤瀬浩司、前掲論文、255 ~ 257頁。商業資本による小営業の支配の形態についてはレーニン『ロシアにおける資本主義の発展』(レーニン全集・大月書店) 376頁以下。

32) F. Lütge, a. a. O. S., 377.

33) 藤瀬浩司、前掲論文、256頁。例えばザクセン商人クラマー Cramer は1579年、騎士領モイゼルヴィッツ Rittergut Meuserwitz に麻布生産のため、晒布工場、織布工場、染色工場、オランダから連れてきた親方、雇人用の小屋百戸以上を建てている(F.

Lutge, a. a. O. S., 378.) をあがくことで、この
麻織物の流通を規制し、また麻織物工業
の担手であつた都市を支配したものは、領
邦君主をはいめとする裁判領主であつた。
裁判領主は、その支配下にある都市のツ
ィフトが西南ドイツ資本と契約を結ぶに
當つて、西南ドイツ資本の利潤の分前に
なることを条件に許可した。さらに直接
手工業者の繊維に課税し、織布工、紡績
工、糸買人にも課税した（進藤牧郎『ド
イツ近代世立史』415頁）。

34) 川本和良、『ドイツ産業資本成立史
論』40頁。

35) F. Lutge, a. a. O. S., 380. 藤瀬浩司、前
掲論文、256～257頁。

36) F. Lutge, a. a. O. S., 380. 381. 藤瀬浩司、
前掲論文、257頁。

37) 藤瀬浩司、前掲論文、257頁

38) 松尾展成、「封建的危機の経済的基
礎 — ガクセンの場合 —」（『西洋経済

史講座』所収、55頁以下。) 藤瀬浩司、

前掲論文、257頁。

39) 藤瀬浩司、「東ヨーロッパの農場領主制」(『西洋経済史講座 III』所収、149～150頁。)

40) F. Lütge, *Geschichte der deutschen Agrarverfassung*, 2. Auflage. 1967. S. 134, S. 140.

41) 以上に見られるような社会的分業の発展の量的、質的な違い、各地域の農業の性格、構造にどのように影響しているかが問題とされなければならないであろう。先に述べたアーベルのチェーン図による各地域農業の集約度に関する把握はこの観点と欠いている。確かに、アーベルがヨーロッパ各都市の穀物価格が相互に密接な関連性を示していることに基づいて主張しているように、とくに十六世紀後半のヨーロッパは地域間の関連の度を高めている。またドイツについてみても先に述べたように各地域間の商

品流通密度も高まっている。しかしこの
 時期の特徴をなす大商人の財産の最大の
 蓄積基盤が、藤瀬氏の指摘されるように、
 各市場間の価格差の最大限の利用にあっ
 た事から考へると、アーベルの言うチュ
 ーネン圈成立の条件はまだ必要最小限度
 満たされていなかったと考へざるをえない。
 おしり特定地域内における社会的分業の
 発展が地域農業に対して持つ意義が、ス
 ランダを中心とする交通立地と同時に考
 えなければならぬ。すなわち特定地域
 農業の規定要因としては、十六世紀にお
 ける地域間分業と共々、地域内分業が重
 視されねばならぬであろう。

42) 43) A. von Thunbshirn, M. Grosser の二農書は、
 Schröder-Lembke 女史編の以下の書物に収めら
 れている。Grosser / Thunbshirn, Zwei frühe
 deutsche Landwirtschaftsschriften, herausgegeben von Gertrud
 Schröder-Lembke, 1965. この書物にはレム
 ケ女史の二農書の解題、書誌学的研究が

(〇 〇)
含まれている。なおグロッサー農書には
農用具解説が、トウムバスヒル農書に
は農事暦が附されている。

44) コーラー農書の書誌学的研究には
G. Schröder-Lembke, Die genesis der Colerschen Haus-
bücher und die Frage seiner Quellenwertes (in:
Weg und Forschungen der Agrargeschichte, herausgegeben
von W. A. Boelke und H. Haushofer, 1967.) がある。

45) Konrad Heresbach, Vier Bücher über Land-
wirtschaft, Bd. I, Vom Landbau, herausgegeben von
W. Abel, Übersetzung mit kritischem Quellenachweis
von H. Dreitzel, 1970. 8. Ba ff.

46) 十四、十五世紀にドイツでは各地
域とも封建地代は一般的に貨幣化してい
たといわれている。

47) Grosser/Thunbshim, a. a. O. S., 7 ff. アー
ベル『農業恐慌と景気循環』(寺尾談)
158頁。

48) 近世における人文主義者の農林業
に与えた影響については、A. Hauser,

Beiträge der Humanisten, insbesondere der Juristen zur
Entwicklung der Land- und Forstwirtschaft vom 15. bis 17.
Jahrhundert, ZAA, XIV. 1966. SS. 182-190. を参照
のこと。

49) ことの真に ついては, G. Schröder-Lembke,
Die Hausväterliteratur als agrargeschichtliche Quelle,
ZAA, Bd. I. 1953. とくに S. 109. 地域性
について最も明確なのはグロフサーの農書
である。この書物では、私は我々の土地
柄 (Landart) において行なわれるべきこと、
および行なうべきからざることを示した。

(Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., S. 19.)

50) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 9f.

51) O. Brunner, Die alteuropäische Ökonomie, Zeit-
schrift für Nationalökonomie, Bd. 13, 1950.; Derselbe,
Hausväterliteratur (in: Handwörterbuch der Sozialwissen-
schaften, 5 Bd. 5. S. 92 ff.); S. v. Frauendorfer, Ideengeschichte
der Agrarwirtschaft und Agrarpolitik Bd. I, SS. 116-126.

52) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 96.

53) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 97.

54) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 63.

55) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 84.

56) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 98.

57) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 98.

58) 各地域で、領主の「初期資本主義的精神」の具体化したる領主経営がどのような経営形態をとるか、各地域内における社会的合業に主として規定されると考へる。

第二章

十六世紀後半のニーダーライン地方
における農業生産力と農業経営の諸
類型

第一節 ニーダーライン地方の農業生産力¹⁾

(1) 農地の構成 ヘレスバッハは耕地を (a) 毎年新たに耕耘されて播種される土地 *ager restibilis* (b) 三年目、四年目、五年目には休閑される土地 (c) 休耕地 *ager Novalis* — 初めて犁耕される以前には作付されて、なかつた土地で、收穫後休ませている土地ではない — の三種に区分している。 *ager restibilis* とは文字通り休閑なしに「毎年播種が可能な土地²⁾」であつて、沖積地であるか、あるいはは特に自然的豊度に恵まれた土地である。ニーダーラインでは河川流域の若干の地域に見られるとする³⁾。次の一般耕地の「三年目、四年目、最高五年目には作付を中断しなければならぬ⁴⁾」耕地とは明確に区分されている。しかし *ager restibile* はアーベル版では箇所によつて異つた理解、ドイツ語訳がなされているように思われる。すなわち犁耕に属し説明する箇所では「犁耕する耕地は休耕地であるか、

あるものは前年に作付けられた土地 (restibile) で
あるか、で大きな相異がある⁵⁾としており、ま
たエンドウ栽培に關する箇所でも「エンドウ
は休耕地に栽培されるが、しかし前年に (他
作物が一筆着) 作付けられた (restili) とするの
を、して一回犁耕した肥沃な土地に播く方がよ
い」⁶⁾としており、微妙な相異があるように思
われる。すなわち犁耕およびエンドウの播種
地に關する箇所でのように「前年に他作物を
栽培した土地」の意味に解されるならば、こ
の場合厳密に考えると (a) の *ager restibilis* だ
けでなく (b) の休閑されるが休閑後数年間
連作される土地が含まれる = となる。つま
り前年に他作物を作付けた土地、無休閑作付
地の何れも *ager restibilis* ということになるから
である。この区別を問題にする理由は、一つ
にはニ－ダーラインに於ける耕地の構成の異
からであり、二つには耕地の地力維持の問題
に關してである。

耕地の構成について云えば、後にブランデ

ニブルグについて具体的に見るように、当時の耕地は、例えば三圃式農業が行われていたとした場合に、一律に三年に一回休閑されるものではなかった。ブランデニブルグの例では三圃式農業を営む村落には実に種々の作付期間をもち土地があった。⁽⁷⁾ 毎年作付けられる土地 (Wördenland, 毎年施肥)、三年間に二年作付けられる土地 (Gerstenland, 毎年施肥)、三年間に二年作付けられる土地 (Haferland, 無施肥)、三年に一年作付けられる土地 (3 jährige Roggenland, 無施肥)、六年間に一年だけ作付けられる土地 (6 jährige Roggenland, 無施肥)、九年間に一年だけ作付けられる土地 (9 jährige Roggenland) があり、これらの地力、施肥方法の異なった土地から成る村落耕地で三圃式農業が行われていたのであった。したがって作付順序と理解するためにも、耕地の構成を明らかにする必要がある。この場合にニ－グ－ラインについて毎年播種される土地、休閑される土地、休耕される土地 (アルメシデ, 放牧地)

の三種から成るのか、あるいは休閑される土
 地と休耕地との二種類の土地から成るのかが
 問題になるのである。アーベル版からすると、
 河川流域の若干の地域を除いて、何年かに一
 回休閑する普通耕地（内周）と数年に一回作
 付けられる休耕地（外周）とから成り立って
 いる = となる。この耕地の構成と関連して、
 第二に地力維持の問題がでてくる。ブランド
 ンブルクの *ager restibilis* である Worden 氏は、
 集中的に毎年施肥されることによって毎年の
 播種が可能であった。ニードーラインでは、
 ヘレスバッハの記述によれば、*ager restibilis* は
 自然的豊度に恵まれて毎年播種が可能であっ
 た。この *ager restibilis* の解釈について注目すべ
 きのは、ゲージによる英訳版である。このゲー
 ジ英訳版では *ager restibilis* がレイ（lay ground yearly
 sown）⁸⁾ として理解されている。ゲージが *ager*
restibilis をレイ耕地として扱えたのは、十六
 世紀におけるイングランド農業の現実、すな
 わち lay farming の進展をふまえてのものと考え

えられる。ニ—ダーラインにおいても、ヘレスバッハが指摘するように、地力の枯渇した農用地には、地力恢復作物として、ルーピンその他の豆科作物が栽培されていた。この異なつた單なる自然的豊度にもとづく *ager restibilis* の存在だけでなく、おそらく未だ体系だつてはいないにせよ、改良穀草式農業にみられるような耕地と採草地との交替という形での *ager restibilis* が存在したことが充分考えられるのである。ヘレスバッハの記述からは、*ager restibilis* が河川流域にだけ見られる例外的な存在であつたのか、それとも改良穀草式にみられる形での地力維持方式による普遍的な構成要素であつたのかは明確ではない。ヘレスバッハが *ager restibilis* として理解しているのは河川流域に限定されているように考えられる。しかしニ—ダーラインにおいてもイングランドのいわゆるレイ耕地が部分的にせよ見られることは疑いのない事実であるように考えられる。

(2) 作付順序

a) 作物交替原則 ニーダーラインの作付順序でまず注目すべき点は、不充分ながら、作物交替原則が意識されてゐたと考えられる点である。「すなわち土壌の性質によつて、二年目に休閑させるか、あるいは軽い性質の種子、つまり土地を痩せさせる程度が少なく、土地から力を奪ひ取らない種子、例えばルーピンとか後に奪うような他の種子を作付するかせねばならぬ。」⁹⁾ここではル、ーピンの持つ積極的な地力恢復機能を指摘するといふよりも、むしろ、地力を奪ひないといふ消極面しか指摘されてゐるが、しかし作物交替原則は見まがうべくもなく認識されてゐる。この記述に見るやうにニーダーラインでは、当時はつまりと前作・後作を考えた作付順序が見られた点に特徴がある。この点を確認した上で具体的に作付順序の問題にはいつて行くことにする

b) ヘレスバッハはニーダーラインにおけ

る作付について以下のように述べている。

「休閑地あるいは施肥した耕地には、最初に大麦または小麦を播くべきである。

小麦は肥沃な土地を好むが、しかし余りに肥沃すぎる土地では徒長して倒伏しやすい。それゆえ、あらかじめ大麦、エン

ドウ、あるいはソバを作付けた土地に小麦を播くのが一番良い。小麦のあとに、

同じ土地をもう一度ライ麦播種のために

整え、ライ麦のあとにはもし地力が無く

なっていなければ、もう一度大麦を播く。

非常によく肥えた土地には、アブラナを

収穫したあと、すぐに一回犁耕して、ソ

バを播く。そうすると耕地は一年に二度

収穫物を生む。同様にライ麦の収穫後、

同じ耕地で二回目の収穫をカブから得る

ことができる。エンドウ、ガイーケン、

ヘントウ、インゲンおよび殆んど全ての

豆類の播種のためには肥沃な土地が必要

である。それ等を収穫した後で、同じ耕

地で次年度には小麦が一番良く出来る。

さらにキビ (Rispenhirse, Kolbenhirse — 筆者)、

カブ。ポリニウスはカブを施肥した土地

に播くのを良しとしてゐるが、しかし私

は自分の経験を通じて、特に肥次でない

土地で、ライ麦を収穫した後、同じ年に

カブが良く出来ることを学んだ。砂質地

は二、三年間休ませねばならない。次い

で施肥し、ライ麦またはソバを栽培し、

その後には燕麦を作付ける。休ませてい

た土地、あるいは耕耘前は放牧地であっ

た土地には、肥次を地方にある場合燕麦

を、しかも一回犁耕した後で作付ける。

次いで次年度には再度しかもアブラナを、

次に大麦、次に小麦またはライ麦を、最

後に燕麦あるいは地力があればライ麦を

作付ける。その後は施肥するか、休ませ

るかせねばならない。軽い土地では多く

の処で、大麦に続いて Rispenhirse を播き、

これを収穫したら、カンパーニアでやっ

て、いゝように大根 *Rettich* を、その次に大
麦および小麦を播く。そのようを耕地で

は、播種の際に犁耕するだけで良い。ス

ペルト小麦を植えた土地が残つていれば、

冬の三ヶ月間放置しておき、春インゲン

を作付ける。同様に肥えた土地では作付

交替が可能であり、しかも穀物収穫後三

作目に豆類を播ける。瘦せた土地では一

年間ずつと休ませねばならない⁽¹⁰⁾

以上から次のように整理できる。

i) 粘土質土壤耕地における作付順序

普通の地力をもつ耕地では、耕地は最大四圃

に区分され、休閑 — 小麦（または大麦）—

ライ麦 —（地力がなお残つてゐる時）大麦と

なる（三年二作ないし四年三作）。すなわち

$B^+ H H (H)$ が基本骨格である。（ただし B は

休閑、 H は穂実作 *Halmfrüchte*、 $+$ は施肥を示す。）

穀物の二年ないし三年の輪作という点では典

型的な三圃式ないし四圃式農業である。⁽¹¹⁾ 小麦

が徒長するほど肥沃な（つまり窒素成分過多

の) 耕地では、小麦の徒長、倒伏を防ぐため、
 小麦の前作に過剰窒素と利用して、地力消耗
 作物を挿入する。その作付順序は 休閑 —
 大麦 (またはエンドウ・ソバ) — 小麦 —
 ライ麦 — 大麦 (五年四作) となる。これに
 一年二毛作の作付 アブラナ — ソバ (休閑
 後のオ—作付年度の位置にはいる)、ライ麦
 — カブ (第三作は年度の位置) が組合めさ
 れる。⁽¹²⁾ すなわち、休閑 — 冬アブラナ・ソバ
 — 小麦 — ライ麦・カブ 圃作 — 夏大麦 (五年六
 ありいは 休閑 — 豆類 — 小麦 — ライ麦
 ・カブ 圃作 — 夏大麦 (五年五作) となる。
 その他の作付としては 休閑 — 豆類 — 小
 麦 — キビ — カブ⁽¹³⁾ (五年四作) が考がら
 ている。

これらの作付順序は主穀式農業段階での優
 良地である。粗土質土壌におけるものであるが、
 注目されるのは以下の点である。第一に、豆
 類 (エンドウ、アブラナなど) があるいは土地
 を砂漠土地の固くなるのを防ぐソバが輪作と

採り入れられてゐる。第二に、従来圃地に栽培
 されてゐたカブが耕地作物として登場してゐ
 る。しかもその場合、玄代におけるように施
 肥地ではなく、ライ麦收穫後の跡地に無施肥
 で栽培されて良く成育するといふ経験に基づ
 いて間作として採り入れられてゐる。第三に
 一年二作といふ、当時の西ヨーロッパ農業から
 みて、かなりの集約度の上昇が認められる。
 すなわち、アブラナは商品作物として、当時
 主として冬作物として、三回犁耕後肥次なエ
 地または施肥地に播種された。ソバは砂質土
 壌でもよいが、肥次地で良く出来るとされて
 いる。従つてナタネ—ソバの一年二作
 の場合、優良地に播種されるのが普通であり、
 当然施肥を必要としたと考えられる。したが
 って先にあげた作は順序はア—ベルも云うよ
 うに一見輪栽式農業に近いように見える。
 しかし、こゝで注意すべき事は、休閑が依然
 として存在してゐることは別として、エンド
 うなどの豆類とカブが輪栽式の作は順序の中

で持つとされている、いわゆる地力増強機能を
 有しているか、どうかの問題がある。豆類は
 作物分類からすると確かに茎葉作物に属する。
 しかし上述の輪作中に見られる機能からすれば、
 小麦にとつての過剰窒素成分を消費する
 機能を有するものとして、大麦（地力消耗作物）
 と同列に置かれていた。この点からみて
 豆類は地力消耗的機能をもち稔実作と見らさ
 なければならぬ。この点については加用土
 が、エンドウを「三圃式」栽培法の段階では、主
 として重粘土壤において夏穀に準じて一部に
 栽培されていたが、その場合は一種の夏穀と
 して地力収奪機能をもちものであったとし
 ておられるのと全く同様である¹⁴⁾。ただし「收
 穫直後、エンドウの小鋤で刈り残した部分を
 直ちに犁き込む」ことによる肥料効果¹⁵⁾、及び
 農作業の面では、豆類あるいはソバの収穫跡
 地に小麦を播く場合、普通三回を要する犁耕
 が一回で良いとされており、労力節約的效果
 を持った点に注意せねばならないであらう。

この二葉において、浅耕・多肥段階でのエン
 ドウ・小麦という前後作関係（作付組織）
 の成立は、この時点での生産力発展の特徴で
 ある。またカブもノーフォーク農法にみられ
 るように地力増進機能を持っているであろう
 か。ノーフォーク式農法で栽培されるカブは
 深耕（30 cm）多肥のもとで後作の穀物に対し
 地力増進機能をもつ。しかし十六世紀のニ
 ガーランドの耕地に作付けられるカブは穀物
 用の浅耕（約10 cm）しかできない犁で耕作さ
 れている。ところでヘレスバツハは、カブの
 栽培には犁よりも鋤（Spaten）で耕耘するのが良
 いとしている。これは広い土地（耕地）では
 犁、狭い土地（園地）では鋤と云われるよう
 に、栽培地の広狭による耕耘用具の相異を指
 摘しているのではないかと、耕耘の浅深につい
 て述べていると考えた。つまりカブの栽培
 には犁の耕深では不十分であり、鋤でなくて
 はカブに適した深さまで耕耘出来ないことを
 指摘しているように考える。したがって十六

世紀のカブ栽培と特徴づける、耕地におけるカブは、カブの必要とする深耕が行われないう条件のもとで栽培されたと考えられる。また肥料の欠けらぬ、休閑後四作目に作付けられるカブに對しての施肥は行なわれないうちに栽培される。つまり施肥は穀物に對するものであつて、カブに對するものではない。このように浅耕、少肥（穀物に適した施肥）のもとで栽培されるカブは、輪栽式農業で發揮する地力増強機能を發揮しているといへないであらう。⁽¹⁶⁾ カブが輪栽式における機能を發揮していないことは、カブが栽培されて耕地の連作期間が長くなつても、休閑が消滅せず存続している裏や、穀物の前作ではなく後作として位置づけられている裏、さうにカブの栽培される土壌が當時では主として粘土質土壌であつた裏などにもみられる。⁽¹⁷⁾

以上、粘土質土壌における作付順序は、豆類、カブが導入されているが、その栽培は浅耕、肥料不足という条件の下で行なわれた爲、

ある程度の地力増強機能を示しているとは云え、輪栽式において豆類、カブが持つ機能を發揮しているとは云えない。しかしエンドウソバに見られるような作付順序組成の出現、カブ間作、地力の固渇した耕地への牧草の栽培(レイ)は主穀式農業の枠内ではあっても、その極限とも云える発展を示している。そして先に見た作付順序が従来と比較して、多量の労力と特に肥料を必要としたことは明らかであって、地力の維持・増大の面での進歩なしには実現できない性質のものであると云える。

リ) 砂質土壤耕地における作付 砂質土壤では二・三年の休耕後に施肥し、二年間の穀物連作が行なわれている。すなわち、¹⁸⁾ 休耕(二・三年)ーライ麦(ソバ)ー燕麥。ここでは穀物の連作と二年以上の休耕とが交互に繰返されており、新しい展開は見られない。しかし他方では豈科牧草のうちルーピンが特に砂礫土壤の適作物(飼料・緑肥)とし

て取入れられており、この奥に当時の砂質土壌耕地における発展がみられる。¹⁹⁾

iii) アルメンデにおける作付 肥次を土地では施肥した休耕地も一回犁耕して、休耕 — 燕麦 — 冬アブラナ — 大麦 — 小麦 (ライ麦) — 燕麦 (可能な時はライ麦) という六年五作の作付が行なわれる。砂質土壌では、休耕地の三回犁耕後 休耕 — 大麦 — Rispenhuse — 大根 — 大麦 (小麦・スペルト小麦) — ソラマ²⁰⁾ の作付が行なわれた。アルメンデ、すなわち外園においても粘土質土壌については施肥を必要とする作付が為されている。奥は、この地方における肥料の豊富さを裏付けるものである。この厩肥は、芝草の上に糞尿をかけ、そのまま放置して腐熟させるか、あるいは羊小屋に芝草と混ぜ入れて作るものとされている。なお重粘土壌ではアブラナが、砂質土壌では大根が栽培されているのが目とくが、これは耕地について豆類、根菜類に同じ述べたと同じことがあてはまる。

であらう。

注目すべき点は、放牧地、休耕地、未墾地に、とくに砂質土壤に適した豆類、牧草が導入されていることである。²¹⁾ エンドウも休耕地に播種されたが、²²⁾ しかしとくに砂質土壤で、グーテン²³⁾、ルーボン²⁴⁾、コロハ (Bockhorn, Kuhhorn)²⁵⁾、苜蓿 (cytisus)²⁶⁾、オオツメグサ (Spergel)²⁷⁾ が播種された。このように三圃式農業に代表される生産力水準では劣等地であった砂質土壤でも、飼料作物であると同時に緑肥作物でもある豆類、牧草が導入され、そのことによって生産力が増大した。

ル) 採草地 採草地について十六世紀のニーターラインで最も強調されている事は、灌漑と栽培牧草である。すなわち採草地についての記述は、マルメラ、プリニウス、バロウデビローマ農書によっている部分が多いが、灌漑の必要性を強調する部分はいくつかハ自身の記述である²⁸⁾。「土が乾燥して収量の少ない土地にある採草地は、近くから灌漑

用の溝の助けを借りて、近くの小川または池から灌水できれば最も有利である。」乾燥して地味の良い土地でも、灌漑できれば採草地をつくれる。」

栽培牧草としては特にルーサン (Luzern) が注目されている。ルーサンはドイツに「現在（十六世紀に筆者）イタリアないしフランス産クローバー (Welscher Klee) と呼ばれて導入された²⁹⁾」しかし既に「多くの処で、採草地に豊富に自生している³⁰⁾」とされている。この自生ルーサンは「多くの場合、以前に播いた種子の残りが生えたものである。」あるいは「ルーサンは多分に亘って絶えず地面に落ちた種子から生産量を落とさずに発芽する。しかしその後³¹⁾は芝土の力に負けて普通の採草地に退化する。自生するのを妨げるものは何も無いように思われるが、しかし外国産であるので、恐らく播種 (künstliche Aussaat) を必要とする。」³²⁾注目されるのは古代ローマでは、ルーサンの栽培が園芸的手法（苗床、灌水、施肥、耕翻、除草）

によって栽培されたものば、多年生深根性雑草に負ける爲に播種に必要とされているが、自生に委ねられるほどに粗放的に栽培されるようになってゐる点である。ルーサンの外には苜蓿、オオツメグサが養がられているが、これについては先の述べた。

以上、アルメンデ、採草地については、灌漑、多少粗放的でかつ砂質土壌への豆類、栽培飼料の導入が見られる点に時代的、地域の特徴がある。

(3) 地力維持

① 肥料の種類 肥料としては家禽・人間・家畜の糞尿、ルーピン、穀物藁や羊歯類の藁、堆肥(ルーピンの茎と落葉)、泥灰土、石灰、泥土などが養がられている³³⁾。この中で目新らしいものは、泥灰土(Mergel)とルーピンである。泥灰土については、マース流域のフランス領側の地域から得られる泥灰土が外国へ運ばれて高価に販売されると記されており、当時の農産物の商品化を反映する金肥の

存在が知られるのである。

b) 厩肥 肥料のうち最も主要なものは厩肥であるが、肉類は家畜肥料の量、従って飼育頭数と規定する飼料、とくに冬期飼料の量およびその生産方法である。既に述べたように、ニードーラインでは、耕地、アルメニダに多種類の飼料が作付けられている点に特徴があった。中世的生産力水準では、荒地である砂質土壌に適した飼料作物が耕地とアルメニダとは導入されていた。これらの飼料作物は苜蓿作物、一年生、多年生とを問わず、主として未墾地、採草放牧地に播種されたものと考えられている。³⁴⁾ このような飼料用作物の栽培によって家畜飼料の増大が見られたことは疑いなく、飼料の増大は第一に、ルーサニが役畜用、肥育用、オオソメグサが主として乳牛用（その他鶏、蜜蜂、羊、山羊、牛など）として用いられているように用途別の方化が見られ始めていた。これは畜産の発展に伴って生じた家畜飼育の方化に対応している。

第二にルーピンは穀物の脱穀の際に生じる屑物と一緒に、あるいは単独で冬期飼料として用いられ、ルーピンも三年間保ち出さるゝとしてあるから冬飼料として用いられたと考へてよいであろう。カブもまた同様である。したがって、これらの栽培家畜飼料が主として夏期飼料の増大であつたとしても、飼育頭数と最終的に規定する冬期飼料の増大も、カブ、ルーピン、ルーピン等について見る事ができよう。二うして飼料の増大が家畜飼育頭数の増大、従つてまた厩肥増大となつて現われ、先の肥料集約的作付順序を可能とする主要な原因となつたと考へられる。³⁵⁾

c) 緑肥 さらに肥料としてハルーピンに代表される緑肥がある。「もし厩肥が無い場合、ルーピンは最良の肥料を提供する。なぜならルーピンを播種し、あるいは型込めば、最良の厩肥代替物を提供するからである。」³⁶⁾「ルーピンには特別な効果がある。ルーピンを鋤あるいは犁で、莢が出来る前に犁返す。あ

るいは束ねて果樹や葡萄の根のほっている土
 の中へ埋める³⁷⁾グリーケンについても類似の
 記述がある。「何らの肥料を必要とせず、むしろ
 それ自体が土を肥やす。とくに飼料用グリー
 ケンを生(Grün)で刈取り、直ちに犁返す時
 はそうである。小鎌が刈り残した生が枯れる
 前に犁込まねばならない。何故なら、残った
 根が土地から力を奪うからである。」³⁸⁾

以上で見たような、多様な栽培飼料の出現、
 緑肥、金肥の使用が、この地方の作付組織と
 特徴づける一年二作、二年二作という作付順
 序組成を含む五・六圃式輪作を可能にしたと
 云えよう。勿論ここに見られる飼肥やその他
 の肥料の増加も、三圃式農業における地力維
 持体系を根本的に変えるものではなかったと
 云える。すなわち、休閑は三分の一から五分つ
 一、六分の一に減少しても、依然存続してい
 る。また耕地外に、特に冬期飼料としての乾
 草を生産する永久採草放牧地も存在したまま

であつた。この採草放牧地が、当時の穀物生産の有利さを反映して、開墾される場合も少なくならなかつた様であるが、この開墾は耕地と採草地とのバランスを崩し、飼料基盤の弱化をもたらすことが多かつた様で、後に第二節で述べるように、小作契約の中で、地主の許可なしでの放牧地開墾は禁止されている。したがつて耕地、アルメーデの一部への牧草導入は、一方に於ける飼料＝厩肥基盤の弱化を補強する方向を示すものであり、三圃式にみられるような地力再生産の絆を緩めるものではあつたが、それを完全に断ち切つて、より高次の地力再生産機構を確立するものではなかつたと云えよう。

(4) 労働手段 ここでは最も主要な労働用具である犁と役畜に触れるに止め、その他については、第二節の領主経営の分析の際に述べるにとした。い。

a) 犁³⁹⁾ 犁は、犁先、犁刃、犁へら(換土板)、犁柄、長柄から構成されている。犁

刀、犁先は鉄製である。犁へうは土壌が堅い時、犁の右側に取付け、すき取られた土塊を反転させるための物で、取りはずしが出来る。犁を反転する時は左側に取付ける。

6) 役畜 「ライン」下流では、多くの地方で馬が用いられる。馬は犁を、より良く牽引する。しかもその場合、多頭馬よりも小頭数を利用する。何故なら多頭馬では土地を速く掘り起し幅の広い溝を作るが、これは否定されるべきであるからである。従って土壌は、普通は、ゆっくりと前進する、二頭で耕されるリムブルグ地方やブラバン地方で最も良く犁耕されているのを見る。イタリア、フランスその他では敵は牝牛で幅よりもむしろ深く耕す⁴⁰⁾。したがって役畜は、ケルン周辺では馬二頭が用いられた。このように犁の主要部が鉄製で馬二頭びきの軽量犁がこの地方の特色である⁴¹⁾。

(5) 以上、作付順序と栽培技術、施肥方法、生産手段を分析したが、これを共同体規

制の観真から改めて考えてみたい。

まず作付順序について見ると、一年二作の作付順序組成の出現、カブ周年作、一部耕地への栽培牧草（主として多年性）の播種は、南放耕地での休閑、刈跡放牧、その裏返しとしての作付強制の規則正しい実施も妨げ、共同体規制の弱化を前提とする。村落耕地全体規模での耕地強制はもはや不可能であり、少なくとも耕区単位への規制への移行が行なわれていなくてはならない。⁴²⁾したがってニ－ダ－ラインにみられた作付は耕地強制が弱いかきには全く存在しない散居式村落に適してゐると云える。ライン地方は散居式と村落式定住との境界線になっており、ほぼグラーデバッハーデューセルドルフ－エルバーフェルトの線を境として、北部は散居式定住、南部は村落式定住であったといわれる。⁴³⁾散居式の場合は、各農民の耕地が村落の場合のように混在せず、散在する家々を中心に一団となっており、したがって村落単位の耕作強制は欠落してゐた。

したがって、上述の作付順序が容易に行なわれると考えられる。

地力維持方式についてみると、耕地と採草地との相互輪換が、耕地でもアルメンデでも行なわれるようになっており、地力維持が耕地内部で行なわれる可能性が増大してきていると考えてよい。しかし、永久採草放牧地は依然存在しており、その無規律の開墾、耕地化は飼料不足、したがって肥料不足を招くおそれがあった。したがって三圃式農業に典型的に見られる地力維持体系の基本骨格は維持されている。また栽培飼料の耕地への導入、緑肥の使用によって、地力維持が個別耕地片において、したがって個別経営内部で完結する可能性が高まり、共有権下の共有地に依存する度合は低下する。換言すれば耕地と永久採草放牧地との結合が緩和されて、土地保有と共有権との分離が進み、個別経営が共同体規制から脱却する方向に進んでいると云ってよいであろう。

勞働手段について見ると、馬2頭牽の輕量鉄製犁の使用は、個別農業経営内部での役畜調達を可能とした。したがってこの点からも個別農業経営の完結性を高め、共同体規制からの脱却を進めるものである。

このように作付順序、地力維持、生産手段の各要素について、個別農業経営の共同体からの自立度の増大が認められると共に、十六世紀のニ－ダーラインにおける農業生産力発展の特徴がある。

注 1) ヘレスバッハ農書のテキストにはアーベル版独語訳本を使用した。このアーベル版はドライツエルにより嚴密な史料批判が加えられており、古代農書、外国農書の引用とヘレスバッハ自身の見聞に基づき部分とが明確に区別されている。特に示さない場合、ヘレスバッハ農書の引用頁はこの版の頁数で示す。またゲー

ジの英訳増補版と比較した場合、ゲー
ジが英国の事情を記述している箇所や、
英国の農業事情を反映した訳をしている
箇所が識別できるのは興味あるところ
である。

2) Heresbach, Vier Bücher über Landwirtschaft,
Bd. I Vom Landbau, hrsg. v. W. Abel, S. 39b.

3) 4) Heresbach, a. a. O. S., 39b.

5) Heresbach, a. a. O. S., 40a.

6) Heresbach, a. a. O. S., 60b.

7) A. Krenzlin, Dorf, Feld und Wirtschaft im Gebiet
der großen Täler und Plätten östliche der Elbe, S. 51ff.

8) The Whole Art and Trade of
Husbandry, translated and enlarged by B. Googe, p. 22a.

なお、レイについて述べてある箇所を挙げて
ると 17a, 22b, 24a である。

9) Heresbach, a. a. O. S., 40a.

10) Heresbach, a. a. O. S., 44a. 44b.

11) 休閑後の一年度に小麦が栽培さ

れる場合は 休閑 — 冬作 — 冬作 —

(夏作) となり、大麦の場合は休閑 — 夏作 — 冬作 — (夏作) となり、集約度が異ってくる。大麦が休閑後第一年度の作物となり、施肥作物となるのは、当時にあける大麦の商品化(ビール醸造原料)と関連している。

12) アブラナは8月末から9月初めにかけて播種する (Heresbach, a. a. O. S., 53b)。ソバは四・五・六月にアブラナ収穫後播種 (55b)。アブラナは農民的商品作物であった (53a)。またライ麦は九月または十月初めに (49b)、カブは大麦収穫後七・八月に播種する (53b)。

13) カブは農民によって耕地作物とされた真が重要である。「カブは私(ヘルスバッハ — 筆者)の考えでは、むしろ園芸作にはいる。・・・しかし農民はこの作物を耕地に栽培している。・・・種子は大体ライ麦あるいは大麦を収穫した後、冬耕地に播種される。」 Heresbach,

a. a. O. S., 53b.

14) 加用信文、『日本農法論』25頁。

15) Heresbach, a. a. O. S., 60b. ただし根を引
き抜く場合は地力消耗的と理解されてい
る点に注意のこと。「さほど肥沃ではない
土地に多くの栄養分 (Saft) を必要としな
いもの：例えば、クローバー、オオツメ
グサ、ヒヨユマメ (Kiehererbse) を播く。た
だし根を引抜く、したがって下部を刈取
らないう類は播かない。多くの栄養分を
必要とする作物、例えばカンラン、小麦、
ライ麦、大麦、亜麻も肥えた土に播く。
人々は次年度のことも考えて播種する。
例えばレーピンが施肥の爲にすま込まれ
るように。栽培した土を改善するからで
あるの。ここでは豆類の残能は一義的に把
えられていない。刈残した部分を犁込ん
だ場合の地力増強効果と、根を引き抜く
場合の地力消耗効果とが明らかに意識さ
れている。

16) 加用氏はこの裏に因して「穀物段階的を浅耕地盤のもとに導入された基業作物は本来の残能未發現のまま、穀作と同じ地力消耗的作物化してゐるのであつて、深耕多肥体系によつてはじめて本来の生産的残能を發揮するとともに、いわゆる地力増進的作物の性格を獲得し、さらに穀物との補合関係によつて、地力の拡大再生産的を輪作体系を確立せしめるものとなる」と言へてゐる(加用信文、前掲書、124頁。)

17) もっとも当時カブが「人間にも家畜にも望ましの食物を与へるので見過せない」ものであつた(Heresbach, a. a. O. S. 536)。すなわちカブは冬期飼料として用ゐられ、冬飼料の増大→飼育頭数の増大→肥料の増大を生じさせたことは見過しえない事実である。ヘレスバッハ自身は園芸作物としたカブを農民が耕地に作付けてゐる裏は、部分的とはいへ、農民経営のもと

どの畜産の発展も推測させる。

18) Heresbach, a. a. O. S., 44 a.

19) Heresbach, a. a. O. S., 63b. 64a.

20) 犁耕しを以て播種し労力を節約する。 Heresbach, a. a. O. S., 59 a.

21) 栽培牧草に関する記述はドイツではこのヘレスバッハ農書が初めてで、この点で劃期的である。グージがヘレスバッハ農書出版後直ちに英訳本を出版したのも、十六世紀のイングランド農業が、優れた牧草を必要とするレイ・ファージング農業の成立期にあったからであろう。

22) Heresbach, a. a. O. S., 60b. 「エンドウの休耕地に作られる。あるいは前年(他作物が一筆着)作付けられた肥えた土地に一回犁耕して播く」

23) Heresbach, a. a. O. S. 63a. 63b. 「グアイーケン」は乾いた土地も好むが、日陰の土地も嫌いではない。どんな土地でも大した手間をかけずに良く出まゐる。農民の手

ばかりからない。すなわち一回犁耕して播
 き、耨耕は必要なく肥料もいらない。む
 しろ土を肥やす。特に飼料ヴァーケンを
 生で刈取り、同時に犁返す時そうである。
 ただし小鎌で刈り、残した部分が乾燥した
 い間に犁返すればならぬ。何故なら
 残った根が土地から力を奪わなければ
 ある。ドイツでは三月末し四月に、実
 取り用、飼料用の二つの目的で播く。
 ……ソラマメについて述べたように、ヴ
 ァーケンも労力を節約するために、播種
 前に犁耕しなくても害はない。ヴァーケ
 ンは六月に開花する。すると水を清める
 ので非常に有益な飼料である。思慮に富
 む農民は、莢も一緒に貯蔵して、水にひ
 たして家畜の飼料に使う。燕麦と一緒に
 ヴァーケンを混合飼料として播くのが普
 通である。」

24) Heresbach, a. a. O. S., 63b. 64a. ルーベ

ンは「何らの作業も必要としないし、非

常に安価でもある。しかし栽培作物の中で一番土地に有用である。何故なら地力の失せた葡萄園や耕地に一番良い肥料だからである。ルーピンは地力の乏しい土地でよくできる。・ ・ ・ 砂礫質土壌や、一般に地味の悪い土地を好み、既耕地を嫌うという点で食用豆類の中で特殊な地位を占める。・ ・ ・ 石灰質や泥土を好まない。・ ・ ・ 耕耕はルーピンには害がある。雑草に食べられることなく、逆に殺してしまう。肥料が無い時はルーピンが最良の肥料となる。というのは播種するが、犁で突き込めば一番良い肥料の代替物を提供してくれるからである。・ ・ ・ 農民が怠惰でも害をうけない。」

25) Heresbach, a. a. O. S., 64b. 「コロハを未墾地、地味の悪い土地に栽培すると、大きな利益がある。・ ・ ・ ルーピンと同じように・ ・ ・ 食用にする。家畜飼料その他いろいろの目的に利用する。」

26) Heresbach, a. a. O. S., 67 b ff. 「羊飼料として役立つし、乾燥させれば豚の喜んで食べる飼料となる。毎年牧量が多く、地味が悪く土地でも良くできる。乾草と同じ効用があり、家畜をすぐ満腹させる。少量で足り肥やす。他の飼料より多量かつ良質の乳を生じさせる。・・・養蜂にも欠かせられない。・・・従って鶏、山羊その他すべての家畜に有用である。」

27) Heresbach, a. a. O. S., 68 b, 69 a. 「ドイツでは他の飼料からはこれほど豊富で味のよい牛乳は得られないし、この作物を飼料に与えられている家畜からえられる牛乳ほど良質のチーズを作るものはない。したがって大麦あるいはその他の穀物と殆んど同じ位に高く評価されている。その稈は乾草より質が良く、その屑物はビール醸造の際にできるどんを残渣よりも家畜にとって良い濃厚飼料となる。その実は特に冬期の鳩、家禽の餌に良い。人

マハエと砂質土壤、輕鬆土壤に播く。しか
 かも、実取り用には夏の月中旬に播く。
 放牧用には秋または收穫期に播く。砂質
 土壤の農用地を持つた農民には、この作
 物を出来る限り多量に播くのが利益があ
 る。鶏、蜂、羊、山羊、牛、その他の家
 畜に非常に有用である。

28) Heresbach, a. a. O. S., 79b, 80b1.

29) Heresbach, a. a. O. S., 66a.

30) Heresbach, a. a. O. S., 67b.

31) Heresbach, a. a. O. S., 67b. 芝エ (Garnerbe)

とは「グラスの根のからみあつた草地
 の表層」を指す言葉であり、この記述は
 恐らく、長期にわたると草地雑草が繁茂
 するためにルーサンの生育が圧倒される
 ことを述べたものと推測される。ルーサ
 ンは「三年目までは質が良くなり、そ
 のうち草地雑草に圧倒されるようになる
 のであらう。

32) Heresbach, a. a. O. S., 67a.

33) Heresbach, a. a. O. S., 34a~36a.

34) ルーサンにっいては「十年間維持
できる」(67a) がある。これは「三年生になるま
では質が良くなる」(67b) とある。首當に
っいては「三年後に刈りとり家畜にま
さるべきである」(68a)、「三年間に完全に生
育する」(68b) とあり、多年生であること
は明白であろう。グ、ーケ、ルーピン
にっいては、ほっまりしな、グ、ー
ケにっいては燕麦と共に混播される時
には一年生として利用されたと推測され
る。

35) オ六世紀のニーターラインにかけ
る大家畜の飼育にっいては、三好正喜、
「十六世紀後半のニーターライン地帯に
おける家畜飼育にっいて」(「東原
正信放牧定年退官論文集」農業経営と計
算の研究』所収) と参照された。

36) Heresbach, a. a. O. S., 64a.

37) Heresbach, a. a. O. S., 34b.

38) Heresbach, a. a. O. S., 64a. また豆類のキ
 っ肥料効果が古代農書の引用によって強
 調されている。例えばエンドウについて
 「ユルメウは、小鋤で刈残した部分と、
 刈取り直後に、... 犁込むことによって、
 エンドウで施肥すべきであると考えてい
 る」。しかし收穫の仕方(根を引抜くのと
 刈取るのと)が異なれば機能も異なると
 みるべきと理解されていることは先に述べ
 た通りである。

39) Heresbach, a. a. O. S., 36b~37a.

40) Heresbach, a. a. O. S., 37a.

41) Julich-Berg 領の騎士経営で馬が役畜
 に用いられていたことは、封地の面積表
 示に *Pferdacker* が用いられていることから
 も裏書きされる。ヘレスバッハ農場でキ
 農耕馬、軽馬用の厩が設置されており、
 馬が役畜に使用されていたことがわかる
 (Heresbach, a. a. O. S., 22b.)。

42) この点については、吉岡昭彦『イ

ギリス地主制の研究』100～106頁を参照されたい。

43) 川本和良『ドイツ産業成立史論』21頁。

第二節 ラインランドの土地所有と農業

経営の諸類型

本節では、ラインランド全体について、十六世紀を中心とした封建的土地所有と農業経営の諸類型を概観する。そして、この概観を通じて、次節で分析するニーダーライン地方の領邦国家ベルク—ミニヘレスバッハの直営地経営が存在した—の位置付けを行なっておきたいと考える。

(1) 封建的土地所有 ラインランドでは、封建的土地所有の中で、領主の単独所有の貫徹する土地(領主直営地および小作地)の比率がドイツの他地域と比較して大きい(ほぼ三分の一)長に特徴がある⁴⁴⁾。農民保有地が残りの三分の二を占める。この農民保有権は、殆んどが貨幣地代を負担するだけで、自由譲渡権をもつ *schlichtes Zinsgut* ないし *Erbzinsgut*⁴⁵⁾ であり、定額貨幣地代化する傾向が強かった。賦役義務も、領主経営が十三世紀以後解体す

ると共に、貨幣に転化するが、あるいは貨幣
 支払いによって消滅した。したがって貨幣価
 値が低落するに従って、農民の土地保所有权は
 事実上の分割地的土地所有権に接近したと云
 ってよい。⁴⁶⁾しかし十六世紀には上級土地所有
 である領邦君主が次第に強化されてくる。領
 邦君主は、一般領主の單獨所有権の貫ぬく土
 地を除いて⁴⁷⁾その他の農民保有地を財政的見
 地から強力に把握し、領邦君主の課税租税お
 よび賦役が、領主の課税封建貨幣地代よりも
 重大な意義をもつに至った。⁴⁸⁾

他方、領主が封建的土地所有の属性として
 農民に対して行便する経済外強制は、上級土
 地所有が領邦君主の手中に集中されたにもか
 かわらず、依然として個々の封建的土地所有
 と分離しなかつた。すなわち土地保有の分割、
 売却、抵当権の設定など荘園所属の土地に属
 する事項は、荘園裁判所で継続され、領邦
 君主の介入は殆んど認められなかつた。⁴⁹⁾しか
 し領邦国家ベルクでは事情が異なっている。⁵⁰⁾べ

ルクでは、経済外強制の上級領主、つまり領邦君主への集中が進み、個々の封建的土地所有からの分離が進んだ。すなわちベルクでは、十六世紀から領邦君主による裁判権の集中が進み、農地に属する手続が領邦君主役人によって行なわれるようになった。荘園裁判所は多年に亘って廃止される＝となく、農民保有地の授受も行なわれなくなった。

こうしてラインラントにおいては、本来の封建的土地所有関係と封建的階層秩序が、本来の人間の従属関係から貨幣的従属関係に転化すると共に、領邦君主→現実の封建的土地所有者→隷属農民という單純な関係に整備されていったといえる。この方向はベルクで最も明確な形で見られたといつてよい。そして現実の封建領主と隷属民との間の封建的土地所有＝保有関係については、農民の土地保有が「事実上の」土地所有に接近し、隷属農民は「事実上の」分割地農民に接近したといえる。

(2) 農業経営の諸類型

a) 領主経営

十三世紀に古典莊園における直管地経営が解体してからは、旧領主直管地の殆んどが小作農民によって耕作された。しかし領主経営は限られた範囲ではみられ続けたことは看過しえない事実である。領主の居住地では自己経営が引続いて行われ、十五世紀以後は強化された。しかし領主経営の規模は中規模の農民経営の規模を一般には越えることが無かった。領主とくに騎士の農場経営の農民経営に対する優位は法的性格のものであり、経営上のものではなかった。

b) 小作経営

小作の最も古い形態は分益小作農である。農具、役畜などの農業生産手段 (Inventar) は初めは領主所有であった。領主はその他に第一年目は播種量の全部、次年度以降はその半分を負担した。小作人が全播種量を負担する場合もあったが、その場合は収量の三分の一、ないしそれ以下を支払う必要があった。小作料は最初主として現物であ

ったが、代金納する = とも出来た。貨幣で支
 払われる割合が大きくなればなる程、地代の
 定額が進んだ。収量が変ると領主の収入も変
 るというのは地代收得者たる領主にとって非
 常に煩わしいことであつたからである。領主
 は = の煩わしさを農民に転嫁する。その上収
 量の正確な把握を行なうことが領主にはあつ
 ても非常に困難であつた。したがつて分益小
 作から定額小作へと移行する傾向が見られた。
 勿論多くの地方で、依然現物地代と分益小作
 が十九世紀まで維持されたが、全体としては
 定額貨幣地代小作制への移行が見られたとし
 てよい。小作期間は六年から十二年、二十四
 年へと延長されたが、永小作への発展は生じ
 なかった。小作経営の分化は著しく、最大
 規模は数百モルゲンに達し、米、麦、大豆、麻
 などを商品作物とする商品生産を行なう富農
 が形成された。⁽⁵²⁾

(c) 土地持ち労働者 ライニメントでは先
 にのべたように、「事実上の」分利地所有が

成立し、農民保有地の流動化が進んだ。さら
 ら農民保有地の分割の自由と分割地の譲渡
 が進んだ。これに伴って経営規模の細分化が
 生じた。この原因は農業が集約化して自立経
 営規模が縮小した⁵³⁾ ことにもよるが、むしろ山
 嶽地方にみられる農村工業の展開の結果でも
 あった。その結果、完全ホーフ所有者たる
 Meistbesitzte 層、二分の一ホーフ所有者たる
 Hofbesitzte 層、および小屋住層 (Kötter)
 に分化した⁵³⁾。これらの小屋住層は数モルゲン
 の経営規模で、土地持ち農村分働者の性格の
 ものであった。耕地が少なく家畜飼料が不足
 するため、家畜飼育をアルメーダに依存せざ
 るを⁵⁴⁾ えず、この面から共同体規制に固執した⁵⁴⁾。

注 44) F. Steinbach, Rheinische Agrarverhältnisse
 (in: Collectanea Franz Steinbach, 1967. S. 421.)

なお小作地が全農用地に占めて居る比
 率は Kurköln では 1669 年に 50 パーセントに

上、*Kurtier* では十八世紀で約三分の一、
Berg ではそれ以下と見積られている。

小作地の拡大は、農民保有地からの貨幣地代のもつ実価価値が減少した為である。領主は農民保有地を分割し、その各分割部分から旧地代全額を徴収しようとしたが、その試みが成功した場合も一時的に収入増大はあったし、また領主の意図が実現せず保有地の分割と同時に地代もまた分割される場合が殆んどであった。そこで領主は収入増を何よりも望み、小作地の地代に依存せざるをえなかった。農民保有地の購入によって領主は小作地の拡大に成功した。こうしてラインラントの全農用地の三分の一が十七、十八世紀に小作地になったと見積られている。この小作地所有者の中では次第次第に新貴族、都市貴族の比重が増大した。農民追放は殆んど無く、大部分の場合都市周辺で小作農場農地を園地化するたの

のものであつ、*これとわかれてゐる* (Steinbach, a. a. O. S., 421.)

45) Steinbach, a. a. O. S., 420. F. Lütge, *Geschichte der deutschen Agrarverfassung*, 2. Auflage, 1957. S. 164.

46) Steinbach, a. a. O. S., 420-421. *なお以上*
のようを觀察からの土地所有の整理につ
いては、堀江英一編『イギリス革命の研究
完』第一章「イギリス革命における土地
問題」を参照された。

47) 領主直管地および小作地について
は租税が免除されたが、*または極めて名*
目的を課税が行なわれたに過ぎない。

48) Steinbach, a. a. O. S., 424~425.

49) Steinbach, a. a. O. S., 424.

50) Steinbach, a. a. O. S., 423. Lütge, a. a. O. S., 191ff.

51) Steinbach, a. a. O. S., 421.

52) Steinbach, a. a. O. S., 421~422.

53) Steinbach, a. a. O. S.,

54) 川本和良、前掲書 28頁。

第三節 領邦国家ユーリッヒ＝ベルクの

土地所有と農業経営の諸類型

本節では、前節と若干重複するが、ヘレスバッハが領主経営の典型として描いた彼の農業経営が存在した領邦国家ユーリッヒ＝ベルク (Herzogtum Jülich-Berg) について、騎士領主の土地所有と農業経営の諸類型を検証する。

〔I〕 封建的土地所有

(1) 騎士領主の性格 — 領主権カー

ヘレスバッハはその農書の中で、訪問者リゴ (Rigo) に「君は騒がしい宮廷の煩わしい義務から逃れて、この上なく静穏に暮らしている⁵⁵⁾と述べさせているように、領邦国家ユーリッヒに顧問官 (Rat) として仕え、外交官として各地に派遣されており、当時の騎士が一般にそうであったように宮廷貴族化した存在であった。また彼の領主経営は「私のところには多数の奉公人 (Gesinde) がおり、多量の穀物粉が必要なのだが、大水車 (Großmühle)⁵⁶⁾は非

常に遠くに在り、そこへ行くのも骨が折れるので、また大水車の使用と何ら義務づけられてもいないので、粉にするために穀物と家へ運ぶことも、自分の粉引機と造ることも、そうしたことを思えば許されている。ところが水車、風車を建てるには場所もなく権限もない。⁵⁷とあることから推測されるように、リッター・ジッツ (Rittersitz) に附属する農場であつたと考えられる。

それではリッター・ジッツは領邦国家ユーリッヒ・ベルクではどのような地位を占めるものであつたろうか。一般的に云つて、リッター・ジッツの所有者である騎士は、等族議会への出席資格 (Landständefähigkeit)、租税免除特権、狩獵特権、その他の特権 (農税免除、禁制衣施設使用義務免除、飼料燕麦賦課の免除、宿営義務の免除、裁判領主役人の騎士領への立入り禁止特権、シャッツ (Schatz = Bede) 免除など) を持つてゐる。⁵⁸⁾

次に領邦君主とリッター・ジッツとの関係

を中心として整理すると次の諸氏が注目される。第一にリッター・ジッツの大半が莊園裁判権を保持している。例えばアムト・アング
 ルムント (Amt Angermund) — ベルク領 — では、十
 七のリッター・ジッツのうち莊園裁判権をも
 つものは僅かに七つに過ぎない。⁵⁹⁾ 他のアムト
 の事情も同じといわれており、⁶⁰⁾ したがって、
 リッター・ジッツ所屬の土地を耕作する農民
 の大半が領邦君主の裁判権に服していること
 になる (大部分の、また大きな莊園裁判所は
 領邦君主あるいは教会の所有であった)。しか
 も莊園裁判権を騎士が持っている場合も、そ
 の权限に属する隸屬農民は少数であった。例
 えばアムト・シュタインバッハ (Amt Steinbach)
 — ベルク領 — の或る村では、リッター・ジ
 ツの莊園裁判権に服する農民の数は僅かに
 十人十二人に過ぎない。これに対して同じ村
 にある或る教会は百五十人の隸屬農民を持つ
 莊園裁判権を保持している。⁶¹⁾ また莊園裁判権を
 持っている場合も、その裁判権の权限は縮小

あるいは空洞化してきている。荘園裁判領主
 は中世を通じて、土地の賣買、交換、分割、
 相続、質入については管轄権を、地代その他
 の荘園所屬の土地について行なわれるあらゆる
 変更については同意権を、不法な道路によ
 って農地に加えられる損害については管轄権
 を、地代滞納については差押え権を持ってい
 た。しかし十六世紀になると道路に関する事
 項は領邦君主の管轄に移っている。また差押
 え権についてみても、依然荘園領主が維持し
 ていると云うものの、差押えの執行につい
 ては領邦君主の裁判役人の介入が行なわれ、
 領邦君主の役人の手で執行されるか、あるい
 はその許可をえて始めて荘園領主が執行する
 事が出るという事態も生ずるに至っている。⁶²⁾
 以上の事實は荘園裁判領主が隸屬農民に対し
 て持つ力が領邦君主の介入によって弱められ
 て来ている事を示しているものと考えられる。
 いかえると地代徴集を保障するものが、騎
 士自らの裁判権から領邦君主の裁判権へと形

式的にも実質的にも移って来ていると云える。

第二に租税免除特権について見ても、同じ

騎士がリッター・ジッツを多数持つている場

合、この特権はすべてのリッター・ジッツに

及んでいたが、次第に制限されて、唯一つの

リッター・ジッツだけに限定されるようにな

る。⁶³⁾ リッター・ジッツ以外の騎士所領 (Ritter-

güter) は特殊な土地 (レーエン・自由世襲地)

を除いて領邦君主の租税たとえバシヤツツを

賦課されるが、その賦課単位は騎士領ではな

く村落であり、その徴集は領邦君主から騎士

に委任されるのではなく、直接領邦君主の

役人 (Amtleute) によって行なわれた⁶⁴⁾ (最終段階

の村落では、村役人が徴税請負人化している)。

第一、第二の表が共に示しているように、土

土所有と、その土地を耕作する農民に対する

支配権とは、すでに分離しており、とくに裁

判権、租税徴集権などの支配権が領邦君主の

手中に集中する過程、領土の一元支配化が、

かなりの程度進行していることがわかる。す

なわち騎士領は政治単位としての性格を次第に失なっているわけだ、この意味で騎士は次第に地主化して行っているといえる。

第三に、このような事態の進行を反映して、騎士の収入もその土地所有からの地代だけではなくて来ている。騎士の土地所有に基づく地代収入の外に、領邦君主から受ける地代、租税、関税などの貨幣レーエン (Geldlehen)、ラント貴族 (Landadel) としての権利 (Indigenatsrecht) に基づいて得られる官職からの収入、等族議会手当てなどがあり、これ等の収入の方が、土地所有に基づく収入よりもむしろ重要であったと云われている⁶⁵⁾。云いかえると、封建的土地所有に基づく収入よりも、等族制国家に由来する収入が過半を占めるに至ったこと、また貨幣収入が現物収入 (地代)⁶⁶⁾を上回って来たことを意味するものと解釈して差支えないと考えられる。これはまた騎士が特定の領邦君主によって、領邦君主以外の上級領主 (国王、他の領邦君主、教会領主など) と

の關係を断ち切られ、特定の領邦君主だけへの
 の従属を深めつつあったこと、これに伴っ
 て、騎士が下級領主（現実の封建領主）
 としての性格を次第に失ひ、役人化して行
 っているという事の結果であった。

以上を封建的土地所有の観点から考えると
 次のように纏める事が出来よう。すなわち、
 封建的土地所有は重疊的関係に置かれており、
 領地を封ずる上級領主の上級領主土地所有、
 封ずるを受ける下級領主の下級領主土地所有（
 現実の領主的土地所有）、農民の土地保有が
 同一の土地に重なって存在している。このよ
 うな重疊関係の中でユーリッヒ・ベルクにお
 ける上級領主と下級領主との関係では、上級
 領主が領邦君主に單純化されると共に、現実
 の領主である下級領主の封建的土地所有の属
 性としての農民に対する経済的強制も個々の
 土地所有から次第に分離されて、唯一の上級
 領主たる領邦君主の手中に吸収されていった
 ことがわかる。

(2) 騎士領主の土地所有

a) 規模 まず騎士所領の中でリッター・

ジッツについてみると、リッター・ジッツは

附属する農場の規模はその大部分が100モル

ゲン(20~25ha)内外である⁶⁷⁾。騎士所領はこ

のリッター・ジッツの外にレーエン、自由世

襲地も含んでいるが、これ等リッター・ジッツ

以外の土地面積はリッター・ジッツの面積

とほぼ等しいのが一般とされている⁶⁸⁾。したが

って、騎士所領の大きさは区々であるのは勿

論であるが、一般的に云って約200モルゲン

(40~50ha)と見られる。それ故騎士は一般

には大土地所有者ではなかった。従って多数

の騎士においては土地所有から得られる収入

はそれほど大きいものではなく、その為先に述

べたように土地所有に基づく以外の収入が重

要な意味を持っていたのであった。

b) 封建的土地所有と農民的土地保有

騎士所領は、領主の単独所有権のつらぬく

土地一すぢを騎士の自営地、および小作

貸出地 一 と農民保有地からなっている。こ
の表を一五八八年のユーリフと箒族議会文書⁹⁾
によつて見ると、次のように三つに区分され
ている。永小作権 (Erbpacht)、分益小作権 (Halbpacht)、定期小作権 (Zeitpacht) がそれであ
る。

i) 永小作(権) 永小作は、かつてのフ
ーエ地、それ以外の小地片の土地、園地付
きの宅地などに適用されており、農民は相続
権を持っていた。可なり農民の慣習保有地
を指す。かつては分割、譲渡、質入れを行な
う場合には領主の許可を必要とし、四分の一
以上に細分するとは許されていなかった。

しかし十六世紀には既にこの規定は実施され
ておらず、土地保有の移転に際して一定の承
認料 (売買価格の十分の一) を支払えば自
由に保有権を譲渡する事が出来たし、地代
も固定していた。この意味で、永小作地には
ある領主の封建的土地所有は名目化して来て
おり、農民の保有権は事実上の分割地的土地

所有に近づいていったとみえよう。

ii) 分益小作(权) 分益小作は領主に

收穫の半分を地代として支払わなければなら

ない (die. gutere, so umt halboheit gewonnen werden)。期

間も六～十二年で、一般に十二年契約であっ

た。専ら旧領主直営地の貸借に対して適用さ

れたと云われている。⁷⁰⁾

iii) 定期小作(权) 定期小作は「定額

小料料」に対して (gegen sicheren und benentlichen pfacht)

貸出される。借地期間も九～十二年であつた。

ただレベルクではこの借地形式は余り用ゐら

れなかつたと云われている。

十六世紀後半において慣習保有地である永

小作地とその他の小作地との比率は明らかで

はないが、十八世紀では小作地は三十パーセ

ント以下と見積られており、したがって十六

世紀後半においても七十%以上が永小作地で

あつたと思われる。農民の慣習保有地の小作

地への切換へは、農民の慣習保有地の封建地

代の増額を実現しえたが、領主が、収入増

大のたのめに、農民の慣習保有権を買取るとい
 う方法で行なわれたことは第二節で触れた通
 りである。農民保有地の小作地への印換、小
 作経営農地の一戸化のための手段として、農
 民追放も見られたが、それはごく僅かの事例
 であり、その地域も都市周辺に限られたとい
 われている。しかし十六世紀後半のニ－ガー
 ライニ地方で都市周辺に限られるとは云え、
 大農圃の形成が追求されているのは、農民層
 の分解を前提として小農を追放し富農層をよ
 び入れる傾向が見られたことを示すものと考
 えてよいであろう。現実の領主たる騎士は農
 民的慣習保有地から封建地代をもはや増大す
 る力をもたなかったが、この力をもったのが
 領邦君主であった。領邦君主は農民の商品化
 農産物（大青その他の染料原料、麻など）に
 対して課税することによって、すなわち農民
 の商品生産に立脚することによって、その一
 戸領地支配を進めることが出来たのであった。
 このようを事態をふまえて上で、ヘレスバ

ッハが小作についてどう考えてゐたかを見て

みよう。

第一に小作人については「土地と小作に貸し出した」時は、先に管理人と農業労働者について述べた事に注意せねばならない。一般的に云へば、土地を有能、勤勉、誠実であることがよく知られてゐる人物に仕せるべきである⁷¹⁾としてゐる

第二に地代については「小作人からは貨幣支払よりも、賦役 (Dienstleistungen) を要するべきである。何故なら小作人にとっては負担になること少なく、しかも利益を生ずる点ではより大きいからである」⁷²⁾としてゐる。ニーダーラインでは賦役が騎士＝農民関係では基本的に解体してゐた事は既に繰返し指摘した通りであるが、ここでは小作契約関係を通じて賦役の復活を試みている点が注目される。貨幣地代の労働地代への移行は、しかし、経済外強制の適用によつてではなく、契約関係によつてゐる事に注意しなければならない。この

賦役が何に使用されたか、すなわち領主経営
 労働力としてか、あるいは市場への農産物の
 運搬に用いられたのか、などについては全く
 不明である。また小作契約に基づく賦役がど
 の程度の意義、比重を持つものであったかも
 不明である。ここではただ賦役創出の手段に
 ニーダーラインの特徴が見られる点と指摘す
 るに止めなければならぬ。

第三に小作期間については「農場 (Gut)」と
 毎年小作料を支払う条件で小作人とその妻に
 一代限りで小作させるか、あるいは相続人一
 人と含ませて小作させるかとする慣行に同意す
 る。そうすれば小作人は契約した小作料を支払
 い、農場において、および建物について、必
 要な改善補修を行なうから農村から離れられ
 ない。何故なら、このようにして、小作人は
 農地を綿密に耕作し建物と補修し、一言で云
 えば、農場を自己所有と異なるとしては
 取扱わないからである」と述べている。ここ
 では先に述べた事実とは異なり、小作期間の長

期化が述べられている。これは農業において
 商品生産が進み、それに伴って土地市場が活
 動化すると共に、借地期間の短縮化傾向一
 れは同時に領主の地代の上昇機会を増大させ
 るものであった。一が生じたが、この借地期間
 の短縮は小作人の荒しづくりと招き、耕地・
 建物荒廃を生じている事実を反映している
 ものと推測される。

第四に小作地とするに通ずる立地条件に
 いて、次のように述べている。「最も利益があ
 るのは、海または河川の洪水の危険に曝され
 るが、あるいは何らかの脅威に脅かされる農
 地であって、この場合小作人は危険とすべて
 負わねばならない。この場合、財産がなく、
 損害を負担して復旧する＝とばかりで、その
 為には小作料を支払えずに土地を去る小作人に
 小作させるよりも、富裕な農民に貸出した方が
 良い。しかし地主が見廻り易い地域では、
 農地を奉公人または分家小作人に耕作させる
 のが良い。しかし耕地があつと遠くに在れば

土地を先に述べた条件で一定の地代 (Abgabe) に
 対して小作させる (verpachten) を選ぶべきであ
 る。もし遠く離れた土地を泰公くに耕作させ
 ると、家畜の放牧とみろそかにし、耕地と神
 聖に耕作せが、盗賊から守らずに、かえって
 自ら奪い取る。彼等は必要以上に種ふやそつ
 他と支出し、結局その他のことにきずべてた
 かへ氣を配らな⁷⁴⁾い。すなわち、小作地とすべ
 きか、直営地な⁷⁵⁾し分益小作地とすべきかは、
 生産の安定性、監督の難易によつて決定さる
 べきであるとし、小作人⁷⁶⁾には、経営の安定性
 が高く、危険負担能力のある「富裕な農民」
 を選択すべきであるとしてゐる。小作料収入
 の増大・安定に対する領主の欲求は明白であ
 る。分益小作については、直営地経営の延長
 として把握されており、監督の必要性が強調
 されてゐる点が注目される。定期小作と分益
 小作の何れを選択するかによつて、監督の難
 易が決定的要因であつたことが窺われる。

第五に小作契約条項として「地主の許可

なく薪を採取したり、放牧地の耕地への変更
 をしたりしないこと。冬穀物の栽培面積、夏
 穀物の栽培面積、休閑面積。施肥すべき量^が
 が挙げられてゐる。この内容は第一に、小作
 経営に対する地主（領主）の介入の程度が極
 めて大きいことを示してゐる。経営主の果す
 べき機能－経営設計－が領主に規制されてお
 り、この限りで領主経営の延長とも云うべき
 側面をもつてゐるといえる。第二に、当時小
 作人がその収入を増大させる爲に、価格的に
 最も有利であつた穀物の栽培面積を拡大すべ
 く放牧地を開墾する傾向が見られたことを明
 らかにしてゐる。放牧地の開墾は、耕地およ
 びアルメンダ^{（羊飼料）}の栽培を伴はねな
 い限り、家畜飼料の減少→家畜飼育頭数の減
 少→厩肥の減少→耕地の荒廢を招くものであ
 った。したがつて地主としてはこれを防ぐ
 ために契約条項の中で、開墾を規制すると共
 に施肥量をも規定して地力の維持をはかる必
 要があつた。以上の莫は、先にヘレスバッフ

が小作期間の延長を説いた事情とも関連して
 いふと考えられる。しかしこの事が、当地の
 の農業の先進性を示すところの飼料作物の耕地
 ・アルメンデへの導入と矛盾するものではな
 いであらう。そうではなくて、飼料作物の導
 入にも「かかわらう」な永久放牧採草地を必
 要とする生産力段階を示しているものと考え
 られるのである。⁷⁹⁾

〔Ⅱ〕 農民層の階層分化

農業経営の諸類型の分析には、前に、十
 六世紀後半におけるベルクの農民層の分化に
 ついて簡単に見ておきたい。

一五五九年の Amt・ヴィンデッケン (Amt
 Windschen)⁷⁹⁾ (第一表) についてみると、役畜賦
 役農民と手賦役農民との比率は四六・五パー
 セントと五三・五パーセントである。役畜賦
 役農民は中・富農と考えられる。他方手賦役
 農民は、その中に日雇いや村落手工業者など
 を含んでおり、貧農、農村プロレタリア層と

第1表 Amt Windeckの階層分化 (1599)

村名	役畜賦役農民	手賦役農民
honschaft much	146	198
Rospach	110	110
Morspach	46	52
Linscheit	46	57
Dattfeldt	57	25
Weil	38	74
Numberg	37	38
im Dal	9	9
計	489 (46.5%)	563 (53.5%)

第2表 Amt Wassenberg の階層分化 (1576)

	戸数 %	役畜 %
5頭役畜農民以上	0.1	2.1
4頭役畜農民	0.6	4.9
3頭 "	1.4	8.6
2頭 "	10.9	44.9
1頭 "	19.2	39.5
手賦役農民	67.8	0.0
	100.0	100.0

見てよい。すると勞働力放出階層が過半数を占めていることになる。また一五七六年の Amt Wassenberg (第2表) をみてみよう (第2表)。⁷⁸⁾ ここでは手賦役農民、つまり貧農、農村人口が実に六八パーセントを占めている。役畜賦役農民三二パーセントのうち、三頭以上の役畜賦役を義務づけられている農民が二パーセント、一〜二頭の役畜賦役を義務づけられている層が三〇パーセントを占める。三頭以上の役畜賦役を義務づけられている層を富農、一〜二頭の役畜賦役を負擔する層を中農とみれば、中農三〇パーセント、貧農六八パーセントという数字は、戸数比率でみる限り、かなり分解の進展を示している。

と共に、富農比率の低さはブルジョア的分解の弱さを示している。以上僅か二つの事例に過ぎないが、共通して云えることは、戸数比率で見ると限りでは分解ばかり進んでいるが、分解の仕方では富農の形成が弱く、貧農・農村プロレタリアートが多く析出されるという形態をとって行なわれている事である。次に役畜所有の階層別分布を第二表について見てみよう。五頭以上の役畜賦役を義務づけられた農民の役畜所有平均頭数と十頭、半賦役農民の家畜所数と零と仮定して計算したものである。三頭以上の役畜賦役を負担する富農層は戸数では二パーセントと占めるに過ぎないが、役畜所有では約十六パーセントを集積している。(もっとも、五頭以上の賦役を義務づけられている農民の平均家畜所有頭数を十頭としたため、この層の役畜所有比率が高くなりすぎている事は考えられる)。中農は戸数では三、十パーセントを占めるに過ぎないが、役畜所有比率では実に八十四パーセントを集積して

あり、この点から見れば依然農村における最
 も主要な階層であり、農村における領邦君主
 の最も主要な基盤であつたと云えよう。役畜
 所有の点からみても富農の形成は弱いと云わ
 なくてはならない。ただ、このような農民層
 分化をニ－ダーライニ全域について一般化す
 ることは出来ないと考えられる。というのは、
 ここに挙げた二事例は何れも山地の多い、従
 って耕地面積の少ない、しかも耕地の地味の
 悪いベルク領に属する地域だからである。富
 農層の形成が、戸数、役畜所有の何れの点か
 らみても弱いのは、この自然条件によること
 が大きいと考えられる。この山地の多いベ
 ルクで圧倒的に多数の貧農、農村プロレタリ
 アートが形成されたのは相続分割慣行が行な
 られた結果であるが、自給自足が不可能な数
 モルゲンという零細な土地保有規模にまで分
 割が押進められたのは、この地方に多様な農
 村工業（金屈加工、紙糸・漂白業など）が近
 隣都市のツンフトを衰退させる程の規模で行

なわれ、主要な生活基盤を農村工業に求め
 事が出来たからであつた。例えば金銀加工に
 就いてみると、ベルグでは、農村において、
 小舗、大舗、犁先などを始めとする鉄刃物製
 品や武具が生産され、これが向屋制流通機構
 を通じて、当時世界貿易の中心であつたオウ
 ンダへ輸出された。このような農村工業の発
 展が主たる所得とこの農村工業から得る多数
 の土地持ち労働者と出現させる経済的基盤と
 なつたのであつた。ライン左岸の肥沃なユー
 リッヒ北部の平野地域ではベルグと異なり富
 農の比重は高かつたと推測される。ここでは
 麻などの繊維原料作物、大青などの染色原料
 作物、菜種などの油用原料作物などを高産作
 物とする商品生産農業が行なわれたといわれ
 る。⁹⁹⁾

さて、上述した貧農、農村プロレタリアー
 トの農業を考えると、彼等の土地保有は零細
 であつ相続分割の結果分散してあり、従つて
 その生産は食料とくに穀物を主要とせざるを

えなかった。そして家畜の飼料は主としてアルメーデへの放牧に依存せざるをえず、この面からも共同体規制に依存せざるをえなかったと云われている。しかし上層の農業では事情は正に逆であったと考えられる。苧科作物、カブを導入しての一年二作、二年二作を含む五〜六圃式農業、砂質土地（耕地、アルメーデ）への栽培牧草の導入は土地利用度の上昇という形で農業生産力の上昇を生じしめたが、このような形で苧科作物、カブ、栽培牧草の導入は相対的にみて上層経営において多かったと推定される。従って上層においては、下層とは逆に村落共同体への依存度と減いて行ったと見てよいであろう。このような農業生産力の上昇、発展に見られる上層・下層の相違は、また、土地利用可能な個別経営の、その保有する耕地に対する現実の支配権、実体的利用権（ゲグエーレ *Gewere*）の強弱の相違となって現われる。一年二作、二年二作、間作、あるいは休閑（耕）地への栽培

牧草の導入は、作物が周年耕地に作付けられる方向、つまり休耕地、刈跡放牧地での共同利用を排除して個別利用を強める方向に作用する。しかしこのような形でゲグエーレを強化しようのは、多量の肥料を生産しようとしたが、で多量の飼料作物を栽培し、家畜の多頭飼育を行ないうる上層経営においてのみ可能であつたはずだからである。ニ－ダーラインにおける農民的土地保有強化の一因は、上層経営における以上のようなゲグエーレの強化に基づいてゐると考えられるのである。

〔Ⅳ〕 農業経営の諸類型

最初に、具体的な農業経営の分析にはいる前に、当地域における商品生産の性格を明らかにする必要がある。

H. フッセルは、ニ－ダーラインに見られるような、耕地に多種類の穀物（小麦・ライ麦・燕麦・シユペルト小麦など）に加えて豆類、栽培飼料作物などが耕地で栽培される農

業を混成農業 mixed Farming とよび、オランダ、北イタリヤ、南フランスに加えてニールラインもこの方式が行なわれた地域であったとして⁸⁰⁾いる。また吉岡昭彦氏はこの混成農業をイギリスについて次のように性格づけておられる。すなわち、混成農業とは「食糧としての冬穀、家畜飼料としての春穀および莖類と並んで自給衣料原料としての大麻・苧麻の作付、耕耘・運搬用家畜たる牛馬、羊毛生産および肥料確保のための羊の飼育が行なわれるものである」、その経済的性格は「経営諸条件の大部分をその経営の総生産から直接に補填する」とを目的としたものであるとされている。従ってかかる混成農業を営む農民経営の行なう農産物の商品化は余剰生産物の販売の段階にあるとされるのであ⁸¹⁾る。ニールラインではこの真ばどうであったであろうか。確かに、ヘレスバッハも、領主経営は、その必要とするあらゆる食糧（穀物、果樹、野菜、畜産物、ビール、葡萄酒など）を生産

することを目的としてゐることを述べると共に、
 古代農書を引用して「よき家長は購入の
 友であるよりも、販売の友なるべき」事を強
 調する。つまり買うことを少なくし、売る事
 を大きくすることを強調するのである。しか
 し他方ヘレスバツハは衣料原料たる亚麻につ
 いて次のように注目すべき事実を明らかにし
 ている。すなわち、亚麻について、第一にラ
 イン地方内部で特産地が形成されてきてゐる⁸²⁾
 (オランダ、ユーリッヒ)とともに、第二に
 ヨーロッパ。規模での特産地形成が見られた。
 「現在ではロシアおよびバルト海沿岸のリー
 フラント Livland から」良質の亚麻を輸入する⁸³⁾
 それは「耕地に穀物を作付け、亚麻織物と買
 う方が大きな利益がある。特に土地が荒れる
 こと、紡糸、織布の費用も考へるとそうであ
 る」⁸⁴⁾ためであつた。ここでは、衣服用原料と
 しての亚麻の特産地がライン地方内外で形成
 され、原料生産地域と加工地域とが分離しつ
 つあること、加工地域では亚麻が自給用とし

ても農家で栽培されなくなつてしまつてゐる事情が明らかになつてゐる。そして穀物は互に麻織物の購入を一つの目的として栽培されてゐる事が述べられてゐるやうに理解される。すなわち、ここでは余剰生産物を売るのではなく、初めがら生活必需品たる衣料を買うことを目的として、つまり他方で食糧を売ることを目的とする生産が、初步的段階ではあつて、すでに始まつてゐることが知られるのである。しかもこうした衣料品の購入は、農家で自給用に作られるものよりも費用が安く済むよい製品（撚糸・織布）が、農家外で生産された結果であつたことが読みとれるのである。すなわち、第一章第二節で述べたニ－ダーラインを含むヴェストフーレン北部地域における麻織物工業の農村地帯における発展が、そして繊維部門だけでなく金属工業部門の農村における発展が、全体として、分割相続慣行を極端なまでに展開させて、つまり土地が家長の専有権に属し、家族構成員が土地保有か

ら排除されるという家族労作自給経営基調と
 解消させ、教モルゲンしか保存しないう事実上
 の賃労働者層を生みだしたと云わなくてはな
 らないであらう。以上によつてニーダーライ
 ンでは小商品農業生産が始まつてゐたことば
 ほぼ実証されたと考へる。

(1) 領主経営

a) 騎士層における直営地経営の展開、経
 営規模とその経済的性格

教会がまづ、たゞ自己経営を行なつてゐた⁸⁵⁾
 のに対して、騎士はリッター・ジッツでしば
 しば自己経営を行つてゐる。二、三の例を
 あげてみよう。一五四七年、ラードフルム
 ワルト教区(Kirchspiel Radvormwald)では、二頭の⁸⁶⁾
 馬で自営する騎士が見られた。一五八〇年モ
 ンハイム村(Monheim)ーバルク領ーではグイ
 ックラート(Wickerath)の領主ディートリッヒ・
 クァイト(Dietrich Quaidt)が「私はモンハイム
 村にある私の農場を自ら管理してゐる。この

農場を、私が費用を出し、奉公人、馬、農具
 を使つて耕す⁸⁷⁾と述べている。一五八三年⁸⁸⁾
 ユルヘルム・フォン・ヘンゲン (Wilhelm von Hengen)
 は一農場を自分の馬を用いて自営⁸⁹⁾。同じく一
 五八三年、ヨハン・フォン・ツェーフェル (Johan von Zewel)
 はリッター・ジッツであるライ
 シュムレン農場 (Hof Reichsmullen) を自営、等々。
 二れが騎士経営の規模は種々であつたろう。
 しかしリッター・ジッツの附屬農地面積の標
 準や、ラードフェルムワルト教区の馬二頭で
 耕せる程度の面積 (2 Pferdacker) から判るよう
 に余り大きいものでもあつた様で、百モル
 ゲンを一応の目安としてよいであらう。と
 ころでこのようを騎士の自己経営について、
 全体としてみれば次の諸点に注意せねばなら
 ない。⁸⁹⁾ まず第一に騎士の自営例は、その大部
 分がリッター・ジッツに於けるものであり、
 その他の騎士所有農地は貸出されてゐる。ま
 たリッター・ジッツが常に、またすべての騎
 士によつて自営されてゐるわけではなく、館

に騎士が住んでゐる場合でも、附屬農地は分
 益小作人が借受けて耕作してゐる事例が多く
 みられる。第二に、騎士の自営は十六世紀前
 半には極めて少なく、その殆んどが十六世紀
 後半のもののみみられる。例之び十五世紀のア
 ムト・メットマン (Amt Mettmann) の騎士所領は、
 一例を除いて、後はすべて分益小作人、定期
 小作人、隸屬農民に貸出されてゐた。このよ
 うな事例から考へて、騎士の自営は十五世紀、
 十六世紀には少なく、十六世紀後半にかけて
 増加したものと考へてよい。第三に、それに
 も拘らず、十六世紀後半でも小作ないし他の
 形式による騎士所領の貸出しが広範に立証さ
 れる。例之び、一五八三年、教会・貴族・レ
 ーエンロイテ (Lehenleute)、自由人 (Freie) の收入
 調査が行なわれたが、この時上記土地所有者
 から土地を借用してゐる分益小作人および
 定期小作人 (halfleude und pechtere) が領邦君主
 役人に召換され、地主 (Herrschaft) の土地での小
 作経営からあがる收入を申告させられてゐる。

従、で十六世紀後半に騎士の自営が増大した
 とは云っても、全体としてみれば、自営は小
 部分を占めたに過ぎなかったと考えられる。

ところで騎士の自営が十六世紀後半から増
 大した一つの原因として価格革命が考えられ
 る。自己経営の増大と価格革命の影響のテン
 パとが平行しているからである。貨幣收入の
 比重が高か、た騎士層にあつては、価格革命
 による貨幣收入の実質価値低下を補う方法
 として、地代の引上げが事実上極めて困難で
 あつたので、直営地経営へと回るのは一つの
 有力な方法であつた筈である。ただ、その経
 営規模から考えて、騎士経営の殆んどが、食
 糧自給を第一とし、剰余を販売する性格を持
 つものであつたと考えられる。⁹⁰⁾

6) 領主経営における建物、施設および農
 具

建物、その他、施設としては、屋根の外に、
 家計用のパン焼およびその他調理用の窯、薪
 ひき機⁹¹⁾、ビール醸造用の浸し桶、乾燥窯⁹²⁾があ

る。農業用には、脱穀場（その両側に奉公人用寝室）、厩（馬用、その両側に奉公人用部屋）、畜舎（その傍らに奉公人用部屋）、納屋、家禽飼育場、農具洗場、養魚池、農場監督（Inspektor）住居、収納役（Verwalter）住居⁹³⁾が挙げられてゐる。

農具⁹⁴⁾としては、系統だてて記されてはゐないが、大別して、耕耘用具、收穫用具、馬具・運搬用具、醸造用具、脱穀調整用具、製粉用具、紡織用具が挙げられてゐる。ここでは農耕に直接関係するものだけを整理して挙げるに止めた。注意を惹くのは、鋏・鎌類についてかなりの分化が見られること、犁先、犁刃、鉋子、ハーケン（Haken）などは鉄製品が使用されてゐる点である。

耕耘用具：犁（犁刃、犁先、挽土板、犁柄、長柄）。鋏 Hacken — 除草用 Jätthacken、又歯付鋏（二・三・四又）、南蛮用つるはし Karste、菜園用鋏（単一・二又）。馬鋏 Egge。鎮圧機 Walzen。鋤 Spaten。

收穫用具：小鎌 *Sichel* 一穀物刈取用、(果樹剪定用)、牧草刈取用、*シュペルト* 小麦用、(葉刈用)。熊手 *Gabel* 一大熊手、鉄製熊手。大鎌 *Sensen* 一 *Reffensen*、くちばし 牧大鎌、歯付大鎌、半月用大鎌(葡萄用、葦用、油菜樹用、果樹用、菓用)。

脱穀調製用具：打穀棒。磨箕。

運搬用具：荷車(二輪・四輪)、馬車。

これらの農具はすべて二組を備え、破損しても支障のないようにすべきことが述べられてゐる。農具の管理はすべて農場監督に委ねられてゐる。

注意すべき事は、中世の領主経営では、農具、役畜は直接生産者である農民所有のもつて利用してゐたのに対して、十六世紀のニールラインの騎士経営では、犁その他の農具や馬を始めとする役畜がすべて騎士所有であるという事である。

(c) 勞働力 *ヘルスバッハ* 農書では、領主経営が労働力として養はられてゐるのは、屋内

(189)

外の一の農作業を指揮する監督と、收穫物
および貢租の收納と司る收納役と農業労働者
に等げられてゐるに止まる。農場監督に
ては各工業における職人のように徒弟的・修
業の必要性が強調されてゐる⁹⁵⁾。これは第一節
に見たような農業生産力の上昇や商品生産農
業への志向を反映してゐるやうに考えられる。
農業労働者と意味する言葉には *Arbeits-Gesinde*⁹⁶⁾
が用いられてゐるが、この二つの言葉の用法
上の相異は見られないうちに思われる。何れ
も住込奉公人に關して用いられてゐる。この
奉公人は「衣服を給せられ」「毎年賃金の支払
いを受け」⁹⁷⁾ており、一年奉公人であること
はほぼ明らかである。この住込奉公人が耕耘
家畜飼育をはじめとする主要農作業を担当し
てゐることは、日雇、請負賃金労働などの臨時雇
傭労働が専ら收穫労働に限定されてゐる
ことから窺える⁹⁸⁾。
隷属農民の行なう農耕賦役は裁判領主であ
る領邦君主に稀に見られるが、量的には微々

なるものに過ぎず⁹⁹⁾、騎士層については見
 えな。騎士の様を、今や次第にその封建的
 経済外強制権力を領邦君主に集中されて行く
 領主層において、農耕賦役はすでに消滅解
 体しているものと考えてよいのではなからう
 か。経済外強制によつてはななく、小作契約
 に基づいて、賦役を復活しようとする領主の
 意図が、ヘレスバッハの小作契約について
 記述に見られるが、その意図の実現について
 は否定的に評価されるであらう。
 以上、騎士直管地における勞働力の中心が
 一年奉公人であつて、日雇の勞働力が補助
 的に使用されており、賦役は、経済外的強制
 権を失いつつある騎士層では用ゐられ得な
 くと考えてよいであらう。ただ農村工業の
 展開によつて、勞働力が農村工業に流出し、
 このため農業勞働力の不足が生じた場合、領
 邦君主に代つて貴族層が働きかけ、僕婢奉
 公使賃率の発給という手段に訴えて農業勞
 働力を確保しようとする試みが、バルクに隣接

する クレーフェ (Kleue) ¹⁰⁰⁾ で行なわれた。この兵
 びニ－ダーラインの労働力市場が完全に自由
 であつたとはいへない。しかしこれらの命令
 は実効を有したと云われており、事実
 上の自由な労働市場の存在が見られたと考へ
 られる。したが、ニ－ダーラインでは、個
 別領主の経済外強制からは勿論、集中化され
 た領域に対する一円支配権力たる領邦君主の
 経済外強制からも、事実上自由な労働市場が
 成立してゐたといへよう。
 ただし騎士経営は、その領主的土地所有権
 に対しての領邦君主の地租を、また雇傭労働
 力に対しての領邦君主の賦課する *Gewinn- und*
Gewerbesteuer を免除されてあり、この点で封建
 的特権を享受してゐるといへる。しかし封建
 的性格はこの点に限られる。農具、役畜など
 の生産手段の所有、事実上自由な雇傭労働力
 の使用、カブを導引入れてゐないが、一年二
 作、二年二作を含む五～六圃式農業にやられ
 る高い生産力。これらの点については農民上

層と殆んど異なるところはない。したがって
生産過程に属する限り、ブルジョア的性格を有
したと云えよう。

(2) 分益小作経営 分益小作経営は、
ヘレスバッハも記しているように、一般に「
富裕な」農民によって行なわれたと云われて
いる。すなわち役畜(馬)三頭以上を持ち、
また奉公人を小規模ながらも雇傭する存在で
あった¹⁰¹⁾。このような分益小作人の事例として
は、一世紀ほど時代は遡るが一四六九年の
Gewinn- und Gewerbesteuer 史料が挙げられる。「ユ
ニカーであるメンツォンゲンの分益小作農は
フローンホーフ Fronhof において四マルクを支払
う。分益小作人の奉公人は二マルクを支払う¹⁰²⁾」
この史料では分益小作人は唯一人ではあるが
雇傭労働力を使用していることが知られる。
このように雇傭労働力を使用する分益小作経
営はこの史料によれば各村に二〜三戸見られ
るのである。以下で簡単にこの分益小作農の
性格を分析する。

a) 商品生産の性格 先に述べたように、
 ニーダーラインでは繊維原料たる亜麻につ
 て明確に生産地域の分化がみられ、農家は一
 般に自給用繊維原料の栽培を止め、これをニ
 ーダーライン内外の特産地から購入して農村
 家内工業として加工し販売するものと、穀物
 を栽培してそれを販売して衣料を購入するも
 のの二に分化してきている。したがってニーダ
 ーラインでは小商品生産が開始されていくと
 判断される。分益小作農はこの商品生産の先
 頭に立っていきと考えられる。彼等の生産す
 る商品は麻・亜麻、大青、菜種、穀物であっ
 た。

b) 生産力 上の商品作物栽培のためには
 当然主穀式農業の枠内ではあれ多量の肥料、
 したがって多数の家畜飼育、多量の飼料の必
 要を満す作付順序が第一節でみた作付であっ
 たと云える。カブの栽培が農民経営で見られ
 るとのヘレスバッハの指摘は、冬期飼料の増
 大と因り飼育家畜頭数と増大させようとする

農民、とくに上層農民の意欲を反映している
 様に思われる。苜蓿、カブを導入しての、一
 年二作・二年三作を含む五へ六圃式農業、砂
 質土壌への栽培牧草の導入に示される上層農
 民の生産力は、その小面積の土地保有のために
 耕地では食糧たる穀物の生産に限定される
 もえず、家畜飼料の殆んどを共有地放牧に依
 存せざるも乏しかった下層農民とは明らかに
 異っていたと考えられる。

また上述の作付順序は、耕地強制と明らか
 に対立する個別利用を前提とするものであり、
 耕地での飼料作による共同放牧への依存度の
 低下とともに、村落共同体規制を緩和、個別経
 営の自立度を高めるものであったといえる。

(c) 所有関係 まず土地についてみると、
 分割小作農民の経営地は領主の単独所有権の
 貫徹する土地である。経営「資本」について
 みると、小作料が粗収益の半分であることが
 う判断して、播種用穀物以外の一切の経営「
 資本」(農具・後畜・雇傭労力)を分益小作

人が負担したと推測される。なお経営地に対
 する領邦君主の課税(地租)は、その土地が
 騎士所有地であるため免除され、その代りに
 分益小作人に対して *Gewinn- und Gewerbesteuer* が課
 せられたことは、先の十五世紀の史料でみた
 通りである。この税は一般農民と異なる税で
 あるが、取扱いは異なる税は二つ一税に限
 られている。

以上、分益小作人は、地主たる騎士に対し
 て收穫の二分の二の小作料を支払い、領邦君
 主に對しては *Gewinn- und Gewerbesteuer* を支払いう
 るほどの生産力の高い小商品生産を行ない、
 しかもこのようを経営を行なう為には要する経
 営「資本」のうち種子とのおく全部を負担し、
 小規模ながら資金労働者を使用する。ここに
 当時における富農の性格と見るべきがでる。

注 55) Hereshach, a. a. O. S., 1 b. 　　を あ　へ　れ　ス　バ
 　　ッ　ハ　は　一　四　九　六　年　領　邦　国　家　ベ　ル　ク　の　ヘ　ル
 　　ス　バ　ッ　ハ　家　(Salhof Hertzbach) に　生　れ　た。　長　い
 　　て　法　律　学　を　ま　な　び、　ユ　ー　リ　ッ　ヒ　大　公　に　江
 　　え　て　顧　問　官　と　な　っ　た。　エ　ラ　ス　ム　ス、　シ　ュ
 　　トル　ム　と　親　交　が　あ　っ　た　と　え　わ　れ　る。　一　五
 　　七　六　年　に　死　せ　る。

56)　グ　ー　ジ　英　訳　版　で　は　common miles　と　訳
 　　さ　れ　て　い　る。　禁　制　権　施　設　の　所　有　者　は、　領
 　　邦　国　家　ユ　ー　リ　ッ　ヒ　・　ベ　ル　ク　で　は　一　般　に　領
 　　邦　君　主　あ　る　は　教　会　領　主　で　あ　っ　た。　騎　士
 　　は　水　車　強　制　(Bannmühle)　を　持　た　な　い　場　合　も
 　　水　車　強　制　に　は　服　さ　ず、　自　ら　の　水　車　を　持　っ
 　　こ　と　が　で　き　た。　騎　士　の　隸　属　農　民　も　禁　制　権
 　　を　免　れ　騎　士　の　水　車　を　利　用　で　き　た。(v. Below,
 　　Territorium und Stadt, SS. 119 ~ 120.)

57) Hereshach, a. a. O. S., 1 b b.

58) v. Below, a. a. O. S., 115 ff.

59) 60) Ibid., 111 ff.

61) Ibid., S. 154. Anm. 2.

62) H. Schöningh, Der Einfluss der Gerichtsherrschaft auf die Gestaltung der ländlichen Verhältnisse in den niederrheinischen Territorien Jülich und Köln im 14. und 15. Jahrh. S. 51.

63) v. Below, a. a. O. S., 116 ff.

64) v. Below, Die landständischen Verfassung in Jülich und Berg, III. 1. SS. 44 ~ 48.

65) Below, Territorium und Stadt, SS. 113 ~ 114.

66) v. Below, landständ. Verf., III, 2. S. 36 ff. + 五世紀末の地代は依然現物(ライ麦)であった。なお貨幣レ－エンは領邦君主が領土の一元支配を実現するために用いており、事実そのように機能している事に注意。

67) v. Below, Territorium und Stadt, S. 112, Anm. 1., Derselbe, landständ. Verf. III, 2, S. 34. Anm. 1. への例として、ホルトロフ家(Haus Holtrop)のリッター・ジッツは三頭の馬で耕す面積の耕地(3 pferdecker)、若干の叢林、採草地。ボーレンドルフ家(Haus Bohlendorf)

のそれは 4 pferdacker 相当大なる灌木地、の
 なるの広さの採草地。

68) v. Below, *Territorium und Stadt*, S. 113.

69) v. Below, *Landständ. Verf.*, III, 2, S. 36.

70) H. Schöningh, a. a. O. S., 41ff.

71) 72) Heresbach, a. a. O. S., 83b.

73) *Ibid.*, S. 84a.

74) *Ibid.*, S. 84b.

75) *Ibid.*, SS. 84b~85b.

76) グー ジ英訳増補版では小作契約条
 項は次のようになってゐる。「領主の許
 可無しでの又貸し、あるいは売却の禁止。
 放牧地、採草地の犁耕の禁止。耕地に播
 種すべき穀物の種類とその面積。土地改
 良すべき面積を地主として作務につい
 ての項目を含まべきであるとしてゐる。

(Google, op. cit., p. 45a)。ここでは明白に牧草

と播種すべき面積や土地改良を行なうべ

き面積が述べられてあり、ドイツとは異

なるイギリス農業の実態を反映してゐる

莫^もバ興^き味^み深^{ふか}い。

77) v. Below, *Landständ. Verf.* III, 2, S. 53. Anm. 160.

78) Schöningh, a. a. O. S., 68. Anm. 5.

79) 川本和良、前掲書、22頁。

80) G. E. Fussell, *Farming Technique from prehistoric to modern times*, p. 91.

81) 吉岡昭彦『イギリス地主制の研究』
105~106頁。

82) Heresbach, a. a. O. S. 696.

83) Ibid., S. 70a.

84) Ibid., S. 70b.

85) 当時において「教会は最大の地代
収得者であった」と云われていた様に、
教会領はほとんど例外なく貸出されてお
り、自己経営は行われていなかった。

(v. Below, *Landständ. Verf.*, III, 2, S. 37.) またその地
代は大部分現物であった。Ibid., III, 2, S. 174.

«viel fruchtrenten und wenig geld»

86) v. Below, *Territorium und Stadt*, S. 112. Anm. 1

87) v. Below, *Landständ. Verf.*, III, 2, SS. 37~38.

88) Ibid., S. 38.

89) 以下の叙述については Ibid., III, 2. SS.

37~38.

90) Lütge, a. a. O. S., 163.

91) Heresbach, a. a. O. S., 169ff.

92) Ibid., S. 179.

93) Ibid., S. 189.

94) Ibid., S. 199.

95) Ibid., S. 246.

96) Ibid., S. 216.

97) v. Below, Landständ. Verf. III, 2, S. 38. «derjenige, so denselben Hof bauet und bewonet, sein bekleideter diener, den jehliches besolden und allen nützarkeit selbst, gleich als tete er alda residiren und wonen, aufhebt»

98) Ibid., III, 2. S. 52. Anm. 159.

99) Schöningh, a. a. O. S., 71ff.

100) 川本和良、前掲書、26頁。

101) Schöningh, a. a. O. S., 68. Anm. 5

102) v. Below, Landständ. Verf. III, 2, S. 49. S. 218 Nr. 11.

アムト・ポルネルト Amt Bornfeld にあ

ける祖視に與りる一四六九年の記録より)

Overste hunschaf

Item her Gauwinshalfin zo Keenkusen 8 mr.

Item zwein Jungen zo Keenkusen 1 mr.

Item Druetgen zo Keenkusen 4 alb.

.

Kinchspiel Darbinghausen

Item juncken Mentzongen halfwin zom vroenhoere 4 mr.

Item desselven halfwins knecht 2 mr.

Item sin heistgen 4 alb.

.

第三章 十六世紀後半のザクセン

地方における農業生産力と農

業経営の諸類型

第一節 ザクセンの農業生産力

(1) はじめに 一 史料と課題

十六世紀のザクセンにおける農書として、《

Haushaltung in Vorwerken, Ein landwirtschaftliches Lehr-

buch aus der Zeit der Kurfürsten August von Sachsen,

1957/70.」, Abraham von Thumshirn, 《*Oeconomia*》

(1616年 Casper Jugelius によって Leipzig で出版

)の二つがあげられる。その他に当時のザク

センの農業事情をまとめた形で知りうる史

料としては、Kurfürst August von Sachsen がその

治世の最初にあたり、もと、た直営地解体政策

を進めるため、当時の *Kontschel, Baste Leipzig*

に命じて所領収入や直営地の経営事情につい

ての記録を編纂させた《*Acta: Beschreibung der Eing.*》

54. 1564. L. n. 7358》(1553年から1564年

にかけての文書が集められている)と、1561

年以後 August が一転して直営地経営を復活強

化する方針をとり、直営地経営改善のため、

先にあげた V. Thumshirn を Hofmeister に登用し、

彼に管轄下の Vorwerk を視察報告させた《Bericht über die Visitation der Kurfürstlichen Vorwerke im Jahre 1571 von Thumshirn》がある。

ザクセン農書、したがって領邦君主直管地経営のもつ第一の特徴としては、第一章第二節で述べたように商品生産的性格が指摘されねばならない。第二に、ザクセンの二つの農書については、とくにその農業経営的性格を指摘しておかねばならない。十六世紀の農書は領主経営を記述の主たる対象としているが、しかし、Herzbach と Grosser の二農書が農業技術的性格が強いのに対し、ザクセンの二農書は、限界はあるにしても農業経営的性格が強いのである。すなわち経営規模、作付順序、播種量、飼育家畜頭数、労働力、各部門および経営全体の収支、についての具体的な記述がなされている。

このような特質はザクセンにおける農書が書かれた経緯からも明らかになる。すなわち、1569年ザクセンの領邦君主 August の Hofmeister

と「なる」た v. Thumbshwin は August の命により 15
 71 年管轄下にある直管地を巡察し「第一に農
 業の地勢、土質、地味」、第二にどのような
 状態にあるか」、「第三に各地の条件に
 応じてどのようにして最も有効に管理すべきか⁴⁾
 」についてこの報告書を提出した。August はこ
 のすぐれた報告を読み、直管地役人が日々の
 経営管理業務を遂行するために常に座右に備
 え参照すべき一般経営指導の書を v. Thumbshwin
 に命じて書かせたのが《Oeconomia》であり、
 同様の趣旨から、農業の各部門についての役
 人にも命じて書かせたのが、《Haushaltung in
 Vorwerken》である。つまりザクセンの二農書は
 直管地管理指針とも名付けられるべき性格を
 もっている。この意味でザクセン農書の記述
 の対象は領主経営とくに Landesherr の直管地経
 営であり、農書編纂は August の領邦国家経済
 ・財政政策の一環を形成しているといえる。
 August は領邦国家の経済・財政政策としてと
 くに鉱工業の開発に重点をおいたものであった

が、鉱工業の発展は人口の増大をひきおこし、
 十五世紀以後、とくに十六世紀には食糧不足
 が表面化した。このような非農業人口の増大
 と食糧不足、農産物価格の高騰に対応して農
 業を集約化して生産を増大させ食糧不足を解
 決し、同時に収入を増加させようとする *Landes-*
herr の方針⁵⁾が直営地経営の復活強化、農書編
 纂となつてあらわれたと考えられる。以上の
 点から考えれば、ザクセン農書の成立は、*Landes*
herr が領邦国家権力を財政的側面から確立し
 て行く中で、「とからの」商品生産に主要な
 基盤をもつと云ふよう。
 十六世紀農書の史料価値については *Lembke*
 女史がすでに指摘したところであり、⁶⁾ この点
 はザクセンの二農書についても妥当する。《
Haushaltung im Vorwerk》は *Dresden* 地方を、《*Oecono-*
mik》は v. *Thunbsheim* の所領である *Rittersitz Fran-*
kenhausen, Ponitz を中心として記述しており、
 十七世紀の家父学農書が無原則的におこなつ
 ている古代ギリシャ・ローマ農書やフランス

・イタリアなど外国農書の引用、挿入は皆無
 であり、農書の成立した地域の農業を忠実に
 記している。このような地域性と時代性とか
 地方史研究、とくに地方農業史にとって大き
 な史料的价值を持たせることとなるのである。
 この点を、ここで用いる史料に即してみれば、
 これらの史料はまず第一に August が、直営地
 経営・賦役の解体・金納化から、直営へと方
 針を転換した後の最も近い時点における分農
 場の実態・その問題点・改善の方向を知らせ
 てくれるものである。第二に、分農場経営が
 全農業部門について、どのような基準に則り
 運営され評価されたかを具体的事例とともに
 知ることができるといえる。

本節では上記の二農書および二つの Landesherr
 御料地に関する史料のうち、筆者が入手しえ
 た《Haushaltung in Vorwerken》、《Oeconomia》
 《Bericht über die Visitation》を主として用いて、
 十六世紀の Kurfürst Sachsen の直営地における
 農業技術を明らかにすることによって課題を限定す

る。

(2)

農業技術

(2) 耕地の分散度

v.

Thunbshirn « Bericht

über die Visitation » によつて整理すると、耕

地の分散度について記してある二十四 Vorwerk

のうち、全然分散せず完全な団地を形成して

いるのが十四 Vorwerk、大部分の耕地が団地を

なした一部分だけが分散耕地であるとされてい

るものの三 Vorwerk、大部分の耕地が分散してい

るものの六 Vorwerk となる。さらに耕地が一部分

散あるものは大部分分散しているといわれている

Vorwerk のうち、夏冬の作物播種量が一筆毎に

わかる Kloostervorwerk と Vorwerk in Amt Wolkenstein と

Kloostervorwerk Tschepnitz についてみると、それぞれ

四筆と三筆、十筆であるにすぎない。以上

から判断する限りでは、Landesherr の大部分の

Vorwerk 耕地はほぼ一カ所に集中しており、分

散耕地をなしている Vorwerk についてそれぞれの分

散度は著しく低いとみられる。

分散耕地を有する Vorwerk についても、交換
分合によつて分散性を除去しうる可能性があ

る場合には意識的に団地化が追求されている。

たとえば Mülberg 在の Vorwerk についても「混淆耕

地はうまく交換して Vorwerk 耕地を集団化する

ことが可能である。何故なら Mülberg 村民は彼

ら自身から遠く離れてゐるが、Vorwerk に近

い土地を持つてゐるから喜んで交換に応じる

からである⁷⁾と述べられてゐる。このような

交換分合の目的は第一には作業能率の向上で

あつた。すなわち「Vorwerk を購入せんとする

ときは、特に灌漑用水を有するや否や、また

耕地が互に隣接してゐるや否やに注意すべし。

何となれば、一組の犁でも、一団地のばあ

には優に四十畝^{うね}を犁耕しうるが、遠く離れて

在るときは二十五畝を犁きかゝるにすぎ

ないためである⁸⁾。第二には、この方がよ

り重要であるが、一耕地の集団化は作付の「

自由」を保証するためのものであつたと考

られる。後に具体的に述べるが Vorwerk におけ
 る作付は多彩で流動性に富んでいる。「経営
 主 (Hauswirt) はその Vorwerk 耕地の事情に依
 じて、耕地を毎年いくつかの部分に区分して耕
 作せねばならない。五圃に区分すれば四圃に
 作付け、一圃は休閑する。四圃に区分すれば
 三圃に作付け、一圃は休閑する。三圃に区分
 すれば二圃に作付け、一圃は休閑する⁹⁾とあ
 るように、本質的にみてなお主穀式の枠内に
 ありながら、しかしその枠内ではかなり流動
 性をもつて作付けをおこなったのであつた。
 このような流動性を保証する基盤の一つが耕
 地の集団性にあつたことは疑いえないと思わ
 れる。
 耕地の分散性は他の要因と重なって収益を
 いちじるしく損うときは直営から小作へとき
 りかえる、あるいは Vorwerk を売却する契機とな
 る。地味が悪く、肥料、労働、種子をうまく
 用いない時 (Vorwerk Kehesberg)、水害地で耕耘
 運搬に不便であり、施肥しても地力が低いと

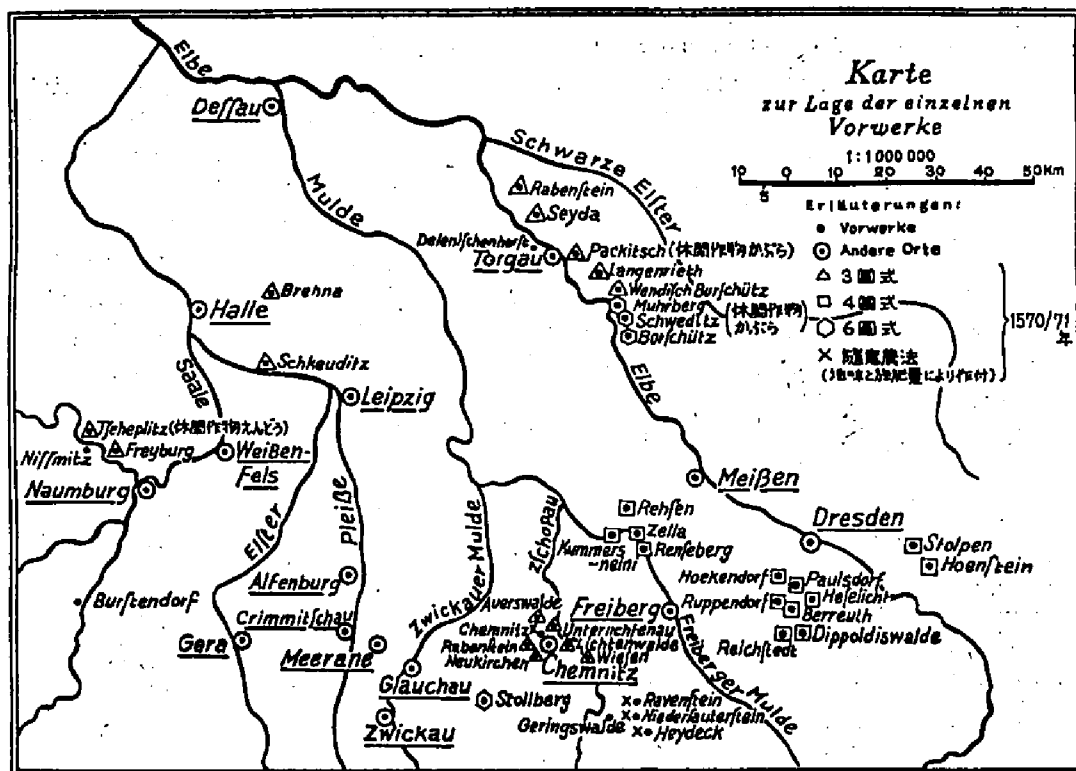
きく Vorwerk zu Mülberg のエルベ川の上手にある
耕地)、耕地が遠く離れて存在し、年雇ある
いは農民の賦役による農作業の監督が充分行
なわれえず、畜産、牧羊の収益も期待しえな

いときく Vorwerk Seyda, Vorwerk Rabenstein)、
施肥が不足して収穫が低い(Vorwerk Nie-
derlauterstein の hanfeld)は現実に小作に出され、
あるいは小作に転換するよう勧告されている。

以上のようには当時の少なくともランデスハ
ル経営においては、耕地の分散性は、作業能
率を高め、作付けの流動性を保証し、収益を
あげるために克服されるべきものとして意識
されていたことが明らかであろう。

(b) 圃数 V. Thumbshirn の視察報告書か
ら圃数のわかる三十六 Vorwerk のうち、三圃が
十四 Vorwerk、四圃が十二 Vorwerk、六圃が四 Vor-
werk、地味と施肥の量とに依りて適当に作付
される(大部分が穀草式)ものがある。
圃数と作付方式とが必ずしも一致せず、
各圃に依りて圃数とは異なつた作付方式があ

となわかれ、たことは van Bath など、の指摘して
 いるところであるが⁽¹⁹⁾、十六世紀サクセンのラ
 ンデスへ Vorwerk にふいては一例 (Vorwerk Pachitzsch
) を除いては、すべて圃敷と作付方式とが一
 致している。圃敷、したがって作付方式の地
 域的分布を示すのか次の図である。四圃式は
 Elbe 河流域で Dresden から上流の兩岸に、また
 地味と施肥の量に依じて適宜作付けられる随
 意農法が十六世紀に鉱工業都市として勃興し
 てくる Chemnitz⁽²⁰⁾ および Freiburger Mulde と Zschopau の
 両河川の上流地域に集中している。これに對
 し六圃式はエルベ川流域の Meißen と Torgau の
 間の地域および Mulde 支流である Zwickauer Mulde
 の Zwickau 近傍とに点在する。三圃式は、Elbe
 本流の Torgau 周辺、Leipzig - Weißenfels - Naumburg
 を連ねる線より北の地域、および Chemnitz 周
 辺に分布する。このように 1570 / 71 年度にっ
 いてはある程度の地域性を示すが、しかしこ
 の作付方式は先にも述べたように決して固定
 的ではない。たとえば 1570 / 71 年に四圃式で



あった Vorwerk Hohenstein, Vorwerk Stolpen は何れも
 1569 年 12 は五圃であった⁽¹²⁾。しかも V. Thumbshirn
 の所見によればこれら二つの Vorwerk には
 は、面積に比して施しうる肥料の量が不足す
 るという理由で三圃式への転換が勧められて
 いるのである⁽¹³⁾。このように主穀式という大枠
 の中にはあるが、十六世紀のザクセンでは作
 付様式は地味や施しうる肥料の量に応じて流
 動的で固定していなかったことがわかる。こ
 れは他のドイツ地域にっいてもあてはまると
 みられるのであつて⁽¹⁴⁾ Lemcke 女史の指摘する
 ように十六世紀における農業に共通する性格
 といえるよう。
 ところでこのように十六世紀のザクセンで
 は圃数も、したがってまた農法も流動的であ
 ったが、しかしこの流動性は一体 Lemcke 女史
 が主張するようには十六世紀を通じて休閑地が
 したいに減少する方何に直線的に何かとい
 ったのか、それともその逆であつたのか問題
 である。この問題には以下でもふれるが、今

こゝで圃数の変化に関する限りでふれておく
と、*Thunbshirn* は四圃式の *Vorwerk* にっいては施肥
の及ぶうる範囲にっいては三圃式に、施肥
の及ばないところにはっいては(粗放)穀草式
に転換するのが最も有利であるとしてゐる。

これは肥料(家畜の堆厩肥および羊の放牧によ
る施肥 = *Pferche*) が耕地面積に比較して少
ないためであり、その不足を休閑によつて補
つておうとする方向であつた。この限りでは休
閑地が増大する方向を指向せざるをえない状
態にあつたと云つてよい。このばあい、施肥

の及ぶうる範囲(内圃)と施肥の及ばないところ
(外圃)との両者が一体化して運営される。
内圃の占める比重が大であればあるほど三
〜四圃式に、外圃の占める比重が大きくな
ればなるほど粗放穀草式に接近する。

(C) 栽培作物 1570 / 71 年のガクセン王
領地における作物の種類とその作付比率を示
すのが次の表である。冬作物としては冬小麦、
ライ麦、冬大麦、夏作物としては夏大麦、燕麦、

作 付 比 率 (1570/71年度)

	小 麦	ライ麦	冬大麦	(冬作 物計)	夏大麦	燕 麦	ソ バ
Forberg zu Mülberg, Purschitz, Schweditz							
kloster feld	4.7	18.6		(28.4)	55.1	17.5	
purschitzer felder	4.6	27.5		(82.1)	42.3	13.5	
schweditzer felder	7.8	8.7		(16.0)	54.4	18.5	
Langenreuth							
Langen Reuth.		47.1		(47.1)	38	49.5	
windischen Purschitz		54.9		(54.9)		41.5	8.5
Forberg Packitzsch	7.8	25.7		(88.1)	38.5	15.2	0.8
Forberg Brehna	6.2	32.5	4.6	(48.2)	11.1	42.3	1.6
Forberge im ampte Freyburg							
Uff die schloßfelder I	20.7	32.4		(53.2)	17.1	27.0	
Uff die schloßfelder II		55.4		(55.4)	7.7	33.9	
Uff die felder zu Nießnitz	51.0	19.6		(70.6)	29.4		
Kloster forberg Tacheplitz							
Uff die felder in der auen	25.9	74.1		(100.0)			
Uff die breite hinterem dorfe		44.8		(44.8)	15.8	37.0	
Brustendorf		49.1		(49.1)	24.3	26.5	
Forberg Kemnitz		37.3		(37.3)	16.9	45.8	
Forberg Rabenstein im ampt Kemnitz		47.4		(47.4)	22.7	29.9	
Forberg Naunkirch		16.8		(16.8)	35.4	20.9	
Forberg Stolberg		18.9		(18.9)	11.4	68.0	
Forberg im ampte Wolkenstein							
das feld über der Schoppau				(0)		94.0	
Forberg Jerichswalde				(0)	2.0	79.5	
Forberg Ravenstein		10.0		(10.0)	6.9	82.5	
Forberg im ampte Lichtenwalde							
Forberg Lichtenwalde		49.2		(49.2)	10.2	40.6	
Forberg Unterlichtenau		20.9		(20.9)	9.3	69.8	
Forberg Auerswalde		21.1		(21.1)	15.8	63.2	
Forberg Wiesen		33.1		(33.1)	16.2	50.7	
平 均	8.6	28.2	0.8	(32.6)	21.2	40.4	0.5

注) Forberg Brehna, Forberg im ampt Freyburg gelegen, Forberg Jerichswald については夫々異った

夏ライ麦	夏小麦	(夏穀物計)	(穀物計)	エンドウ	ヴィーケン	(小計)	あぶら菜	亜麻	麻	(小計)	(夏作物計)
		(72.5)	(95.9)	1.9	2.2	(4.1)					(76.6)
		(55.8)	(87.9)	5.2	6.9	(12.1)					(67.9)
		(72.9)	(88.9)	5.8	5.3	(11.2)					(84.0)
		(52.8)	(100.0)								
		(45.1)									
		(54.4)	(87.7)	7.0	5.8	(12.8)					(66.8)
		(55.0)	98.2	1.8	0.5	(1.8)					(56.8)
		(44.1)	97.8	2.7		(2.7)					(46.8)
		(44.6)									(44.6)
		(29.4)									(29.4)
											(0)
		(52.8)	97.1	1.7	0.6	(2.3)	0.2	0.2	0.2	(0.6)	(55.7)
		(50.8)									(50.8)
		(62.7)									(62.7)
		(52.6)									(52.6)
28.4		(83.2)									(83.2)
1.2	0.6	(81.1)									(81.1)
		(100.0)									(100.0)
-6.0		(100.0)									(100.0)
18.5		(89.4)	99.4						0.6		(90.0)
		(50.8)									(89.4)
		(79.1)									(79.1)
		(78.9)									(78.9)
		(66.9)									(66.9)
1.9	0.0	(84.0)	(96.6)	1.8	1.5	(3.3)	0.0	0.1	0.0	(0.1)	(87.4)

単位が用いられており、換算する必要があったが換算のための基礎数字がないので、そのまま合計して計算した。

夏ライ麦、夏小麦、ソバ、エンドウ、グイー
 ケン、あぶら菜、亜麻、麻、それに表12は現
 れてこないが、夏・冬作のカブラが栽培さ
 れている⁽⁵⁾。作付比率を全体としてみれば穀作
 が圧倒的比重(96.6%)を占め、豆類、カブ
 などの休閒作物や、菜種、亜麻、麻などの工
 芸作物の比率はとるにたりない。穀類のなか
 では、肥料量、労働などの点からみて集約度
 のある夏穀物が $\frac{2}{3}$ 近くを占めている。冬作物
 が優越しているのは僅かに二カ所だけである。
 冬作物の代表はライ麦、夏作物の代表は夏大
 麦と燕麦である。注目されるのはカブラがエ
 ンドウと共に休閒作物として栽培されている
 点である。エンドウは、休閒作物として栽培
 されるばかりで、輪作の最後につまり休閒の
 前年に栽培されるばかり、およびエンドウの
 あとにさらに穀物が一作だけ植えられるば
 かりの三種類の栽培法がとられている。なお
 ソバが少量ながら三カ所で栽培されているが、
 これはドイツとしては、最も早い事例ではな

いかと思われ¹⁶⁾る。

(d) 作付順序 *Thunbshin* の「視察報告」

により 1570 / 71 年度の作付順序を整理すると

次のようになる、

(1) 三圃式

	三 圃 式	改良三圃式
第1年	休閒・施肥	エンドウ(休閒地の一部)
第2年	ライ麦	ライ麦
第3年	燕麦および夏大麦 (またはソバ)	燕麦, ヴィーゲン(飼料用・燕麦と混播・施肥) あぶら菜, 苧麻(施肥), 麻

三圃式農法をおこなっていることがわかる。

三 Vorwerk のうち + ま で が 休 閑 - ライ麦 - 燕麦

(および夏大麦) の作付方法を示している。

改良三圃式をとっているのは、ほゞ¹⁷⁾ かに Kolsterwerk

Tschepnitz だけである。残りの二 Vorwerk は

第三年目夏大麦にかわってソバが作付けされ

ているが、基本的には一般の三圃式農法とみ

てよいであろう。

改良三圃式で注目される点は、まず第一に

エンドウが非常に小面積ではあるが、休閒作

物¹⁷⁾として栽培されている点である。休閒作物

としてエンドウが作付けられることには何の不

思議もないが、十六世紀ザクセン王領地では
エンドウの輪作との位置は三つあり、休閒作
物として位置づけられているのはこの Kloster-
vorwerk の事例だけであるという点で注目され
るのである。

第二には夏大麦にとってかわってヴィーケ
ン（飼料作）が休閒作物としてではなく第三
年目の作物として、しかも施肥されて導入さ
れている点である。

エンドウ、ヴィーケンその他のあぶら菜な
どの作物はごく小面積の播種であって一般的
な三圃式農法の図式がこの Vorwerk のばあい
にも維持されているのは言うまでもない。した
が、このばあい改良三圃式といっても、三
圃式から飼料作を拡大する方向に必ずかみ歩
ほどふみだしたところにはすぎないと言っ
てよい。しかしこうしてばあいにこそエンドウあ
るいはヴィーケンが当時どのような機能を
つとめていたかとして輪作との位置を占めていたかが
農業技術の構造を把握するばあい重要な指標の

一つとほるのである。

(2) 四圃式

四圃式

第1年	休 閑
第2年	ライ麦
第3年	大麦または燕麦
第4年	燕 麦

1570 / 71 年 度 に 四 圃 式 農 法 を

と、て いる + Vorwerk の う ち 大

部 分 が 左 の よ う な 作 付 順 序 を と、て いる。こ

の 基 本 型 か ら の 若 干 の 変 異 を 示 す 作 付 と し て

休 閑 年 に 一 部 大 麦 が 施 肥 し て 作 付 さ れ る は あ

い (Vorwerk Heselicht)、あ、ま、休 閑 - 冬 穀 物 - 夏

穀 物 - 夏 穀 物 な ら び に、夏 穀 物 (大 麦) - 冬

穀 物 (ライ 麦) - 夏 穀 物 (燕 麦) と な る、つ

ま、り 夏 作 を 三、四 年 目 に 連 作 せ ず、夏 冬 穀 物

を 交 互 に 作 付 け る 場 合 (Vorwerk Hoenstein) と か あ る。

四 圃 式 は 三 圃 式 の ば あ い と 比 較 す れ ば 明 に

か な よ う に 休 閑 地 を 縮 小 し て、よ り 多 く の 夏

穀 物、通 常 醸 造 用 の 大 麦 を 栽 培 で き る と い う

利 点 を も、て いる。し か し 反 面 休 閑 地 に よ り

大 量 の 肥 料 を 投 下 す る こ と に よ、て の み 可 能

で あ、た。こ、こ、ろ で こ の よ う な 肥 料 の 増 投 は

ザ、ク、セ、ン、王、領、地、で、現、実、に、可、能、で、あ、た、の、で、あ

ら、う、か。Thunbshirn の « Bericht über die

Visitation >> は休閑地の減小に反比例する施肥
 の増大が現実には極めて困難であつたことを
 はつきりと示している。四圃式をとつている
 Vorwerk のばあい、休閑地の三分の二が施肥さ
 れるものが最高であり¹⁸⁾、休閑地の二分の一が施
 肥されるばあひもみらる¹⁹⁾。したがつて全耕
 地を施肥するには最少六年か八年が必要であ
 つた。「しかし地味が悪いばあひ、休閑地は
 毎年、したがつて全耕地が三年に一回施肥さ
 れる必要がある。最良の耕地で六年に一回の
 施肥を必要とした。さもないければ労力と種子
 をつぐなひえなひ²⁰⁾、ほどの収量しかえらな
 かつた。「同じ耕地に四度目の播種と犁耕を
 しても収獲は全くない²¹⁾。したがつて施肥可
 能な耕地だけを三圃式農法——一年目休閑、
 施肥。二年目ライ麦。三年目大麦（地味のよ
 いところ）、燕麦（地味の悪いところ）——
 をとり、施肥の及ばない耕地では隨意農法、
 すなわち穀草式（三年放牧、二〜三年燕麦連
 作）をおこなうよう *Thumshirn* は勧告してゐる²²⁾。

このように十六世紀のサクセンでは、対応した肥料の増大が伴わない形で耕作面積の拡大が行なわれたのであり、肥料問題が最も大きな農業技術上の問題の一つとして出現したのである。

Vorwerk Heselicht の四圃式にみられる休耕地の一部への大麦の作付けは、大麦に適した地質(乾燥、肥沃土壌)に加えて施肥した場合にのみ可能であったが、このほかにも同様耕地が広すぎる(肥料の量に對して)として三圃式への転換が勧められている。Vorwerk Hohenstein の四圃式で注目されるのはすでに述べたように第三、四年目に夏穀物と冬穀物とが交互に栽培されている点である。Thunbshin は、たとえは Vorwerk Stolpen の四圃式にみられる夏¹²穀物の連作を好ましくないものとして冬、夏穀物を交互に栽培することを勧めるのであるが、その理由として次のように述べている。「夏作を頻繁に作付けしないのは、冬圃では三回の犁耕その他の作業が行われ、太陽が雑草を

やさしくして、畑地から雑草(*quacken und groß*)
 を除いてしまふからである。これに反して夏
 圃では犁耕は一回だけである。夏作物をあま
 り度々栽培しすぎると、太陽はその作用を果
 すことができず、作業もより僅かしか行われ
 ないので、夏圃に雑草が生い繁り、収穫がへ
 り、したがって畑地はますます地力が低下す
 るばかりである。²³⁾ 収量は夏作を二回続ける
 よりも、冬作物をはさんだ方がよい。²⁴⁾ 雑草
 は犁耕と施肥とが不十分ならば、三～四年
 間では枯渴した地力を回復させることができ
 ないほどに耕地を荒廢させるものであった。²⁵⁾
 このようにガクセンでも少くとも十六世紀後
 半には、雑草が収穫に對して重大な影響を及
 ぼすような農業生産力の段階にあったことは
 否定しえない事実であらう。そして夏季休閑
 耕(犁耕とハローとの組合せ)が当時の技術
 水準では決定的な意義をもっていたことと上
 の *Thunbshirn* の叙述から明らかである。²⁶⁾ 十六世
 紀後半のガクセンでは夏季休閑耕は三～四回

行われている。犁耕はよむハロー一は縦だけで
 なく横にもおこなわれ、一回目縦、二回目横、
 三回目縦、四回目横と交互にクロスしておこ
 なわした。第一回休閒耕 (Brache) は荒起し
 で五月に、第二回休閒耕 (Rühren, Wenden) は
 肥料のすき込みと除草を目的として五月末か
 ら八月と旬にかけて、第三回目は種子の発芽
 に適した条件をつくり出すことを目的として
 播種の一〜二週間前に行われる。播種期の前
 に雑草が多く生えるときには、二回目と三回
 目との間に除草を目的とした犁耕がおこなわ
 れる (gebalcken, gehock)、そのさい用いられ
 る犁は撥土板のないフロス・フアーミンク用
 の Hakenspflug であつた。この夏季休閒耕は除
 草と同時に増収効果を生じさせている。…
 先に述べたように犁耕、ハローすれば五シエ
 ッフェルの播種量で、さもおこなければ七シエッ
 フェル播きしたよりも成育がよい²⁸⁾。耕耘 =
 除草作業 (夏季休閒耕) と薄蒔による分蘖効
 果との相乗効果が僅かながらみられるように

考 え ら れ る。

(3) 五 圃 式 . 六 圃 式

そ の 作 付 順 序 は 以 下 の 通 り で あ る。

五 圃 式	六 圃 式 (I)	六 圃 式 (II)
第 一 年 か ぶ	第 一 年 休 閑	第 一 年 か ぶ
(休 閑 施 肥 地)		(休 閑 施 肥 地)
第 二 年 大 麦	第 二 年 休 閑	第 二 年 小 麦 , ライ麦
第 三 年 大 麦	第 三 年 ライ麦	第 三 年 大 麦
第 四 年 ライ麦	第 四 年 大 麦 又 は 燕 麦	第 四 年 大 麦
第 五 年 { エ ン ド ウ 麦 は ヴ ィ ー ケ ン	第 五 年 燕 麦	第 五 年 { エ ン ト ウ ・ ヴ ィ ー ケ ン
(Vorwerk Packitzsch)	第 六 年 燕 麦	第 六 年 燕 麦
	(Vorwerk Stolberg)	(Vorwerk zu Mülberg , Pur- schitz , Schwed- itz , Klosterfeld)

Vorwerk Stolberg の は あ い は、四 圃 作 付、二 圃
休 閑 で あ り、六 圃 式 と い。て も 実 質 は 三 圃 式
と い。て よ い。た だ 三 圃 式 の は あ い と 比 較 し

て夏穀物の比重が高、点に六圃式の特徴がう

かかえる。

Vorwerk Packitzsch, Vorwerk zu Mülberg のばあいを

みると、五圃式、六圃式とい、ても実質的な

相違はみられない。すなわち、休閒作として

カブがはいり、以後穀物の連作、その後には工

ンドウ、グイーケンがはいるとい、う型は両者

に共通している。両者ともにエンドウ、グイ

ーケンは休閒作物ではなく、休閒圃以外の圃

場を占める作物としての位置にすえられてい

る。これはエンドウの第二の輪作との位置づ

けである。ただ、エンドウが輪作の最後には位

置づけられるか、あるいはエンドウの後には

う一度夏作物が作付けられるかがことな、て

いるだけである。

休閒地にはカブがはい、たことの意義につい

ては必ずしも明白ではない。栽培法も全く知

られない。ただ、すかには家畜の飼料、とくに

牝牛の肥育用飼料としてあげられているので

当時すでに家畜用飼料として用いられたこと

は間違いない²⁹⁾。しかし播種量も記されてい
 いるところからして我培量はごくわずかである
 と推測される。また耕地に播種されてい
 るのが記載されているのは「*Bericht über Visitation*」
 では三 *Vorwerk* にすぎない。したがって休閒作
 物としてのカブの我培ははじまつたばかりの
 段階であつたと思ふ。飼料として大きな比
 重を占めるものではなかつたように考えら
 る。
 つぎに五圃式、六圃式農法についてみられ
 るインドウの輪作との位置づけから、当時
 おける五圃式、六圃式の生産力段階につ
 いて考えてみたい。インドウは一般に土
 壌に窒素成分を供給し、同時により多くの
 家畜を飼育することとを可能にし、その
 結果畜肥の供給量を増大させるという二
 重の利益をもたらすものとされてい
 る。しかしこのように地力増強作物とし
 て利用されるならばインドウあるいは
 「*Wintersaat*」は休閒作物あるいは *Vorwerk zu*
Milberg の場合のように穀物作の中間に挿入さ

ねばならないはずである。しかしこの当時
 のインドウあるいはヴィーケンは Vorwerk Packitzsch
 の場合のように輪作の最後に位置づけられて
 いることが多い。³⁰⁾つまりこの場合休閒面積は
 インドウあるいはヴィーケンが一圃を占める
 ことで四圃式が五圃式に、五圃式が六圃式に
 なり減少するが、休閒年度は依然として一年
 間存在しつづけるのである。このばあいのイ
 ンドウは地力増強作物と見られたい。むしろ
 穀物の連作でおとろえた地力では、もはや
 穀物はもう一年無施肥で栽培することは不可
 能であるが、豆科作物ならはまた何とか収獲
 が可能であるという性格のものであると考
 えられる。豆科作物の後にはもう一作、穀
 物が作付される³¹⁾はあいに、その後作物は燕
 麦、すなわち最も粗放的で、やはりしか生
 らない作物であるから、豆科作物の地力増進
 効果は期待されていらないように思われる。こ
 の点はライ麦の播種時期について次の記述
 からもうかがえる。「ライ麦は、夏作に工

ンドウ、グーテンを作った畑には、ミカエル
 祭（九月二十日）の三週間前には、中程度の
 地味の畑および質の悪い厩肥を与えた畑には
 二週間前には、良質の温かい畑には、ミカエル祭
 の前後一週間には播種する³²⁾。これで見れば、そ
 の地力増進効果はある程度認められてはいる
 と考えられる。しかし施肥した場合には反ばら
 ないことが指摘されている。そしてまた Vorwerk
 zu Mühlberg のばあいには、Thumshirn は六圃式を五
 圃式に改め、エンドウを最後に作付けして後
 作を行わないよう勧めている³³⁾。これは土壌そ
 の他の条件によつては豆科作物を栽培しても
 地力は増進されない、時には地力を消耗し、燕麥
 のように粗放穀物さえも収穫がえられないこ
 とを窺わせる。またエンドウ自身について
 も「地味の悪い畑では施肥する。そのばあい、
 施肥しない良質耕地でよりもよくできる³⁴⁾」と
 記されており、土壌に与える養分よりもエン
 ドウが土壌中から吸収する養分の方が大きか
 ったことを示しているように思われる（浅耕）。

肥料不足のもとの莖類穂実作のもつ地力消耗的性格)。

以上の点はすべてエンドウが当時穂実エンドウとして栽培されたことを示している。もとよりガクセンでも緑肥としてのエンドウ栽培が全く知られていなかったわけではない。

「*Quedlinburg* では遠く離れている畑にはエンドウを播き、花が咲きはじめた時すき込む。すると土がよく肥えやわらかになる³⁵⁾。これは當時に於いては大きな進歩であつたが、その記述の仕方からも窺われるように緑肥としての栽培はガクセンでも *Quedlinburg* に限られていたと思われる。 *Vorwerk Hoenstein*, *Vorwerk Stolpen* では

わすか一年前の1569年には五圃式農法が施された。播種面積の $\frac{1}{4}$ に播種量の $\frac{1}{4}$ のエンドウ・グイ・ケンが輪作の最後の作物として播種されたことになつてゐる³⁶⁾。とここから一年後

には (*Thunfshim* によれば) 四圃式でエンドウ・グイ・ケンは全く栽培されていない。注目すべきことにはそれによって大家畜頭数および牧

羊頭数にっいては変化はみられないのである。

そして肥料不足を理由として三圃式農法への

移行が得策だとされてゐる。またエンレウ、

ヴィーケンの作付がみられる Vorwerk でも 1570

171 年度には Hoenstein, Stolpen でみられるよう

に大量の作付はみられない。このような僅か

一年で豆科作物が激減した理由は今のところ

不明であるが、少なくともその理由の一つに

この豆科作物が稔実作であり地力増進よりも

むしろ地力消耗的な性格をもつたためではな

いかと思われる。

(4) 随意農法 (粗放穀草式)

地力と施肥量に応じて耕作されるが、冬穀

物は皆無に近く、専ら夏穀物、しかも主として

燕麥の連作である。四～六年間の休閑・放

牧と四年間の夏作物連作との交替が普通の型

である。³⁷⁾

以上の作付方式を検討した時、確かに作付

方式は三圃式農法と比較して複雑となつてお

り、休閑地は減少し、集約度は上昇してゐる。
 休閑作物としてエンドウ、カブが導入されて
 おり、改良三圃式の初発的形態がみられるし、
 緑肥としてのエンドウの栽培も知られてゐる。
 しかしこれらの新しい現象はまだ極めて限ら
 れた現象にすぎない。豆科作物は大部分が稔
 実作として栽培されてゐるため、地力増進的
 機能に乏しく、かなりの場合に地力消耗的で
 さへあった。つまり豆科輪作の性格は乏しか
 ったといえる。そのため飼料、肥料の経営内
 部での増大は、四、五、六圃式農法の移行に
 あたつて必要とされる程度に達せず、かえつ
 て三圃式農法への移行の方向がみられたので
 あつた。

(2) 肥料

休閑地の減少あるいは非常に肥沃な土壌を
 必要とする工業用作物が導入されることによ
 り大量の肥料が必要となつた。この肥料がど
 のような方法で調達されるべきかを検討
 する。

《Hanshaltung in Vorwerke》によれば施肥方法
 として次の方法があげられている。
 一般的には、大小家畜の堆厩肥の施肥。す
 なわち牧羊、牛飼育の規模によつて、作付耕
 地面積が定まつた。Thurbschirnの経験では牝牛
 四十頭、羊千頭（必要な採草地、放牧地、冬
 飼料があるばあいは）、毎年四百 scheffel まきの
 土地もしくは、もう少し広い土地に施肥して
 地力を維持できたといいう。したがつて三圃式
 では六百 scheffel まきの耕地を維持できること
 になる。³⁸⁾ その他の方法として①最も普通の方法
 は一～二年の夏季、冬季休閑耕を伴う休閑
 、②次いで穀作の間にエンドウを挿入する方
 法（ただし作付の項でのハたように、穀物の
 連作の後には豆科作物を栽培しその後一作だけ
 穀物をつくる型であつて、Coler が記してい
 るように穀物の二年連作後には必ず豆科作物を
 入れ、この型をくり返して行くという豆科輪
 作の先駆的形態にもまたなつていない）、③
 古い堆厩肥の施与、④土地が灌漑されてゐる

は、あ、い、の、灌漑、⑤刈株を焼く、⑥泥灰土、⑦硝石製造のさいの灰、⑧ごみ、石鹼製造業者の灰、こけ、落葉、木の下にある各種の土があげられる。³⁹⁾

《*Oeconomia*》では①こけ、もみ、かしなど、の葉を腐熟させたもの、②木挽場の鋸くず、③晒布工場からでる屑、④泥灰土（泥灰土の採取用器具が紹介されている）、⑤緑肥として、のインドウ栽培が挙げられている。⁴⁰⁾

この二つの農書から、施肥の方法として、第一は、新しい輪作により土地に窒素成分を供給する作物を栽培し、土壌から持ち去られた肥料成分を回復する方法、第二は、経営外からうる方法とがある。第一の方法としてはすでに述べたように、緑肥として、のインドウの栽培、稲実作であり、また、挿入される位置づけからして、地力増強作物としての性格が強くないが、豆科作物の耕地での栽培があげられる。しかし、勿論、このような方法をもつてしては、必要な肥料量の増大をまかなうことはできなから、

のであり、大部分を第二の方法で経営外から補めねばならなかった。この第二の方法のうちで注目をひくのは泥灰土の使用であり、また工業生産の発達に伴って生じる残滓物（灰屑など）の使用品目が大きいことである。

(f) 飼料

まず家畜とくに大家畜の飼料について、耕地と採草地の家畜収容力を比較してみよう。

《*Haushaltung in Vorwerken*》によれば、百シェンフェルの耕地（約27.7ha）と採草地で四十頭の牛を飼育しうるのに対し、採草地なしで耕地だけのばあいには飼育頭数は半分以下（十六～二十頭）になる⁴¹⁾。これで判断する限りでは、採草地の家畜収容力は耕地のそれに匹敵するか、ないしは凌駕してゐるとみられる。これは耕地における飼料生産力の相対的な低生産性を示すものといえる。したがって、耕地と永久採草放牧地との結合が地力維持と不可欠であったことは明らかである。

採草地では、馬飼料用としてグイーンお

よびエビウハギ(siebengerit) が播種され⁴²⁾、また
 クロバーの生えた放牧地も存在した⁴³⁾。も
 ともクロバーが栽培されたものかどうかは
 不明である。このように採草地では栽培牧
 草が導入されていた。
 他方、耕地では、エンドウ、ヴィーテン、
 カブなどの飼料作物が導入されていたことは
 先に述べた通りである。エンドウ、ヴィーテ
 ンなどの豆科作物については、当時飼料とし
 て用いられたのは主として茎であって、穀物
 (大麦、ライ麦、ディンケル小麦、ソバ) の
 藁と共に乾草を節約するものという考え方で
 使用されている。つまり豆科作物は当時にお
 いては主として粗飼料として利用されたわけ
 である。勿論ヴィーテンは冬季の羊飼料とし
 て利用された。その点でとくは領主の牧羊飼
 育頭数を増大させ、したがって重要な施肥手
 段たる羊放牧による施肥量の増大を可能とし
 たが、しかしながら肥料不足を満すには遙かに
 及ばなかったことは、これまでに述べてきたと

こゝから明らかである。またウィーゲン
 の実とカブは牝牛の速成肥育用飼料として用
 いられて⁴⁴⁾いる。したがってカブは冬季飼料の
 不足をおぎなう意味をまた大きくも、てはい
 なかったといえるのである。Thumbshirn があげ
 る彼の直営地農場での牝牛冬飼料がこの見解
 を裏付けてくれる。すなわち二月二日 (Licht-
 enmef) 以前は、大麦束 (Gerstengebunden) が、
 二月二日以後から四旬節 (Fastenzeit) までは
 エンドウ莖、大麦葉をさざんたものに粗びき
 麦をまぜたもの、四旬節を過ぎた農作業がは
 じまると、さらに乾草が一日三回つけ加わる。
 粗びき麦の量は四旬節の期間中で六頭あたり
 十五 Sch. とさ⁴⁵⁾わいている。
 羊の飼料についてみると、飼料は、カレ、
 白樺、はこやなぎ等の広葉樹の葉や大麦、ラ
 イ麦の麦稈が主であるが⁴⁶⁾、しかし春さき飼料
 が不足する場合は、倒伏を防ぐために厚
 播してビッシリつまったライ麦畑への放牧が
 行われて⁴⁷⁾いる。羊のライ麦畑への放牧は十七

世紀、とくに三十年戦争後は普遍的となるが、その傾向は Lemcke 女史の主張とことなり、すでに十六世紀後半にみられたのである。

(9) 農法上の性格

以上不充分ながら十六世紀後半のザクセン王領地に出ける農業技術を主として作付方式、除草＝地力維持にっいてみた。そこでは確かに Lemcke 女史の指摘するようには、耕地制度、集約度の点で発展がみられる。意識的に耕地の集団化が追求され、この基礎にたって耕圃数は地味と施肥量に依いて可変的であった。

四・五・六圃式農法が領邦君主分農場の過半を占めていた。集約度にっいてみると、部分的ながら休閑作物が導入され、改良主穀式農法への歩をふみ出している。豆科作物が問題はあるにしては少なく、一部は地力増進作物として栽培されていた。施肥の改善のためには緑肥としてのエンドウの播種とばらんと泥灰土の使用が知られており、泥灰土の採掘器にっいては知られている。

しかし *Lembke* 女史 に した が、て「可動的に
みえ、地味と事情に依りて変化する経営を吾
々 は みる の である。それは豆科作物圃を挿入
する こと により 休閑地を駆逐し、大家畜群（
必要な厩肥を生産するためには不可欠である）
用の豊富な冬飼料を得ようと努めている。油
用作物および間作物の栽培が輪作を豊富なもの
としはじめており、緑肥と泥灰岩がそこには
あらわれていいる。描かれていいる経営が、良質
の平均以上のものであることを考慮して、
農業が健全であり、生産の集約化への最善の
道を歩んでいいるという印象は依然続くのである
と云えるであらうか。⁴⁸⁾

すでに見たように、*Thumshien* は四圃式農法
をと、ていいるすべての *Vorwerk* を肥料が不足す
るという理由で三圃式に移行するようすす
めている。移行すべき三圃式は休閑一冬穀物
一夏穀物を基本とする型のものであり、した
が、て集約度の低下、休閑地の増大の方向へ
と何かうものであった。四圃式は自ら必要と

する肥料。したがってまた飼料をその内部で
 自給しえなかつたのであつた。肥料不足は王
 領地全体にわたつており、飼料不足は羊を厚
 播きしたライ麦畑へ放牧せねばならない程で
 あつた。⁴⁹⁾

十六世紀は以上のような集約度低下の傾向
 が集約度上昇の傾向と交錯して存在した時代
 と捉えるべきなのではないか。この二傾向の
 交錯の原因の一つは農業技術的には豆科作物
 が総実作として栽培されてゐる点に求められ
 る。ラインランド地方では Heresbach によれば
 豆科作物、とくにルーピンは緑肥として開花
 前に搾きこまれるのが普通であつたが、ザク
 センでは緑肥の使用は都市周辺に限られてい
 たように思われる。このことが当時のザクセ
 ン農業をして肥料を経営内部で自給しえなく
 した原因であつた。したがって休閑地を減少
 させようとするばあい、農外から、とくに工
 業から灰分の供給をうける必要があつたが、
 灰の購入は経営収支を困難にしたようであり、

ザクセン公の Vorwerk でも葡萄作に限られ、穀作には使用されなかつたようである。したがって多圃式においては、エンドウ、ヴィーケンの導入がみられるとはいえる。農法上の性格からみれば村落共同体規制のもとで行なわれる三圃式農業のばあいと基本的に変化はないといえるよう。

しかし原因はこれだけではない。Thurnbshwin は十六世紀のザクセンの農業の技術上の問題点として、一、施肥料 二、労働力 三、適期作業をあげているが、労働力（および労働力に関連して適期作業）が社会経済的側面から問題になるのではないかと考える。Thurnbshwin は《Bericht über die Visitation》の中でしばしば賦役農民・農業労働者が必要な時にえられず、そのため適期作業が行われ難いことを指摘している⁵⁰⁾。その理由はおそらくザクセンにおける農村工業の発展に求められるであろう⁵¹⁾。十六世紀のザクセンにおける農業の多圃化が、労働需要を増大し、従来の労働量で

は賄えなくなつて来た上には、農業、工業における商品生産の発展が領主の農民支配（労働力確保）を困難にしたのであり、このような事情が遂に農業の集約度の上昇を妨げたといえるのである。

そして *Lembke* 女史の主張とは反対に、三十年戦争以後にはではなく、十六世紀後半に農業の後退がすでに始まつていたと云ふなければならぬ。

次にザクセン農業における雑草の意義をみると、十六世紀後半には、雑草が収量に大きく影響したことは疑いのない事実である。雑草の除去の必要性は、播種前の三～四回の犁耕、穀物発芽後の小作（*Grasspachter*）による除草、夏穀物連作の忌避から明白である。とくに除草用として *Hakenpflug* が分化し使用されたことは注目される。

（3） おわりに

十六世紀後半のサクセン選定侯直営地では、穀作を中心とする商品生産がすすみ、経営の合理化、集約化が進められた。直営地耕地では意識的な耕地の集団化が進められ、大半が農民村落から囲込まれている。この囲込地で「分農場 Vorwerk」、耕地の事情に応じて粗放穀草式から三～六圃の主穀式農業（集約度の低い夏穀物中心）がおこなわれた。同じ直営地でも年度により圃場区分が変化することもあり流動的であった。展開の主たる方向は開墾ないし多圃化による作付面積の拡大、休閒面積の縮小という外延的方向をとった。休閒作物としてのも麦科作物やカブの導入という集約化の方向も同時に生じたが、この展開方向は弱かった。も麦科作物は休閒作物としてよりはむしろ、作付順序の一番最後に位置づけられ、稔実作、したがって地力消耗作物として用いられる場合が殆どであった。も麦科作物の緑肥としての使用もおこなわれたが、一地域に限られ普及しなかった。そのため作付

面積に⁽⁵²⁾対して肥料、労働力が不足し、その結果、生産は不安定となり、経営規模を施肥可能でかつ適期の農作業をおこなう範囲に縮小することが、当時の農業技術上の最大の問題であった。また夏穀物中心の多圃化によつて除草問題がこの時期特有の意義をもつて生じてくることとなった。以上から考えて、囲込された土地で経営が行なわれているといえ、その農法上の性格は村落共同体規制下で行なわれる三圃式と基本的に同一の性格をもつといえよう。

(注)

1) Hubert Ermisch und Robert Wuttke, *Haushaltung in Vorwerken*, Ein landwirtschaftliches Lehrbuch aus der Zeit des Kurfürsten August von Sachsen, Leipzig 1910.

2) Martin Grosser / Abraham von Thunbshirn, *Zwei frühe deutsche Landwirt-*

schaftsschriften, Herausgegeben von Gertrud Schröder-Lembke, Stuttgart, 1965.

3) Harm Wiemann, Bericht über die Visitation der Kurfürstlichen Vorwerke im Jahr 1571 von Abraham von Thumbshirn, 1940, Sonderdruck der Crimmischauser Stadt- und Landzeitung.

4) H. Wiemann, a.a. O.S., 5.

5) H. Ermisch u. R. Wuttke, a.a. O.S., XIII.

6) Schröder-Lembke, Die Hausväterliteratur als agrargeschichtliche Quelle (in: Z. f. Agrargeschichte und Agrarsoziologie Bd. 1, 1953)

但し、レムフケカ史がこの論文でおこなった十六世紀農業と十七世紀農業との類型化については筆者は見解を異にする。

この点は以下の行論の中で述べられる。

7) H. Wiemann, a. a. O., S. 33. レムケが、て當時はなお農民追放は行なわれていた。

8) H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S., 13.

9) Dieselbe, Die Hausvaterliteratur als agrargeschichtliche Quelle, Zeitschrift für Agrargeschichte und Agrarsoziologie Bd. 1. 1953.

10) スリッハル・フアン・バート・西
ヨーロッパ農業発達史

11) H. Wiemann, a. a. O. S., 38.

12) Johannes Falke, Geschichte des Kurfürst
August von Sachsen, 1868. S. 59, S. 61.

13) H. Wiemann, a. a. O. S., 26, S. 28.

14) ハレスバハ農書を生みだした北
西ドイツのベルク地方についてもある。

15) «Oeconomia» «Haushaltung in Vorwerk
»の中に、他にさび、Stauderkorn が畑
作物としてあげられている。

16) cf. D. S. Saalfeld, Bauernwirtschaft
und Gutsbetrieb, 1960. S. 53. ガクセンに隣
接する Braunschweig ではソバは三十年戦争
後はじめて導入された。

17) エンドウの播種量は、ライ麦の四シ

エッフェル播きの土地に対して三シェッ

フェル播き (Wiemann, a.a. O.S., 107) で

あるから、Tschepitz のエンドウの播種

量四シェッフェルはライ麦六シェッフェ

ル播きの面積に相当する。

18) Vorwerk Zelle, Vorwerk Hoenstein.

19) Vorwerk Dipsoldswalde

20) H. Wiemann, a.a. O.S., 5, S. 12. u. a.

21) Derselbe, ibid., S. 12.

22) Derselbe, ibid., S. 7 ff., S. 12, S. 17 ff. u. a.

23) Derselbe, ibid., SS. 28~29.

24) Derselbe, ibid., S. 26.

25) Derselbe, ibid., S. 5, S. 26.

26) なお、H. Ermisch u. R. Wuttke, a.a.

O.S. 52. を参照されたい。耕地の地味

が悪く雑草が繁茂している時は、耕地を

充分犁耕せねばならない。すなわち二回、

三回あるいは最高四回。しかし耕地が充

分肥沃 (mürbe 土壤) がぼろぼろしている

で、雑草が生えていなければ二回以上の

犁耕は必要ない。

さらに、穀物が成長した後には畦畔や穀物畑の中に生える雑草は小作人によつて除草されている《Oeconomia》。除草の必要性は明らかである。

27) Grosser / Thumbshirn, Zwei frühe deutsche Landwirtschaftsschriften, hg. von G. Schröder-Lembke, Einleitung, SS. 101 - 102. H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S. 52 - S. 55.

28) H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S., 49.

29) Derselbe, ibid., S. 18. 「とくにはカマ

を秋腐らばいように清く土をふりかけて

おき。毎日家畜に与えるのがよい。雄牛

速成肥育用飼料「一。カマあるいは人参、

穀物の荒挽き粉。一。最後におし燕麦」。

30) J. Falke, a. a. O. S., 59, S. 61.

31) Vorwerk zu Mulberg のばあい「一イン

ドウ「燕麦(夏作物)であるが。一イン

ドウ「ライ麦(または小麦)が一般であ

る。H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S., 251,

Schröder - Lembke, a. a. O. S., 107.

32) Schröder - Lembke, ibid., S. 107. S. 102.

33) H. Wiemann, a. a. O. S., 32.

34) Schröder - Lembke, a. a. O. S., 107.

35) Derselbe, ibid., S. 98.

36) J. Falke, a. a. O. S., 59, S. 61.

37) H. Wiemann, a. a. O. S., 70, S. 71, S. 75. u. a.

38) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 97.

39) H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S., 64.

40) Schröder - Lembke, a. a. O. S., 97ff.

41) H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S., 21.

42) Derselbe, ibid., S. 254.

43) Derselbe, ibid., S. 82. S. 67.

44) Derselbe, ibid., S. 83.

45) Grosser / Thumbshirn, a. a. O. S., 90.

46) H. Ermisch u. R. Wuttke, a. a. O. S., 170.

47) Schröder - Lembke, a. a. O. S., 84.

48) Derselbe, ibid., S. 116 - 117.

49) Krenzlin 18 2 a 5 3 + 5 7 2 4 18 6

18 穀物の連作のたゞに收穫が悪く、地力

を涸渴させ、放牧地不足のために家畜飼

育を限定せざるをえず、それかすた不充

分の施肥をもたらすという悪循環の生じ

る多圃式農業」を粗放穀草式から発展し

たものとし、三圃式がより高次の生産力

段階であると主張している (A. Krenzlin,

Historische und Wirtschaftliche Züge im Siedlungsformenbild des westlichen Ostdeutschland)。

50) H. Wiemann ; a. a. O. S. 15., S. 50. u. a.

51) 松尾展成「封建的危機の経済的基

礎」 (『西洋経済史講座』Ⅲ所収)。

52) サクセンにおける労働力不足は単

に作付面積の拡大、集約化に由来するも

のではなく、社会経済的要因 (社会的分

業の発展、直接生産者のもとでの商品生

産の展開) に基づく。この点については

松尾展成、前掲書、を見たい。

第二節 農業経営の諸類型

(1) はじめに

本節では十六世紀後半におけるサクセン領邦君主アウグスト August の直営地経営の分析をおこなう。その分析視角はサクセン農業に関する前節と密接に関連している。すなわち先にサクセン領邦君主直営地経営の商品生産的性格と、その経営合理化の時代的特質⁵³⁾および商品生産の発展と関連した作付組織を中心とする農業生産力の発展の特質⁵⁴⁾を分析した。

本節ではこの視角を更に展開させ、商品生産の展開と主として作付組織の展開に示される生産力の発展の仕方が、労働力の質とその編成、生産手段と労働力との関係とどのような関連を示しているか、という視角から分析する。

すなわち前節(3)でまとめたような直営地における商業的農業の発展、そのもとでの農業

生産力の展開の仕方が労働力の質・編成によ
 り役畜・農具などの生産手段と労働力の関係
 にどのような影響を及ぼしたかが本節の中心
 課題である。さらに直営地経営は穀作部門の
 外に主たる部門として家畜飼育部門（搾乳牛
 部門、牧羊部門）があったが、家畜飼育部門
 についてはいままで殆ど分析されないことがな
 かった。⁵⁵⁾ 本節ではこの家畜飼育部門について
 も不十分ではあるが検討を加え、当時の直営
 地経営を全体として把握することに努めた。
 まず十六世紀後半という時期をサクセン選
 定侯直営地経営の史的展開の中に位置づける
 作業をおこなう。
 サクセン選定侯 August は 1553 年登位するが
 登位後直ちに収入の増大を目ざして財政改革
 に着手した。その方法の主要なものには直営地
 経営（分農場）の解体・売却・農民保有地へ
 の転化、賦役の金納化、直営地の小作化であ
 った。⁵⁶⁾ この方針に沿って 1564 年までに売却・世
 襲借地（*Erbleihe*）とされた分農場数は五十三

に達した。⁵⁷⁾ そして1558年に依然分農場として
 挙げられていたのは(正確さについて)は疑問
 があるにせよ)僅か四十であり、しかもそ
 の中に小作地として貸出されていたものも含
 まれてい⁵⁸⁾た。しかしこの転換も成果を充分あ
 げることができず、小作人の「不正直と無能⁵⁹⁾
 を理由として1568年に再び直管地経営の復活
 強化の方針がうちだされた。ただしそれは15
 53年以前への単純な復帰ではなく、今や各直
 管地は侯のその地の所領管理から切離されて
 Augustの直接の管理のもとに立たされること
 とな⁶⁰⁾った。すなわち各直管地は五人の分農場
 管理官 *Vorwerksbefehlshaber* に分属管理せしめられ
 選定侯の総代理人である *Hofmeister* がこの五人
 を統括した。分農場は1578年には七十二へと
 増大した。ザクセン農書を代表する「エゴノ
 ミア」の著者である *Abraham von Thunbshirn* が
 この方針変更の翌年である1569年4月に *Hofmeis-*
ter に登用された⁶¹⁾のも、この直管地経営の再編
 ・強化と関連づけられるであろう。このよう

な方針の変更に伴、て、1568年以後^へ新分農場
 の創設、既存分農場の購入・交換による規模
 拡大、小作分農場の直営化がはかられた。同
 時に賦役の金納化も、少なくとも大規模には
 おこなわれないうになり、反対に出来る限
 り^{賦役が}強化されるようになった。直営分農場では
 必要とされる賦役は金納化されることなく、
 全面的にまた何ら軽減されることなく使用さ
 れた。この点に関連して注目される点はAugu-
 ーが土地の売却・購入に際して取った態度で
 ある。売却のばあいには分農場を一括売却す
 るのは稀であり、一村全体を売却することは
 全く無かったといわれる。
 売却の相手方としては貴族が最も少なく、
 次に都市ゲマインデであり、大部分は農村
 ゲマインデ、市民、農民であった。そして売
 却される耕地はフーフェに分割されて、ある
 いは購入者の総有（たとえば十六〜二十一人
 で売却され、新村が設立された。購入のばあ
 いには、少数の例外を除き大面積の一村全体

(2)

ハルシャフト全体が入手されている。この事
 実には購入売却にあたり、常に他領主の排除
 支配の一円化、分散支配の克服が意図的に追
 求されたことを示しているように解される。

これは後にも見るように賦役労働の村落共同体
 への賦課という方法を通じて直営地経営の展
 開に重要な意義を持つこととなる。

(2) 耕種部門

Augustが小作から自営へと転換した時点の
 直営地の事情を示すThunbshirnの¹⁾分農場視察
 報告書から作付組織、労働力、生産手段の
 所有状況の三点がわかる分農場を抜き出して
 みると次のようになる。

(1) 丁内は筆者)

Zella⁽³⁾

回圃式農業(休閑-冬穀物-大麦-燕麦)。

耕地は一部の混在。回圃目の播種耕作は

…成功してはいない。穀物は小作人によつて

荒しづくりさし、適切に施肥されず、かつ
 耕地面積が広すぎ、施肥可能面積よりはず
 かに広い。三年目にライ麦が施肥さしぬは、
 用いられた労働、種子よりも作かない。施
 肥せずには四区分ではそれ以前の収穫より
 もはずかに少ない。Zellaおよびこれに所属
 する分農場における穀作面積は広く、これ
 に対する賦役は散在している (weitläufig) の
 で、農場長は荷車 + 犁 = + 耙 + = 対を
 Oberland の賦役人のために備えておかな
 ない。彼ら賦役人は一部遠く離れて住
 み、然るべき時間に来ないし、仕事も少し
 しかない。しかし賃金 (lohn) は同じよ
 うに支払われる。またしばしば天候がよい
 と仕事はほかとらない、たせたら働き手 (
 dienst Leute) がすぐ入手されないからであ
 る。
 Zella では二十四頭の雌馬を飼うことがで
 きる。そうすることによって、分農場での
 犁耕、搬出搬入を世襲賦役人とならん、

よりよくかつ適期に行ないうる。反対に賃

労働を節約できるし、しかも緊急にそなえ

ることができる。

Ruppendorf⁶⁴⁾

五圃式農業（休閑－冬穀物－夏ライ麦－

燕麦－大麦）。耕地は全く混在しない。若

干地味が悪く土地がつかめたい。したがって

近くにある耕地を三つに区分し、あるいは

施肥で土地を改善しうる程度に区分し、そ

れ以上は区分すべきではない。Ruppendorf.

Paulsdorf では、それぞれ夏四組の雄牛を飼

育できる。しかし冬はすべての雄牛一八組

六十八頭一をよりよく飼育し、舎飼し周到

に監視するためには、また分農場長を一人

節約するためには、Paulsdorf で飼育するの

がよい。…賦役人が一部遠くに離れて住み、

役畜が充分でないので、Reichstedt の農場長

は雄牛の果たすべき仕事で利益をつくりた

きたいと希望している。

Dipoldismühle⁶⁵⁾

四圃式農業（休閒－ライ麦－燕麦－大麦）。

耕地が多すぎる。したがって三圃に二分し

て収穫をふやすより他ない。Dipoldiswalde の

穀作には雄牛を用いる。Reichstedt 分農場で

も同様……夏にはこの地には雄牛の放牧地が

全くない。そのため、休閒放牧地で、他の

家畜に損害を与えないで、またあまりに長

く休閒地を囲込おことかに生じる害なしで、

Dipoldiswalde の放牧地と Wind の灌木林放牧地

だけで飼育できない。それで、そこそこと

移動しなければならぬし、放牧のための

場所もないので、この地で雄牛を飼育する

ことは疑問がある。

Dorf Langen Renth⁶⁶⁾

三圃式農業（休閒－ライ麦－大麦）。+

三人の住民が一緒になつて、混在耕地にな

っている圃場だけでなく、その他の hoffeld

もすべて彼らの夏・秋の垣の中に囲込み、直

管地牧羊者がその時にそこに放牧できない

ように散らしてある。これは全く不法とみ

なすべきであり、これらの者どもに禁止

せぬばならぬ。これらの者どもは彼らに

垣が許されなければ損害を受けることを考

慮して、垣をする代わりに一年に二回ラン

ケンロイト圃場で耕作したいと述べている。

四旬節に半月、六月に半月、秋播きの播種

に一日。この代償に圃場を四旬節の八日後

から秋をへて十月十六日までしかるべく夏

垣で囲込め資格を与えられる。しかし夏秋

の羊放牧施肥を支障なくふにない、直営地

牧羊者が完全に放牧を行なうべきであり、

同様にそこで作業する他の賦役者がこれら

で同様 Mittagsweid を使用するべきである。

Seyola⁶⁷⁾

三圃式農業。農民耕地と地片、敵がとこ

ろどころで混在。すべて賦役人によつて耕

作されぬばならぬので、適期にかつ入念

にふにたうことが極めて重要である。

この耕作は…耕地が混在してあり、分

農場長が遠くはなれて住んでいるので常時

監督できない。ゲジンは何事をなすにつ

いても非常に不熱心である。……

Rabenstein im ampte Beltzig⁶⁸⁾

altes Hofefeld 三圃式農業(休閑-ライ麦-

大麦)。すべて賦役。

Arnsdorfer Mark (ライ麦-大麦-ソバ-

燕麦-二年休閑)。開墾地は過半を自

分の犁で作業せねばならず、十二頭までの

雄牛がゲジンゲも含め維持されねばならな

い。若干の小地片は昔からのもので開墾地

ではなく、賦役人が作業せねばならない。

穀作はほとんど利益がなく一部だけ賦役

でなされる、大部分は自分の労働と費用

で行なわれねばならない。

Damsdorf のこちら側の採草地は賦役され

る。しかし賦役者には一人につき三マルク支

払われねばならない。

manewiese は賃労働で行なわれる。

Brehna⁶⁹⁾

改良三圃式農業。休閑(休閑作物エント

ウ・グイ - ケン) - 冬穀物 (ライ麦) - 夏

穀物 (主として燕麦。他に夏大麦)。

一部四圃式農業 (第四圃は小麦、冬大麦

冬播きカブ用)。

個別地片がところどころフーフエ地と混

在。

穀作はすべては賦役さしず、定日賦役 (

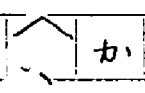
gesetzte ackertage) でおこなわれる。そのた

め作業用運搬用は二組、播種期には三組の

役畜・用具 (*Geschir*) を少なくとも備え付け

ねばならない。小麦、大麦を二十人が刈取

量の十分の一の報酬で刈り取る。冬大麦、

夏大麦、燕麦を一人一日三 *acker* すっ  かき

集め、結束、収納……は賃金を支払われる。

大麦、燕麦の刈取りは賃労働でなされねば

ならない。エントウの収穫、収納は二十人

がすべて十分の一の賃金でおこなう。

採草地では一番草、二番草の刈取りは賃

労働でおこなわれねばならない。二十人の

刈手が一番草、二番草を裏返しで乾かし倉

に は こ ひ 入 ん ね ば ち ら な い 。 … 穀物、大 麦

燕 麦、一 番 草、二 番 草 の 収 穫 に 約 三 十 ケ ル

テ ン と ラ イ 麦 ニ シ ェ ッ フ ェ ル が 支 払 ん ね る 。

Schenckitz⁷⁰⁾ 三 圃 式 農 業

し か し 穀 作 に は 賦 役 が 不 足 し、ゆ え か 七

人 の 農 民 が い る に す ぎ な い 。 各 農 民 は 四 日

耕 作 す る 。 七 人 の 他 に は 十 八 人 の 農 民 が

そ ん な 四 日 間 耕 作 せ ね ば な ら な か っ た が

二 年 前 に Wolf von Kostenwitz が 買 取 っ た (be-

kammen) 。 そ の た め に 賦 役 が 不 足 し、耕 作

と く に 一 番 大 事 な 犁 耕 が 適 期 に 入 念 か っ 迅

速 に お こ な え な い 。 そ の た め 一 層 多 く の 馬

お よ び 少 な く と も 八 ～ 六 頭 の 鞍 馬 - こ ん に

飼 料、賄、1 ケ ジ ン テ 賃 金 が 加 ね る - か 備 え

ら れ ね ば な ら な い … と く へ っ 大 き な 費 用 を

か け ず に 馬 を 飼 育 す る に は、八 頭 の 去 勢 雄

馬 を 耕 耘、運 搬 用 に 飼 う の が 不 都 合 で な い

よ う に 思 ね る 。 去 勢 雄 馬 は 雄 馬 よ り も 粗

飼 料 で す み、夏 は 放 牧 地 で 放 し 飼 い で き る。

Forberg im ampte Freyburg gelegen⁷¹⁾

三圃式農業（休閒地にごく少量のエンドウ作付）。

Schlossfeld, Niesmitzerfeld は完全に耙耕に至るまで一直管地備付の用具でなさねばならない。一若干数の賦役人によつておこなわれる。Podelitz 村で九犁。Rossbach, Nollendorf, Lützen で十五犁。Zeichfeldt で十三犁...

Coltzenndorf, Gleina, Ochltitz, Ober-, Nieder-Erstedt 堆厩肥運搬、〔穀物？〕搬出。

Niesmütz 住民は堆厩肥を自分と二人で散布義務。

成育した冬穀物を刈取り量の十分の一の賃金で収穫せねばならない。

大麦・燕麥の収穫は賃金労働。しかし搬入は賦役。

Tschepelitz⁽⁷²⁾

改良三圃式（休閒作物エンドウ）。Munche-
roda 圃場のうち、傾斜地の三フーフェにっ
いては Muncheroda の農村と共同放牧権をも
つ。

賦役人については Munchendorf の十一農民

があるだけである。犁は各二日、一日は夏

作物播種、もう一日は冬作物播種のためで

ある。二回目の犁耕、耙耕、堆厩肥運搬、

収穫物の搬入はすべて修道院の馬一六頭以

下ではできない。一でなさねばならない。...

夏穀、冬穀の播種は極めておそろしか成育

していない。おそろしく長く残った雪、過度

の湿気、適期にはなく若干おくれた作業、

はその原因が歸せられる。賦役人がいない

ばあ、には、いつも適切で迅速にこなさ

ない農作業を自己の馬で行なわねばなら

ない。

Burstendorf⁷³⁾

三圃式（休閑—ライ麦—夏大麦・燕麦）

この圃場のためには二組の役畜、用具をし

くは少なくとも六頭の馬を備えなければな

らない。なぜなら世襲賦役人（Erbfrohnner）

がおらず、しかも圃場はかもし草（gucken）

を除草し、冬穀のためには四回犁耕する必要

があるからである。

Kemnitz⁷⁴⁾

普通の三圃には三分さしていいので、地味、施肥でさるかできないかに応じて^(土地)用い

る。圃場は南斜面は混在せず集中している。

圃場作付はすべて賦役でおこなわれる。

Rabenstein im amt Kemnitz⁷⁵⁾

三圃式農業

耕作作業は Stein, Rutloff のニカ村から賃労働でおこなわれる。一シェツフェル播き

のライ麦畑と大麦畑は三圃犁耕して九 ch.

(7ムニツツ単位)、一シェツフェル播き

の燕麥畑は四 ch. が与えられる、種子はす

き込まれる。穀物、一番刈草、二番刈草、

亜麻、麻、その他の運搬は一フーテル〔250

~ 300 kg〕または一ショック〔六十束〕あた

り一ケロツシェン。堆厩肥の運搬は賦役で

おこなわれるがならない。

Stolberg⁷⁶⁾

六圃式農業(休閒-ライ麦-燕麥-燕麥

一 燕麦)。

圃場耕作は耕耘、運搬等すべて賦役であ
はれる。

採草地作業もすべて賦役。

Forberge im ampte Wolkenstein, Jerichowalke

粗放穀草式農
Scheube 地味に依いて播種。大体燕
麦。農民耕地と混在。
Jerichowalke 分農場・耕地は地味に依
いて作付。

夏ライ麦 - 燕麦 - 燕麦 - 燕麦 - 休閑 (四

五、六年またはそれ以上) Scheube, Jericho-

walke の二つの分農場の圃場は賦役ですべて

あはれるのではなく、定日賦役だけで

あり、百五十日の犁耕と同じ日数の耙耕賦

役の義務を負う。堆厩肥を賦役人は羊舎と

分農場からすべて搬出し、彼らが耕作した

穀物を搬入せねばならない。この賦役をも

つてしては最少限の耕地を整えるにすぎ

ない……そこで雄牛八頭を飼育するのは不得

策ではたい。そして、¹⁴⁹⁹家畜と並べて放牧し、

耕耘と運搬に交互に使用し、毎年ハ+〜百

シエツフェル播き耕地〔22〜28ha〕を開墾

し、一年または三年間播種すれば特別の費

用をかけずに整えることができる。そうす

ると Voigt は…この雄牛で耕耘することか

き…賃労働者を一人雇うことができる。

Rebestein⁷⁷⁾

粗放穀草式農業（大部分夏ライ麦）

この圃場には仕事量が多くかかるが賦役

は少ししかない。また Lauterstein の賦役人が

現在この分農場に用いられているが、それ

でも不足なので、大部分自分の馬と作男で

作業せねばならない。そのため馬十頭、作

男五人、童僕五人を賄、賃金で維持せねば

ならない。

Lichtenwalde⁷⁸⁾

三圃式農業。

他人の耕地と全く混在しない。耕作には

賦役はなく。。。

Ebersdorf, Braunsdorf のような若干の村々

が定められた賃金で作業せねばならない。

農民は役畜を伴って来るが、この役畜に対

しても同じように賃金が支払われる。そし

て同時に作業に必要な人数が確保できない

ので Rabenstein でとられてゐるようには、シエ

ッフェル数に応じて支払うよう農民と交渉

するのが利益があり正しい。

Unterrichtenau 79)

現在厳密に三圃に分かれてゐない。

この耕地は Lichtenwalde と同じように役畜

で耕耘、耙耕させ、賃金を支払う。堆厩肥

の運搬に關しては、役畜一組につき三 ch.

を支払い、その他には何の経費もかからない。

そして半日運ぶだけである。収穫時には穀物、一番刈草、二番刈草、その他 Lich-

tenwalde と同じように行なわれ、賃金を支払

う。

以上 Thunbshirn の視察した分農のうち十八

分農場に關する資料から次の諸点を明らかに

する。

a) 直管地経営労働力の不足が顕著である。
 すなわち分農場が全体として賦役だけで経営
 されているばかりは極めて僅かである。『分
 農場視察報告書』による限りでは Stolberg, Raben-
 stein の altes Hofefeld の二カ所にすぎない。もち
 ろん賦役だけでおこなわれる分農場はこれた
 けではない。他の史料から Stolpen, Hohenstein,
 Nieder-Lauterstein の三分農場が賦役だけで耕作
 されたことが知られるからである。⁸⁰⁾ しかし Thurm-
 schirn による限りでは 1570 年の時点で賦役た
 けで耕作される分農場は少数であつたと推測
 される。賦役労働力だけで経営される分農場
 のうち、最も詳しい内容がわかる Hohenstein 分
 農場について賦役の内容(所収見積りと実際の
 賦役日数)を示すと⁸¹⁾ 第一表のとおり、耕地
 255 ha, 採草地 60 ha 経営について役畜賦役 12
 82 日、牛賦役 2406 日(うち農業に用いられる
 のかほつきりしているのは 1374 日)が必要と
 されている。施肥面積は全耕地の $\frac{1}{6}$ であるが、
 これは当時のガウゼン農業の水準であつた。

賦役は各種類について分農場附属の184 Hufe
のうち141 Hufe 四~十三カ村から徴集され
ている。

第1表 Hohenstein 分農場(五圃式)所要労働見積り

耕地面積	461 Acker (約255ha)			
犁耕賦役	3回犁耕	840日	4カ村	役畜賦役
耙耕賦役		84日		
種子運搬賦役	1 A.あたり播種量2½シッフエル (Sch.) 全播種量 702 Sch.	36日	3村の Lehnrichter	
堆肥運搬賦役	休耕地1 A.あたり使用量30フーデル 全使用量2,106フーデル	211日	9カ村	
乾草運搬賦役	採草地面積108 A・98M (約60ha) 1 A. 平均生産量一番草2フーデル、二番草 1フーデル、一草一日8フーデル運搬	41日	5カ村	
穀物運搬賦役	一車積載量90束、10回運搬	70日	10カ村	
大鎌賦役	採草地、夏穀作付地、1 A. あたり1日	357日	13カ村 義務負担日数412½日	手 賦 役
乾草づくりの熊手賦役		216日	13カ村 義務負担日数706½日	
夏穀作付圃での熊手賦役		140日		
冬穀作付圃での熊手賦役		140日		
小鎌賦役	2 A.あたり3小鎌	212日	10カ村 義務負担日数 322日	
採草地清掃		111½日	12カ村	
堆肥散布		41日	4カ村	
油、素菜採集		61日	10カ村	
播種、種穀の隠分		56日	4カ村	
亜麻、素菜、カブ手賦役	多くのばあい貨幣に転化	40日		
結束葛紐賦役				
借家人 (Hausgenosse) 手賦役	(年2日)	1,032日	Amt	

なお August はこの分農場に荒廢農地と六農
民保有地とを付け加えたが、1569年アムト住
民 (Amtuntertanen) が、先に同意した賦役金
を免除さしめ代わり、新たに付け加えらるゝ

耕地の耕作を引受けるといふ協定を結んでい
 る(しかし負担軽減のためには Waitzdorf, Ostraニ
 カ村の賦役が如き⁸²⁾。これは領邦君主
 の直管地経営にとって、今や賦役の金納化よ
 りも現物(賦役)が望ましいものであつた。こ
 こを示すものであろう。また上に述べた事
 実から賦役が村落共同体およびアムトを単位
 として課されたことが示されているように思
 われる。また借家人賦役がアムトを基盤とし
 ていることも同様に解される。このように直
 管地労働力は賦役の各種目毎に、若干の村落
 を含む幾つかの圈から調達され、その最も大
 きい圈がアムトであつたと考えられる。領主
 直管地とそれに賦役を提供する数カ村から成
 るいわゆる「領主所領区域」⁸³⁾の形成と同質の
 過程が進行しつつあることがわかる。これら
 の賦役を提供する賦役人はおそらく Thumbshirn
 のいう「世襲賦役人」Erbfrohnnerであつたと思
 われる。
 多くの分置場では明らかに多かれ少なかれ

賦役は直営地経営が必要とする量に達してい
 なかった。この不足する労働力を調達するた
 めに何にせよ、まず賦役の増大が考えられ
 たいと思われる。その努力の現われが賃金を支
 払う賦役の存在（*Zelle, Rabenstein im ampte Beltzig*）
 であり、賦役の新たな設定である（*Dorf Langen
 Reuth*）。*Zelle*での賃金を支払われる賦役は、
 おそらくは正式の賦役義務ではなく、領主の
 懇請もしくは農民の自由意志に基づく事実上
 の賃労働であったように思われる。「彼ら賦
 役人は…然るべき時間に来ないし、仕事も少
 ししかしない。しかし賃金（*lohn*）は同じよ
 うに支払われる。またしばしば天候が良いと
 仕事ははかどらない。なぜなら働き手（*diens-
 lente*）がすぐ入手出来ないからである」とい
 う事実を示されているところの、「賦役人」
 支配力の弱さがこのような解釈を許すように
 思われる。また *Langen Reuth* 村の例は農民に
 彼ら農民保有耕地の囲込権を認め、領主の農
 民耕地での羊放牧権を放棄する代償に、新た

日賦役(定日賦役 *gesetzte Tage*)の新設を目ざ
 したものであった。これは直営地経営のため
 に、羊放牧権よりも賦役が重要であったこと
 を示している。このように何にもまして、ま
 たあらゆる機会をとらえて賦役の増大策が講
 じられた。しかし、その賦役量は年賦役(二
 ~四日)であった。この負担の点週賦が一般
 化した東部ドイツとは決定的に異なっている
 といえる。賦役は量的にはたけどはなく、質的
 にも問題があったようである。すなわち賦役
 で耕種作業が行なわれたばかりでは、*Amt*
Freiburg 所在の分農場にもみられるように、
 役畜・農具は農民のものではなく、「直営地
 備付の用具」でたきやたけやばらなかつた。
 以上 *Thunbsheim* の分農場視察報告書から
 明らかになるように、賦役の増大による労働不足
 の全面的解消は不可能であったようであり、
 賃労働の使用という道がとられていた。賃勞
 働のばあい雇傭の形態からみて、住込みの年
 雇労働力であるゲジンテ(*Seyda, Schenclitz, Reben*)

他一般の戸主がその奉公人にいくらかの穀物を
 を播いてやり、奉公人とくは犁耕夫はこれに
 なれど他の方法では雇われようと思せず...この
 奉公人はいらいるしくわがままになるばかり
 でなく...彼らのほたす労働よりむしろ自分自
 身のものに注意して他のことを怠り、彼らの
 作った穀物を取引する^{のよ}かによそおって各種の
 危険な密売を営む...そこで...今後いかなる者
 もその奉公人に穀物をまいてやっではならず、
 彼らとしかるべき賃金を貨幣で契約すべきで
 ある⁸⁴⁾。この史料は奉公人労働力とくは犁耕
 夫が不足しており、そのための事実上の土地用
 益を与えることで適時にまた迅速に農業をお
 こなう経営条件を確保しようとしていること
 を示している。ここでは土地用益の給付は直
 営地経営の発展を示し、労働力を確保する様
 式である(土地との結び付きの強化)。

日雇は *Thumbshin* による限りでは二例しかみ
 られない。しかしこのほか定められた賃金
 では必要とする人数が得られないため出来高

払ひ労働への移行が考えられている。出来高
 払ひ賃金は主として農具類をなるともたない
 農村プロレタリアでも行ないうる収穫労働に用
 いられているように思われる。賃金は刈取量
 に対する割合($\frac{1}{10}$)ないし面積あたり、とな
 っているが、Brehna の例が示すように、とっ
 ぱら貨幣で支払われている(94%)。しかし
 また役畜と農具類とをもつ経営主たる農民た
 けが行ないうる犁耕にも、出来高払ひ労働が
 行なわれている(Rabenstein im ampte Kemnitz)
 (後述)。

労働力調達の手段として、上記の外に貸付
 金利率の農作業による返済および草小作⁸⁵⁾があ
 る。サクセン王領地直営地経営の指令書には
 以下の様な事例計算が示されている⁸⁶⁾。

(i) 貸付金 100 ターレル。年利率 6% (「買
 戻し aufwiederkauf」での貸付け)。
 一年間の利息 144 gr. この利息を犁耕賦
 役(馬二頭ひき)で支払うときは 24 日分
 に相当する。

三年間では利息 432 gr. で犁耕賦役 72 日

分に相当する。

(ii) 貸付金 20 gr. 年利率 6%。一年間の利息

は 1 gr. 2 pf. 1 Hellen で手賦役一日分に相当す

る。三年間では利息は 3 gr. 7 pf. となる

て手賦役 (handfeon) 三日間になる。

(iii) 貸付金 1 ターレル。年利率 6% とし一年

利子は 1 gr. 5 pf. で草刈賦役一日分に相当す

る。三年間では草刈賦役三日分となる。

貸付期間は三年間、三年後には支払いかた

される。現金支払いかできないときは賦役

で支払われる。

農民は役畜を提供する。牡牛二匹を馬一頭

に計算する。他領主または他のアムトの隸

属農民の賦役を買いとるときは、その領主

の同意を農民に得させておく。

上記の例から犁耕賦役、手賦役、草刈賦役

一日当りの評価額を計算するとそれぞれ 6 gr.

1 gr. 2 pf.、1 gr. 3 pf. となるが、一般の日雇賃

労働価格ではそれぞれ $\frac{1}{2}$ fl. 2 gr., 3 gr. で、

負債利子の賦役による支払の場合の評価額は
一般賃労働価格の $\frac{1}{2}$ 以下の価格を示している。

このような直営地労働力の調達方法は明らかに
かに債務奴隷的關係と云ってよい。⁸⁷⁾

後者は播種後の畑に繁茂する雑草を飼料不足に悩む農民に除草させ、除草した雑草を農民に与える代償に小作料を徴集する制度である。雑草が直営地経営と農民経営とを結びつけるものであり、農民は領主の畑の雑草を採取（一種の土地用益）がでさなければ経営を営むことができないし、領主はこうした方法で、農民とくに下層の飼料不足に棄いて夏作中心の多圃化に伴って生じる除草問題を解決するにとができたのである。

b) 直営地経営の労働力不足は社会経済的原因（直接生産者層における社会的分業の発展、直営地解体の方針をとった際の賦役の売却、金納化）と農業技術上の要因の二つに大別される。前者については既に松尾論文に於

として触れられたい。この本節では省略する。
 農業技術上の要因としては、開墾、多圃化による作付面積の増大、休閑地面積の縮小、休閑地作物の導入による集約化、夏作中心の多圃化という形で生産力が上昇したのに伴って、耕耘回数が必然的に増大し、除草が必要となったことがあげられる。すなわち開墾地には賦役は無く、ゲジンを雇傭し、役畜その他の生産手段を備えつけねばならなかった (Rabenstein im ampte Beltzig)。また Zella, Ruppendorf, Dippoldiswalde のように六、五、四圃式農業を行なっているところでは、耕作面積に比して肥料とともに賦役労働力の不足が殆んどの場合訴えられ、三圃式農業への移行、つまり休閑地面積の拡大、作付面積の縮小が常に報告されている。休閑作物の導入による労働集約度の上昇に起因する労働力不足は当然考えられるが、史料では明確にはでてこない。というのは休閑作物を導入した Brehna, Tschepnitz でも、旧態然たる三圃式農業を営む Schenditz でも、同じように労働

働カ不足が訴えられているからである。当時
 の休閒作物（その中心はエンドウ）の栽培が
 ごく少なかったという事実とも考え合わせ
 と、労働力不足の要因は主として開墾、多圃
 化による労働力需要の増大に帰せられると考
 えてよい。そうした多圃化に対応した夏作中
 心の作付体系から必然的に地力維持のため犁
 耕回数が増加（冬穀物三〜四回、夏穀物一〜
 三回）、除草の必要性の増大（犁耕回数の増
 大、夏穀物連作の回避、播種後の人力除草、
 除草用犁 *Hakenpflug* の分化）が生じたのである
 と、ここでこのような労働力不足は世襲役人
 が存在せず定日賦役だけしかない場合に特に
 強く訴えられている（*Brehna, Schenditz, Eschepitz,*
Burstendorf, Forberg im ampte Wolkenstein）。した
 が、従来定日賦役で経営されてきた直管地
 が、主として作付面積の拡大、多圃化によ
 って生じた労働力需要の増大を、二つの方法、
 すなわち（い）直管地を中心とする「領主所
 領区域」の形成（前に述べたような「フーエ

創設による中農中心の新村落の設置に伴う)

世襲賦役への転化という方向と、(月)年雇

労働力を中心とする賃労働の雇傭という全く

相対立する方法がとられていたといえる。

C) 定日賦役においては、いままでもなく農

業は農民とその農民所有の役畜その他の生産

手段でも、であってなされた。これが労働力不

足を充足する過程でどのような変化をたかを

みてみよう。

まず賃金を支払ったる賦役のばあい、役畜

荷車、犁、耙が直営地に備えつけられている。

すなわち、このばあい労働力と生産手段とは

分離することになった。その理由として「分

農場における穀作面積が広く、これに対する

賦役が散在している」とことが挙げられている

が、これは単に相対的に作付面積に比して勞

働力が不足するというだけではない。同時に

役畜賦役を行ないうる農民が十分にはいない

という事態を示しているように推測される。

すなわち役畜賦役農民の不足あるいは役畜賦

役を行ない、な、農村プロレタリアの増大。
 加うるに領主は「然るべき時に来ないし、仕
 事も少ししかない」賦役人を如何ともしが
 たい事態、つまり領主権力の弱化が生じてい
 る。このような条件のもとに直営地における
 生産手段の創出、賃金支払の必要が生じてい
 ると考えられる。
 ゲジンデ雇傭のばあい、必ず役畜飼育と結
 びつき犁耕・運搬用農具が備えられたことは
 先に指摘した通りである。ゲジンデ雇傭とそ
 れに結びついた役畜・農具の創出は「耕作、
 とくに一番大事な犁耕を適期にかつ入念、迅
 速に」「よりよくかつ適期に行なう」ためで
 あり「賃労働を節約し緊急に備える」ためで
 あった。これは犁耕が「適期にではなく遅れ
 れば穀物が」「必ずかしか成育しない」原因と
 なるといふことの外に、先にも述べたように
 穀物の商品生産発展の結果、圃場が多圃化し
 て、それに対応して作付組織が変化する中で
 犁耕、除草の必要性が増大した結果でもあ

こゝに注意せねばならない。こうした形での
 農業生産力の展開が、社会的分業の発展から
 生じた領主権力の弱化ともあいまって賦役勞
 働よりも賃勞働を雇傭する原因となつたと考
 へる。そしてゲジンデの形態での雇傭勞働が
 犁耕勞働の中心を占めたのは、領邦君主直管
 地の事例から明らかたように、役畜作業を行
 ないうる農民層の減少が必要な時に必要な量
 の勞働力雇傭を困難にしたことが挙げられよ
 う。
 この関連でいえば出来高払いの犁耕、すな
 わち賦役と同様、農民が自分の農具で領主の
 土地を耕作するという賃勞働（レニンのい
 う賦役制度の直接の残存物である「雇役」）
 も存在した。
 こうして十六世紀後半のザクセン領邦君主
 の直管地経営では、勞働力と生産手段との分
 離がすすむ方向と「領主所領区域」形成一つ
 まり勞働力と生産手段とが結合を強化する方
 向一との相対抗する二つの方向が併存してい

たりといえる。そして多くの直営地では年雇労働を中心として雇傭労働、債務奴隷的性格のものも含めて役畜と農具とをもつ経営主たる農民が行なう賃労働、農具類をなんらもたない農村プロレタリアが行なう賃労働が結びついていったといえる。このような労働力の質と編成は再三指摘したように社会的分業の進展とサクセシ農業生産力の居間の仕方と関連づけられるのである。

d) 生産手段、役畜としては雄馬 (Brehma, Tschepnitz, Burstendorf, Rabenstein) 去勢雄馬 (Schenditz) 雌馬 (Zella) 雄牛 (Ruppendorf, Lipoldswalde) が挙げられている。Thumshirn によれば役畜に何をを選ぶかの基準は経済性および「適期のかつ入念、迅速な作業」という二つの視点から述べられている。「特別大きな費用をかけずに馬を飼育するには、八頭の去勢雄馬を耕耘、運搬用に飼育するのが不都合ではないように思われる。去勢雄馬は雄馬よりも粗飼料で済み、夏は放牧地で放し飼

できる」。馬と牛との経済性の問題について
 では Ostra 分農場長 Daniel Hartmann の報告が
 ある。「Ostra 分農場に配属された十二組の
 馬は年間飼育に多額の経費を要した。そこ
 でこの経費は、現在分農場で飼育させ、毎年
 育成させている雄牛の中から若干頭数を選別
 し牽引に慣れさせれば一部軽減するであろう。
 さすれば既に実地に試みてみたように、耕地
 の事情に応じて四頭～三頭、また二頭の雄牛
 一放牧地だけで飼育させる一で充分二頭の馬
 一年間を通し燕麦を給飼せねばならない一が
 行なうと同量の作業を耕地で行なうことか
 ら、單に燕麦等の費用を節減できるだけでなく、
 雄牛がつくる堆厩肥も馬の敷藁より遙
 かに肥力が高⁸⁸⁾い。したがって Thumshirn,
 Hartmann 共に主として馬の飼料費を問題にし
 ていることかみかる。一方馬の飼育は改良三
 圃式で作業量がふえたばあい、耕地面積に比
 較して役畜が過小なばあい、除草のための犁
 耕労働を四回も行なわねばならないばあいに

ど、限られた期間に多量の仕事を迅速にこなさなければならぬ分農場で用いられている。したがって経費と適期の迅速な作業とが役畜の種類を決定する決定的な要因となつていゝることかわかる。

犁、当時直営地で一般的に使用された犁は馬四頭（併列）牽きの四犁刃犁であつたといわれる。これは重く操作が困難で、馬の銜とりに二人、犁の操作に二人計四人を必要とし⁸⁹⁾た。このような多犁刃をもつ犁は深耕するたみに必要とする牽引力が余りにも大きくなり過ぎ、種子をすき込む程度の浅耕しか可能ではなかつたようである⁹⁰⁾。そこでこの時代にはこの重量犁の改良——馬二頭、二犁刃犁、労働力一～二人、軽量、操作簡便、欠点のない犁溝（四犁刃犁より深耕の意か？）の形成——がはかられていゝ⁹¹⁾る。おそらく当時の作付組織の変化に対応して従来よりも深耕を可能にする軽量犁の改良を目ざしたものであつたろうと推測される。そしてこの軽量の二犁刃犁につ

いて役畜の馬から牛への転換が経済性を考慮して考えられたいと思われる。深耕のばあい雄牛六～八頭⁹²⁾四人、浅耕のばあい四頭二人であつた。作業能率は一日0.83 ha (ニシエツフェル播きの土地)、ただし賦役のばあいは0.55 ha (ニシエツフェル播き耕地)とされてゐる。

2) このような役畜、犁その他の生産手段の創設はいうまでもなくそのための資金投下を必要とし、しかも生産手段の新規整備には賃労働の雇傭を伴つた。そこで役畜と労働力とを無償で提供する賦役を有償としたばあい粗収益に對してどの程度の比率を占めるかを計算してみよう。そうすることによつて賦役の賃労働への切換えと、それに伴う生産手段の新規の整備がどれほど直営地経済の負担となつたかについて凡その目安を得ることができるところからである。

先に挙げた Hohenstein 分農場では全農業が賦役で賄われていた。ここでは五圃式農業が行

な め れ 休 閑 ー ラ イ 麦 ー ラ イ 麦 ー 燕 麦 ー ヴ ィ ー
 ケ ン ・ イ ン ド ウ の 作 付 順 序 で あ っ た。⁹³⁾ 播 種 量
 と 収 穫 量 と の 比 率 は ラ イ 麦 1 : 5. 燕 麦 1
 : 6. イ ン ド ウ ・ ヴ ィ ー ケ ン 1 : 4 と 見 積 り
 れ て い る。こ の 評 価 は 穀 物 に つ い て は 高 く 見
 積 り ら れ ず ぎ て い る。⁹⁴⁾ し か し 一 応 見 積 り の 通 り
 の 計 算 を す る と 第 二 表 の よ う に な る。

第2表 Hohenstein 分農場粗収益見取り (耕種部門)

	1 シェップエル 当たり価格	播 種 量 (シェップエル)	価 格	収 量 (シェップエル)	価 格
ラ イ 麦	1fl.	351	351fl.	1,755	1,755fl.
燕 麦	12gr.	175½	100fl.9gr.	1,053	601fl.10gr.
エ ン ド ウ	30gr.	87½	125fl.7gr.	360	515fl.15gr.
ヴィーケン	1fl.	87½	87fl.17gr.	361	361fl.
計			664fl.9gr. (20.6%)		3,233fl. 4gr. (100.0%)

賦 役 の 評 価 は 個 別 の 分 農 場 毎 に 異 な っ て い
 る か、当 分 農 場 で の そ れ は わ か ら な い。そ こ
 で 領 邦 君 主 分 農 場 で の 賦 役 評 価 の 基 準 と さ し
 て い る 価 格 を 用 い て 概 算 す る こ と と し た い。

第3表

賦役評価基準表
 犁 耕 賦 役 ¼fl.
 乾 草 収 穫 賦 役 3gr.
 穀 物 収 穫 賦 役 3gr.
 手 賦 役 2gr.
 堆 肥 運 搬 賦 役 1flr.

犁 耕 賦 役 日 数 (犁 耕 賦 役 + 耙 耕 賦
 役) 924 日 分 462 fl. 運 搬 賦 役 日
 数 (糞 子 ・ 堆 厩 肥 ・ 乾 草 ・ 穀 物 の

一、の、非常に遠くにある農地を永小作に貸
 出し、貨幣、穀物、賃租、賦役を課し…しか
 し、それは富裕な農民に、第二に彼らの以前
 に多量の賦役、賃租を課されてい…ところ
 の良好な状態で維持されている農地に加えら
 れ、そしてこれらの農地が全体として元から
 の、また新しい賃租と賦役を同時に保障する
 よう充分注意されねばならない…以前のあま
 り新たにうけ入れた農地が一人の領主 *Lehnherr*
 に属すること…⁹⁸⁾。すなわち小作人をして一
 人の領主とだけ小作関係を取り結ばせ、他領
 主支配権との競合を避けるが、小作関係を
 媒介として賦役、しかも最も不足している有
 畜賦役の新設がもくろまれている。ここでは
 小作関係は役畜賦役を行ないうる農民層の創
 出の手段となつてい…のである。
 なお領邦君主の直管地の耕種部門に…て
 は *August* が直管方針をとつてからは分益小作
 制による経営は行なわれなかつた。しかし一
 般領主層においては耕種部門の分益小作人へ

の貸出しもしばしば行なわれた。Thunbschwin は

耕種部門の分益小作人について次のように述べている。

「耕種 (Ackerbau) を分益小作人 (Helfte) に貸出し作業させること

多くの邑 (Orten) で耕種を分益小作人に貸出し、播種させ作業させることが有用でありまた利益がある。その故、耕地が播種されてから貸与される時は、受託者は再び同じよ

うにして退去しなければならず、年間生育したもののなかからまず種子をさしひき、残余を

分割する。分農場に属する賦役 (Frohn Dienste) を使用することとを分益小作人 halben Mann に

許すよう配慮することとが最もよい。しかし

賦役金 (Frohngeld) は彼から支払われるべきである。

乳牛の飼育 (Viehzucht) および牧羊は普通分益小作人に、一定額の貨幣で小作される。

収穫した穀物、播種した穀物、毎週脱穀した

穀物の割符を分益小作人と共にもち、簿記に

記帳する。またあらゆる作業 (*Bestellung*) が
 正しく行われぬよう、すなわち、耕地に適
 正に耕耘され、播種され、手入され、入念に
 用いられ、(*wird nicht ausgesäemt*), そしてこれら
 の点について精粗があり怠惰がみられぬは、
 直ちに注意し、耕地が荒廢して損害が生じな
 いよう、に、予防するよう、に努める。
 分益小作人に、農業経費用に引渡された (*inventariensweise eingeworfen*) とこのもの、に
 ついては、分益小作人の退去の際定められた
 保障金でも、て再び返却されなければならぬ
 い... (99)
 ここでは領主は分益小作人に経費用生産手
 段を貸与している。これは小作人が退去の際、
 受領の時と同じ状態で返却せねばならぬ、か
 ら、いわゆる *eiserne Inventar* と考えられる。領
 主はこの *Inventar* の外に直営地に附属する賦役
 をも使用させる場合もみられるようである。
 しかしこの賦役は無償ではなく、貨幣で支払
 われなくともならない。したが、て分益小作

経営は領主権力の発露である賦役を利用する
 が、分益小作人が領主特権を行使するとは直
 ちに云えないであらう。それは支払い額が
 労働市場価格での換算額と比較して著しく低
 く名目的な額であるときにはじめて(云える)
 いえよう。この賦役に対する貨幣支払い額が
 当時の労働市場における価格と比較して、ど
 の程度のものであつたかが、この賦役を使用
 する分益小作人の性格を考えるばあいに重要
 であるが、その点は明らかではない。ともか
 くこのばあい領主と分益小作人との関係は貨
 幣化されているといえる。また領主は生産過
 程および収穫物の管理を厳しく監督する。生
 産物は種子を除いて折半されている。

サクセン侯が初めにとつた直管地の小作人
 への貸出しはここに述べられているような分
 益小作人であつたと考えられる。それが失敗
 したのは「荒しづくりされて適切に施肥され
 なかつた」(Zella)という生産過程上の問題
 つまり地力維持を行つても何らそれに対する

代償は与えられぬので、小作期間中に「荒
しづくり」をした方が有利であるとする小作
人の考えのと、かかる「荒しづくり」を防止
できない領邦君主役人の無能、すなわち管理
上の欠陥の二つが考えられるように思われる¹⁷⁰⁾。

(3) 乳牛部門

直管地経営の乳牛部門は穀作部門とは異な
り、賦役労働は全く用いられず、ゲジンテ窮
働力を用以て直管地である、あるいは小作とし
て貸出されている。これはいうまでもなく乳
牛飼育にあたっては労働の質が問題となる程
度が技術的にみて耕種部門より高いからであ
ろう。耕種部門でも、十六世紀後半では商品
生産の展開にともなって、農業技術的側面か
ら雇傭労働力に依存せざるをえなくなっ
ている点を見れば、乳牛飼育にあたっては飼育
管理に賦役ではみられない一段と高い労働

の質が要求されたとおもわれる。

第4表 Stolpen 分農場搾乳牛飼育部門見積り(2)

(I) 飼育規模

搾乳牛 61頭
雌牛年間
育成頭数 8頭

(II) 労働力

	人数	賃金(賄を含まず)
チーズ主任(Kasemutter) ^{a)}	1人	8fl.
搾乳牛飼育係(Viehmagd)	8人	32fl.
家畜番(牧童)	2人	4fl.
合計	11人	44fl.

a) Kasemutter 酪農部門の責任者、同時に賄、その他の家事、亚麻糸つむぎの責任者を兼ねる

(III) 粗生産

	生産量 ⁽²⁾	単価 ⁽²⁾	粗収益
バター	1頭あたり年間 36擔 a)	2gr.	205fl. 15gr.
チーズ	" 1/2大樽 b)	5fl.	150fl.
仔牛生産	52頭(60頭のうち8頭育成)	1tlr.	59fl. 9gr.
計			415fl. 3gr.

a) Kannen=0.94l

b) Tonne=105 Kannen
=98.2l

1頭あたり粗収益見積り 7fl. 1gr. 6pf.

(IV) 飼料

	消費量	単価	価格
搾乳牛 1頭あたり 年間 1フーデル	60フーデル	1fl	60fl.

最初に酪農部門の直営のはあいを分農場 Stol-

pen についてみよう。経営規模、所要労働力、

賃金、粗生産額の見積りは第四表のとおりで

ある。

この見積りでは粗生産額中に賃金が占める

割合が+-%弱であり、穀作に比して遙かに

小さい。

次に賃金についてみよう。当時の主要食用

穀物であるライ麦の一人あたり年間消費量は

6.5 シェツ、フェルと見積に引いては¹⁰⁴⁾、これを
 も、貨幣賃金部分を評価すると、子-ズ主
 任、搾乳牛飼育係、家畜番の賃金はそれぞれ
 1.2人、0.6人、0.3人分にしか相当しない。
 一人あたりの年間賄費については次の資料
 (第五表)から12fl. 1gr.と計算される。し
 たが、現物賃金部分の方が貨幣賃金部分の
 りも比重が高いことがわかる。賃金すなわち
 現物(賄)部分と貨幣部分との合計額の高さを

第5表 16世紀後半ザクセン侯領地年間食費見取り(14人分)¹⁰⁴⁾

肉(牛または老齢雌牛)	5fl. 12fl.)	17fl.
ライ麦	85シェップェル	85fl.
ビール	3樽b)	12fl.
葡萄酒	1大樽	5fl.
薄ビール	12樽	9fl. 11gr.
チーズ	2大樽	10fl.
バター	18塊	1fl. 15gr.
エンドウ	1シェップェル	1fl. 9gr.
ソバ	3シェップェル	2fl. 12gr.
キビ	1/2シェップェル	1fl.
塩	5大樽	8fl. 12gr.
キャベツ(刻ミ)	3樽	9fl.
カブラ	12シェップェル	1fl. 9gr.
サフラン	6ロート	1fl. 9gr.
しょうが	6ロート	1fl. 15gr.
こしょう	1/2ポンド	1fl. 6gr.

168fl. 14gr.

1人あたり 12fl. 1gr.

a) 14人には以下のものが含まれる。

1. 貴族 2. その召使 3. フォークト
4. 下級フォークト 5. Kesemutter
- 6.7. 家畜飼育女 8.9. 雌牛番 10.11. 牡牛番
12. 運搬御者 13. その補助者
14. 貴族の妻又は家畜飼育女

b) Vaß (ビール) 3.93hl

は子一丁主任のばあいにも單身賃金的性格で
 しかたないことは明らかである。ところでこの
 賃金の高さは馬一頭あたりの年間飼育費には
 るかに及ばない。すなわち濃厚飼料である燕
 麦の年間消費量 29 fl. 15 gr. をはるかに下す
 る。これは当時の賃金および生活水準が価格
 革命の過程で物価の高騰、とくに穀物価格の
 高騰に追いつけなかったことを如実に示して
 いると考えられる。

次に *Thumbshirn* によって乳牛部門の小作経営
 について検討する。彼は以下の三種を(第六
 表)提示している。¹⁰⁶⁾

まず *Thumbshirn* の例示する乳牛小作の経営
 規模であるが、これを推定する手掛りとなる
 のは雌仔牛の育成頭数である。*Stolpen* 分農場
 の例では六十頭規模のばあい育成頭数は八頭
 とされている。*Thumbshirn* の例では育成頭数が
 四頭とされているので飼育頭数は三十頭とみ
 られる。このばあいの労働力は六十頭経営の
 $\frac{1}{2}$ とみれば、小作人夫婦、乳牛飼育女、家畜

第 6 表

	小 作 料	ゲ ジ ン グ 賃 金	領 主 よ り の 給 付
A	牝牛1頭につき 2 Taler 仔牛(雌)育成 4 頭	小作人がすべてのゲジングに賃金を 支払い、賄を給する	夏放牧権(休閑地、未墾地) 藁飼料 採草権(採草は自己負担) Krautland ^{a)} および Kretzland ^{b)} 用益 (小作人の費用で耕作・収穫) 粗朶 20 Schock
B	牝牛1頭につき 6 Florin 仔牛(雌)育成 4 頭 Voigtstelle 管理	領主より、小作人・その妻ゲジング に賃金として 20 Florin ライ安 20 Scheffel 小 安 1/4 " エンドウ 1/4 " 大 安 1/4 " (粒のまま)	放牧権 藁飼料 採草権(採草は自己負担) 冬飼料 Krautland および Kretzbeet 用 益 粗朶 20 Schock たたきでの脱穀
C	牝牛1頭につき 30 Groschen 仔(雌)牛4頭離乳 3年目に領主に引渡す	小作人がすべてのゲジングに賃金を 支払い、賄を給する 薪代償支払い	自由な住居 放牧権 藁飼料 採草権(採草は自己負担) Krautland および Kretzland 用 益(自己負担)

a) 圃場内での茎葉・根菜作物(飼料作物)栽培地

b) 圃場外での根菜栽培地

番を含めて五人程度が考えられるであろう。

しかし一方B例にみられる領主から与えられる

現物給与のライ麦20シェッフェルは一人あ

たりの年間消費量、6.5シェッフェルからみて

三～四人分に相当する。これから判断すれば

小作人夫婦に被雇傭者一～二名という構成が

考えられる。

小作人から領主に支払うべき小作料について

てみると、その額はA、B、Cそれぞれに異

なるが、何れの場合においても金納であり、これ

に加えて雌仔牛四頭の育成を義務づけられて

いる。この育成牛は飼育牛の更新に用いられ

るものと推測される。小作料が金納であるの

は小作人が家畜生産物を販売することを示し

ていると考えられる。ただし雄牛一頭につい

ての小作料が著しく異なる点が注目される。

A例では48 gr., B例では126 gr., C例では30 gr.

と最大四倍以上の開きがみられる。この小作

料が雌牛一頭あたりの粗収益に占める比率を

みるため、一頭あたりの粗収益を Stolpen 分農

場と同じ基準で計算すると次表のようになる。

乳牛1頭あたり粗収益見取り

バター	36罐	②2gr.	72gr.
チーズ	1/2大樽	⑤5fl.	52gr. 6pf.
仔牛販売	(30-4)/30	①1flr.	20gr. 10pf.
		145gr. 4pf.	

これから考えるとしてB例のばあいには乳牛1頭あたり粗収益145 gr. の大半(87%)が小作料としてと納さねてゐることをみてよい。A、C例では粗収益のそれぞれ33%、21%となつてゐる。

つぎにゲジンを賃金をみると、A、C例では小作人が賃金を支払ふこととなつており、小作人が雇傭主であることを示してゐるが、B例のばあいには領主から支払ふことになる。なお、つており、しかも賃金の中に小作人とその妻の賃金も含まれてゐる。このことによつて納すべき小作料の額が粗収益の大半を占めてゐることから考えてB例の小作人は実質的には被雇傭者の性格が強いといえる。ただし現物が穀粒のまゝ支給されてゐるから住込みの被雇傭者ではなく独立の竈を持つてゐたことからの

かる。

貸金額に ついてみる と 先にみた ような Stolpen

分譲場の例では子 - 不主任 8 fl. 家畜飼育女

4 fl. 家畜番 2 fl. と な、ていた。これには賄

費は含まれていない。これを B 例で支給され

る賃金 20 fl. にあてはめてみる と 労働力は小作

人夫婦と飼育女一人(場合によ、てはさらに

家畜番一人)が考えられる。したが、て結局

労働力は三 ~ 四人規模とみてよいであろう。

と、ここで当時主食穀物であったライ麦の生産

者販売価格が / シェツフェルあたり 1 fl. とさ

れてゐるから 20 fl. という貨幣賃金はライ麦

20 シェツフェルに相当する。

現物給付部分をライ麦に換算すれば / シェ

ツフェルあたり小麦は 1 tlr. エンドウは 20 gr.

大麦価格は不明であるがライ麦と同価格とす

れば B 例の小麦、エンドウ、大麦 $\frac{1}{2}$ シェツフ

ェルはそれぞれライ麦 0.6 シェツフェル、0.

7 シェツフェル、0.5 シェツフェルに相当し

したが、て現物給付はライ麦 21.8 シェツフェ

ルで表示される。このことから領土から支払
 される貨幣賃金と現物賃金は全給与の中では
 ほぼ半分ずつを占めているとみてよい。なお、
 この他に Kretzland で栽培されるカブ、キャ
 ベツなどの蔬菜や酪農生産物たるバター、チ
 ーズおよび老廃牛が家内仕向として用いら
 れたと思われる。これらを含めての一年間一人
 あたりの食費については先にあげた十六世紀
 後半のサクセン侯直営地における資料では 12
 fl. 1 gr. ライ麦に換算して約 12 シェツフェル
 に相当した。この資料の中で B 例で示されて
 いる穀物部分に相当するもの（ライ麦、エン
 ドウ、ソバ、キビ）を取出して一人あたり食
 費を計算すると 6 fl. 9 gr. すなわちライ麦 6.4
 シェツフェル分に相当する。B 例では労働力
 三～四人として一人あたり 7.2 ~ 5.45 シェツ
 フェルであるからほぼ等しい基準にあること
 がわかる。したがって B 例のほあいにも食費
 は全体としてサクセン侯直営地経営に示され
 たほあいとほぼ等しく約 12 fl. とみて差支え

ないであらう。

以上からみてB例にみられる貸金水準は、

小作人に与えられる貨幣貸金を10～8 fl. と

考えても、賄支給額を含め單身者貸金の性格

をもつていたと考えられる。他方しかし小作

人には貸金の外に、殆ど吸上げられてしま

うとい雌牛一頭あたりなほ若干の剰余19.3

gr. があり、三十頭経営として年間27 fl. 余

の剰余を生む可能性がある。この点も考えあ

ねるとこの小作人は直営のばあいの被雇傭者

(部門責任者)の地位から小作人へ移行する

段階に位置づけられるであらう。

A. C例についても同様の検討をここにな

し、第七表のよう三十頭経営のばあい、小

作料、貸金、小作人夫婦の食費を差し引いて、

それぞれ85 fl., 110 fl. が剰余として残る。

その他の家計費・経営費をさしひいてもなお

かなりの剰余を生じることは間違いないと思

われる。雇傭労働力を使用し剰余を生む点で

A. Cを富農経営的性格をもつと考えてよい。

第 7 表

	A	C
粗 収 入 1頭あたり	145.3gr.	145.3gr.
小 作 料 1頭あたり	48gr.	30gr.
現	97.3gr.	115.3gr.
30頭分現額計	139fl. 1gr.	164fl. 15gr.
貸金 (制育女 家畜費 2fl.)	6fl.	6fl.
贈	24fl.	24fl.
小作人夫婦食費	24fl.	24fl.
造 額	85fl. 1gr.	110fl. 15gr.

領主よりの給付としての放牧権、採草権、土地用益権、飼料供与については A、B、C の各例とも条件は全く同じである。しかし B 例においては、A、C 例に見られない冬飼料が特に挙げられていること、またフォークト役宅の管理手入れを義務づけられている代償に領主脱穀場の使用を認められている。このことは B 例について先に指摘した被雇傭者的側面をも併せ持つ性格を裏書きしていると考えられる。A 例については目立つのは、他にみられない「自由な」住居、粗朶ニヤショツク の給与がなく、その使用については支払義務が課せられている点であり、自立性の高さを示している。

以上家畜小作には大別して富農的経営と被

雇傭者の性格から小作経営への移行の過渡段

階にあるものととの二種に大別される。

ところでザクセン選定侯の乳牛小作について

では、具体的な事例がわからぬので、*Thum*

rum の類型の中でどれが一般的であつたか不

明である。たゞ一頭あたりの小作料が42~48

gr.¹⁰⁷⁾であつたことだけは明らかなので、これ

から判断する限りA例すなわち富農的性格を

もつたものが一般的であつたと一応考へてお

いておらう。

(4) 牧羊部門

Stolpen 分農場における牧羊部門の経営規模

所要労働力、粗生産中の領主帰属部分、飼料

費は第八表(i-iv)のように見積られる。¹⁰⁸⁾

領主帰属部分と同じ基準で賃金部分を算出す

ると次のようになる。すなわち賃金となるの

は総飼育頭数二千四百頭から領主に帰属すべ

き千六百六十七頭をさしひいたのこり七百三

第8表 Stolpen 分農地牧羊部門見取り

(I) 経営規模 1200匹×2群		(III) 領主船風部分	単価	粗収益
(II) 所要労働力 (1群につき)		羊 毛	領主船風 150シェッフェル (約1542kg)	60gr. 428fl. 12gr.
牧羊者	1	羊 乳	833四分	8pf. 26fl. 9gr. 4pf.
牧夫頭	1	仔羊生産	416四分	12gr. 7pf. 249fl. 7gr. 2pf.
牧夫	3			
計	5人	領主船風分		704fl. 7gr. 6pf.
2組	10人			

(IV) 飼料 (2群計)		消費量 (シェッフェル)	単価	価格
ライ麦	100匹あたり	4シェッフェル	96	24gr. 109fl. 15gr.
燕麥	"	2 "	48	12gr. 27fl. 9gr.
大麦	"	1 "	24	21gr. 24fl.
塩	"	1/4 "	18	~ 20fl. 12gr.
グイーケン	"	1/4 "		4gr. 6fl. 18gr.
葉菜	100匹あたり			5gr. 5fl. 15gr.
乾草	10匹あたり	1フーデル	240フーデル	1fl. 240fl.
				434fl. 6gr.

十三頭分で、その総計は 309 fl. 7gr. 9pf. と
なる。これは粗生産額の 30.6 % を占め、ほぼ
穀作部門の労賃比率に等しい。牧夫頭の賃金
が五頭分で約 21 fl. 牧夫の賃金が一人あた
り五頭分で約 2 fl. 2gr. となる。牧羊者の収
入は歩合制で飼育頭数の 1/5 とされ、一
人あたり牧羊者の収入は約 127 fl. 7gr. となる。
この収入は乳牛飼育のばあいの富農的性格の
小作人に相当する。その収入、労働者雇傭の
点からみて牧羊者も富農と考えてよいであら
う。ただし、Thurbschirn はむしろ賦役を有せ

ざる時は、牧羊者は牧草を自らの費用で乾か
 し、搬入せねばならぬ⁽¹⁰⁹⁾とあり、牧羊者が
 賦役を利用する場合がありえたこと、をうかが
 わせる。また放牧地についても農民経営地の
 休閑地、刈跡地が含まれることがありえたこ
 とは Dorf Langen Renth のばあいから推測さ
 れる。したがって利潤の源泉の一つが領主権
 力の利用にあったことは確かである。
 粗収益から賃金部分と飼料部分をさしひい
 った残額は 270 fl. で粗収益の 38% を占める。
 これはほぼ剰余部分とみて差支えないであ
 る。なお領主にほかに、羊の糞尿が帰属
 する。牧羊部門の直営地経営に占める意義は
 穀物・乳牛部門とは異なり生産物の殆どすべ
 てが売却されて現金収入源になる点と、そに
 羊が重要な肥料源となる点にある。羊糞尿は
 領主に帰属する旨規定されていることから
 明白である。ここでも牧羊小作は直営地経営
 (穀作部門) の一環として組みこまれている
 のである。

第9表 貸金部分見取り

羊 毛	733頭分	66シュタイン	188fl. 12gr.
羊 乳	366頭分		11fl. 13gr.
仔羊生産	183頭分		109fl. 3gr. 9pf.
計			309fl. 7gr. 9pf.

(5) あ わ り に

と述したところを以下で補足しながら次の

ようにとりまとめる。

a) 十六世紀後半におけるガクセン侯直営
 地経営の構造は過渡的性格を有した。そこは
 における労働力は (i) 賦役労働、 (ii) 領主
 の農具で土地を耕すゲジンテ、日雇の労働、
 (iii) 雇傭労働 (支払形態に関係なく農民が
 自分の農具で領主の土地を耕す労働) の三種
 があり、ゲジンテ労働を中心に結ばれてい
 たといえる。したがって賦役経済制度と資本
 主義的経済制度、その中間形態である雇役制
 度という多様な、かつ相対立する制度が結合
 されている。この変化は穀作を中心とする商
 品生産の発展と関連づけられる。穀物商品生

産の発展はガクセンでは、開墾、荳科作物の
 導入を契機とする多圃化による作付面積の拡
 大と、それに対応して夏穀物中心の作付体系
 の変化という形で生産力の発展を生じさせ
 た。その結果必要労働力の増大、適期の迅速
 かつ入念な農作業および除草労働の必要性の
 増大が生じた。この解決は基本的に賦役の
 増大とゲジンデ、日雇の雇傭という二つの相
 対立する方向でなされた。ただ賦役の増大は、
 領邦君主直管地についてみる限りでは、年賦
 役の週賦役への転化ではなく、主として年賦
 役を負担する農民の拡大を通じてなされたよ
 うに思われる。つまり一農民の負担する賦役
 量の増大ではなくて、賦役を負担する農民数
 の増大。後者の方法があらゆる機会をとらえ
 て追及されたのは既に述べた通りである。そ
 して特に役畜賦役を行なう農民の不足が甚だ
 しくみられた。そのため領主は役畜・農具を
 備え、ゲジンデ（とくに入念さを必要とする
 犁耕、播種作業を担当）、日雇（とくに収穫

労働)を雇傭して適期の農作業を行なめざる
 をえなかつた。他方、領主はフーフェ創出に
 よる新村設置、富・中農への土地貸与(小作)
 など、を媒介として役畜賦役の増大をはかつて
 いるが、需要には遙かに及ばなかつたように
 思われる。

このように賦役の増大が東部ドイツにみら
 れるよう^な程度に達しなかつたのは、勿論ラン
 テスハルの自営農民の維持、体系的農民保護
 政策(貴族が農民の經管用地を収用すること
 を厳しく制限した)があつたことは言うまでも
 ない。この政策は既に十六世紀後半からア
 ンゲルトによつて精力的にはじめられ、その
 結果農民地の領主直管地への編入はせいせい
 4~5%にすぎなかつたといわれている。し
 かし第二に農村における工業(麻織物)の発
 展が考えられねばならないであらう。この農
 村工業は十六世紀に最盛期を迎えた都市手工
 業を当時にお压倒しえなかつたが、しかし十
 六世紀にはすでにかなりな発展をとげていた

こゝは松尾氏の研究によつて明らかである。
 その結果は農村に農業だけでは生活しえない
 貧農層、土地持ち賃労働者層の増大である。
 1603年のMeißen地方(ハッヘ村)についてみ
 れば、奉公人を除く二千四百五十四年のうち
 7-7エ農民(1/4 7-7エ以上)は52.5%(
 千二百八十九戸)であり、うち一7-7エ以
 上はなおかに5.5%(百三十四戸)にすぎな
 い。ここに先にあげた有畜賦役農民の決定的
 な不足の理由がみられると考へてよいであら
 う。Gärtner, Häusler, Hausgenossenの貧農が47.
 5%を占めるに至つてゐる⁽¹¹⁾。この外に奉公人
 九百八十二人があつた。農村家内工業のうち
 麻織物についてみれば、一般消費用繊維につ
 いて「共同体内部の需要のデミウルギー的
 充足の段階をこえて発展し、自由な商品生産
 の段階に移行してゐた⁽¹²⁾。このような農村工
 業の発展を基礎にしてはじめて奉公人、日雇
 層のあつたらしい分出とその再生産が可能であ
 つた。このような工業とくは農村手工業の

發展が領主層をして東部ドイツにおけるよう
な形で領主と農民關係の創出を経済的側面
から困難なものにしたと考へられるのである。

他方農民層の分解が進行し、貧農層が多数析
出したが、ザクセン全体としてみれば、領邦

君主の相続分割禁止 *Dismembrationsverbot* — 担

税能力のある農民、すなわち中農の維持政策

— がその基本において貫徹された点から、農民

層分解の限度を示さるゝのと考へられる。この

点とはたとえば半連畜農の増大と役畜賦役を給

付しえない下層農の追放となつてあらわされる。⁽¹³⁾⁽¹⁴⁾

b) 家畜飼育部門はそれが生産する肥料(

家畜糞尿)を媒介として穀作部門と結びつく。

十六世紀後半のザクセン農業では粗生産額の

最も大きい穀作部門 (*Stolpen* 農場では 9245 ^{1/2} *pf.*)

7 ^{1/2} *pf.* ⁽¹⁵⁾) を中心として編成されてゐたと思われ

る。当時のザクセンでは緑肥作物、飼料作物

の圃場での栽培は極めて限られており、しか

も穀作面積は拡大した。そのため地力維持に

必要の肥料の経営内部での自給は極めて困難

であつた。穀作部門の規模はそのためまず家
 畜飼育部門の規模によつて規定された。堆
 肥、家畜糞尿で地力維持が可能な程度の耕地規
 模、採草地の草生、放牧地の事情に応じて牧
 羊、家畜飼育を考へること⁽¹¹⁶⁾、耕作規模が大
 きいばあい、すべての畑に必要な施肥を行な
 つて地力を維持することはできない。結局、
 経費と支出を償ふことができない⁽¹¹⁷⁾。経営規
 模はまたくりかえし指摘した適期の迅速入念
 な農作業遂行の可能性によつて規定された。
 「広大な面積の農耕ではあらゆる作業に多額
 の経費を要し、運搬労働、手労働、種穀を大
 量に必要とするだけではない。支出が大き
 だけでなく、しかも規模が大きいために適期
 に入念な作業を行ない、また賦役者や雇傭者
 をして日々の仕事に精励させることができな
 い。したがつて時機を失し天候がたまに悪
 ければ播種、收穫に損害が生じる。⁽¹¹⁸⁾」したが
 つて経営規模が大きすぎる時は、そこにもう一
 つ分農場をつくるか、永小作あるいは他の保

有形態で小作に貸出すことが考えられた。⁽¹¹⁹⁾

C) 小作経営は直営地経営の穀物部門に労働力(役畜労働および草小作のほあいのよう
な手労働の両種)、家畜糞尿を媒介としてく
みこまれている。このほあい小作人は主とし
て中・富農層が考えられているが、これは小
作料支払能力、したがって小作経営の安定性
とかがわかっていいる。すなわち領邦君主が直営
地経営解体、小作貸出しから直営地経営の再
建強化に転換せざるをえなかつたのは「小作
人が小作料を滞納し、地力を枯渇させ、ある
いは入念に作業せず耕地が荒廢し、そのため
多年にわたって地力を恢復しえないようにし
た」ためであつた。このような小作料の滞納
を防ぐため代人(Vorstanden)制がとられ保証
金がつみたてられたが、代人も保証した小作
人の小作料滞納によって損失をうけ、破産し
たことも稀ではなかつたといわれている。⁽¹²⁰⁾

の事實はすでにこの頃当時「サクセン農業」に
おける生産力発展の仕方(肥料不足のちとて

の作付面積の拡大、多圃化、それに対応する
労働集約度の増大、それにともなわらず労働
力確保の困難・労賃の高騰）、その不安定性
と結びついている。

d) 直営地経営の穀作部門、乳牛部門、牧
羊部門ではそれぞれ労賃に相当する部分は各
部門粗生産のそれぞれ33%、11%、30%を占
めていた。穀作部門においては賦役から賃労
働への完全な切りかえは農業生産力の発展に
しには極めて困難であつたことが、この比率
から推測される。

e) 乳牛部門の小作人には領主の被雇傭者
的性格の強い小作経営から経営の自立度の高
い富農的小作経営まで三つの類型がみられた。
これは領主が土地用益以外に負担する経営
資本が大きいほど小作人の地位は
被雇傭者の地位に近づく。領主の負担する部
分が少なければ少ないほど小作人の自立度は
高くなる。その場合の決定的な点は労賃部分を
領主（地主）が支払うか、小作人が支払う

か に あ、 た と い え る。 そ し て 支 払 わ れ る 小 作
 料 も 領 主 の 負 担 す る 経 営 「 資 本 」 の 大 小 に よ
 っ て 異 な、 て い た。 し た が、 て 領 主 の 収 取 す
 る 小 作 料 は、 そ の 領 主 の 負 担 す る 経 営 「 資 本 」
 に 対 す る 利 子 部 分 を 含 む も の と な、 て い る と
 え れ な く て は な ら な い。 す な わ ち 直 接 生 産 者
 と 分 益 小 作 人 の 剩 余 を 規 定 す る も の は 地 代
 お よ び 利 子 部 分 と な、 て い る と い っ て よ い。
 こ の 点 か ら 乳 牛 部 門 の 小 作 人 も 分 益 小 作 人 的
 性 格 を も つ と い っ て よ い。 牧 羊 経 営 小 作 人 の
 場 合 は 明 ら か に 分 益 小 作 人 で あ る。 こ れ ら 分
 益 小 作 人 の 利 潤 源 泉 の 一 つ は 領 主 権 力 の 利 用
 (領 主 放 牧 権、 賦 役、 賃 金 規 制) で あ り、
 ガ ク セ ン に お け る 富 貴 の 存 在 形 態 の 特 徴 を な
 し て い る。 た た し 領 主 特 権 か、 利 潤 の 源 泉 で
 あ る 程 度 は 東 ト イ ツ ほ と 大 き く は な か、 た と
 思 わ れ る。 そ れ は 賦 役 に 対 す る 賃 金 支 払 を お
 こ な う 点。 お よ び 奉 公 人 規 制 か 十 六 世 紀 中 ば
 に 変 動 し、 優 先 雇 傭 権 の 形 を と る。 最 高 賃
 金 の 決 定 に と っ て ま り、 し か も 最 高 賃 金 か た へ

ず堀り崩さぬで高騰したという事実を示さぬ
てゐる¹³¹⁾。

注 53) 三好正喜、「農書を通じてみた十六
世紀ドイツの農業」(『近代農学論集』所
収)。

54) 三好正喜「十六世紀ザクセンの農
業技術構造」、農林業問題研究、第6巻第
2号。

55) 私の知る限りでは近藤牧郎『ドイ
ツ近代成立史』が唯一のものである。134頁

56) このような直管地解体の理由とし
ては、所領管理責任者である收税官 Schösser
の無知と怠慢に帰せられてゐる。「従来悪
質にして腐敗した御料地アムトの長—收
税官に任ぜられた—の爲に、十人、いま
二十人、三十人の中に、無知、不誠実、
怠慢の故に、任命されるアムト内の分農
場と管理し、経営収支の明細を示しうる
者が殆んど見られぬ。その爲分農場と

牧羊部門も食の世襲借地とすることがある

いは小作とすることが良いと長年考えられ

てきた。J. Falke, Geschichte des Kurfürst August von
Sachsen, S. 78.

57) Ibid., S. 78.

58) Ibid., S. 86.

59) 「怠慢で不注意な所領役人と小作
人のため、小作料が滞納され、耕地の地
力が失われ、あるいは農作業が不良であ
り、耕地が悪化し、その後多年に亘って
地力が恢復しえないだけで済む。これ
らの事と共に、保証人もまた困難な事態
に陥り、生業に損失を蒙り、極端な場合
には破滅し、訴えられている。」

v. Thunshirn, Oeconomia (in: Zwei frühe deutsche Landwirt-
schaftsschriften, hg. von G. Schröder-Lembke, S. 67. 二二に

は領邦君主の小作人を把握する権力の強
弱の問題と、当時の農業生産力の不安定
性の二つが述べられているように考えら
れる。

60) Falke, a. a. O. S., 85 ff.

61) Zwei frühe deutsche Landwirtschaftsschriften, hg. von
Schröder-Lembke, S. 7.

62) Falke, a. a. O. S. 78.

63) Harm Wismann, Bericht über die Visitation der
Kurfürstlichen Vorwerke im Jahre 1591 von Abraham von
Thumshirn, S. 15.

64) Ibid., S. 19.

65) Ibid., S. 25.

66) Ibid., S. 37.

67) Ibid., S. 39 ff.

68) Ibid., S. 42.

69) Ibid., S. 46 ff.

70) Ibid., S. 50.

71) Ibid., S. 52.

72) Ibid., S. 55 ff.

73) Ibid., S. 57.

74) Ibid., S. 60.

75) Ibid., S. 62.

76) Ibid., S. 70 ff. S. 73.

77) Ibid., S. 74.

78) Ibid., S. 78ff.

79) Ibid., S. 81.

80) Falke, a. a. O. S. 59, 861, 8335.

81) Ibid., S. 335. Ann. 6.

82) Ibid., S. 336. 農民が一度貨幣化した
賦役を再度逆転して賦役を受け入れると
いう選択を行なっていること、Dorf Langen
Reuthで、領主の農民経営地に対する牧羊
権を拒否する代償に賦役を行ない、貨幣
を支払うという道を選択したことは、
農民経営の当時に及ぶ商品生産の
限界を示すものであろう。しかし、全体
としての農村工業の発展とこれに伴う
農民層分化の進行が、年賦役から週賦役
へと転化させるような形態での農民の肩
負を困難にしたという点が重要である。

83) 藤瀬浩司『近代ドイツ農業の形成』

100頁。

84) 松尾展成『封建的危機の経済的基

礎」(『西洋経済史講座』Ⅲ, 75頁。) Falke,
a. a. O. S., 94.

85) Thunbshim, Oeconomia, S. 84.

86) Haushaltung in Vorwerken, hg. von H. Ermisch und
R. Wuttke, S. 50.

87) 藤瀬氏は農民の領主に對する債務
と、再版農奴制、すなわち隷役小作制生
成の重要な原因として把握されている。

氏の場合、負債が直ちに負債農民の賦役
を結果するのではなく、負債農民の逃亡・
農民保有地の放棄→農民の下級所有権の
領主の所有権への癒着・吸集、農民への
「前貸用具」貸与→隷役小作制の成立と
いう過程をとったとされている。しかし

藤瀬氏のように、負債が農民の土地保有
権を弱体化させ、これに「前貸用具」貸与
が結びついて、賦役を制度化するという
過程だけでなく、負債が直ちに債務奴隷
的勞働を生じさせるという道筋も考えら
れるのではないか。あるいは債務奴隷化

の過程が執筆小作化の過程に先行したと

云えるのではないだろうか。

88) Falke, a. a. O. S., 88.

89) Ibid., S. 100 ff.

90) E. Klein, Die historische Pflug, S. 171.

91) Falke, a. a. O. S., 100.

92) Haushaltung in Vorwerke, S. 50.

93) Falke, a. a. O. S., 61.

94) Ibid., S. 62.

95) Haushaltung in Vorwerke, S. 41.

96) Thunbshirn, Oeconomia, S. 97.

97) Falke, a. a. O. S., 92.

98) Thunbshirn, Oeconomia, S. 71.

99) Ibid., S. 70.

100) 注8) E 参照されたい。

101) Falke, a. a. O. S. 59 ff. E だれ計算の誤り

は訂正した。

102) Ibid., S. 59. Haushaltung in Vorwerke, S. 71.

103)

104) Haushaltung in Vorwerke, S. 20.

105) Ibid., S. 19 ff.

106) Thunishirn, Oeconomia, S. 68.

107) Falke, a. a. O. S., 164.

108) Ibid., S. 60. Haushaltung in Vorwerke, a. a. O. S., 170.

109) Thunishirn, Oeconomia, S. 69.

110) Lütge, Geschichte der deutschen Agrarverfassung, S. 154.

111) 松尾展成、前掲論文、55～56頁。

112) 同上、61頁。

113) 進藤牧郎『ドイツ近代成立史』144頁。

114) ガクセンでも十五世紀、とくにそ

の後半から小領主たる騎士層において、

騎士農場の新設が顕著にみられた。これ

より先、中世後期に仕地の小領主の手許

で、共同体的性格をもつ村落裁判权、村

落領主およびそれよりも大なる荘園領主

のもつ裁判权。ラニデスヘル裁判权から

Patrimonialgerichtsbarkeit が形成された。この裁

判权は住民の身分に關係をく、領主が一

定地域に住民に対して行使する公法上の

裁判权 (totalen Herrschaft über Land und Leute) であ

って、並行または従属するすべての公权

力を排除するものであった。この裁判权

は十六世紀以後警察权とも含むものへ発

展いさばう、領邦君主の行政機構に編入

されて行った。騎エはこのようを裁判权

行政权力を用いて直営地経営の拡大、同

いく賦役の強化とほか、これに対

しては、一概、賦役拒否をどの抵抗形態

もやられるが、主として領邦君主裁判所

への上訴 (Appellationsgericht) を通じて、領邦

君主の干渉により阻止されたといわれる。

以上にういては、K. Blaschke, Grundzüge einer

sächsischen Agrarverfassungsgeschichte (in: Zeitschrift für

Savigny-Stiftung für Rechtsgeschichte, Bd. 82, 1965.

Germanische Abteilung, S. 39, S. 238, S. 265) とやられ

ている。

115) Falke, a. a. O. S., 60. により計算した。

116) Thunbshum, Oeconomia, S. 96.

117) 118) 119) Ibid., S. 97.

120) Ibid., S. 67.

121) 松尾展成、前掲論文、73頁以下。

第四章

十六世紀後半のブランデンブルグ地
方における農業生産力と農業経営の
諸類型

第一節　　グラニンバルグ地方の農業生産力

(1) 経営規模および耕地の存在形態

コーラーは経営規模にかんして「経営主 (Hauswirth) あるいは領主は余りに過大な耕地を耕作してはならない。何故なら、小面積の土地と持ち、この土地をよく手入れし、適期に作業して栽培する方が、広大な面積の土地を耕作して充分手入れできないよりも、遙かに良いからである。」と述べて、労力の集約化、適期作業を行なうる範囲に経営規模を限定すべきことを強調する。

耕地の存在形態については、作業能率の点から分散混在地帯では全く団地化された耕地が認められている。一つ一つの農場では耕地は隣接してゐるが非常によい。何故なら続いてゐる土地では四十畝 (Bethel) 犁耕できるが、互に離れてゐると二十五畝しか犁耕できないからである。²⁾ それでは耕地の集約化の方法としてどのような方法がとられたのであろう

か。マルク・ブランデンブルクにあっては、十六世紀の領主直営地の拡大は一般に荒蕪地（黒死病・戦乱・都市への逃亡流出）で行なわれた。この拡大は分散耕地の形態でではなく集団耕地の形態で行なわれた。これには二つの方法がとられた。一つは既存村落にあってすでに存在していた領主直営地と隣接する無主の荒蕪農地の押収である。この方法で領主は農民耕地との混在状態からも同時に抜け出すことが出来た。もう一つは新しい農場を荒蕪地に設置するという方法であった。この後者が当時主として用いられた方法であったといわれている。この何れの方法によっても領主は農民耕地との混在状態から脱し、あるいは初めから混在状態を回避することができたのである。

(2) 作付順序

「農業者は耕地区分に充分注意しなければならない。同様に一つ一つの耕地の性質 (land-nath) も充分知らなければならない。何故なら

農業者は一片一片の耕地に冬あき、又は夏何と
 播くべきもののことをし、かりとわきまえておか
 ねばならぬからである。ベルリン地方では
 フーフエ (Hufen) と三つに分ける。第一の部分
 は休閑する。第二の部分には夏に大麦と播く。
 第三の部分にはライ麦または小麦と播く。な
 ぜなら住民 (Völke) はこの地方では大抵ライ麦
 と大麦とを好んで播き、燕麦、グレイセンと
 播くのを好まないからである。と、この方は、
 それ等は土地を疲れさせ、その後ですぐに用
 び施肥せざるを得なくするからである。・
 ・ライ麦、大麦とグレイセン、燕麦、その他
 の作物よりも多く作る。従って、ある人々は
 自分の耕地を三つに区切る。ある人々は四つ
 に区切る。ある人々は土地の性質と肥沃度 (*Landerth und gutgelegenheit*) に応じて、以下の表に
 見られるように五つに区切る。
 (15) 93 年に冬にライ麦と播いた土地に、
 次の冬は休ませて、冬前に肥料を運んで冬を
 越させて、春に大麦を播く。

大麦を栽培したところは休閑し休ませる。

耕地を休閑したところには、再び冬にライ麦を播く。村々(Dörfern)では小麦のために違

た区切り(eine andere Austheilung)をする。若干の村

々では、とくに良い耕地を持つハーフェ地方

(Hafeland)では小麦を播く。亜麻、麻、カブ等

を播くために(違った区分の仕方をする。...

・筆者)

他の地方で行なわれてゐる耕地区分・作は

順序は以下の通りである。

三圃：休閑—ディンケル小麦—グアイ—ケン

(間作)・燕麦

四圃：休閑—ディンケル小麦・ライ麦—グ

アイ—ケン(間作)・燕麦—燕麦

五圃：休閑—ディンケル小麦—グアイ—ケン

—ライ麦—燕麦

六圃：休閑—大麦—小麦—エンドウ・グアイ

—ケン—ライ麦—燕麦

七圃：休閑—大麦・小麦—ディンケル小麦

—エンドウ・グアイ—ケン—ラ倭—ラ

イ麦—燕麦

八圃：休閑—大麦—小麦—デュ—ンケル小麦

—エンドウ・グイ—ケン—ライ麦—

ライ麦—燕麦

休閑—大麦—小麦—エンドウ・グイ

—ケン—小麦—グイ—ケン—デュ—ン

ケル小麦—ライ麦

4)

以上のユ—ラの記述から以下の諸氏が明ら

かになる。

a) ブランデングブルグ地方においても、他

の地域—ニ—ダーライン、ザクセン—と同じ

様に輪作圃数は固定的ではない。土地の性質

と肥沃度』に応じて異っている。ベルリン地

方と他の地方とが異っていると共に、同一地

地（たとえばベルリン周辺）でも人により異

なると言われている。従って、アーベルが考之

たように東部ドイツは三圃式だけが行なわれ

たのではない。このことはまたコーラーが「

シュレジエン、クーール・ブランデングブルクは

地力のあまり無い土地であり、四、五、六年

毎に一回休めなければならぬ。その後で施

肥する」と述べてゐることからも明らかであ

る。

b) ベルリン地方では三圃輪作で、休閑一

大麦—ライ麦が代表的作付順序とされてゐる。

しかしまた、休閑—ライ麦—大麦(施肥)も

行なわれたようである。何れの場合も施肥作

物は夏作物たる大麦であるが、これは十六世

紀に大麦がビール醸造原料として商品価値を

増大したことの反映とみてよいであらう。こ

の地帯ではヴィーケンが多肥、多労の地力消

耗作物として扱えられ、燕麦と共に栽培の好

まれな乃至栽培面積の少ない作物となつて

ゐるのが注目される。何故なら後にみるよう

に、ヴィーケンは收穫後直ちに刈り残し部分

や根をすき返せば地力を増進すると理解され

てゐるからである。なおベルリン地帯でも、

小麦、豆麻、麻、カブの栽培のために、三圃

とは異つた圃場区分がなされる場合があつた

ことが推測される。あるいはこれ等の麻、豆麻、

カブが圃地ではなく耕地で栽培されるために
 は、圃場区分は三区分であるにしても、耕作
 運営の単位が圃地ではなく、土壌別めるいは耕
 区(Gewann)になつてゐたのではないかと考えら
 れる。この英は耕地で、亚麻—小麦⁴⁾、カブ—
 亚麻⁵⁾、カブ—大麦、カブ—エンドウ⁶⁾、麻—五
 麻などの作付けが行なわれてゐたことから表
 書きされるように思われる。以上の様を推測
 を裏づけ、また当地域における三圃式農業の
 具体的姿を知るために、クレンツリン Krenzlin
 の研究をみることにした。女史の研究は、
 ブラウンデンブルクの主たる作付け順序形式であ
 る三圃式農業の具体像を生き生きと描き出し
 てくれる⁷⁾。

'ブラウンデンブルクの三圃式は、嚴格な耕地
 強制を伴う集約的三圃式農業が一般的を形
 態ではなく、より粗放的な形態が多かつたと
 えられてゐる。すなわち村落に近い内圃と、
 その外側の外圃の、二つの集約度が異つた土
 地ガルーアの組合せと、この形で三圃式農業が

営まれていた。三圃に区分された耕地のうち、
 村落に最も近い部分が施肥され、この部分で
 は三圃式農業における規則的輪作が行なわれ
 た。施肥はまず夏圃で大麦の播種前に行なわ
 れた。冬圃への施肥は厩肥が充分ある場合だ
 けに限られた。その外側の部分は肥料不足の
 ため施肥されなかった。この外圃の部分のう
 ち夏圃には燕麦が播かれるか (Hafenland)、ある
 いは三年に一回ライ麦を播種する土地 (drei-
 jähriges Roggenland) —— ライ麦 — 休閑 — 休閑 —— と
 して休閑したままであった。地味が更に劣悪
 なところでは六年をいし九年に一回だけライ
 麦が作付けられた。以上のような外圃では三
 圃式農業の輪換に組み込まれて、最も粗放的
 な穀草式農業が主として行なわれたことにあ
 る。圃場の地味が悪ければ、それだけ収量は
 低く、少頭数の家畜しか飼育できず、得られ
 る厩肥の量も僅かになった。ところが地味が
 悪い土地ほど肥料を多量に必要とする。した
 がって地味が悪ければ悪いほど内圃 (三圃式)

農業が本来行なわれる場)の面積が減少することになる。したがって内圃と外圃との比率が問題であって、内圃の比率が大きければ大い、ほど三圃式農業に、反対に外圃の面積が大きければ大い、ほど粗放穀草式農業に近づくことになる。

三圃式農業の行なわれる圃場を地味に従って分類すると次のようになる。

Wördenland

毎年施肥。毎年播種。

Gerstland

三年間毎年施肥。二年間作付。

Haferland

無施肥。三年間のうち二年間作付。

3-jährige Roggenland

無施肥。三年毎に1回作付(毎年三分の一の面積に播種)。

6-jährige Roggenland

無施肥。六年毎に作付(毎年六分の一の面積に播種)。

9-jährige Roggenland

無施肥。九年毎に作付(毎年九分の一の面積に播種)。

したがって冬作物の栽培面積は以下のようになる。

冬作地

夏作地

ライ麦 Wördenland の $\frac{1}{2}$ 大麦 Wördenland の $\frac{1}{2}$ Gerstland の $\frac{1}{3}$ Gerstland の $\frac{1}{3}$ Haferland の $\frac{1}{3}$ 3 jähr. Roggenland の $\frac{1}{3}$ 燕麦 Haferland の $\frac{1}{3}$ 6 jähr. Roggenland の $\frac{1}{6}$ 9 jähr. Roggenland の $\frac{1}{9}$

休耕地

冬作地と夏作地との比

Gerstland の $\frac{1}{3}$

率が集約度を反映する。

Haferland の $\frac{1}{3}$

村落の全耕地で厳密な三

3 jähr. Roggenland の $\frac{2}{3}$

圃式経営が行なわれると

6 jähr. Roggenland の $\frac{5}{6}$

すれば、この比率は1:

9 jähr. Roggenland の $\frac{8}{9}$

1である。この比率が夏

穀物の比の小さい方向に

動けば、内圃の面積はそれだけ小さくなる。

ラント シュテンベルクのラウデン (Rauden

auf dem Warthe-talsanden des Landes Stenberg) では一七七八

年に一経営あたり、ライ麦、大麦、燕麦の播

種量バ、それぞれ、ハシエツフェル、二分の

一シェツフェル、ニ分の一シェツフェルとな
 っており、冬穀物と夏穀物の比率は8:1と
 なる。したがって粗放的に利用される外園が
 圧倒的な比重を占めることとなつて、三圃式
 農業について述べられたいほどになる。し
 かしラウデンには実際に三圃区分が見られる。
 しかも耕地強制については、ごく稀にしか述
 べられていない。耕地強制は殆どの場合無
 かつたように思われる。耕地強制を必要とす
 るのは、非常に離れた道路網しかない大耕区
 編成の園場の場合であらうが、具体的に史料
 で見る限りでは、ブランデンブルクに至ると
 こうで耕地強制が厳格に行なわれたのではな
 いようである。ラフカー・マルク (Tuckermark) の
 氷堆石土壌に位置するシュモレン (Schmollen) で
 は、各人バ夏、各人の土地を犁耕し、播種し、ハ
 ローし、収穫し、運び入れる。ただし大麦は
 けが例外で、一緒に播種し、同時に刈取り、
 同時に運び込んでゐる。これは耕地強制が外
 園に限られており、外園では自由に耕作され

ていたことを意味する。三圃式農業は氷堆石
土壌の耕地でのみ普及していた。

c) ベルリン以外の地方における作物順序
第一に三圃および四圃の区分では、グー
ーゲンが冬の周年作物として穀物の間に挿入され
ていることが注目される。耕地への飼料作物、
地力増強作物であるグー、ーゲンの導入は、耕
地自体での地力再生産機能を増大させると共
に、土地に対する現実的支配をもたらすグーエ
ーレを強化する方向に作用することは第一章
でも述べた通りである。重要なことは、この
ような機能をもちグー、ーゲン・エンドウの耕
地への導入が階級性を持つたことが重要である。
これらの作物の耕地での栽培が面積を必要と
し、多量、費用のかかることから、農民の場合
には一般に一シエツフェル程度に限られた
のに対して、貴族層ではかなり大量に栽培さ
れる場合があったことである。¹⁰⁾ エンドウ、グ
ー、ーゲンは耕地区分が更に増大して五圃以上
になると、周年という位置から一圃を占める

作物にかわってくる。この場合これら二作物が
 穀物と穀物との間に挿入されている事が重要
 である。すなわち輪作での位置がほぼ真中で
 あって、ザクセンの場合特徴的であった最末
 端ではない。しかも穀物を大体二〜三年連作
 した後、ほぼ規則的に挿入されている。こ
 のような二作物の輪作内での位置づけは、こ
 れらの二作物が地力増強作物として考えられ
 ていたこと、また事実そのように機能してい
 たことを推測させるのである。この点とコー
 ラーによって確かめてみよう。ユーラーは「休
 耕地にはまずライ麦を播く。次年度には施肥
 して大麦を播く。三年目にはライ麦と、ライ
 麦の後には燕麦がよく出来る。しかし好んで
 休耕地に休ませる。施肥しても我々の処では三
 作以上は出来ない。四作した¹⁾と思っても休
 ませて再び施肥しなければなら¹⁾ない。」として
 いる。従って穀物を連作する時は三〜四圃輪
 作が限度としてゐる。それ故五圃以上の輪作
 の場合にエンドウ、グーテンが連作した穀

物の次にほゝるのほゝ、明らかに地力増強作物
 として位置づけられてゐると考えてよいであ
 ろう。この場合には、かくともエンドウは総
 実作と云うよりも、寧ろ緑肥的性格を有した
 のではなゝかと考えられる。すなわち「エン
 ドウの茎 (Erbenstroh) で土地を肥やした者は、
 上弦の月の時にエンドウを播く。すると何時
 も花が咲き、少ししか莢が生じない。そして
 之をすき込んだら、その後で耕地にライ
 麦¹²⁾めゝ、ほゞインケル小麦が良く出来る。」こ
 こではエンドウの栽培にあつて肥料として
 用ゐようとする時には莢を生じないように、
 つまり結実しないようにしてゐることが明瞭
 に述べられてゐる。六圃以上の輪作でエンド
 ウ・グィーケンの後作としてライ麦をいし小
 麦が作はされてゐるのは、正にユーラーの云
 うエンドウ・グィーケンの緑肥機能、および
 根のすき込みによる土壤構造の改善 (小団粒
 化)¹³⁾を狙つてゐると考えてよいであらう。そ
 してこのようなエンドウ・グィーケンの使用

方法が主として領主経営地で行なわれたことも先にふれた通りである。これら二作物の緑肥としての使用は確かに経済的余裕をもち、緑肥として栽培しても他作物、とくに穀物の栽培面積が充分ある面積規模階層においてのみ可能であったのであろう。またベルリン地方にみられるように、転作させれば却って地力消耗作物と化したのであった。

第二に注意しなければならないのは、先にも挙げた亚麻—小麦（大麦）、カブ—エンドウ、エンドウ—ヴィーケン、カブ—亚麻、燕麥—ソバ、亚麻—キビなどの作付の評価に關してである。亚麻—小麦で亚麻の後作に小麦が考えられているのは、亚麻栽培のための施肥、追肥の小麦への残効々果、亚麻播種準備のための鋤（spade）による深耕、除草効果の小麦への利用を目ざしたものと考えてよいだろう。すなわち「鋤耕すれば、肥料が充分土地のなかにはいり、雑草が生えないようになる。日雇二人で一日当り二分の一シエフスェル播

まの土地を耕す。」次にカブが耕地に作付けさ
 れているが、エンドウ・グ、一ヶ一が穀物の
 圃に位置づけられていたのに、カブは穀物と
 組合せられてはいない。耕地への冬飼料の作
 付という意味では重要であるが、作付順序方
 式という観点から見ると、圃地における組合
 せを單に耕地に延長したものでしかない。こ
 れはここにあがられている莖類についても云
 える。栽培技術の点からみても手耨耕であり
 栽培面積の点からみても、云うべき程の意味
 をもっていないと云える。したがってここに
 あがった作物の組合せは本格的に作付順序とし
 て取りあげられない性質のものであると云え
 よう。ただこのような作付を行なおうとすれ
 ば、この面からも一律の耕地強制は実施しえ
 ないかと考えられる点は指摘しておかねば
 ならない。

以上作付順序としては、ブランデンブルグ
 地方、その中でもとくにベルリン周辺では三

圃式農業が主として行なわれていた。ここ
 は栽培作物は穀物に限定され、飼料作物は全
 くと云って良し程含まれていない。耕地は地
 味に応じて区分された。大きくは集約的に耕
 作される内圃と粗放的に耕作される外圃とに
 分けられ、外圃の比率が増大すると粗放穀草
 式に、その反対に内圃の比率が増大すると三
 圃式に近づいた。耕地強制も村落耕地の全体
 に及ぶとは稀であつて、内圃に限定される
 場合が多かつた。ブランデンブルグではこの
 三圃式の外に、四圃から八圃に至る多圃式農
 業が行なわれていた。この場合に重要なのは
 エンドウ、グー、ケンが飼料作物、緑肥作物
 として、つまり地力増強的機能をもつて導入
 された事である。三・四圃区分では間作物と
 してであつたが、五圃以上の多圃式では一圃
 を占める作物として登場する。またエンドウ
 ・グー・ケンが階級的に異つた採り入れ方を
 されてゐる事が注目される。すなわち貴族の
 領主経営においては多量に栽培される傾向が

あつた。これに対して、農民経営での栽培面積は
 一般に小さかつた。それは経営面積が小さい
 ためと、緑肥として栽培する経済的余裕が無
 かつた爲である。カブ、エタ作物の耕地への
 導入が見られるが、これは園地における作付
 を單に延長したに止っている。すなわち輪作
 の骨格は穀物と苜蓿との交替で形成されてお
 り、カブやエタ作物はこの骨組みを基本的に
 変えるものではなかつたと云つてよい。ブラ
 ンデンブルグにおける生産力は穀草式から三
 圃式への移行、三圃式への苜蓿の導入による
 多圃化によって増大したと見てよい。
 耕地強制の点からみると、穀物と苜蓿との
 交替という作付順序は必ずしも耕地強制を緩
 和するものではなかつたと考えられる。たし
 かに耕地への苜蓿の導入は、ブランデンブル
 グの場合、飼料作物、緑肥作物として耕地の
 地力維持を耕地内部で行なうことを或る程度
 可能にし、その限りで永久採草放牧地と耕地
 との結びつきを緩和したといえる。また苜蓿

が田作物として栽培される時は、その栽培地で従来行われてきた家畜の共同放牧を不可能とする。しかし、莖類が圃に栽培されるに至れば、耕地強制とは矛盾せず、耕地強制に従って圃が運営されることになるからである。

ブランデンブルク全体として見た場合、主たる作物の順序は三圃輪作であり、グーテン・エンドウの耕地への導入が全体として位々ニと、領主経営で導入度が高く、農民経営では位々だったこと、領主耕地だけが一元化される傾向があった事などを考えあわせると、農民層については耕地規制は依然変ることなく維持されたことよいためであろう。

(3) 生産手段

a) 農具 ここでは基幹的労働手段である犁および馬鋤について述べるに止めた。

(i) 犁 犁には普通犁と特殊犁 (Ruhrlaken od. Radlitz) とがある。⁽¹⁴⁾

普通犁は重粘土壌で用いる鉄犁と、砂質土壌で用いる木犁との二つがある。鉄犁といっ

ても勿論全体が鉄で作られてゐるわけではな
 い。鉄の部分は、(1)犁先を取付ける台となる部
 分 (groß Eisen)、(2)犁床の底部にとりつける細い鉄
 棒—犁床の摩損を防ぎ、かつ摩擦をすくなく
 する爲である—、(3)犁床の横側に取付ける細
 い鉄棒 (seiten schien)—犁先で掘起した土塊をす
 き溝からとり出す機能と強める爲のものである
 —、(4)犁先、(5)犁刃、(6)犁の撥土板と取付ける棒
 (Streichschien)、(7)長柄につける鎖の七部分である。
 犁の主要な構成部分としては、犁先、犁刃、
 手柄、長柄、犁床と長柄とを固定する支柱 (
 Griepssäule) から成りたつてゐる。これらの外
 に車輪があり、耕深は車輪の位置を前後する
 ことで調整される。木犁には上述の鉄製部分
 が全く無い。

特殊犁は重粘土壌を普通犁で一回犁耕した
 後、畝に直角に犁返し碎土するたもの、
 犁床の両側に後外向きに木鉄の棒 (Ohren) と具
 え碎土に役立ててゐる。雑草が繁茂して犁先
 だけでは作業が困難な時は犁刃をはける。

普通犁と特殊犁の分化が見られる。英はガク
 セン、シムレジエンと同様である。この二つ
 の科も、E. クライン (Klein) に従って分類す
 ると、普通犁は畝立犁 (Beetpflug : 撥土板——平
 面であるが湾曲してゐる) によって作用に多
 少の差があるが——で土塊を反転し、犁床の上
 にすまもられてくる土層を上へすま返し畝を
 つくる犁) に、特殊犁は土地を草にひき裂き、
 碎土して膨軟にするだけの Hakenpflug に属する
 といわれる。重要な事は、普通犁の主要部分が
 鉄製、すなわち鉄製でないまでも鉄で補強され
 、その限りでは堅牢性、犁溝に土塊が残らな
 いように土をすくい取る機能などが改良され
 て来ている点である。しかし撥土板は木製で、
 木製で湾曲した撥土板が見られるのは現在知
 られている限りでは漸く十八世紀であるから、
 おそらく平面板状のものであつたと推定され
 る。この場合、犁先ですまもられた土塊は反
 転は不充分であるから、撥土板の機能は導き
 碎土とすま溝に土塊が残らないようにする積

能とが主であつたと思われろ。

作付順序と関連して注意すべきは、この犁が商業用原料作物や根菜類を栽培するに不十分を深さしか耕耘出来ないと考えられる点である。すなわち亜麻、カブが耕地に作付けられる場合には既に指摘したように鋤耕を行ない肥料を地中深くすき込み雑草が生えないようにする必要がある。これは犁をもってはここに示されたようを深さにまで耕耘するのが極めて困難であつた事を示しているように考えられる。この耕深について深根性雑草の除草についても云われている⁽¹⁶⁾。「耕地が悪い、すなわち不潔つまり芝草(Quacken)が繁茂するかある」は深根性雑草(Distle)が生繁つた時にはよく作業せねばならない。つまり二回、三回、最高四回犁耕する。精農は除草と鋤で掘返して行かうのが普通である。除草が主として犁耕(休閑耕)で行なわれた事は、この引用から明らかであるが、ここで注目すべきは除草を完全に行なうためには鋤が用いられている

る。奥であり、このことは犁の耕深が不足する
ことと暗示していると考えられるのである。(17)

以上見たように、グランデンブルグの普通
鉄犁は改良されたもの、なお耕深の奥で欠点
が見られた様に思われる。

(18) 馬銬 四〜五又とを、てあり、鉄製
歯にを、ていた。

b) 役畜 「農耕を営まんとする者は、先
に述べた様に、良質の放牧地および耕地を耕
す良質の家畜を持たねばならない。従って経
営者 (Wirth) はどの種類の家畜が耕作に役立
つかを充分考へねばならない。ある人々は大き
な馬を飼う。馬は常に舎飼し、かつ給餌せね
ばならない。馬は畑仕事がない時には駄載の
荷仕事をしなると、経営主が耕地で収穫し
てものの全てを喰ひ盡してしまふ。しかし場所
によっては、山地や重粘土壌のために、大きな
馬を飼わねばならない。

農民は小体躯の農耕馬または去勢馬を持
つ。夏期はこれらを放牧地に行かせて放牧する。冬

期には質の良くない藁、干草と与え、時に小
 量のひまわりまたは藁と混ぜる。あるいは並
 麻の搾り粕に刻み藁をまじて与えればよい。
 農民はまた野生馬を持つ。これと何時も古馬
 と若駒とも一緒に育てるようにすれば買う必
 要がない。野生馬を何時も繋いでお置かない
 ようにする。孕んだ時はずっとそうである。
 一番良いのには耕作用に雄牛を持つことであ
 る。なぜなら、薪、肥料の運搬とか、穀物の
 搬入にはある程度時間がかかるが、農耕には
 その糞尿が非常に有効であり、年間を通じて
 飼育が容易だからである。
 四フーフエには雄牛八頭、雌牛六頭を持て
 ば耕地を充分に施肥して耕すことが出来る。
 牛に馬のように鞍、^{つわ}革勒などを買わずにすむ
 し、踵鉄も打たないでよい。牛が年をとった
 り、力けなくなれば食べられる。⁽¹⁸⁾
 さらに牛にうってほかの箇所でも次のように
 述べられている。農耕や、厩肥、薪の運搬な
 どの作業には馬を使って行なうのが何時で

も一番良。何故なら馬だと仕事、が迅くでき
 るからである。しかし馬はよく云われるよう
 に口が大まぐ、燕麦を飼料にし、従って
 費用がかかり、しかも飼育には手間がいる。
 購入するにも費用がかかり、償う悪い不注意
 で急情を奉公人の爲にすぐ悪くなり易い。こ
 れに反して雄牛は飼育し易く、年をとっても
 肥育してから屠殺して食用に供することので
 きる。従って経営主は農耕やその土地の事情
 に応じて一組の雄牛の外に二〜三頭の馬も飼
 う。

去勢雄牛は馬に次いで有用な動物である。
 農民にとって馬よりもはるかに役に立つ。な
 ぜなら、雄牛は強壯で農耕に非常に役立ち、
 支出は少なくてすみ、飼育に金もかからない
 からである。激しく幼いて最後には屠殺され
 て食べられる。皮と子え体や足を蔽、てくれ
 る。その糞尿は耕田や葡萄園を肥やす。これ
 等は全部馬ではやれない。馬は牛よりもよく
 働き、毎日長い道程と旅するが、しかし

稼いだものをすっかり喰い盡してしまふ。干
草と藁で済ませられるのは、貧乏の悪い中、小の
農耕馬だけであり、これとても重作業とする
時は穀物を混ぜるか、グーテンと藁とをふ
まねばならぬ。(19)

以上のユウの引用から、農民の役畜とし
ては、飼育費（飼料、舎飼）および糞畜糞能
、老廃時の利用などの点から、たとへば労働能
率の点でみると、雄牛が第一とされてい
た事がわかる。馬を使用する場合は、農民
の場合には、夏期に放牧飼育ができ飼料費が
牛をみですい去勢馬、農耕馬であつた。すな
わち「農民は普通一組の中程度の貧乏馬を持
ち、舎飼し、必要に応じて使役する。・・・
それは普通去勢馬で、使役しない時は放牧す
る。しかし使役する時は舎飼して干草とライ
麦ひき割、細かく刻んだ切藁を与える。・・・
、普通の農民または運送業者は、この二頭の去
勢馬の外に、農耕やその他、良くない作業に
用いる為、貧乏の悪い農耕馬（Heckermehrgen）を飼

育する。村の家畜番が一日中放牧する。・
 ・夏は放牧地で飼育し、冬は質の悪い粗飼料
 で飼う。藁と干草は他の家畜に与える。
 ・時々小麦藁と切った大麦藁と混ぜて水に
 ひたして与える²⁰⁾。したがって四フーフエ規模
 の場合でもユーラーの記しているように牛が
 役畜として用いられるのが一般的であったと
 推測される。ユーラーが「雄牛八頭、雌牛六
 頭」という時、雌牛も役畜として使用された
 かどうかは問題になるが「八頭の雄牛で普瓦
 (Ackermann) は耕地を大体耕せる²¹⁾とあることか
 ら、雌牛は耕耘作業などには使用されること
 は余り無かったと考えられる。
 犁の牽引に必要とされる役畜頭数は各地域
 で、その土壌の質によつて非常に異なってい
 る。アルト・マルクでは役馬八〜十頭牽き、
 ミッテル・マルクでは役馬一〜二頭牽き、
 牛二頭牽きであった²²⁾。この連畜頭数から考え
 ると、おそらく四フーフエ以上層では連畜頭
 数をすべて自己の経営内で飼育しえたと考え

うれゐる。

(4) 飼料 まずユーラーによつて主要家畜の飼料と具体的にみてみよう。

役馬：〈最適飼料〉ライ麦と大麦のひき割を混ぜたもの。〈弱すぎる飼料〉大麦のひき割と切藁とを混ぜたもの。〈最も強い飼料〉ライ麦のひき割。〈飼料用穀物のない貧農の飼料〉亜麻の実の搾り糟、すなわち「亜麻の実を購入し、搾油して都市の市場に売れば相当の儲けがあり、しかもその搾り糟から馬などの他の家畜の飼料がえられる²³⁾」。〈マルク・ブラウンデンブルクの最良の飼料〉燕麦・切藁・あし・とくさ・クローバー・グレイケン。〈繁殖期飼料〉ライ麦、グレイケン²⁴⁾。〈農民農耕馬〉干草・切藁²⁵⁾。

乳牛：〈冬飼料〉「牧草にカブがあるいは穀と混ぜて与える。〈生飼料〉白クローバー、赤クローバー、gelbe Blumen, Dreifingerkraut²⁶⁾。〈乾燥飼料〉大麦藁、刈秣、干草、その他の乾燥飼料²⁷⁾。

肥育牛：非常に細かく刻んだ切藁、良質の

干草、切葉と混ぜたひき割・畑作カブ (Feldrüben)

(「沢山はやらち」)、赤カブ・カンランの葉

・麩⁸⁾。

子牛：燕麦葉、干草、グイーケン、ライ麦葉、腹殺の時に出るおみかげの屑、ひき割。

牛(雄、雌)：〈マルク地方〉ライ麦葉またはエンドウの茎と大麦葉または燕麦葉とを混ぜて刻んだもの(特に干草をふえない時)。

特に熱心な酪農民〉乳牛にはビール糟、ひき割(搾り糟は牛乳に、ひき割は肉に廻る。ビール糟がひき割より良い)。肥育牛にはひき割。

木ッポの蔓。切葉。エンドウ茎(または大麦葉)を混ぜたもの、少量の亜麻搾り糟。カブの葉、亜麻搾り糟、切葉、カブ茎葉(麩、ひき割と混ぜれば一層よい)。

羊：エンドウ、グイーケンの茎葉(「羊の爲にエンドウ、グイーケンと多量に播くべきである。なぜなら羊は葉を好んで喰うからである。干草の少ない多くの者は羊には唯エンドウ

ウ・ヴァーケンの茎だけを子え²⁹⁾る。葡萄・

ホップの葉。〈熱心な牧羊農民〉飼料ニンジン

ン (Mohnwurz)。

庭畑農：借屋農の飼料：切葉汁に脱穀の時

出る屑 (もみばら、のぎ・穀粒・葉柄の破片

など) を混ぜられ、若はニ普刈牧草、とく

さ、Knicksisch (あしに似た植物) を混ぜ³⁰⁾る。

以上から飼料については次のように纏める

ことが出来る。

a) 十六世紀の飼料の特色 家畜飼育頭数

を最終的に規定する冬期飼料とあらゆる家畜

について見てみると、従来同様に牧草 (Heu,

Grummet) と麥粟が中心となっていた。灌漑飼

料ではビール搾り糟、麴、ひま割などは従来

のものとして見てよいであろう。そうすると十六

世紀における新しい飼料としてはエンドウ、

ヴァーケンなどの豆科作物、クローバー、gelbe

Blumen などの牧草、畑作カブ、飼料ニンジンな

どの根菜作物が挙げられる。エンドウ、ヴァー

ケンは作付順序の項で述べたように、耕地

で同作物をいし独立の一圃を占める作物として栽培されていった(量的側面)。また穀物と交替に規則的に栽培され、地力増強的機能と発揮する=とによって多圃化による土地利用度を高めるという形で土地生産力を増大させるものである、(質的側面)。エンドウ(グアイーケン)ライ麦(小麦)にみられるように前作としてのエンドウ・グアイーケンの位置づけは主穀式農業の枠内での高度の水準を示すものである。このように質的にも量的にもエンドウ・グアイーケンは十六世紀後半のブランダンブルクにおける耕種部門農業生産力の水準を示す存在であった。他方根菜類は独立した圃を占める=ともなく、また穀物を含む基本的作付順序の中に位置づけられる=とも強んじなかつたと考えられる。したがって、質的にも量的にも、基本的な作付順序の性格を規定する存在ではなかつたといえる。

　　b) 冬期飼料と夏期飼料　カブ(根の部分)が乳牛、肥育牛、ニンジン・パセリの冬期飼料

とし て 用 い ら れ て い る 。 し か し カ ブ に つ い て
 は 肥 育 牛 の 場 合 に 「 沢 山 ほ や ら な い 」 と 記 さ
 れ て お り 、 恐 ら く 補 助 的 な も の で あ っ た で あ
 う う 。 ま た 羊 飼 料 と し て の ニ ン ジ ン は 全 く の
 特 殊 事 例 で あ っ て 一 般 的 と は し 難 い 。 そ れ は
 ユ ー ラ ー の 次 の 記 述 か ら も 窺 え る 。 「 先 に こ
 の 書 物 の 第 一 章 で 、 私 は 羊 で 大 饒 け し て い る
 濃 底 の ニ と を 考 え た 。 私 は 彼 を 度 々 訪 ね 、 進
 ん で 特 別 な や り 方 と 彼 か ら 学 ば う と 努 め た 。
 し か し こ の 男 は 、 自 分 の や り 方 を 匿 し 、 彼 に
 由 り た だ し て も 大 し て 教 え て も ら え な か っ た 。
 し か し と う と う 酒 に 酔 っ て 私 に し ゃ べ っ た の
 は 次 の よ う な 事 で あ っ た 。 春 早 々 に 、 幾 つ か
 の 畝 を 犁 耕 し 、 そ の 後 充 分 に 馬 鋤 耕 し 、 数 週
 間 た っ て 土 壌 が よ く 腐 熟 し た ら も う 一 度 犁 耕
 馬 鋤 耕 し 、 飼 料 ニ ン ジ ン ・ と 播 き 数 ヲ イ ス ペ ル
 を 收 穫 す る 。 ニ れ を 彼 は 冬 に 潰 し 器 で カ ブ と
 同 い よ う に 細 か く 碎 き 、 羊 に 与 え る 。 そ う す
 る と 多 量 の 搾 り 糟 、 燕 麦 と 必 要 と し な い 。 羊
 も 甚 だ ち ん で 喰 う 。 . . . エ ン ド ウ の 茎 を 羊 は ま

31)

た好んで喰う。すなわち十六世紀後半に根菜類(カブ、ニンジン)と冬期家畜飼料として用いる農民が存在したことは興味ある事実であるが、このように飼育方法はいくまでも秘法であって、一般的事例とは乏しきやうに考えられる。したがって根菜類は冬期飼料の中で主たる位置を占めるものではなく、補助的なものであつたと考えられる。エンドウ・グリーゲン(穀粒、茎葉)は主として羊用として用いられたが、乳牛、馬子牛にも用いられてゐる。濃厚飼料、粗飼料として質的にも量的にも冬飼料を改善した。

c) 階層別飼料 農民の飼育する農耕馬用の冬期飼料は一般に干草と切葉である。飼料用穀物と持たない食糧に就しては、豆麻の実を買つて油を搾り、それを都市に売り、残る搾り糟を飼料にするやう奨められてゐる。庭畑農、借家層においては、冬飼料に、脱穀時に生じるもみ殻、茎、屑穀、茎稈の破片などを与え得ない者は、二番刈干草、とくさ、kni-

chisch なじも子えるものとしてゐる。このよ
うに一般農民、貧農層の飼料は従来同様変化
なく、かつ極めて貧弱である。しかし同時に
おける都市の遅ればせ乍らの発展に伴なう農
村における商品生産の発展が部分的にせよ知
られる。このような飼料状況のもとでは家畜
飼料は放牧・採草地における野草に大ゆに依
存せざるを得ないのである。この飼料面か
ら共同体制への依存が裏付けられる。こ
れに対して、領主層、富農層においては、耕
地におけるエンドウ・グー、一ケン、カブの栽
培および採草地の草生改良（すなわち夏期飼
料としての白クローバー、赤クローバー、gelbe
Blumen, Dreifingerkraut）がある程度見られる。と
くに商業的畜産（酪農、肥育³²⁾）を営む農民上
層にあつては、乳牛、肥育牛飼料として、ビ
ール糟、ひき割、カブが用いられており、羊
飼料としては飼料ニンジンが使われている。
これは当時における商品生産の発展に基づく
ところの飼料の改善、分化が一定度進んでい

たニとを示すものであゝ。この表は、乳牛の
 当時の一般的飼育方法と比較すると明らかで
 あゝ。当時の一般的雌牛の飼育方法は次のよ
 うであつた。³³⁾ 聖ヤコブ祭（七月二十三日）までは
 午前中は荒地および草が生へた圃に込まれて
 いなゝ土地（Field）に、午後日杯地、沼沢地お
 よびワルポガス（五月一日）までは採草地に
 も放牧する。聖ヤコブ祭からミカエル祭（9
 月29日）までは共有地およびライ麦、大麦の
 刈取地に放牧する。この場合羊と同じ場所に
 放牧しないようにする。ミカエル祭から聖マ
 ルテン祭までは農用地に放牧する。放牧前に
 畜舎でライ麦藁をふえる。放牧しない時はク
 リスマスまでは、ライ麦藁、冬大麦藁、干草
 その他をふえる。クリスマスから聖燭節（二
 月二日）の三週間後まではライ麦藁をふえる。
 また聖燭節の三週間前から夏大麦藁、燕麥藁
 をふえはじめゝ。したがって孕んだ時にひき
 割、もみ殻も切藁に混ぜてふえる以外は、濃
 厚飼料は皆無と云つてよく、専ら粗飼料だり

で、かつ乳牛と、之ども夏期は刈跡地、および
 共有地、採草地に放牧されてゐたこと、がわか
 るのである。このような乳牛の飼育方法と比
 較すれば、富農層における施肥方法はかなり集
 約的であり、しかもこの集約性は耕種部門に
 おける作付の集約度を反映したものであつた。
 もっとも農民上層にあつても、乳牛の周年舎
 飼は行なわれてゐなかつたと思われ、刈跡地、
 採草地、共有地への放牧にも依存してゐたこ
 とは疑いなき事実であらう。ただ農民上層
 において、耕地における飼料作物の栽培、
 採草地の草生改良が耕地において、は耕地強制
 と部分的に弛緩させ、かつ放牧、採草地への
 依存度を僅かながらも減少させてゐるを指
 摘したのであつた。領主層においても飼料、
 飼育方法については農民上層とほぼ同様であ
 つたと考えられる。しかし領主経営の家畜飼
 育について注意すべき点は、家畜放牧に關し
 領主特権が大きな意味をもつてゐたことであ
 る。羊飼育は領主経営にとつて、羊毛の販売

と並んで糞畜として特別な意義を有した¹こ
 の羊の放牧は農民耕地の休閑地、刈跡地で行
 なされた。この²領主の羊の農民耕地への放牧
 は、領主経営への農民経営の従属を生ぜしめ
 た。すなわち休閑耕（夏期）を不可能とし、
 また南作を阻止するものであった。従って一
 般農民は勿論、今や作付順序の面での発展に
 よって共同体規制とゆるめはじめた農民上層
 経営と³再び共同体規制に縛りつけ⁴る方向に作
 用したと考えられる。さらに農民経営地の夏
 期休閑耕を不可能としたことは農民経営の生
 産力を下げ⁵る方向に作用した筈である。³⁴⁾

- 注 1) Coler, *Oeconomia*, Das vierte Buch, vom Ackerbau, Das IV. Capitel, S. 96. (IX F. *Oeconomia*, S. 96. と略記)
- 2) Ibid., 128.
- 3) F. Lütge, *Geschichte deutschen Agrarverfassung*, S. 140 ff.
- 4) Coler, a. a. O. S., 140 ff.
- 5) Ibid., S. 95.
- 6) Ibid., S. 150.
- 7) Ibid., S. 153.
- 8) Ibid., S. 151.
- 9) A. Krenzlin, *Dorf, Feld und Wirtschaft im Gebiet der großen Täler und Platten östlich der Elbe*, S. 51 ff.
- 10) Coler, a. a. O. S., 151. 152.
- 11) Ibid., S. 118.
- 12) Ibid., S. 128.
- 13) クレンツリンサマは、フョア・ボムメルン, シュレジエなどに見られる休肉を含む多圃式農業を、北西ドイツの無休肉・芝草施肥 (Plaggen düngung) の一圃式農業 (zelgenfreie Feldsystem 耕区制を伴わない耕園体系) が上記の地方の砂質土壌地域に

伝播し、この地帯の自然条件に適応して

成立したものであるとする。他方三圃式

農業は良質の粘土質土壌の地域にまず普

及し、十六・七世紀に砂質土壌地域にも

普及するようになり、多圃式農業を駆逐

したと主張する。この考え方は、三圃

式農業が多圃式農業よりも生産力段階と

してはより高い水準にあると理解されて

いる。このような立場からクレンツリン

はシュレダー＝レムプケに代表されると

ころの三圃式農業から多圃式農業への移

行（この場合には、多圃式農業が三圃式

農業よりも高い生産力水準にあると理解

されている）というシェーマを否定する。

このクレンツリン女史の研究は耕区制、

地質など、地理学者としてのクレンツリ

ン女史の深く広い知識、実証の上に支え

られており、これ等の点について議論す

る能力は私には全くない。しかしここで

取扱っている作付順序の点からクレンツ

リン女史の見解を考えると必ずしも賛成
 できない。すなわち女史はこの箇所では
 作付組織の問題について全く觸れていな
 いのであるが、ブランデンブルグの多圃
 式に見られるように、莖類と穀物とが規
 則的に交替して作付けられ、莖類が緑肥
 として使用されて耕地利用度を高める機
 能を果たしている場合には、この多圃式は
 三圃式(穀物連作)よりも明らかに生産
 力的に高い水準にあると考へねばならな
 いであろう。女史の見解の基礎は、三圃
 式が粘土質土壤に、多圃式が粘土質以外
 の、中世段階では豊度の低い土壤地域に
 見られること、多圃式が十七世紀以降三
 圃式に移行するという事実にあかされてい
 る。しかし女史の言う多圃式が作付の具
 から見てどのようなものであったかにつ
 いては全く觸れられていない。多圃式が
 ここではコーラーが述べていたような作付
 であれば、女史の議論は説得的ではな

と云わなく てはなら ない。また女史の云

う多圃式が無秩序に多種目の作物と作付

けしてゐるものであれば女史の議論は成

立する可能性があるが、コーラーの述べ

てゐるような多圃式とは似て非なるもの

と云わなく てはなら ないであらう。女史

の主張について は先にあげた書物の五ナ

四頁以下を見られた。なおコーラーが

「シュレジェンでは白玉カンラン (Weißkohl)

ニンジンも耕地あるいは耕地にある大玉

な菜園地 (Feldgarten) に作付け。マルク地

方では、ニハを菜園に作付け、その為

に土地を堀る」 (Colin, a. a. O. S., 95) と述べ

てゐるのは、クレンツリンの云う多圃式

の理解について一つの示唆を与えてゐる

ように思われる。Feldgarten とは耕地と共

有地との境界区域に位置する野菜栽培地

であるが、ニハは耕地と統一的に運営さ

れる土地ではなく、それ自体は本来の穀

作耕地とは無関係に取扱われる性質のもの

のであつた。クレンツリンはあるいはこ

の本末の耕地と Feldgarten とを區別せざに

体つものと理解してゐるのかも知れない。

14) Coler, a. a. O. S., 144.

15) E. Klein, Die historische Pflüge, S. 4ff.

16) Coler, a. a. O. S., 125. なお雑草とし

雨の多い時のスズメノチヤヒキ、雨の少

さい時のムギナデシユが拳げられてゐる。

またこの当時は勿論散播が行なわれてい

たので、穀物が発芽した後、除草は非常

に困難であつた。そこで当時商品的性格

が強くなつた大麦については、播種用と

してとくに雑草の種子と含まないものを

購入使用したことが述べられてゐる。

17) Ibid., S. 145.

18) Ibid., S. 143.

19) Ibid., S. 387.

20) Ibid., S. 357.

21) Ibid., S. 392.

22) Ibid., S. 118.

23) Ibid., p. 342.

24) Ibid., p. 343.

25) Ibid., p. 357.

26) Ibid., p. 408 「農民はクローバー、
グレイセンを農地および採草地に多量に
繁茂させるよう努めるべきがある」。こ
このクローバーは野生のものが播種され
るものの確かではなすが、何れにしても
採草地の草生改良が説かれてゐる事だけ
は明らかである。

27) Ibid., p. 409.

28) Ibid., p. 391.

29) Ibid., p. 421.

30) Ibid., p. 415.

31) Ibid., p. 424.

32) なお第二節でも述べるが、当時ブ
ランドンバルクでは肥育がかなり有利で
あった。このように肥育部門の商品生産
化を反映して、肥育素牛はこの地方産の
ものではなく、他地方の優秀品種が移入

されてゐる。「今日では地方によつて雄牛
の種類が異なる。我々は今日、ハンガリ
ー、フリースランド、ポーランド、イギ
リス、デンマークの雄牛を飼つてゐる。
その大部分は屠殺用に飼育される。」

33) *Cole, a. a. O. S., 400.* 1

34) 地力維持については特に述べなか
つたが、それは以上の叙述からも明らか
なように、耕地と永久放牧地との分離を
前提として、家畜を飼つての地力の移転
という基本骨格が依然として維持されて
いるからである。こゝではブランデンブ
ルクでどのような肥料が用ゐられていた
かだけでも簡単に紹介しておきたい。肥料
としては厩肥、羊による放牧施肥が最も
主要なものであり、その他に糞灰用樹皮
・毛皮の屑、石鹼製造の時出まる灰、泥
土、泥灰土が挙げられてゐる。厩肥の施
肥にあつては、土壤の性質（寒・暖、
乾・湿の組合せ）に応じてそれに対応す

る性質をもつ家畜の既肥が選ばれている。

例えば土壌が暖・乾の場合は、馬、ロバ、

羊の既肥が用いられている。栽培作物も

この耕地の性格によつて選択されている。

すなわちライ麦、燕麦、グレイケン、豆

麻、レディツヒ、サフラン、ポツポ、萩

松、ニンニク(? Knoblochsaamen)、麻、白カラシ

など。このように耕地の性格—肥料—種

との組合せが考えられている。これらの

点についてユーラ—農書—二二頁以下

を見られたい。

第二節 バランデンブルク土地所有と

農業経営の諸類型

〔Ⅰ〕 バランデンブルク土地所有

(1) ミッテル・マルクにおける農場領主制 (Gutsherrschaft) の形成 東部ドイツにおける農場領主制の形成について、リュトゲは次の三段階に区分してゐる⁴⁹。第一段階は十五・十六世紀の時期であつて、その特徴は荒廢した農民経営の沒收と、沒收農地の既存領主経営への編入をいし新農場設置への利用であつた (いわゆるグーツ経営 Gutswirtschaft の形成)。これと併行して次第にユニカーの社会的・政治的権力が強化されて領主制区域 (Gutsbezirk) が形成された。第二段階は三十年戦争と共に開始される。この期の特徴は、新しい荒廢の成立とこの荒廢した経営耕地の沒收に加えて、嚴密な意味での農民追放が本格的に貫徹する時期である。第三段階は十八世紀および部分的には十九世紀に及ぶ期間を含む時期である。

この段階の特徴は、領邦君主の農民保護政策
 によって特徴づけられる（クーール・ザクセン
 = ヴェッテン、プロイセン = ホーエンツォッ
 レルン）。ただしメックレンブルク、スエーデ
 ン領フォア・ホムメルンなどでは領邦君主の
 干渉は断念され、農場制領主（Gutschen）の手中
 への土地集中が継続された。
 従ってこの段階規定に従えば、ヨーラー農
 書が対象とする十六世紀とくにその後半の
 時期は第一段階後半をいし末期に属する時代
 といえる。すなわち一方では村落共同体規制
 から自立した領主経営が成立した。つまり領
 主経営地の一般農民耕地からの分離と拡大の
 進行。他方では領主経営をして農場制領主経
 営たらしめる農場領主制区域の完成の時期で
 もあった。
 この時期の事情を、ヨーラー農書が主とし
 て記述の対象としたブランデンブルクのうさ
 領主経営の耕地拡大を辿りうるミッテル・マ
 ルクについて概観したい。

まず農場制領主経営の成立とその経営耕地
 の面から追ってみよう。S. コルトの研究に
 よれば一八〇〇年、すなわち農民解放開始当
 時のミッテル・マルクに於ける領主経営地は
 次のような時代別・出所別の構成を示してい
 る。⁽⁸⁾したがって、領主経営地のうち、十六世
 紀以前の時期に五十四パーセントが、十七世
 紀に三十七パーセントが帰属している。した
 がって十六世紀においてはミッテル・マルク
 では目立って領主経営地の拡大は生じなかつ
 たと考えられる。

植民時代	26.2%
14 / 15 世紀の荒廃地	27.7
17 世紀の農民追放	18.7
30 年戦争時代の荒廃地	18.2
17 / 18 世紀の農民追放	5.5
18 世紀の土地改良	2.1
不明	1.6
	100.0

次に東部植民時代のミッテル・マルク地方
 の土地配分事情をグロスマンの研究によつて
 みてみよう⁴⁹⁾。全体で三八四ヶ村、一五九三。
 フーフェのうち、騎士フーフェ (Ritterhufe) は一
 五七九 (九・九パーセント)、教会フーフェは
 一〇二六 (六・四パーセント) にすぎず、正
 例的部分 (一三三二五フーフェ、八三・七パ
 ーセント) が農民保有地であつた。騎士フー
 フェと農民フーフェとの比率は一対八・四で
 ある。またリッター・ジッツの所在する村落
 は僅か三分の一の一八九ヶ村 (三三・六パ
 ーセント) で、合計二〇セリッター・ジッツ (一
 ヶ村平均一・六) にすぎなかつた。約三分の
 二の村落でリッター・ジッツが存在せず、従
 つてこれらの村々では農場領主制経営の手掛り
 と之も無かつた事が明らかである。また騎士
 が村落住民に対する排他的裁判権を所有して
 おらず、他の領主とともに分割所有せねばな
 らなかつたことも明らかである。この当時の
 騎士農場 (Ritterhof) の平均規模は六〜八フー

エ、であり、一ヘニフーフエ規模からニナニヘ
 ニ十五フーフエ規模の間に分散してゐたと
 われる。騎士は、この六ヘハフーフエと
 土地保有からあがる収入で、ラント防衛義務
 を果たすための馬、従者、防禦施設などの経費を
 賄ねなければならなかつた。したがってその
 生活水準は農民上層のそれを凌駕してゐたと
 は云えないであらう。また騎士農場の一部は
 定期小作で農民に貸出されてゐた。従つて騎
 士の自己経営は自家需要を充足に向けられて
 いたと考えられる。耕地も農民耕地と混在し
 ており、アルメンド利用も農民と一緒に行な
 わねばならぬことも屢々であつたと云われ
 てゐる。⁵⁰⁾したがって、この段階では、騎士は
 農民の隣人(nachbar)的性格を強く持つてゐ
 とみてよい。騎士経営努力力の最も重要なもの
 のは奉公人(主として自由出自)であり、農
 民賦役は大きな意味を持つたてなかつたと云われ
 てゐる。⁵¹⁾

十五世紀末以降、農産物価格の上昇が始ま

り、土地から地代（十四・十五世紀に貨幣地
 代に転化していった）を徴集するよりも、その
 土地を自営する方が有利となる条件が生じた。
 他方では多数の農民経営が黒死病、戦乱、都
 市への逃亡によって荒廃し、その結果領主の
 収入は減少した。その上残存農民から得られ
 る貨幣地代も貨幣価値低下のために減少した。
 これらの理由が重なり、領主は現物収入を獲
 得してこれを直接市場に売却して、収入の損失
 を埋合せようとする傾向が生じた。このよう
 にしてブランデンブルクにおいても、領主は
 農民に代えて、かつての実質価値にまで貨幣
 地代を増額するのを認めるか、直営地経営拡大
 のための賦役の増徴に応ずるか、の二者
 択一を迫った。この領主の要求に代えて農民
 は「貨幣地代の増額よりもむしろ賦役を望ん
 だ」と云われる⁵²⁾。この場合、賦役の増徴は貨
 幣地代の減額を伴うのが普通であった。と
 ころで農民層がこのような選択を行なった背景
 には、当時東部ドイツで一般的に見られた債

務（地代未納）の増大と、いう事態にみられる
 農民経済事情の悪化が、あつたと考えられる⁵³⁾
 すなわち、領主に対する地代の滞納や借金と
 いう形にみられる農民層の経営、家計状況の
 悪化が、貨幣地代の引上げによる債務の増大
 の増大を恐れる農民層をして、賦役を選択す
 る道を選ばせる結果を生んだのではなからう
 か。⁵⁴⁾ また先にも述べたように、東部ドイツで
 は先進地域であつたブランデンブルクでも、
 社会的分業＝都市と農村との分業の展開度が
 低く、貧農層の層としての析出をみながら、
 農民層に自給的性格が強く残つたことと関連
 づけられよう。そして農民のこの選択は、農
 民層については市場からの隔離、領主層につ
 いては、市場との結びつきの強化を方向づけ
 ることとなつた。領主層は、それまで支配的
 であつた農民または市民の商業を駆逐して、
 直接にその生産した農産物（穀物、羊毛、亜
 麻、家畜など）と市場で販売しようとした。
 一五三六年のマルク・ブランデンブルク等族

議会に於ける貴族の商業従事の禁止に因する
 決議は、この事情を明らかにしてくれる⁵⁵⁾。この
 決議は、貴族および教会が「いろいろのやり
 方で商業を営んでゐる」ことを非難し、貴
 族の商業を禁止する理由として、商業が「こ
 の両者には、身分にふさわしからぬ」も
 のであり、また貴族・教会の行なう商業によ
 って農村では農民、都市では商人が損失を蒙
 るからであるとしてゐる。このようにして、
 農場領主制経営の展開に現実的基礎を与えら
 れ、いわゆる「親役小作制」展開の契機が見られ
 るのである。
 農場領主制経営における商品生産の進展と
 ともに、経営規模の拡大もまた進んだ。拡大
 は主として不耕作の無主地の没収によつてい
 るが、一六〇六年のブランデンブルクの記録
 によれば、ブランデンブルクでもおそくも十
 七世紀初めには農民追放という方法もとられ
 た事が知られる⁵⁶⁾。ミッテル・マルクについで
 領主農場経営地の拡大と一六二四年の地租台

帳 (Schloßkassent) に よ っ て 検 討 す る 。 騎 士 フ ー フ エ
 三 二 五 六 に 対 し 農 民 フ ー フ エ は 二 一 七 八 九 ・
 四 分 の 二 フ ー フ エ (七 九 八 八 ・ 二 分 の 一 フ ー
 フ エ 保 有 農 經 営) で あ っ て 、 そ の 比 率 は 一 対
 六 、 七 と 植 民 時 代 と 比 較 し て か な り 縮 ま っ て
 ま っ て い る 。 ま た 十 六 世 紀 の 七 〇 、 八 〇 年 代 以
 降 の 没 收 地 は 一 五 二 四 フ ー フ エ (七 ・ 四 パー
 セ ン ト) を 百 の 、 全 村 落 六 八 九 ヲ 村 の う ち 一
 二 三 ヲ 村 (一 八 パー セ ン ト 弱) に 及 ん で い る 。⁵⁹⁾
 こ の う ち 嚴 密 な 意 味 で の 農 民 追 放 、 つ ま り 無
 主 地 の 没 收 で は な く 、 現 存 し た 農 民 の 追 放 を
 い し 經 営 地 の 没 收 が どの 程 度 で あ っ た か は 明
 ら か で は な い 。 こ の 没 收 と 通 じ て 、 既 存 村 落
 では 領 主 經 営 耕 地 の 一 円 化 、 農 民 耕 地 か ら の
 分 離 が 進 ゃ 、 荒 廢 地 では 新 し い リ ッ タ ー 、 ミ
 ッ ツ 、 分 農 場 の 設 立 が 行 な れ た 。

他 方 、 こ の よ う な 農 場 領 主 制 經 営 の 拡 大 を 現
 實 に 保 証 す る 領 主 側 の 条 件 も 整 備 さ れ た 。 「
 隸 役 小 作 制」が 農 民 の 領 主 に 対 す る 負 債 と 領 主
 の 市 場 支 配 と 媒 介 と し て 成 立 す る こ と に つ い

ては先に觸れた。ここでは農場領主制区域の
 成立に因して簡単に述べる。さて一般領主(騎士)
 が深刻な財政難に困らされたばかりではな
 く、領邦君主も同様であった。領邦君主の課
 税租税は植民時代から専ら貨幣であったの
 である。すでに繰返し指摘した様に、東部ド
 イツにおいては工業発展が弱く、領邦君主は
 何よりも農村住民への課税、すなわち地租収
 入に依拠せざるをえない状況にあったが、こ
 の地租も農村の荒廃の過程で決定的に減少し
 た。この財政危機を克服するためには租税を増
 額する必要があったが、そのためには租税同
 意権も有する等族の同意を得る必要があり、
 彼等の要求を認めて領邦君主高权をふえ、あ
 るいは農場制領主权力を構成するのに必要な
 新しい権利を認めるより他に道がなかった。
 その譲歩とは、裁判権の附子、不服従農民の
 追放(この裏面は農民保有权の劣悪化・賦役
 の強化であって、いわゆる隸役小作制の成立
 である)、追放農民保有地のうすで、領主経

営耕地の集団化、新リッター・ジッツの設立
 に必要とされる部分の買占めの承認、などで
 ある。⁵⁹⁾ さらに領邦君主は、その行政も財政的
 な理由からも騎士に委ねざるをえなかった。
 騎士所領は領邦君主の下級行政区域となり、
 騎士が行政権、さらには警察権を持つようにな
 った。このようにして、貴族とくに農村貴族
 (Landadel)とは、自己の農場(Gut)を経営し、
 農場領主制区域(Gutsherrschaft)の行政・裁判を掌
 る課題を担う者と、この考え方が一般化するに
 至った。⁶⁰⁾ ここで注意すべき点は、このような
 農民に対する支配権が、領主の農民に対する
 人格的支配権に基づいてゐるのではなく、領
 主の連合体である等族議会での支配権を基礎
 とした国家権力(領邦君主権力)に基づくもの
 であり⁶¹⁾、労働市場に対する規制権(領主の
 優先雇傭権、労働賃金規制権、僕隷奉公強制)
 農産物市場規制権を含んでいた点である。し
 たがって、いわゆる「封建反動」は、一定度
 の商品生産の展開と農民層分解の進行(層と

しての土地から分離した、新しい分離しがか
った層の出現)を背景としており、したがっ
て労働市場、生産物市場など地域に対する支
配权を必要とした事が重視されなければなら
ない。

(2) 封建的土地所有 上にみた農場領主
制(農場領主制経営、農場領主制区域)の成
立も封建的土地所有の側面から考えてみよう。

近世ドイツにおける封建的土地所有秩序は、
領邦君主の上級所有権—現実の領主の封建的
土地所有—農民的土地保有という「縦の系列
で相互に制約しあう三重関係」であった。と
ころで十六世紀後半における農場領主制の形
成はどのようにこの三重関係と展開させたの
であらうか。

第一に、領邦君主＝領主の關係において、
十六世紀を通じて、領主の手中への領邦君主
上級所有権の集中が進み、領邦君主がその上
級所有権によって領主的土地所有権を制約す
ることは事実上なくなったと考えてよいであ

う。この意味で領主の土地所有権は上級領主権と吸収したと云っても過言ではない。

第二に領主＝農民関係については次の三頁が指摘される。(a) 十六世紀を経過する間に、農民保有地が領主によって没収され、直営地への輸入が進んだ。すなわち領主の専断所有権が貫徹する土地が拡大した。これは云うまでもなく、領主の土地所有権、農民の土地保有権が相互に制約しあっている封建的土地所有部分(農民保有地)の減少を生ぜしめた。

(b) 領主の家畜放牧権の農民保有地、共有地への貫徹は、農民のその保有地に及ぶ現実的支配権(Gewere)の弱化を、逆に領主的土地所有権の強化を意味する。(c) 領主の農民把握は、人格的支配隷属関係ではなく、上級領主権である地域的支配権(行政・警察権力)に基づいている。ここに現実の領主権力の上級領主権力との磨着、肥大がみられる。

以上は土地所有権の展開と領主の側についてみたものであるが、農民の土地保有権の展開

と、農場領主制経営労働力の中心である 隷従
小作に焦点もあてて見てみよう。

十九世紀初頭の農民解放時に、隷従農民保
有権のうちもっとも広範に見られた土地保有
形態が隷従小作であった。この保有権は「保
有地または地片が、定期小作でも永小作でも
なく、ただ用益と耕作のために、土地所有者
に留保された一定の利益に就して提供される」
土地保有形態と規定されている。隷従小作で
は世襲的なものと非世襲的なものとが区別さ
れるが、この区別は長期の慣習のなかで発生
してきたもので、本来は、世襲権は存在せず、
農民の追放は領主の恣意にかかわれていたと
される^(a)。したがって本来は、世襲権なく、保
有地を処分（売却、担当化）することは不可
能な土地保有権であった。そのうえに（b）
のべたように、現実の土地利用の面でも領
主の利用権によって弱められていた。したが
って農民保有権が領主の土地所有権に吸収さ
れ、殆んど領主の専断支配権の貫徹する土地

に類似するものになつてゐたと考えられる。

もう一つ、植民時代に農民に認められた相続

権や処分権が吸収され、さらに現実の利用権

までもが領主の側からの強い規制によつて浸

害されても、その吸収の度合が完全なもので

はなかつたことは、農民解放時に切取地の提

供を強制されたとはいへ、所有権も認められ

てゐる事から明らかである。しかし農民の保

有権としては極限まで制限されたもの、逆に

云えば領主的所有権が貫徹する度合が非常に

強くなつて、保有权とは云えなくなつて直前の

ものであつたと考えられる。

以上要するに、三つの重疊的諸関係の中で、

現実の領主の持つ所有権が、上級領主・隸属

農民の権利の主要な部分を吸収し、肥大化し

てゐると云える。

〔Ⅱ〕 農業経営の諸類型

(1) 領主経営

a) マルク・バランデーンブルグにおける領

主所領の收入構成ははじめにマルク・ブランク
 デンブルク (クール・ブランク・ブランク・ブランクも同
 様) の領主所領の收入構成をみることに通じ
 て、領主所領の構成と概観してあきつい⁽⁴⁾。も
 っともこの收入構成は、領主所領の購入、売
 却の際、その価格評価と行なうに当って考慮
 するべき收入項目に基づいて作成したものに
 則っているので大雑把なものでないが、
 領主所領の一般的收入項目をほぼ示すものと
 考えられる。

(i) 穀物貢租 (ライ麦・小麦・大麦・燕
 麦)

(ii) 賦役 (Hüffner od. Pflugdienst, Cossaten dienst)

(iii) 直営地農業 (Ackerbau)

(iv) 小家畜貢租 (かまど税用鶏 Rauchhuhn,
 鶏卵、がちょう)

(v) 貨幣貢租

(vi) 水車 (Erbmühl) 收入

(vii) 採草地および林地 (狩獵权を含む)

雌牛

(viii) 大家畜 (乳牛 , 乳牛飼養权)

(ix) 羊放牧权

(x) 裁判权 (Gericht) , 教会レーエン (Kirchenlohn)

肉十分一税 (Fleischzehend)

以上から以下の事が確認される。第一に領

主所領は領主直管地と農民保有地とに分れて

おり、直管地が農民 (フーフェ農民と小屋住

農民) による賦役 (犁耕賦役と手賦役) を用

いて経営されていたことがわかる。もっとも

直管地労働力として、ほかに雇傭労働力 (奉公

人・月雇) が用いられていたことは後述に述べ

るところであるが、ここでは収入源だけが挙

げられているだけに、支出を必要とする

労働力は述べられていない。第二に領主経営

部門には耕種部門と畜産部門 (酪農と牧羊)

がある。この畜産の場合、放牧权が一項目とし

て採草地・林地とは別に評価されているので、

領主家畜の放牧は領主直管地 (耕地・採草地

・林地) に限られず、農民保有地、共有地に

及んでいたと考えられる。第三に、領主所領

の構成要素としては、以上の外に、水車、裁判権、教会レーエン、十分一税などがあつた。

この中で裁判権が奉公人労働力規制に大きな役割を果たしたことは後に述べる。第四に：農民は領主に對し、現物貢租（穀物、小家畜）、賦役、貨幣貢租、水車使用料、裁判手数料、十分一税などを支払つてゐる。この中で重要なものは賦役と現物貢租、貨幣貢租の比率であるが、この真にっは不明である。しかし賦役が主であり、その他の貢租が従であつたことは疑いがない。

6) 耕種生産部門

(i) 管理人 マルク・ブランデンブルクの十六世紀後半における領主直営地経営では耕種部門は農場管理人 (Forbergsmann od. Meyer) に委ねられるのが普通であつた。この管理人とその専の職務は以下の通りであつた。

「今農場役人あるはマイエルとは、主人 (Herr) がその直営地 (Meyerrey) および全管理 (Haushaltung) を委ねた管理人 (Wirt od. Haushalter)

をえう。耕地、採草地、園地、葡萄畑おトビ
 要するに管理全般と掌握する。すなわち、僕
 婢、家畜、納屋、所屬農地 (Stelle)、経営 (Nahrung)
 全体に附屬するものすべて。彼らを管理人 (Haushalter)
 あるいは貴族がもつてゐるようなフ
 ァークトと呼ぶが、この管理人とファークト
 の間には相異がある。それは管理人は、大て
 いの場合、管理全般 (ganze Haushaltung) をつかう
 どうかねばならないからである。、、、損失が
 生ずれば、あるいは不注意で荒廃すれば罰戒
 される。かつ管理人は、自らの怠慢、不熱心
 を監督から生じた損失を補償する義務を負う。
 何故なら経営全体 (ganze Nahrung) に就して最高
 責任 (die höchste Sorge) を負い、かつ僕婢を熱心に
 監督するため、他の僕婢よりも高給をばん
 でゐるからである。⁶⁵⁾「分農場管理人は、戸外
 での仕事と全部、すなわち、庭先で、納屋で、
 耕地、採草地、果樹園での仕事を行なう⁶⁶⁾」
 この地方では専らある管理人は好まれぬ。
 しかし中には専らある管理人を好む人間もい

3. (管理人の) 事は, Viehmummen, Viehmutter (雌牛
 がらよう、鶏、鴨などの家畜番) の役を勤め
 る。 . . . 管理人の事は家内でなすべきこと
 とを熱心に行なねばならない。すなわち密
 蜂については巣箱の中で行なうべきことの
 一切、炊事して下僕に食事をさせ、下婢を取
 締り、家畜を飼養し、薬草園を整え、乳入り
 食物 (Milchspeise) を取扱ひ、バター、チーズを
 つくり、鶏、がらよう、鴨その他の家畜を飼
 養、肥育する。⁶⁷⁾
 すなわち、管理人は経営全体 (ganze Vahrung, ganze
 Haushaltung) 全体の總括責任者である。そのうち
 最も主要なものは耕種生産部門であつた。管
 理人について注目されるのは、彼が單なる被
 雇傭者ではなくて、損害賠償義務を負う、つ
 まり、やや誇張して云えば経営責任を分担し
 ていることである。ここにみる管理人は、こ
 の二側面、すなわち被雇傭者的性格と経営者
 的性格とを兼ねて存在としてあらわれ
 る。この英をコーラー・バール・グラニ

ンブルグで一年間を通じて管理人に普通ふえ
られるもの」(Was man einem Meyer in der Chur Brandenburg das
Jahr durch zu geben pflegt) として挙げてゐる例から検
討したい。

「領主が五フーフエを所有するばあゝ、領
主は管理人に年間、ライ麦ニグイスベルニシ
エ、フエル、貨幣十六ショックとふえる。管
理人はしかし常に二人目の奉公人を自分で雇
わなければならぬ (der Meyer aber muß im 2. Knecht
selber halten)。下女は雇わぬ。領主は管理人に
また一ターレルの価の豚一頭、チーズニシ
ョック、鯢ニショック、バター十ポンド、
蠟燭四ポンド、エンドウ一シェフフエル、カ
ブ六シェフフエル、一ターレルの価の上着一
着、一ターレルの価の靴、薙ボール二樽 (tonne)、
良質ボール一樽。 . . . 」。

以上にあつても被僱者的性格と経営者的性
格の二側面がやられる。すなわち被僱者的
側面は領主からふえられる賃金であり、経営
者的側面は「二人目の奉公人を自分で雇」う

と、いふ真にあらわれろ。

まず賃金について簡単に考えてみた。初めに述べられているライ麦と貨幣が播種用穀物と経営費と考えるべきなのか、それとも賃金の一部と考えるべきなのかが疑問である。といふのは、この二つが豚以下の食糧、衣料とは別に挙げられているからである。ただライ麦と播種用と考えると、その他の播種用穀物が挙げられていることが理解出来なくなるので、一応ここではライ麦、貨幣も賃金として考えるにとする。さうすると管理人は賄を支給されているので、管理人は一人を構え、自分の窓と持った存在であるとしなければならぬ。ところで、食料として与えられているライ麦その他穀物、肉類、野菜などを一般貴族、市民の賄と比較すると⁴⁹⁾、穀物について一人当りの消費量はほぼ等しいが、肉類の点では、一般貴族、市民のばあ、牛、豚、羊、鰯など多岐であり、畜肉を主としているのに対し、管理人のばあは種類も少なく、

量も少ない。これは当然と云へば当然である。
 そこで前章でみたザクセン侯直管地勞働力と
 比較してみる。するとライ麦ニハシエツフェ
 ル(ニガ、スベルニシエツフェル)はザクセ
 ン侯直管地勞働力一人当り消費見積量(6½
 säch. Sch. = 13 preuss. Sch.) の二倍にほぼ等しい。ま
 た十六シヨフクの貨幣はザクセン侯フーク
 トの賃金(15 Meiss. Gulden = 3/5 silber grochen = 9 Branden-
 burg. G. 27 silber G.) の約一・六倍に當つてゐる。
 さらにザクセン侯直管地勞働力一人当りの消費
 と比較すると、フークトの賃金は約一人強
 に當つてゐたから、ブランデンブルクの管理
 の十六シヨフクは、ザクセン侯直管地勞働力
 賄費の約二人に當るとしてよい。したがつ
 て管理人の受ける現物・貨幣合計は、ザクセ
 ンの奉公人賄費で見積れば二人分以上となり
 したが、家族給賃金的性格を持つてとして
 良いであらう。現物と貨幣との比率は、ライ
 麦価格を一シエツフェル当り一マルゲンとみ
 ると現物給けり方が大まくなるが、ほぼ半分

づつの比率と考えてよい。

次に経営者の側面については、危険の分担、奉公人の雇傭という二点が指摘される。この面から賃金の性格を考えると、単なる賃金ではなくて経営者報酬的性格を若干持つているのではないかという二点も考えられる。ただ、給与される現物、貨幣は生産物に対する歩合の形をとっている事ははっきりしており、したがって、被雇傭者としての性格が規定的であることは明らかである。しかし單純に被雇傭者とは割切れないところに、ブランドンブルクの直営地管理人の特徴があると言わなければならない。

(II) 奉公人 (Knecht) 「われわれの奉公人は全く自由であり、偽りの主人 (gemachte Herren) である。すなわち彼らは自分がしたくなるときには仕事を放り出し、雇主 (Herrschaft) が彼らに命じたことを誠実に行なわず、盗みを行い、害を加へ、損失をかける。そして悪習にふけり、勝手放題に振舞い、雇主夫妻が少しでも

厳しく罰すれば、すべ逃げて出して、雇主にありとあらゆる悪言と力くどと脅迫する。このやうな甚だしい我儘勝手には警察当局 (Abriegelung) に大なる責任がある。何故なら、警察当局は雇主を、このやうな放埒を奉公人から保護し (Schutz und Schirm halten)、彼らを捕えて追放に処し、笞刑を加え、斬首し、彼らにその放埒、脅迫を止めさせ、仕事に止まるよう強制し、雇主に柔順たさるべきやうにすべきだからである。うすれば農民 (ein armer Acker- od. Bauersmann) は、その生業 (Nahrung) と少しは旨くやうて行けることになる。そしてかかる放埒を者どもから、うほど大なる危険は生じなくなる。しかし同時に雇主夫妻は、彼らの放埒にまけて氣落ちしてはならない。主人夫妻は、その家権力 (Hauptrecht) を用いて、彼らにそんな事を云わせないやうにせねばならない。もし奉公人が従順たらんと欲せず、雇主夫妻の命に服さざる時は、その時までには力いた分だけ其の報酬を与え、雌牛出入口をさし示し、退去を命

じ、扉で外へ押出し、真すぐに屋敷地外へ追立てる。よすれば他の奉公人も恐れて軽々しく雇主と嘲つたりしな⁷⁰⁾くする。

以上のユウの記述から、まず第一に、奉公人が、その表現にはかなりの誇張があるにしても、雇主（領主・農民）の「家権力」としては管理するのが困難を存在として取扱われてゐる奥が指摘される。すなわち、かなり高い流動性を持つてゐる奥が特徴的である。この流動性（その表現としての根深い反抗）を制限するために、「近くに友人のいない者と雇傭⁷¹⁾し、また雇傭した奉公人に対しては「沢山の金と与えて出奔させないよう」⁷²⁾にすべきであつた。しかし、流動性をもつ奉公人に対して規制を加へ、流動性を制限し、雇主を保護する最終的な権限（経済外強制）を行使するものは警察当局であつた。この警察当局の持つ経済外強制は、下級裁判権だけでなく、斬首と含む身体に対する刑罰権、すなわち高級裁判権を含んでゐる。これは土地所

有の項で述べたように、現実の領主のもつ封建的土地所有権が、上級領主の所有権を吸収肥大した結果の表規であるが、このような専断力で行けば、農民層分解の結果出現した労働力市場を規制するこゝが出来なかつたこと、すなわち農村労働力の流動性を制限できなかったことが示されている。ブランデンブルクではこの警察権力は遅くとも一五四〇年の大審院改革以後は農場領主であつた。⁷³⁾

第二に農村労働者の雇傭者として、領主とともに農民がみられた。この農民は労働力の流動性を規制する点では領主と利害を共通しているが、雇傭者としては労働市場で領主と競争関係に立つ。農民のもとにおける労働力雇傭は、一つは農民層の階層分化の結果であるが、もう一つは領主に対する役畜賦役が強化された結果であつた。そのため中・上層農民においては家族労働力をもつてしては労働力が不足し、一人を、一〇・五人の奉公人の雇傭を強制されざるをえなくなつていゝ。⁷⁴⁾ 例

えば、グライフスバルト 所在の エルデナ農場
 (Gut Eldena bei Greifswald) では役畜賦役農民の経
 営規模は平均四〇ヘクタールであり、各農民
 に割当てられた領主経営耕地は一六世紀初頭
 には一・四ヘクタールであったものが、一五
 七〇年には二・六ヘクタールに、一六一七年
 には三・四ヘクタールにと増大したのであっ
 た。このようにして領主は賦役を増大するこ
 とによって農村労働市場を拡大するという結
 果を生じるようになった。⁷⁵⁾ この結果領主は農
 民との競合関係を領主のもとでの優先雇傭と
 いう形で解決せざるをえなくなったと考えら
 れる。⁷⁶⁾

(iii) 日雇、「分農場を所有する者は、常
 勤の奉公人と並んで、若干の兼業労働者 (neben-
arbeiter) を用いる。この兼業労働者を、彼は、
 必要を時に、奉公人の仕事に余り多くなりす
 る時に、飼料の裁断、打穀、伐木、その他
 の仕事に用いることが出来る。貴族が村落に
 小屋住農 (マルク)、庭畑農 (シュレジエン)

を持つ のと同じである。

小屋住農、庭畑農は、家屋と園地を持つだけであり、この園地には少量の穀物を播けるだけである。彼らは十六、十八、二十シエツフル当り一シエツフルの報酬で打穀せねばならない。

その他に分農場を持つものはホイスラーを用いる。ホイスラーは粗末な家屋を持つが、他人の家に間借りして、日雇賃金で働かねばならない。ホイスラーは自分の農民めいるいはフーフエ農民をもつ。ホイスラーはフーフエ農民にパハト (Pacht) を与え、耕耘を助け、ホーフで犁耕して働き、薪と穀物を運び、他の運搬作業もし、このようにしてフーフエ農民は自分の大まな農場 (Forstungen) と耕作を継続できるようにする。ホイスラー (借家人) は大まな農場や耕作では有用かつ必要である。農耕およびそのような農業の生^{なり}業も力でもって (mit Gewalt) 行なう必要がある。しかし輕学者は彼らに慈悲を以ていたわらねばならない。さす

れば彼うも経営主は温い情で報いる。経営主は彼うを追ひ立てて、彼うに遅ばせ、收穫とあげさせなければ、逆に彼らが、経営主が生業を放棄せねばならぬように、経営主を追ひ立てる。

シュテッテン (Stätten) では賄つものの日雇賃金で働く日雇が居る。このような日雇を奉公人の仕事が多すぎる時に、必要に応じて用いる。

バロは『このような人間を、ただ必要を時にだけ、他の奉公人がやりたがらないような最も重労働の仕事を行なわせるべきである。例えは薪や厩肥の運搬、その他の重労働を行なわせるのが普通である』と助言している。

このような労働者 (Arbeitssche) に、忠実に、仕事を怠らず、一日で二日分の仕事とするように長時間働かせることに充分配慮せねばならない。それ故に、雇主はいつもこのような人間の側にいて、仕事としないで周辺とつながりしなないで自分の手仕事を統制させるようにするのがよい。

すなわち、住込の奉公人以外の雇傭労働力
 として、兼業労働者の性格の小屋住農と、純
 粋の兼業労働者の性格をもち、農業者に雇
 傭されるければ生活でまな、ホイスラーの二
 種類が挙げられてゐる。彼らが雇傭される時
 期は農繁期であり、雇傭主の生産手段を用い
 て作業してゐる。賃金形態は歩合な、し、シ
 ュテッテンの場合にみられるように日雇賃金
 であり、この場合には、奉公人の場合と同じ
 ように、暴力 (Gewalt) を以てする管理の重要
 性が強調されてゐる。小屋住農についてユ
 ラーは村落に住む小屋住農を挙げてゐるにす
 らな、バ、ブラウニデンブルクで騎士館近く
 の直営地に定住せられた小屋住農 (Vorwerkes-
 kossäten) も存在したことが指摘されてゐる。⁷⁸⁾ 彼
 らは小農地をライエ权 (Leiherecht) で保有し、賦
 役と義務づけられてゐる。そしてこの農場小
 屋住農の場合、領邦君主から課せられる地租
 を騎士が小屋住農に代りて支払つてゐる。こ
 れは小屋住農にとっては経済的に有利であり、

不満足な事態ではなかったと云われているが、
 他方それは領主の家権力の中への完全な包摂
 を意味するものであった。すなわちこの場合
 には小屋住農の土地は領主権力が單独に貫徹
 する領主所有地であった。

(iv) 賦役 賦役についてロウーは全
 く述べるところがない。一般的に言えば、十
 六世紀後半には週賦役がその農場領主の隷属
 農民であるか否かに関係なく、村落共同体單
 位で課せられている⁷⁹⁾。この週賦役は農民は年間
 を通じて一人ないし半人前の勞働を領主に提
 供することと意味した。ここには、農民の工
 地保有者の主要部分を占めた隷役小作の性格
 について考えてみたい。

まず隷役小作の経営地は、既にのべたよう
 に、殆んど領主の所有権が單独に貫徹してい
 る土地といってもよいほどの勞働を保有権し
 かない土地であった。その他の基幹的生産手
 段はいわゆる領主から与えられる「前貸用具」
 であつて、これはまた農民の所有ではなかった。

「前貸用具」の内容は種子、役畜、犁であり、
 て、もともと封建農民においてはこの「
 前貸用具」の内容をなす生産手段は農民の所
 有であつた。この基幹的生產手段が領主から
 貸与されたものであり、この生産手段を以て
 賦役が行なわれたのであつた。すなわち農民
 自身の農具ではなく、領主の農具を使って、
 自分自身のための生産と領主のための生産と
 が行なわれてゐる。これは、形態的を異だけ
 に注目すれば、向屋制的農家内工業に
 ついて、生産手段が直接生産者の所有ではなくて、
 向屋所有のものである場合と類似してゐる。
 いわば小生産は維持されてゐるが、そこで用
 いられてゐる生産手段は直接生産者のもので
 はな、といふ点が両者に共通してゐるといへ
 る。他方、生産手段を貸与する側からみれば、
 生産手段（土地およびその他の生産手段）か
 ら分離した、あるいは半ば分離しかつた勞
 働力を再び生産手段と結びつけ、小経営とし
 て再編しようとする手段が生産手段の貸与で

あつて、この場合には、勞働力と生産手段の
 の分離を生ぜしめるような、したがって、封
 建制解体期における農民層の分化・分解が問
 題になつてゐるといえる⁸⁰⁾。だからこそ、小生
 産の再編成に當つて、そこに成立してゐた勞
 働力市場、農産物市場に対する規制が重要な
 意味を持つたのであつた。このように、土地
 ・基幹的生產手段の所有関係、市場規制の意
 味と考へた場合、隸従小作は單なる封建的小
 生産、賦役經濟の復活と、いう意味での「封建
 的反動」という理解では不十分であると考え
 られる。すなわち封建的小農から賃労働者へ
 と転化する線上において、なお小經營を維持
 はしてゐるが、土地保有権の面でも現實の領
 主的所有に圧倒されて、領主の單独所有権の
 貫徹く土地に極めて近い性格のものになつて
 あり、基幹的生產手段も領主所有であり、し
 たがつて實質上、無所有状態に近くなつてき
 てゐる矣、さうに經營面からみても、領主に
 恣意的賦役を課され、領主の羊の休閑地、刈

跡地への放牧の爲に、現実の土地利用を著しく制限されることによつて、領主経営に完全に従属せしめられてゐる矣、この二点から考へて、その小経営は、「いわば現物の賃金」としての性格を強めてゐる矣が指摘されねばならぬであらう。さらに執役小作人の領主への従属は確かに土地への緊縛を通じて行なわれ、また極めて弱められたものであつて、なお残存してゐる保有権に就しては、経済外強制が必要であつた。しかし土地への緊縛は、市場、とくに労働市場に対する規制の側から説明されるべきであり、経済外強制については、領主と執役小作人関係を支えるものとして、経済外強制の外に、基幹的生産手段の貸与といふ経済的関係、債務と執役的関係が重複して存在したことを指摘せねばならぬ。従来の研究では封建的反動の面に照明があてられて、領主による販売のための穀物生産の発展にとらう所有関係の変化、従属関係の変質の面が分析されないままに放置されてゐた様に思

われる。そして以上に指摘した生産手段に
 する関係、経営の従属的性格からして、隷
 小作制は、分益小作制の延長線上において把
 えられる、ないしは東部ドイツにおける分益
 小作制の逆行形態として理解される面がある
 のではないかと考えられる。すなわち、分益
 小作には経営費の折半負担、生産過程での強
 度を地主の干渉、収穫物の折半という固有な
 性格があるが、しかしこれらの三要素と共通に
 しなげらるも、種々の経営類型がみられる。そ
 れはニーターラインとザクセンとでは領主と
 の関係、共同体との関係で異った特徴をもっ
 ていたし、同じザクセンでも異った形態があ
 ったことから明らかである。これらの整理
 については第五章で行なう。とし、こゝで
 は山岡亮一氏による指摘を引用しておきたい。⁸⁾
 氏は分益制度を三個の類型に区別されていま
 第一形態は、地主が小作人に対して小作地の
 外に一切の経営資本を提供し、かつ地主自ら
 農業経営の方法を定め、小作人を指揮監督し

く耕作にあたらしめるもので、小作人はただ
 肉体労働を提供するのみであつて、めたかも
 地主の雇用労働者のような地位にたつもので
 ある。近代的雇用労働者と異なるところは、
 日々、毎週或いは毎月一定額の貨幣賃金を支
 払うかわりに、收穫時に收穫物の一定歩合を
 以て労働報酬にあてるといふ点である。第二
 形態は、地主が小作地を提供する以外にその
 経営資本の一部をも提供し、小作人は残余の
 経営資本及び労働を提供し、地主は主として
 指揮監督に従ふことによつて、いわば共同的
 に農業経営を行なうもので、かくて得た総収
 益を地主小作人間に実物のままで一定割合を
 以て分配する。第三形態は、第一形態と反対
 に、地主は小作地を提供するのみで、小作人
 は普通の小作の場合にかけると同様に自ら一
 切の経営資本を支弁し、その経営については
 地主の指揮監督を受けず自由にその小作地と
 耕作するもので、ただ收穫物を定率によつて
 地主小作人間に分配するにすぎぬものである。

として、此はこれら三つの形態を土地所有と
 小経営的生産様式の視點から次のように整理
 される。第一形態は小経営生産様式の完全に
 はばまれた形態であり、土地所有は三形態中
 最も長く封建的性格を残存せしめる結果とな
 る。この形態の資本主義的發展の方向はグー
 ツウイルトシャフトからユンカー経営への方
 向、即ちプロシア型の道をとる可能性が十分
 に存在する。これと反対に第三形態は、土地
 所有の性格は著しく近代的であり、小経営的
 生産様式の發展も急速でありうる。こゝでの
 小作人は資本主義的借地農に転換する可能性
 を十分に与へて居り、土地所有は資本主義
 的所有に接近し、それが土地所有の性格を転
 換するのには、小作人の経済的成長如何にかか
 っている。ただし小作人の土地の買取りによ
 り一度分割地所有に転化する方向も存在して
 いる。第二形態は以上の第一、第三の中間形
 態であり、土地所有の性格についても、小経
 営的生産様式の發展についても、兩者の中間

に位置する。マルクスが分益制度の典型としてあげたのはこの第二形態にあたる。彼ののべているように、この形態が完全な資本主義経営たるためには、一方では借地農業者にとり十分な資本が欠けていり、他方では、土地所有者がこのばあい得る分前が純粹な地代形態をとっていふのである。土地所有者の得る分前についていえば、最も純粹な地代形態に近いのが第三形態であり、最も遠いのが第一形態であり、第二形態はその中間といえよう。

以上の三形態について注意すべきことは、これらの諸形態が、同じ地域内で時間的系列として現われることもあつし、また發展段階を異にする各地域間で並列して現われることもあつし、さうに同じ地域内においても農民層の階層分化に対応して並存することもあつたといふのである。最後の場合についていえば、農民層の上層と下層とでは分益小作の形態が異なるといふのである。それはすでに「カ

クセンの酪農部門における分益小作について
 見た通りである。このように考えてくると、
 隷役小作は貧農による分益小作の延長線上に
 位置すると考えられる（東部ドイツにおける
 退化・潰滅形態）。土地所有については、現実
 の領主的土地所有に吸収されて、隷役小作に
 は相続権、譲渡権がなく、領主の恣意によっ
 て追放されるような、ぎりぎりまで追いつめ
 られた保有权となっており、領主の單獨所有
 権の貫徹と土地に極めて接近したものと見て
 いる。経営「資本」についてみても、基幹
 的生産手段（犁・役畜）や種子などは領主に
 よる「前貸用具」に依存しており、僅かに家
 畜飼料、労力などを分担しているに過ぎない。
 しかも隷役小作経営は領主経営に完全に従属
 し、現実の土地利用は領主経営によって限定
 づけられている。したがって実質上の労力者
 たる地位に極めて近くなっているといえる。
 ただ労力報酬が收穫物の一定割合ではないう
 いう点が第一形態と異っている。これは隷役

小作の経営耕地は、領主の単独所有地に近
て近いにせよ、なお辛うじて農民保有地な
性格を止めてゐるといふ点に好応してゐる。
したがつて、轉役小作制は、封建的保有農、分
益小作農、債務奴隸的勞働力の三側面を備え
てゐるといふべくてはならぬ。

一方農場管理人は、経営における危険負担、
勞働力雇傭を行はうと、農民上層の分益小作
の退化・潰滅形態として把握される側面を持
ち、農場領主制農場における勞働力は、農民
上層、下層の兩分益小作の退化・潰滅形態の
結合として理解される面をもつてゐると云ふ
よう。

(V) 領主経営耕種部門の取纏め。まず
経営規模については、コーラーの例示からい
へ、十六世紀後半においては、平均五フー
模が代表的とみられる。領主経営耕地は、国地
化されて農民経営耕地から分離され、そこで
苜蓿作物(エンドウ・ヴィーケンを主とする
飼料、緑肥作物)が一般農民経営よりも相対

的により多く栽培されて多圃式農業が行なわ
 れた。豆類は穀物と穀物との間に規則的に導
 入され地力増強的機能と主穀式の枠内ではあ
 り果すことにより、耕地における輪作期間
 を延長させ、この意味で土地生産性を増大さ
 せている。この意味で一般農民経営よりも相
 対的に高い生産力を有したといえよう。(しか
 し十七世紀以後における三圃式農業への移行
 は、ガクでこの場合と同様、耕地における地
 力維持が充分ではなかったことを示している
 ように思われる)。共同体規制については、多圃
 式農業は耕地強制に対しては殆んど影響を及
 ぼさなかったと思われる。確かに飼料作物の耕
 地における栽培は領主経営耕地と放牧採草地
 との統合を緩和しはしたが、両者の区別を廃
 止するものでは勿論無かったし、また耕地強
 制を緩和するものでもなかった。そして地力
 維持家畜たる羊を農民耕地に放牧すること
 により、農民耕地における耕地強制と維持強
 化とを兼ねるものであった。労働力の中心は耕

役小作であるが、單なる封建的保有農民として把握されるだけでは不十分であり、農民層の階層分化の結果析出される貧農による分益小作農の退化・潰滅形態としての側面が認識されなければならない。耕種部門の責任者たる管理人についても同様に被雇傭者的性格を指摘するだけでは不十分であり、その経営者的側面は富農による分益小作農の退化・潰滅形態として把握するべきであると考えらる。

c) 牧羊部門 牧羊部門において、領主は羊、土地利用権、飼料、賃金（貨幣・現物）その他生産手段を牧羊者に貸ふする。生産物は一定比率で領主と牧羊者との間で配分された。牧羊者は領主から提供される生産手段を用い、自からの危険負担において牧羊経営を行ない、粗生産物の中から、自分の取分（粗生産物の五分の一）と雇傭労働者の賃金分とを除いた残余を領主に引渡す。領主は生産手段の一切と賃金を負担するが、しかし経営の危険負担を行ない。したがって牧羊者は被

雇傭者的性格が強いけれども、やはり牧羊経営は分益小作経営であると考えられる。

領主の子える土地利用权、すなわち放牧权は領主の経営地だけでなく農民経営地も含んでおり、共有地だけでなく、休閑地、刈跡地などの開放耕地を対象としてゐる。したがって放牧は村落共同体規制に則って行なわれる。さらに農民は領主の放牧によつて、休閑地では休閑耕が不可能となり、放牧期間が作物の播種期と重なるため、通期の農作業が出来なくなり、そのための収量が低下せざるをえなくなるという不利益を甘受せざるをえなかった。また雇傭労働力は僕婢命令のもとで雇傭されるものであった。これらの諸点で牧羊経営は経済外強制と共同体規制に立脚する経営であったと云わなくてはならない。

以上のような性格の領主所有羊の飼養を請負う牧羊分益小作経営の收支計算とコーラーによつて示すと次表のようになる⁸²⁾。牧羊者、その他、取分(賄など)現物支給分を含む。

(i) 越冬羊数 500 頭

(ii) 所要労働力および賃金

配当比率

配当羊頭数

貨幣見積額(1人)

牧羊者

 $\frac{1}{5}$

300

172 fl. 13 gr.

奉公人頭

(1人) 2 Viertel

50

28 fl. 16 gr.

子羊用奉公人(3人)

1 Viertel

75

14 fl. 8 gr.

244 fl. 11 gr.

(iii) 領主帰属分

生産量

單位

粗収量

羊乳 (624頭分)

バグー

2.4 Tonne

@ 7 fl.

19 fl. 12 gr. 7 pf.

4ース

2 $\frac{1}{5}$ Tonne

@ 6 fl.

16 fl. 16 gr. 9 pf.

羊毛

(11.25頭分)

11 $\frac{1}{2}$ Stein @ 60 gr.

321 fl. 9 gr.

(22 $\frac{1}{2}$ Centner) @ 16 fl. 6 gr.

子羊

562 $\frac{1}{2}$

@ 12 gr.

289 fl. 6 gr.

647 fl. 2 gr. 4 pf.

羊1頭あたり粗収量

12 gr. 1 pf.

Civ) 飼料費

(100頭当り)

乾草 1 Fuder / 10 頭 ① 1 Thlr (30 gr.) 240 gr.

ライ麦 4 Sch. / 100 頭 ① 1 Gulden. 84 gr.

燕麦 2 Sch. / 100 頭 ① 12 gr. 24 gr.

大麦 2 Viertel / 100 頭 ① 23 gr. 23 gr.

塩 2 Viertel / 100 頭 ① 1 Gulden 10 gr. 6 pf.

ヴァーゲン 1 Viertel / 100 頭 ③ 1 Gulden 5 gr. 3 pf.

薬草根 6 gr. / 100 頭 6 gr.

392 gr. 9 pf.

1500頭飼料 280 fl. 11 gr. 3 pf.

1頭あたり 3 gr. 11 pf.

(V) 収益 366 fl. 12 gr.

い) は現物(羊)で支払われているが、領主
 取分の計算と同じ基準で貨幣に換算したもので
 ある。賃金合計は奉公人を三人とした場合
 粗生産額の二八・三パーセントを占める。飼
 料費は粗生産額の三二・五パーセントである

から領主取分は三九・ニパーセントとなる。
 勿論生産費としては、この外に豚などの屠畜
 労働に対して支給する現物や、放牧・採草地
 びえられる生草などの飼料、地代があるが、
 この時代の領主経営においては、農民保有の
 休耕地、刈跡地、放牧採草地びえられる飼料
 費、地代は零とみなされることは言うまでも
 ない。

牧羊者の所得（粗収益の五分の一）172 fl.
 はその額からだけ判断すると富農と規定され
 るが、この所得が領主权力による放牧权に依
 存し、村落共同体規制に立脚して得られるも
 のであり、領主权力・村落共同体からの解放
 と結果するものではなかったことに留意してね
 ばならぬであろう。

(2) 農民経営

「すぐれた経営主は、あらゆる物を自分の
 生業 (Nahrung) で自給し、出まらばだけ買収をいよ
 うにする。

農民が粉、パン、麴をパン屋で、林檎、梨、
 櫻桃、バター、チーズなど、とハッケ(Hacke)で、
 肉と肉屋で、ビール、葡萄酒を他の酒屋で売
 めなければならぬとすると、彼は貧農(amer
 Wirth)であり、⁸³⁾「農業者は多量に買物を
 いで、むしろ自分の生業で得た物と沢山売る
 ようにしなければならぬ。カトーが云って
 いるように、農民は買わずに売らなければな
 らぬ。とくに老廃牛(雄・雌)、雄羊、去勢
 羊、子羊、一頭に対して二十、三十、四十、
 五十ターレルを貰うようを見事な若駒、その
 他役にたつてゐる家畜、羊も、毛皮、穀物、
 果実、蠟、豆麻、麻、蜂蜜、子牛、豚、GP、
 鴨、鳩、鶏、バチョウ、人参、藍、玉葱、パ
 セリ、すべてを買わなければならぬような
 人間を、銀の犁で耕すくと呼ぶ。)、私は
 上記のようにして富裕になつた思慮に富む農
 民を識っている。この農民は子牛を売ったり
 屠殺したりしないで、飼養できるものは全部
 育成し、その後老廃牛(雄雌)を売却して若

牛に取りがえる。彼は他の農民に雌牛を貸付けて年間によい儲けをする。あるいはバター、チーズ生産。ただ飼育でまゐるだけの飼料と充分調達せねばならぬ⁸⁴⁾。

以上のユーラーの述べるところから、中農以上の農民は、その必要とする生活消費財について、出来る限り自給し、生産した農産物については、出来るだけ多くを販売する存在として現われてくる。食糧は少くとも自給すべきものとされてゐる。衣料品の購入については全くふれられてゐない。販売農産物としては、畜産物が最も大きな比重を占めてゐるのが注目される。その他の販売物として穀物、果実、衣料原料作物、野菜が挙げられてゐる。衣料原料作物が販賣されてゐることは、農家での栽培、その自家用使用、剰余の販売を推測させる。したがってブランデンブルクでは、紡糸、織布生産はなお自給部分が重きと占め、剰余を販売してゐたことが推測される。従つて消費面での商品経済への入り込め

の度合はまだ低く、自給経営的色彩と色濃く
 とどめていたといわなくてはならぬ。また
 農産生産物の販売についても、衣料原料作物
 に典型的にみられたように、剰余生産物の販売
 という段階にあったと云えよう。以上は一般
 的な規定であるが、農民上層においては若干
 異った色彩を帯びているように考えられる。
 すなわち、既にみたように、家畜の飼養と
 くに飼料について、農民上層と一般農民とは
 かなり違った様相を示していた。すなわち耕
 地における根菜類、豆類の栽培、採草地にお
 ける草生改良によつて、上層における経営形
 態に質的相違⁸⁵⁾がみられる様になり、このこと
 が飼料の種類を通じて飼養集約度にかかりの
 相異を生ぜしめていた。そして飼料のこのよ
 うな量・質の改善を通じて、農民上層で畜産
 における発展がみられたことも、先のコーラ
 ー⁸⁶⁾の引用は示しているように考えられる
 のである。コーラーは農民上層における肉牛
 生産と酪農における商品生産の発展を直接的

に示している。まず乳牛についていえば、農
 民上層の所有規模は、乳牛の貸付けに及し
 てゐる。ここから考へて、かたりのもつてあつ
 たことが窺われるし、また、生産構造として
 は上層経営における多頭所有と、貸付けとを
 けた下層経営における小頭放飼養が結合され
 た在り方が推測される。それはこの当時雌子
 牛の育成が不利であつたことによるものと思
 われる。「何故なら育成した雌牛価格よりも飼
 料費が高価につくからである。」このような事
 情が上層農のもとでの雌牛飼育を大規模化さ
 せず、下層農への貸付を通じて、小規模生産
 を支配するといふ生産構造を生み出したこと
 となつたと考えられるのであつた。これに對して
 肉牛生産は有利であつたとされてゐる。「肉用
 子牛を1シユツクで購入し、一年間放牧飼育
 すれば4シユツク以上で販売できる。」「現在
 は肉が少なくなつた。なぜなら肉屋が家畜を
 入手できた雄牛市場が現在では何処にも開か
 れなくなつたからである」⁸⁶⁾、つまり需要に對し

て供給が下まわっていったのが原因であった。
 そして、肥育素材としてハングリー、フリ
 ーランド、ポーランド、イギリス、デンマ
 ークから輸入されていったことは先に述べた通
 りである。したがって肉牛生産は、老廃牛の
 販売に止まらなかつたことは明らかであり、
 売ることを初めから目的として小商品生産が
 成る程度みられたと考えてよいであろう。さ
 うにコーラは冬飼料として根菜類を耕地に
 導入して「羊で大儲けしている農民」につい
 ても述べていた。このようにして農民上層に
 おいては少なくとも家畜部門を中心として小
 商品生産が微弱をばうもみられたのであり、
 ここに富農層の形成とみてもよいであろう。
 しかし、この富農層の生産力的基盤は、依然
 村落共同体規制にあり、また雇傭勞力も僕
 婢条令下におかれたものであったことは指摘
 しておかねばならない。しかしそれにもかか
 わらず、小商品生産を、共同体規制の枠内で
 あれ、規制から解放される方向への農業生産

力の発展に及えられて行なひ、一般農民と比較して優位に立つ富農経営の存在が指摘されねばならぬのである。

注 47) F. Lütge, a. a. O. S., 119.

48) K. Korth, Die Entstehung und Entwicklung des ostdeutschen Großgrundbesitzes; F. Lütge, a. a. O. S., 153.

49) F. Grossmann, Über die guts herrlich-bäuerliche Rechtsverhältnisse in der Mark Brandenburg von 16. bis 18.

Jahrhundert, S. 6 ff. 藤瀬浩司「東ヨーロッパ

の農場領主制」(『西洋経済史講座』Ⅲ.

145頁)。

50) F. Lütge, a. a. O. S., 121.

51) Ibid., S. 124 ff.

52) Ibid., S. 132.

53) 藤瀬浩司『近代ドイツ農業の形成』

79頁以下。

54) ブランデンブルクについては実証

されてゐるが、ザクセンにおけるよう

に債務を賦役で支払う方法がとられてい

たとすれば、貨幣地代の増額分を賦役で

支払うという方法は抵抗をくに賦役農民

によって受け入れられたものと推測され

る。

55) F. Lütge, a. a. O. S., 140.

56) 藤瀬浩司、前掲書、98頁。

57) F. Lütge, a. a. O. S., 121. 藤瀬浩司、前
掲書、98頁。

58) F. Lütge, a. a. O. S., 138.

59) Ibid., S. 137.

60) Ibid., S. 140.

61) 芝原拓自『所有と生産様式の歴史
理論』243頁。

62) この点については進藤牧郎『ドイツ
近代成立史』第三章「メクレンブルクに
おける農民追放」とくに64～110頁の見解
と比較された。

63) 藤瀬浩司、前掲書、239頁以下。

64) Coler, a. a. O. S., 117. 参考のため

に 評 価 基 準 と 示 せ ば 以 下 の 通 り で あ る。

フーフェ農民賦役 = hart Korn 1 Wispel 200 Gulden

小舎住農民賦役 = 燕麥 1 Wispel 100 Gulden

直営地耕種 1 Wispel 播種量の耕地 (収量は播種量の3倍とす) 地味により異なるが
普通 400 Gulden

鶏 (1羽 2gr.)

卵 (1 Schock 4gr.)

バサウ (1羽 4gr.)

計 3 Gulden の ば あ い

100 Gulden

水車 (Erbmühle) 1 Wispel あたり

150 Thaler

採草地 利用家畜頭数による評価のばあい 此牛5頭あたり

100 Gulden

干草 による評価のばあい

5 Fuder

100 Thaler

林地 1 Morgen あたり

6 Thaler

乳牛

1頭あたり 2 Markische Gulden (36gr.), 年収入 4.5~10 Gulden.
価格

10頭

14 Thaler

20頭

30 Thaler

40頭

60 Thaler

50頭

150 Thaler

放牧权 (-10頭あたり)

575 Thaler

羊放牧权

1000頭あたり

1000 Thaler

羊 100頭 7.8. 9 Thaler 収入 50 Thaler

多くのばあい 400頭

175 Thaler

(Erbkauf)

裁判手数量, 教会レーエン, 肉十金一税

場合毎に評価。

左 の よう に 一 般 的 評 価 基 準 が 見 ら

れたことは、レーングートの売買が、
 寺り頻繁に行なわれたことを示すもので
 あつて、封建的土地所有の貨幣化があつ
 程度進行してゐることを窺つてゐる。

65) Coler, a. a. O. S., 99ff.

66) 67) Ibid., S. 102.

68) Ibid., S. 99.

69) Ibid., S. 135. 一般貴族・市民の所有と
 直営地管理人に対する現物支給とを比較す
 ると以下つようである。

一般貴族・市民

直営地管理人

ライ麦 12 Sch. (マルク料)

ラベン 26 Sch.

大麦 12 Sch.

エンドウ 7 $\frac{3}{4}$ Sch.

エンドウ 1 Sch.

牛肉 5 Schoten

豚 1 $\frac{1}{2}$ 頭

豚 1 頭 (1 Thaler)

羊 2 頭

バター 23 $\frac{1}{2}$ Pfund

バター 12 Pfund

チーズ 3 Malter

チーズ 12 Schock

蜂蜜 1 $\frac{3}{4}$ E

ひらめ 10 E

にしん 1 $\frac{1}{2}$ E

にしん 2 Schock

塩 1 $\frac{1}{2}$ Sch.

キビ 1 $\frac{1}{2}$ Metz

カブ 6 Sch.

ソバ 7 $\frac{1}{4}$ M.

サフラン 1 $\frac{1}{2}$ quint

薄ビール 2 Tonne

ショウカ 2 Loth

夜間ビール 1 Tonne.

胡シヨ 2 Loth

計 23 Thaler 18 gr. 6 Pf. (油, 薪, 他給付)

70) Ibid., S. 103.

71) Ibid., S. 3.

72) Ibid., S. 10.

73) 藤瀬浩司、前掲論文、89～91頁。

74) H. Priebe, Die Entwicklung der Betriebsgrößenverhältnisse der Landwirtschaftlichen Betriebe in 50 Ortschaften des Kreises Greifswald, Diss. Berlin, 1936. S. 37.

75) Lütze, a. a. O. S., 143.

76) 奉公人の数は、連畜一組あたり男子奉公人＝人、雌牛十頭あたり女子奉公人一人、その他に各種家畜の家畜番がいるものといわれている。

77) Coler, a. a. O. S., 105.

78) Lütze, a. a. O. S., 140.

79) 藤瀬浩司、前掲書、59頁、91-95頁。

80) ミッテル・マルクにおける三十九年戦争開始当時の一六二四年における階層構成は以下の通りである。フーフエ係有経営セスハハ・五戸(ニ一七八九・七五フーフエ)、小屋住農戸数約五五〇〇戸。

その他の農村住民としては、土地を保有

しないうハウスマン(日雇)のうち、家族

数一名のもの九九戸、夫婦だけの家族と

構成するもの六八八戸となっている。フ

ーフエ保有経営はすべてフーフエ以上

であり、平均規模は三フーフエであった。

以上については Lütge, a. a. O. S., 121.

81) 山岡亮一『農業経済理論の研究』

276頁以下。

82) Coler, a. a. O. S., 425.

83) 84) Ibid., S. 146

85) 吉岡昭彦「西ヨーロッパの地主制

(『西洋経済史講座』Ⅲ、119頁)の用法

によっている。

86) Coler, a. a. O. S., 413.

第五章 結論

第一章では、課題、方法、史料、第二章以下では、第一章で述べた課題、すなわち、十六世紀、とくにその後半における農業生産力の発展と農業経営の諸類型、とくに領主経営および分益小作経営について、十六世紀のドイツ農書を主たる史料として検討した。そして、経営諸条件と確保するための領主权力への依存度、村落共同体規制への依存度、および領主权力による拘束の度合を異にする農業経営の諸類型を析出した。本章では、三地域にかけられた農業生産力、農業経営の諸類型の整理を行ない、時代的特質を明らかにするとで結論とした。

(1) 古典莊園の解体後、領主＝農民関係は、領主による個別人身的支配関係から、土地の授受に基づく物的関係に転化された。農民負担の重心も、勞働地代から生産物＝貨幣地代に移行した。とこそで十四世紀後半、十

五世紀の、いわゆる「封建的危機」の時代には、
 第一に農村人口の大幅な減少（ペスト、戦乱、
 都市への逃亡）とそれに伴う荒地の増大、
 第二に農産物、とくに穀物価格の低落とそれ
 に基づく工業生産物価格の相対的上昇、第三
 に貨幣地代の実質的価値の低下（貨幣悪貨）
 などによつて領主収入は名目的にも実質的に
 も大幅に減少した。領主はこの「封建的危機」
 に対応して封建的土地所有の対応を試みたの
 であるが、ドイツではその再建の仕方が大別
 してエルベ以西とエルベ以东とでは異なり、
 十六世紀においては、エルベ以西では地代領
 主制 *Rentengrundherrschaft* であり、荘園領主制 *Grundherrschaft*
 が、エルベ以东では農場領主制 *Gutsherrschaft* が
 支配的地位を占めた。第二章以下で分析した
 地域のうち、ニーダーライン、ザクセンは地
 代領主制地域に、ブランデンブルクはエルベ
 以东の農場領主制地域に属する。
 ニーダーライン地方は領主が大規模な直営
 地経営を行なうとすることが基本的に生

じなかつた地域である。彼らは、旧領主直営
 地の他に、農民保有地を購入して領主、單獨
 所有地に転化し、これを小作地として貸出し、
 地代収入を増大させる方向を志向した。彼等
 の主たる関心は農業よりもむしろ、領邦君主官
 僚としての勤務にあったと云われる。この地
 方ではベルクで典型的にみられたように、領
 邦君主＝農民関係が支配＝従属関係の中心と
 なり、裁判権も莊園領主から領邦君主のもと
 に集中されていった。これに反してザクセン
 では、個別領主（領邦君主、貴族、都市、*Stift*
 による自己経営の拡大傾向、大規模経営がみ
 られた地域であった。この奥でエルベ以東か
 らエルベ以西への移行地域を形づくっている
 し、しかしザクセンでは、領邦君主が、領邦国家
 収入の減少を生じる農民保有地の領主直営地
 への編入を防ぐために、体系的な農民保護政策
 を精力的に展開した。そのためザクセンの農
 民保有権は良好なまま維持され（世襲で譲渡
 可能な土地保有権 *schlicht Zinsgut* がある）は、エルベ

zinsrecht)、負担は固定され、人格的にも自由であつた。グラントエンブルクは、領主直営地経営の再建拡大の方向が基本的にとられた地域であり、十六世紀後半から二十年戦争の時期に農場領主制が確立し、農場領主＝農民関係が支配＝従属関係の中心となり、領主経営の経営諸条件確保の前提となつた。

三地域に共通してゐる領主＝農民関係は、ある領主に人身的に隷属する＝とに基づくのではなく、むしろ主として一定の領域に対する支配権である領邦君主権力に基礎を置くものであることにその本質がある。この領邦君主権力を等族議会に与ける力関係を通じて、領邦君主が握るのか、あるいは一般貴族（とくに騎士領主）が握るのかという点で相異が生じたのである。

(2) 領主経営

a) ニーダーライン 領主経営は例外的であり、大領主たとえば教会領主は全く自営で行なつてゐる様であり、自営地と有するの

は騎士層だけであつたと推測される。経営規模は一般に小さい。騎士の経営規模は普通二百モルゲンまでであり、従つて騎士の自家消費糧需要を満たすのが主たる目的であつたと思われれる。この裏から、領主経営における農産物販売は自家消費を越える余剰を販売するといふ性格を強く持つていたと思われれる。

生産手段の所有についてみると、その経営地は言うまでもなく領主の単独所有地であり、農業用建物、役畜、農具、すべて領主の所有である。労力は年雇を中心とし、日雇、請負制賃労力を補助的に使用している。この雇傭労力は領邦君主による規制からも事実上自由な労力であつた。すなわち食糧労力への依存が主であつて、中農労力に依存する部分はあつたとしても僅かであつたと考えられる¹⁾。耕地の存在形態は、散居制地域では勿論集団耕地であつたが、専村地域でも耕地の集団化が押し進められていた。この傾向はとくに都市周辺部で明瞭に現われていた。

農業技術面では、主穀式農業の極限までの
 発展がみられた。まず第一に、苜蓿作物、根
 菜類の導入を通じて、一年二作、二年三作、
 あるいは間作ととりいれた五～六圃式農業が
 行なわれた。これは刈跡放牧、休閑放牧と部
 分的にせよ排除するものであった。第二に休
 閑地への苜蓿飼料作物の導入がみられた。す
 なわち新しい永久耕地 *ager restibilis* の出現（レ
 イ）。第三に、中世的生産力水準では劣等地で
 あった砂質土壌耕地および共有地に飼料作物
 が導入され、劣等地での生産力が増大した。
 第四に、以上にみられるような飼料の増大（
 ただし大部分が夏期飼料）の結果、飼育家畜
 頭数の増大→肥料の増大→土地利用度の上昇
 （多圃化）がみられた。さらに肥料として糞肥
 が他地域より遙かに多くとり入れられた。こ
 のように耕地の存在形態、作付順序、地力維
 持の面から、主穀式農業がかなりの程度克服
 されはじめた。しかしまだ耕地と永久採
 草放牧地との分離を完全に止揚する性格のも

のではなかった。それは例え、ば豆類が地力消
 耗作物として、作付順序の中で位置づけられて
 いるなどの点にも端的にみられた。しかし、
 この豆類の位置付けは、主穀式の枠内での過
 剰肥料の存在を前提として、後作穀物のための
 に好適な土壌条件を作りだす為のものである。
 この限りで発展した生産力を示すものである。
 したがって主穀式農業の枠内で、多肥集約化
 に対応する作付方式であり、その意味で主穀
 式の枠内では最大限の発展水準に達してゐる
 と云えよう。

こうして領主経営は、領邦君主の課税(土
 地および雇傭労働力)を免除されてゐるとい
 う点では封建的性格を有してゐるが、生産過
 程に因する限り、経営で生ずる剰余生産物は、
 共同体規制から自立しつつあるところ、一
 般農民から相対的に高い生産力と、自由な賃
 労働力の使用—長時間労働、請負制労働—か
 ら生じてゐるといふ点で、ブルジョア的性格
 を有すると考えてよいであらう。ただし、力

が、また「園芸作物」ととり、えて「も」という生産
力に因する点、とくに自給自足の側面が強
く、余剰販売を基本的性格とするという点で、
ニ－ガーラインの富農経営と比較して、ブル
ジョアの性格はより弱いと云えるであらう。

6) ガクセン 主として領国内の近隣都市
おとびエルツ山地 *Ergelinge* の鉱山地方への農産
物(穀物、羊毛、亚麻、牛)販売を目的とし
ている。²⁾ 領邦君主の直営地経営について云え
ば、生産手段の所有関係、労働力は多元的構
成を示している。この点にまずニ－ガーライ
ンとブランデンブルクとの中間的性格がみら
れる。すなわち、土地は領主の単独所有権の
もとにあるが、その他の生産手段(役畜、農
具など)は一部は領主所有のものであり、一
部は農民所有のものであった。労力も同様
に多様であり、賦役、賃労働(年季奉公人、
日雇、請負制)、債務奴隷的労働がみられた。
これを別の側面からみると、中農に依存する

部分(農民の生産手段を以てする労働、たと

ば役畜賦役、農民の役畜、農具をもつてやる
 賃労働、固いく債務奴隷的労働)と、貧農に
 依存する部分(手賦役労働、手労働を主とする
 日雇など)とが相対的に接近した地位と占
 めていたと考えられる。そして十六世紀後半
 において、中農に依拠する労働(主として犁
 耕労働)が不足した点に特徴がみられたので
 ある。賃金労働力は領邦君主の僕婢系令の規
 制下にあった。この規制は十六世紀において
 は最高賃金の規制という形態をとったが、こ
 の賃金は、賃金労働者側の抵抗のたの次々と
 改定され上昇せざるをえなかった。このよう
 に領主経営における労働力の中で、中農・貧
 農の労働比重が接近しているという点、労働
 力市場の規制の強度の点で、ニードーライ
 ンとブランデンブルクの中間的位置と占めて
 いる。そして中農労働の不足が許えられてい
 ることにエルベ以西における特徴がみられる
 ように考えられるのである。

農業技術面については、まず直営地耕地の

存在形態について見ると、労働能率の英から意識的に集約化が進められ、大半が農民村若耕地と分離してゐた。この英園耕地で粗放穀草式から三〜六圃の主穀式農業が行なわれた。農業生産力展開の方向は、ここでも、苧科作物の導入によって多圃化するという外延的拡大の方向をとった。すなわち作付面積の拡大、休閑面積の縮小、輪作期間の長期化。苧科作物やカブが休閑作物として利用された場合もみられたが、それは例外的であり、また面積の英からやても休閑地のごく一部に播種されるに過ぎなかった。一般には休閑を残したまま多圃化して、その一圃に苧科作物を作付けるものであった。豆類の作付順序上の地位は最後であり、肥料不足のもとで地力消耗的性格をもつ稔実作として用いられてゐる。緑肥としての利用も知られてゐたが、少数の都市周辺部に限定されてゐたと推測される。そのため穀物の作付面積に対して肥料、労働力が不足し、その結果生産が不安定となり、経営規

模と施肥可能で適期の農作業を行なうる範囲
 (三圃式農業) に用び縮小するにたが、当
 時の農業技術上の最大の問題であつた。地力
 維持の方法も主穀式のばあいと基本的に異化
 はない。すなわち耕地と永久採草放牧地との
 分離を前提とし、家畜を媒介として永久採草
 放牧地から地力を移転するという方法(加用
 信文氏のいわゆる間接的地力維持)が基本的
 であつた。このばあい媒介となる家畜は主と
 して羊であつたと思われ。この羊は農民耕
 地のなかの休耕地、刈跡放牧地に放牧された
 のであり、したがって村落共同体規制に依存
 して飼養される家畜であつた。なるほど耕地
 への豆類の導入によつて、耕地と採草地との
 結びつきは弱まり、とくに羊の飼料として豆
 類は冬期飼料として使用されたけれども、そ
 れは極めて限定された意味しかもたらなかつた。
 したがって地力維持の方法としての休耕地に依
 拠として続いた。また豆類の導入によつて、
 飼料不足→家畜不足→厩肥不足→収穫低位を

克服する手掛りは得られたが、多圃化という
 形で土地利用の集約化すらも肥料面から支
 えることができない程度のもので、上述の悪
 循環に押しつぶされる結果となった。共同体
 規制の観念からみても、ここにはみられる農業
 生産力はたとえ農民耕地から分離された耕地
 で経営が行われていても、共同体規制を必
 要とする段階にありたと云わなくてはならな
 い。
 以上にみたザクセン選定侯の直営地経営は、
 生産過程においては、賦役労力および領外移
 動すをわら「他邦での奉公」を禁止され、ザ
 クセン内では最高賃金規制をうける、いわゆ
 る不自由な雇傭労力を用いている。しかし
 この不自由雇傭労力については、法定最高
 賃金制がたえず堀り崩されていっている英が注
 目されねばならない。ザクセンにおける領主
 経営における剰余源泉の一つが、このような
 賦役労力および不自由労力にあることは明ら
 かである。しかし賦役が全必要労力の半で占

め、割合、雇傭労働力規制の絶えざる破綻の
 裏からみて、剰余源泉としての意義はブラン
 デンブルクと比較してかなり小さかったと考
 えてよいであろう。また生産手段（役畜、農
 具）を所有し、上述のようを特徴をもつ貧農
 労働力（長時間労働、債務奴隷的労働）に基
 づく剰余、中農の債務奴隷的、すなわち高利
 貸的労働に基づく部分が考えられ、したがっ
 て剰余労働の源泉も多元的であると云わなく
 てはならない。

c) ブランデンブルク 主として遠距離市
 場（穀物についてオランダ、ニールーラ
 イン、イングランドなど。肉牛について全
 中部ヨーロッパ）向けの販売を目的として
 いる。領主経営における生産手段についてみ
 れば、役畜・農具は農民経営から提供される。
 ただし賦役労働力の中心となす隷従小作にあ
 っては、農民経営から提供される生産手段は
 いわゆる「前貸用具」であって、役畜につい
 てみれば役畜は領主所有であるが飼育費は農

民負担と、いうように、経営「資本」の兩者の
 内での分担がみられる。勞働力としては賦役
 が主として使用された。補足的に使用される
 雇傭勞働力も、領主優先雇傭権、僕婢強制、
 移動の自由の制限などによって規制された不
 自由勞働であつた。雇傭勞働力において注目
 されるのは、農場管理人が経営「資本」の分担
 者であり、したがつてまた経営の危険の分担
 者という側面を持つてゐる点であつて、こ
 こに農場領主制経営の確立期における領主の
 農民上層を利用して、いわゆる「上からの
 道」の推進が見られる様に考えられるのであ
 る。また賦役勞働力源としての隸役小作につ
 いてみると、それは領主の支え、すなわち「
 前貸用具」の領主からの貸与なしには中農と
 して存在しえない貧窮的性格のものであつた
 ことが指摘されねばならない。したがつてこ
 こでも隸役小作と領主との間で経営「資本」
 の分担がみられるのであつて、「前貸用具」
 に当座における「資本」の存在形態が認めら

れるのである。したがって農場領主と隸役小作人との関係は、封建的従属関係にあるとともに、「資本」による支配（資本利子支払）を内包していたといわなくてはならないであろう。これは隸役小作の土地に対する関係が保有权的性格を有すると同時に、いつでもそこから追放されるようを領主の恣意の貫徹する、したがって領主の單獨所有権が貫徹する土地に近くなっていることと対応しているといえる。また貧農についても封建的权力（領邦君主权力）によって規制される不自由勞働であることを指摘するだけで不十分であり、封建的权力の規制による低賃金のもとで、コラーの指摘しているような勞働時間の延長と、いう手段による剰余勞働の存在も指摘しなければならぬ。

農業技術に関していえば、直營地耕地はほぼ農民村落耕地から分離したとみてよい。この分離耕地で、主として三圃式から八圃式に至る主穀式農業が営まれていた。農民経営で

は三圃式が一般的であつたようであるが、領主経営では並科作物を導入して発展した作物がゆられた。すなわち豆類（ニニではグイーン）が間作物として、あるいは地力増強作物（緑肥）として用ゐられる傾向が強かつた。作物順序からみれば、サクセンのように最後にではなく真中に位置付けられてゐる。たとえば B H H ③ H ③ H H（ただし B は休肉、H は木穀類、③ はグイーン）がそれであつて、B H H、③ H、③ H H の三つの作物組織項からなり、③ が夏期休肉耕を伴う休肉と同様の機能を持つてゐることを推測するのである。このようなグイーンの機能によつてはじめて八圃式農業が可能であつたと云えよう。この作物順序にあつてはグイーンは總作物面積の中で八分の二、つまりニナ五八・一セントを占めてゐる。このように地力維持の面での改善が一定度みられたが、それは依然として耕地と永久採草放牧地との区別をなくするものでなかつた。施肥方法の有力な一方法

であつた。羊飼養にかゝても、その飼料は耕地
 で栽培されるグレイズンが利用されると共に、
 公有地、休耕地、刈跡地への放牧に依然とし
 て大幅に依存している。すなわち耕地と永久
 採草放牧地との分離という枠組の中で、耕地
 と放牧採草地のそれぞれにおいて、一方で
 豆類の導入、他方での草生改良という進歩が
 みられたと云えよう。しかし依然村落共同体
 規制を必要とする段階にあつたと云える。し
 かし農民経営と比較すれば、領主経営は一般
 的にいって、耕地が固地化し、かつ豆類の栽
 培比率が高い。其に経営形態の相異が認められ
 ると云えよう。

以上から、領主経営における剰余の源泉は、
 何よりもまず、領主経営の諸条件を保障する
 に最も大きな意味をもつ封建的权力（領邦居
 主权力）であり、したがって、領主経営にお
 ける生産力の一般農民のそれに対する優位性
 も、藤瀬氏の強調されるように「領主側の賦
 役労働の合理的收取を実現するための方策」³⁾

と理解される。しかし同時に、小経営に對する
 前貸用具の貸付を通じて、投下した経営「
 資本」の利子を高めようための方策という側面
 をも持っていたことを見逃してはならないと
 考へる。

(3) 分益小作経営

a) ニーグーライン への地域の分益小作
 においては、十六世紀後半という時点で、領
 主は小作地を貸与すると同時に、経営「資本」
 のうち種子代などを負担し、小作人による他の
 一切の経営「資本」を支弁していたと考へら
 れる。すなわち小作人は、役畜、農具、その
 他の生産手段を所有し、年季奉公人、その他
 の雇傭労働力と小規模なばらを使用した。とし
 て農業生産は、農業地域と工業地域との分化
 傾向、同じ地域内における主たる商品作物と
 異にする小地域の分化を前提として、麻、亜
 麻、大青、菜種などが初めから販売を目的とし
 た小商品生産という性格を有していた。この
 小商品生産を支える基盤は、主幹式農業の枠

内ではあるが、多肥集約農業を可能としたと
 この、豆類、カブ、栽培飼料作物の導入、
 砂質土壌農地への牧草栽培、採草地の草生改
 良にみられるような、質量両面にわたる改善
 であり、緑肥の使用であった。このように富
 農による分益小作費が行った多肥集約輪作は、
 村落共同体規制を大幅に弱める性格のもので
 あり、したがって富農経営の村落共同体から
 の大幅な自立を生ぜしめる性格のものであっ
 た。またこのように多肥集約輪作は、土地持
 ち労働者の性格をもち、家畜の飼料基盤を耕
 地における飼料作にかなりな程度あいている
 富農とは対照的に、家畜飼料を主として共有
 地放牧に依存せざるをえず、従ってまた共同
 体規制に屈せざるをえなかった。富農経営と
 は、経営形態の上で質的に相異が明らかに見
 られた。他方分益小作は、その経営地バリッ
 ター・ジッツであるが、領邦君主から一
 般農民に賦課されるニャッツの代わりに *Gewinn-*
und Gewerbesteuer を課せられたという点で、領主

権利の利用といえどいえるであらう。しかし
分益小作経営において生じる剰余の主な源
泉は生産過程における上述のよう、を相対的に
高い生産力と事実上自由な雇傭労働力の使用
にあることはほぼ疑いなく「と」であつて、
この点で富農経営と規定できるであらう。

6) ザクセン 分益小作は主として畜産部
内で行なわれたようであるが、耕種について
も行なわれていたことはトウムブスブルに農
書からも明らかである。ザクセンの耕種部門
では、領主は経営「資本」すなわち経営用の
生産手段 (essence Inventar) を分益小作人に貸与し
ていた。しかし種子は小作人が負担していた
のが一般的であつたようである。分益小作人
が農場附属の賦役を使用する場合とは、その
代金を支払つていた。この額が、労働力市場
価格で換算した額と比較してどの程度の差を
をもつものであつたのかは不明であるが、何
れにしても、賦役を徴収することは領主特権
の行使であることは確かであるが、分益小作

人が賦役を利用するにとが直ちに分益小作人が
 二の領主特権を享受したというにとにはな
 らない。領主と分益小作人との関係は、貨幣
 化をいし物化してあり、債権＝債務的を性格
 を基本的にもっていたと云えよう。すなわち
 分益小作人が賦役を用いても、しかも領主と
 の関係は貨幣化をいし物の関係となつてい
 う。是にガクセーの耕種部門における分益
 小作の特徴がある。

この性格は乳牛部門の分益小作について明
 らかに認められる。ここでは分益小作農家
 その負担する経営「資本」部分が大であれば
 あるほど小作料が少なくまうて剰余が大中に
 残るようになつており、逆に領主の負担する
 経営「資本」が大きくなればあるほど小作料
 は多くなり、分益小作人の取分は労賃相当部
 分に近づいて行つていく。したがって領主取
 分は、その負担する経営「資本」に対する利
 子部分を含むものと考えられる。場合によ
 っては、すなわち分益小作農家が被雇傭有的性格

に近いはあいは、経営者取分の一部とも含
んでゐると推測されよう。ところで、富農的
分益小作と貧農的分益小作とを区別するもの
は、分益小作人が労働力の雇傭費を負担する
か否かによつて、大に趣味深い点である。

乳牛部門および牧羊部門における分益小作
は共に休耕地（領主経営地および農民経営地）
アルメンゲにおける領主の放牧特権に依拠し
てゐる。したがつて領主経営（耕種）は農民
経営地とは分離した土地で営まれたけれども、
しかし、その作付順序、地力維持の方式から
みて耕地強制を必要とする性格のものであつ
た。農民耕地は混雑耕地であり、共同体規制
に服した経営が行なわれた。したがつて分益
小作による家畜飼養も共同体規制に依存する
ものであり、村落共同体規制を維持、強化す
る方向に作用するものであつたといえる。し
かし、第三章第二節で指摘したように、当時
の領邦君主直営地経営における最大の向題は
労働力、とくに半農労働力の確保であり、こ

のたのには、農民耕地への領主放牧権に必ずしも国執してゐないのが注目される。この一例からだけでは断定できないが、領主の羊放牧権による村落共同体規制の維持、強化への作用力は、十六世紀においてはお相対的に弱かったということも考えられるのである。

以上からガクセンの分益小作人経営における剰余（富農的分益小作人）は、領主権力の利用に一部帰せられる（農民経営地への領主放牧特権、雇傭労働力に対する規制、さらには賦役利用）ことは明らかであるが、その程度は東部ドイツと比較すればかなり低いと判断せざるを得ず、よこにガクセンにおいて富農の特徴をみることはできる。

c) マルクブランデンブルク マルクブランデンブルクの分益小作は家畜飼養部門でめられる。牧羊部門における分益小作にあつては、ガクセンの場合も同じであるが、生産手段たる羊、飼料、賃金、土地用役など、すべて領主負担である。たゞレ賃金は、牧羊業者

牧夫頭、牧夫ともに現物で、粗生産物に対する
 割合で支払われている。支払われる賃金は前
 払いではなく後払いであった。そのため牧羊
 業者はその歩合と受取るまでの間の自己資金
 ので、雇傭労働者の生活費を負担するだけのも
~~貨幣とすくも負担するだけのも~~貨幣と必要と
 したと考えられる。歩合に基づいて、支払わ
 れる経営の危険を分担しながら得られる牧羊業
 者の収入は富農と云える程のものであった
 が、その源泉はグラウンディングの場合、領
 主権力への依存にあることは改めて言う必要
 もなく、この点はこの地域における分益小作
 の特徴がある。(農民耕地、村落共有地への
 放牧、不自由雇傭労働の使用)。

耕種部門において分益小作は、農場領主
 制経営の展開のために見られるが、十六世
 紀後半の農場領主制確立期においては、領主
 経営は、当時における農民層分解の結果生じ
 てきた農民上層を管理人として分益小作的側
 面を持てたことが繰り返り入れて利用したこと、

また経営努力力に利益小作人的側面ともつ資本の賦役を利用したことは先に指摘した通りである。

(4) 以上の明らかによろしく、十六世紀後半のドイツにおいては、生産過程において村落共同体規制、領主権力への依存の度合いの強弱に応じて様々な経営類型がみられた。ニーダーラインでは、村落共同体規制、領主権力への依存の度合いは三地域の中で最も弱い。村落共同体規制への依存が弱いということは、単に散居式定住地が多いという点の結果にいうよりも、むしろ、農業技術そのものの自体が村落共同体規制を大幅に緩和するものであったという意味においてであることに注目しなければならない。またニーダーライン地域の内部でも経営形態の相異が認められた。農民層上層においては豆類、牧草、商業作物の大幅な導入、共同放牧への依存度の減少。貧農層における耕地での穀物生産と共同放牧への強度の依存がそれである。この地域では地

域内外に特産地が形成され、一般的に、すなわち中農層においても衣料原料を自給せず購入してゐた英にみられるように自給自足体制が崩壊し、小商品生産が行はれてゐた。したがって三地域の中で最もブルジョアの性格が強いと云える。すなわち、領主権力、共同体規制への依存が最も弱く、したがって農民層のブルジョアの進行が最も著しい地域で領主経営のブルジョア化も最も進んでゐたと云える。

ニーダーラインの対極は東部ドイツのブランデンブルク地方である。ここでは領主の裁判・行政に属する一円支配権の存在が領主経営の現実的基盤となつてゐる。すなわち生産手段のうち勞働力についてみれば、賦役の確保、雇傭勞働力（すなわち勞働力市場）にはする領主規制権が土地について、好ましからざる農民に対する領主の追放権（すなわち農民保有权の現実的領主の所有権による吸収、領主的土地所有権の肥大化）、農民耕地および

がアルメーデに於ける領主放牧権。領主経営
 への従属によつて生じる農民の現実的工地利
 用(ゲグエーレ)の弱体化(すなわち夏期休肉
 耕の実施が不可能となり、適期の作業が妨げ
 られるなど)など領主経営の諸条件は領主権
 力によつて保障された。この英にブラーニデン
 ブルクの特徴がある。しかし、これだけでは
 なく領主の農民への「前貸用具」の貸与とい
 う形での経済的支配(領主の支出した経営「
 資本」に対する利子支払)が加わる。生産過
 程については以上であるが、流通面において
 も領主権力が重要な役割を果たした。すなわち
 農産物市場支配権が領主経営生産物の貨幣へ
 の転化、農民生産物の買入による前期的利潤
 の実現を保障した。

西ドイツとは対照的に、領主経営が農民経
 営よりも一般に商品生産的性格が強かったと
 云える。また経営形態の異からみても、領主
 経営において豆類、牧草の導入が一般農民経
 営におけるよりも大量に行なわれる傾向があ

られた。これを可能にしたのは領主経営が
農民耕地と分離されていったのがその一つの原
因であつたと考えられるが、この上に、適期
の農作業を不可能とあるようす、莫にみられる
ところの、農民経営の領主経営への従属が、
領主経営と農民経営との間に生産力較差を生
みだしたと考えられる。

当地方における富農の一形態である分益小
作(牧羊部門)について、共有地への放牧、
雇傭労働力確保の莫において領主経営への全
面的な依存関係がみられる。領主牧羊部門は
また農民村落の共同体規制と牧羊経営にとり
込みにといて成立しているといつてもよ
い。さらに一切の経営資本を領主が支出して
おり、分益小作人は最大限給与が支払われる
までの賄費を負担するにすぎなかつた。ここ
でも領主が、微弱ながら、農民層分解の結果
出てきた富農を領主経営に利用していること
が窺われるが、ここでの富農の分益小作人と
しての形態はブルジョア化の程度が最も弱い

といえる。こうして農民経済のブルジョア的
進化が弱い地域で、領主経済のブルジョア化
も弱かったと云えるのである。

中間の位置を占めるのがザクセンである。
領主直営地経営における経営の諸条件と確保
する上での領主権力への依存度は、ニーダー
ライン、ブランデンブルク両地域の中間にあ
る。すなわち領邦君主の直営地経営において、
領主権力、村落共同体規制への依存は、ブラ
ンデンブルクにおけると同様、たとえば、地
力維持に因して農民耕地への領主の羊の放牧
を必要としたこと、勞働力に因して賦役への
依存、雇傭勞働力に対する規制などの点にみ
られる。しかしその程度はブランデンブルク
と比較すればかなり低い。すなわち、賦役で
もって全必要勞働を満すにはほど遠く、雇傭
勞働力に対する規制も、絶えざる反抗のもと
にたえず掘り崩されていっている。この点
は分益小作についても云えるのであって、賦役
を使用するにとがあっても、それは有償であ

り貨幣で支払われてゐる。従つて貨幣関係が部分的にはいり込んでゐると共に、賦税と借受けとが直ちに領主権力の利用と意味をなすといふ関係が成立してゐた。

(5) 以上のような各地域間の相違は、何よりもまず、各地域における社会的分業の発達の種類とかがわつてゐる。すなわちニーターラインにあつては、工業は都市ツインタを衰退、崩壊させるほどに農村において発展し、同屋制が農村工業を基盤として成立した。その結果は農民層における階層分化の進行であつた。この階層分化は、分割相続慣行が極端なまでに進行し、土地が家長の専有権に集中し、家族構成員が土地保有から排除されるという家族労作経営の基調が解消されるに至つてゐる。すなわち一方に於ける共同体規制、領主権力からかなり自立した富農の形成、他方における共同体規制への依存が共同体放散に限られてゐる土地持ち労働者の形成。その結果、領邦君主の労働力市場の規制は極めて

弱のうれ事実上不可能に落ちてきてゐる。

ガクセンにおいても、農村工業が主として

麻織物業について、近隣の農村小都市のフット

フット規制を絶えず無効にするほどに発展して

行、た。たゞ全体としてみれば、十六世紀に

おいては麻織物工業の中心はなお農村におけ

る小都市であり、同屋制も都市フットを基

盤としていた。農民層の分解は、農村工業の

発展に伴って進展し、領邦君主の直営地経営

において中農労働力の不足が許えられ、その

ため後畜・農具などの「資本」投下を行なひ、貧

農労働力を使用せざるを之なひほどに分解が

進んだが、これに對して半連畜農(中農下層)

の形成、貧農の追放にみられるように領邦君

主による社会を許し、相税分割の禁止とあり

なつて、自給的色彩の強い中農層の固定を現

る程度まで許すようなものであつた。しかし

ここには、このような中農下層の再形成にも

限度があり、したがつて領主は経営「資本」

を直営地経営に投下し、後畜農具を備へるに

とによつて、食農労働に依拠せざるをえなかつたのである。したがつてサクセンでは領邦君主によつて労働力市場の規制が繰返し破られ、その都度再建されねばならぬという事態が生じたと考えられる。

ブランデンブルクは東部ドイツにおいて先進地であり、十四世紀から十六世紀初頭にかけて、都市におけるツーフト手工業の発展に従つてまた都中を中心とする商品＝貨幣流通の一定の展開がみられた。しかしこれらの都市の殆んどは、その大きさ、おのづか、その農業的色彩を強くもっており、フーフエ保有者や醸造所所有者が富裕な人々であり、都市貴族の後継者であつたといわれる。ブランデンブルクでも以上の都市の発展とともに、農村住民の都市への、あるいは村から村への移動が顕著にあらわれ、この過程の中で農民層の階層分化が進み、小屋住層が形成されたことはミッテルマルクの例においても明らかである。しかし社会的分業の展開が甚だしく

立遅れたため、農場領主の勞働力市場への干渉を許し、領主による勞働力市場の独占的支配を通じて、階層分化はこの段階でそのまま固定されてしまう結果となった。しかしそれにもかかわらず、一定の農民層分解の進行过程中農再建のために「前貸用具」という形での経営「資本」の投下も領主が余儀なくされた兵を忘れてはならない。

(6) 農業生産力の発展の特徴をみると、各地域において相違はあるが、耕地、採草放牧地への主として藍科作物の導入によって、耕地では休閑を残しながら多圃化が進行し、採草放牧地では栽培牧草による草生改良が或る程度行われていた。十六世紀における農業生産力の増大は、このように、藍類の導入による輪作期間の延長、土地利用度の上昇という形をとって進んだ。ここでは、単一作物につき単位面積当たりの生産量の増大は生じなかったが、単位面積当たりの各種作物合計の生産量は増大した。このような形で土地生産力

の発展がみられたのが十六世紀における農業
 生産力発展の特徴である。各地域における発
 展の相違は、豆類の作付順序内での位置づけ
 に特徴的にみられる。すなわち豆類が地力増
 強的機能を持つてゐるのか、あるいは地力消
 耗的機能を持つてゐるのかという点にみられ
 る。ただ地力消耗的機能を持つばあひにつ
 ては、それを肥料が豊富の場合と不足する場
 合にわけて考察する必要があることに注意し
 なければならぬ。ニーダーラインについて
 みたように、地力過多（窒素過剰？）のため、
 小麦が徒長倒伏するのを防ぐ爲に、小麦の前
 作に位置づけられる豆類は、むしろ農業生産
 力の一定の発展を示すものであつて、ザクセン
 地のように、肥料不足のため、穀物を作付け
 ても収穫が得られず、豆類を作付ける場合と
 は区別されなければならない。

(7) 最後に分益小作の時代的位置付けを
 試みたい。

分益小作農は、ドイツ各地域において、古

典荘園の解体後に一度は貨幣地代が広範に普
 及し、農民の土地保有に一定の前進がみられ、
 それと共に農民層の分解が進行し、土地から
 遊離した、ないし遊離しかかった層が層とし
 て形成されてくる時裏で展開してゐる。すな
 わち、領主側からみると、農民的土地所有が
 前進して、領主の収入が停滞減少する傾向が
 生じ、また農民層の土地保有の前進したば
 び、農産物の農民層による商品化が進行して
 中農層が減少するという事態を前にして、領
 主的土地所有をこの事態に対応させ、再建す
 る方法として分益小作をとりあげてゐるとい
 う事になる。

次に分益小作の性格を検討しよう。まずそ
 の経営地は、領主の単独所有権の貫徹する土
 地であつて、農民の保有権は存在せず、その
 意味で近代の土地私有に酷似してゐる。封建
 的土地所有に固有な重層的土所有関係はこ
 こでは存在してゐないが、それは、もともと
 重層的関係が存在しなかつたか、以前は存在

してゐたが、何らかの方法によつて、つまり
 農民保有権の購入、あるいは農民追放によつ
 て解消した土地であつた。封建的土地所有に
 おける重層的所有一関係が解消して、領主的土
 地所有権と農民の保有権の何れか一方が單獨
 所有として貫徹する方向が近代における土地
 私有に近づく方向であるとする、領主によ
 る單獨所有権の貫徹する土地を拡大しようと
 する試みは、その限りで、近代的土地私有に
 移行しようとする試みであつたといへよう。
 次に農業経営の觀点からみると、收穫物の折
 半およびとくに経営「資本」の分担が重要で
 ある。経営「資本」の負担については、直線
 の両端の一方に領主が、他方に分益小作農が
 位置し、それぞれが單獨で経営「資本」の全
 額を負担する。その中間に領主と分益小作農
 との間の経営「資本」分担の割合を比率
 が位置する二つとなる。ところで領主の負担
 する経営「資本」部分が大まくなればなるほ
 ど、領主の経営危険の負担度は大まくなり、

領主取分も大きくなり、分益小作人経営に対
 する干渉度は高くなり、逆に分益小作人の經
 営主としての性格は動まり、被雇傭者の地位
 に接近して行くこととなった。分益小作人の
 負擔する經營「資本」比率が逆に大きくなれ
 ば、分益小作人の經營負擔度は大きくなり、
 その取分は大きくなり、分益小作人經營の經
 營の自立度は高まって行く。ところで、この
 ような「經營「資本」の負擔比率によって主
 として規定される分益小作の類型（それはガ
 クセンの畜産部門における分益小作農につい
 て端的にみられた）は地域間においては地域
 内の不平等を發展の結果として現われ、同一
 地域内においては時代的を發展系列として考
 えられるが、ガクセンの例では、農民層の分
 化、すなわち農民經濟のブルジョア的進化に
 対応するものとして現われたと考えられる。
 すなわち分益小作人となる層の相違（富農、
 中農、貧農）によると考えられるのであろう。
 この相違はとくに、地主と分益小作人との間

で、どちらが雇傭勞力費用を負担するかが重要な要因となつてゐる。以上から地主取分は地代だけでなく、領主の投下した経営「資本」に対する利子部分も含んでゐると考えられる。分益小作人が被雇傭者的性格が強くなるにつれて、すなわち貧農層が分益小作人になる場合には、領主取分は、地代＋領主の経営資本、分担分に対する利子相当部分＋経営主取分の一部となるであらう。ところで領主が経営「資本」を負担する、あるいは負担せざるを之をかつたのは、確かに分益小作人の「資本」不足がその理由として挙げられるが、領主の側からみれば、特に貧農が分益小作人となる場合、土地から分離した、ないし分離しかつただけでなく、基幹的を勞働手段とも失つた貧農を、再び中農として維持するためには必要を支出であつたと云へる。それは中農維持政策ではあつたが、同時に経営「資本」の分担の意味を含んでゐたのである。分益小作人が、＝－ダーライン、ザクセン、ブラン

デンブルクで、普通の範囲、その意義に相違
 はあっても、一様に用いられたのは、この分
 益小作が、封建的土地所有の崩壊に際して小
 経営を維持しつつ、農民層分化に対応して行な
 ったことの結果であって、その意味では必然的であ
 ると云える。もちろん、各地
 域の分益小作の類型は、それぞれの地域にお
 ける農民経済のブルジョア的進化の度合、し
 たがってまた社会的分業の発展の度合によっ
 て異なっているが。東ドイツの農場領主制地
 域であるブランデンブルクも例外ではありな
 かった。十六世紀後半の農場領主制経営が、
 自らの勞働力を雇傭する管理人を使用してい
 たことは、農民層分解の結果微弱ながら生じ
 た富農的存在（その具体的な姿をブランデン
 ブルクにおける畜産部門にみた）と分益小作
 的な側面を残しつつ領主経営に取り入れてい
 ることを示すものと理解してよいであろう。

注 1) ニッ英は、領邦君主では異っていた
と考えられる。領邦君主の農村における
基盤はいぜん役畜と所有する中農層であ
ったであろう。

2) F. Lütge, Geschichte der deutschen Agrarverfassung,
S. 113.

3) 藤瀬浩司, 『近代ドイツ農業の形成』
105頁 注 12)。